

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 動物の話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001810">https://doi.org/10.15021/00001810</a>



動物  
の  
話

# 1 ハイエナの皮をたべたライオン(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

雄ヤギ先生とハイエナの話。雄ヤギ先生はインク壺と袋をもつた。

さて、雄ヤギ先生は野原で（イスラム教の先生にする）仕事をするために、でかけていった。先生があるいていくと、ハイエナにであつた。先生はしばらくのあいだこわかつた。そのあと、気をとりもどし、ハイエナに、「おじさん、わたしはあなたのところに行くところだつた。というのは、コーランの文句をかいであげるためだ。わたしには、字をかくための木版がない。でも、あなたの手をよくしなさい。手のうえにかいてあげよう」といった。ハイエナは先生に手をさしだした。雄ヤギ先生は蜂蜜でいっぱいになつたインク壺のなかに筆をいれた。先生はハイエナの手のうえにふとい線を二本ひいた。ハイエナはその味をみて、おいしくおもつた。ハイエナは、「もつと、字をかきたしておくれ、友よ」といった。雄ヤギ先生はかきたくもないのに、三回、ハイエナの手に線をひいてやつた。そうしているうちに、ライオンがやつてきた。ライオンは、「おまえさんたちは、ここぞなにをしているのか」といった。ハイエナはこわかつた。でも、雄ヤギが、「ああ、王さま、わたしはあなたさまのところに行くところでした。それなのに、ハイエナに

つかまつてしまいました」といった。ライオンはおそろしい目でハイエナをにらんだ。雄ヤギ先生はさらに、「コーランの文句をかいであげましょう。王さま。あなたさまの手をだしてください。というのは、字をかくための木版がないからです」という。ライオンはハイエナとおなじように、味をみると、もつと（文字を書いて）くれといった。でも、雄ヤギ先生は、「手にはいるなら、（文字をかくためには）ハイエナの皮でもよろしい。王さま」といった。ライオンはハイエナに、「おまえさんの耳をとりなさい。友よ」といった。ハイエナは、それをことわると、ころされるといふことをしつていく。

さて、ハイエナは耳をとつた。雄ヤギ先生は、耳を蜂蜜のはいたインク壺につけた。

さて、先生はそれをライオンにわたした。ライオンは耳をのみこんでしまった。ハイエナはのこつている耳をとつた。のこるは、尾っぼだけになつた。ハイエナは、これではどうしようもないとおもつた。

さて、ハイエナはおおいそぎでにげた。ライオンはハイエナのあとをおつていった。そのころ、雄ヤギ先生はおおいそぎで、人のいる村にかえつていった。そのあと、ライオンはハイエナをつかまえて、ハイエナの皮をはぎとつて、皮をかついだ。ライオンは野原のありとあらゆるところをうろついている。ライオンは雄ヤギ先生に

あいたかったからだ。ライオンは、「先生、はい。わたしは皮を手にいてた」という。

お話は、おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 モコロ出身のアミーヌ・ムーサ。マルアにて)

## 2 ハイエナの皮をたべたライオン (2)

さて、ちいさなお話、ちいさなお話。

雌ヤギがおきあがり、旅にでかけた。雌ヤギは蜂蜜をかい、人びとがつかっているような墨をいれるまるいヒョウタンの容器に入れて、(この容器に紐がついているので)それを肩からぶらさげた。雌ヤギは旅にでかける。雌ヤギはハイエナにであった。ハイエナは、「ああ、先生よ。きょうは、どこにおでかけか」という。雌ヤギはハイエナに、「わたしは旅に行く」という。ハイエナがヤギ先生といっしょにいるところに、ライオンがやってきた。そこに、ハイエナと雌ヤギがいた。雌ヤギは、「ライオンさま、ようこそ。ライオンさま、ようこそ」という。

さて、ライオンが、「先生、ようこそ」という。

さて、ハイエナは、「こいつが先生かい。こいつの額は脂がついている。おまえさんはしらない。わかるかな。こいつの額をわれ

ば、そこには脂がつまっている」という。

さて、ライオンはハイエナに、「この方はおまえさんたちの先生だな」といい、雌ヤギにむかって、「先生、わたしの目がいたむ。どうか、すこし聖なる文句を文字板にかけておくれ。わたしはその聖なる文句を水であらいおとし、その水をわたしの目にたらすのだ」という。雌ヤギは、「ライオンさま、わたしは字をかくものになにもありません」という。ライオンは、「それで、字をかくものにはなにがある」という。雌ヤギは、「ハイエナの皮しかありません」といった。ライオンは、「ハイエナの皮か」という。雌ヤギは、「はい」という。ライオンは、「ほら、そこにハイエナがすわっているではないか。簡単に手にはいるではないか」という。ハイエナは体のむきをかえて、うつむいた。ハイエナはつらいことになるとうことをしている。

さて、ライオンはハイエナに、「ハイエナよ、おまえさんは、わたしの目をなおすものがなにかということをきいたのに、すわっているだけで、わたしのためにおまえさんの体の皮をきりとつてくれないのか」という。ハイエナは、「ライオンさま、わたしはどこをきりとるのですか」という。ライオンは、「目をつむって、きりとるのだ」という。ハイエナは目をつむって、皮をすこしきりとつて、ライオンにわたした。ライオンはそれをうけとると、雌ヤギにわたした。雌ヤギはそれをうけとると、蜂蜜のなかにつけて、ライ

オンに、「ライオンさま、舌までもつていき、皮はこちらにかえしてください。わたしはそれに字をかきます」といった。ライオンがハイエナの皮を口にもつていき、皮は口からなかにはいつてしまった。ライオンは、「いつておくが、皮は口からなかにはいつていつてしまった」といった。皮がおいしかったので、口からなかにはいつていつたのだ。ライオンは皮をのみこんでしまった。ライオンはおいしく感じたのだ。ライオンは皮をのみこんだ。雌ヤギは、「ライオンさま、代わりがありません」といった。ライオンはハイエナに、「ハイエナよ、おまえさんのきらつてるところをさがして、そこをきりととり、よこせ」という。ハイエナはきりととると、それをもつてきて、ライオンにわたした。雌ヤギはいくと、それを蜂蜜にひたした。雌ヤギは、「ライオンさま、これを舌のした、さきほどもつていつたよりむこうに、もつていつてください」といった。ライオンはそれをうけとると、口にもつていくとすぐのみこんでしまった。ライオンはすわった。ライオンは、「ハイエナよ、わたしはいままで、ここにいるのに、皮をよこしていない」といった。ハイエナはまたしてもきりととると、ライオンにわたした。雌ヤギはそれを蜂蜜にひたした。雌ヤギはそれをライオンにわたした。ライオンはそれをのみこもうとする。ハイエナはにげていつた。ハイエナはにげて、どこかにいつてしまった。ハイエナがにげていつてしまうと、ライオンはその皮をうけとつて、のみこんでしまい、

ハイエナのあとをおつて、おおいそぎではしつていつた。雌ヤギは自分のヒョウタンをとると、それを肩にかけ、草むらにはいつて、かくれてしまった。ライオンはいくと、ハイエナをうちころし、皮をみんなはぎとつて、頭にのせてはこんだ。ライオンは、「ヤギ先生、ヤギ先生、ヤギ先生」と雌ヤギをよんでいる。雌ヤギは姿をくらました。ライオンはもとのところまでやつてきて、たちどまり、「こん畜生め。おまえもくつてしまつてやつたのに。おまえを蜂蜜とヒョウタンといつしよにくつてやつたのに」といった。ライオンは皮をほつておくと、そこをとおりすぎて、どこかにいつてしまった。雌ヤギはずつとそこにいたが、ライオンがどこかにいつてしまったのを見て、草むらからでてきた。イヌがやつてくると、雌ヤギがいた。雌ヤギはイヌに、「その皮を頭にのせる。旅にいこう」といった。

さて、イヌはハイエナの皮を頭にのせて、雌ヤギとあるいていつた。雌ヤギとイヌがあるいていく。ほんとうのこと、雌ヤギとイヌがあるいていた道には、ハイエナの鍛冶屋があり、雌ヤギとイヌはその鍛冶屋にむかつていつた。つくくと、そこにはたぐさんのハイエナがいた。ハイエナたちはすわつて、鉄をうつていつる。ハイエナばかりだつた。ハイエナたちがみると、イヌは頭にハイエナの皮をのせていつる。

さて、雌ヤギとイヌがやつてきて、そこにつくと、イヌはハイエ

ナの皮をおろした。ハイエナは雌ヤギとイヌに、「先生、ようこそ。先生、ようこそ。先生、ようこそ」という。ハイエナが一匹たちあがって、「いって、あなたがとまるところをさがしてあげよう」というと、どこかにいってしまった。そのハイエナはもどってこなかった。またしても、もう一匹がたちあがると、そのあとをおつていき、「あいつがずっとかえってこないから、あとをおつていき、よんでこよう」といった。このハイエナもいってしまうと、もどってこなかった。そのうちに、どのハイエナもいなくなってしまう。このころは、一匹になった。このハイエナもたちあがり、「あいつらについていく」といった。雌ヤギが、「いやいや、おまえさんはいってはいけない」といった。このハイエナはやわらかい便をだした。このハイエナはおおいそぎではしっていった。雌ヤギはハイエナの皮をすてると、イヌに、「いこう」といった。雌ヤギとイヌは皮をすてておいて、どこかにいってしまったとき。

この話もおしまい。

(一九九三年、語り手 ルーティ・センベ・ラーム、レイ・ブーバにて。ルーティは六五歳。ルーティの父親はフルベ族。母親はチョッリーレのガルケ族。ルーティはチョッリーレのさきにあるタパーレ村でうまれる。この話は老女たちからきいたという)

### 3 ハイエナの皮をたべたライオン (3)

ハイエナとライオンがいた。ライオンはあっちこっちをあるいている。ハイエナもあっちこっちをあるいている。ライオンの足に棘がささった。

さて、ハイエナがやってくる、ライオンがいた。ハイエナはライオンに、「親父さん、どうしたの」という。ライオンは、「足に棘がささったのだ」という。

さて、ハイエナは、雌ヤギがやってくるのをみると、「親父さん、脂がたつぶりついている額をもったのがやってくる」という。

さて、雌ヤギはハイエナにこたえて、「なんだって、ハイエナよ、おまえさんはどうして、わたしのことをするようにいうのか。ほら、わたしはおまえさんたちから身をかくしている」という。

さて、雌ヤギがやってきた。雌ヤギはやってくる、ライオンに、「親父さん、どうしたのか」という。ライオンは、「棘がささったのだ」という。雌ヤギが、「足をだしなさい。みてみる」といった。雌ヤギはライオンの足を手にもち、みてみた。

さて、雌ヤギは、「これは、ハイエナの皮が手にはいるとなんとかなる」といった。ライオンは雌ヤギにこたえて、「ハイエナのかわいた皮か、それともなまの皮か」という。雌ヤギはライオンに、「親父さん、手にはいるなら、なまの皮がよい」という。ハイエナ

は、「なんだって、雌ヤギよ、おまえさんほうそをもってきた」といった。

さて、ライオンはハイエナに、「おまえさんのもつともきらつているところをさがしておくれ」といった。ハイエナはそれにこたえて、「親父さん、体にきらいなところがあるのか」という。ライオンは、「よくみなさい。おまえさんのもつともきらつているところをさがすのだ」といった。

さて、ハイエナは脇のところをみると、そこをすこしひきちぎって、雌ヤギにわたした。ハイエナが雌ヤギに皮をわたすと、雌ヤギは蜂蜜のはいつたヒョウタンの筒をあげ、皮を蜂蜜のなかにつけた。雌ヤギはその皮をライオンの口にもつていき、「親父さん、そこにおいておきなさい」といった。ライオンはなにもいわなかった。雌ヤギは、「のみこまないように」という。ライオンは皮が口のところにくると、蜂蜜がおいしいのがわかり、皮をのみこんでしまつて、皮から手をはなし、手を口にあてた。雌ヤギは、「様子をみてみよう、親父さん」といった。ライオンはずつとまえて皮をのみこんでしまつてゐる。

さて、雌ヤギは、「よろしい」といった。ライオンは、「どうしたのか、ハイエナよ」といった。ハイエナは、「なんですつて、親父さん。なんですつて、親父さん。体にきらいなところがあるのかい」といった。ライオンは、「たのむ。おまえさんのもつともきら

つているところをさがしておくれ」といった。ハイエナはあつちこつちをみて、鼻のところをひきちぎつた。

さて、ハイエナはその皮をライオンにわたした。ライオンはそれをうけとり、雌ヤギにわたした。雌ヤギはそれをうけとり、またしても蜂蜜につけた。雌ヤギはその皮をライオンの口にもつていった。

さて、ライオンはその皮をのみこんで、ハイエナをみている。ハイエナはにげたがっている。ライオンは、ハイエナの様子をみている。ハイエナがにげていれないかみている。ライオンは蜂蜜のついたハイエナの皮をたべてしまうと、こんどは、雌ヤギのほうにむかつていくだろう。

さて、ハイエナはおきあがると、はしりだした。ハイエナがにげていくと、足のなかつたライオンは、ハイエナのあとをおつて、はしつていった。

さて、雌ヤギはヒョウタンの筒に蓋をして、うしろのほうにもどり、にげていつてしまつた。

さて、ライオンが、「ハイエナをくいおわつていたら、あいつのほうをむき、あいつをくつていたのに」という。雌ヤギはとつくのむかしににげていつた。雌ヤギは旅にでるのをやめたとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ。

サイドウ・ムーサ、レイ・プーバにて。語り手はレイ・プーバ  
地方のダーマ族ではあるが、ダーマ語を知らず、フルフルデ語  
しか知らない)

#### 4 ハイエナの皮をたべたライオン(4)

さて、お話、お話。

よろしい。リスと雌ヤギとイヌがいつしよになって、野原にい  
く。野原にいくと、道すがら蜂蜜をみつけた。リスと雌ヤギとイヌ  
は蜂蜜をみつけた。リスと雌ヤギとイヌは蜂蜜をとり、蜂蜜のはい  
った容器を肩からさげた。リスと雌ヤギとイヌは、蜂蜜をもつてど  
んどんあるいていく。とうとう、リスと雌ヤギとイヌは野原のまん  
なかについた。リスと雌ヤギとイヌは野原のまんなかにいる。ライ  
オンは目がいたかった。ライオンはすわっている。ライオンの目が  
いたんだ。ライオンはすわっている。ライオンの目がいたむ。ライ  
オンは目の薬をさがしたけれども、手にはいらなかった。

さて、リスと雌ヤギとイヌはでかけるとき、おたがいにとのよう  
な手だてがあるかたずねあった。イヌは、「わたしには手だてが百  
ある」といった。雌ヤギは、「手だてはある」といった。雌ヤギの  
手だてとは、かくれていて、だれかがくると、それをついて、ほっ  
ておくことだった。イヌは自分の手だてはたいしたものだといっ

た。リスと雌ヤギとイヌは、いこうとしているところについた。そ  
こに、リスと雌ヤギとイヌがいる。そこにハイエナがいて、リス  
と雌ヤギとイヌをたべようとしている。リスと雌ヤギは、「さて、  
イヌよ、おまえさんのいつていた手だてというのをみせてもらお  
う。にげよう」といった。イヌは、「なんだって、わたしの手だて  
は、はしることしかのこっていない。競走をしよう。つかまったも  
のは、つかまる」といった。イヌが、「雌ヤギよ、おまえさんの手  
だてをみせてもらおう」という。雌ヤギは、「にげよう。にげよう。  
あつちのほうににげていこう。あいつがやってきたら、頭でついて  
やろう」といった。リスは雌ヤギに、「おまえさんのやり方はだめ  
だ」といった。雌ヤギは、「手だては、山のまんなかににげていく  
ことだ」という。リスと雌ヤギとイヌはにげていった。ハイエナは  
リスと雌ヤギとイヌをたべようとして、リスと雌ヤギとイヌのあと  
をつけていった。ハイエナはあちらにべつの肉があるとおもった。  
ハイエナはリスと雌ヤギとイヌをたべようとして、あとをつけて  
いく。いくと、ライオンのところにでた。ライオンは、「どうした  
んだ」といった。雌ヤギは、「ほんとうのこと、わたしたちはイス  
ラム教の教師だ。わたしたちはあなたの目がいたむときいた。わた  
したちは、ながいあいだおまえさんにあつていない」といった。ラ  
イオンは、「きたのか」といった。雌ヤギは、「そうですとも」とい  
う。ハイエナがはしって、やってくると、そこにライオンがいた。

ライオンは、「きて、すわりなさい」といった。ハイエナはやってきて、すわった。

さて、ライオンは、「ところで、わたしはながいあいだ病氣だった。でも、おまえさんたちはわたしをなおしてくれるかい」といった。雌ヤギは、「わかるかな。荷物をもってきたのも、おまえさんをなおすためだ」といった。ライオンは、「よろしい。これから、薬を一つ手にいれて、それをわたしの体につけ、病氣をなおすのだ」といった。雌ヤギは、「よろしい」といい、やってくると、ライオンをすわらせた。ライオンはすわった。ハイエナがすわった。雌ヤギはすわった。イヌがすわった。イヌはにげていき、川をわたりにげてしまった。あとに、ライオンと雌ヤギをのこした。

さて、ライオンは、「おまえさんの薬はなににつけるのか」といった。雌ヤギは、「わたしの薬はハイエナの皮につける。ハイエナの皮がすこし、手にはいれば、その皮を蜂蜜につけ、おまえさんはそれをなめたあと、目にはるのだ」といった。ライオンは、「よろしい」といった。ハイエナは雌ヤギに、「ハイエナの皮はなまか、それとも死んだハイエナのものか。死んでいないハイエナのものか」といった。雌ヤギは、「死んだハイエナの皮をつけると、かゆくなる。死んでいないもののほうがよい」といった。

さて、ライオンはハイエナに、「さて、おまえさんのきらつているところをさがすのだ」といった。ハイエナは、「でも、わたしの

体のきらつているところをさがすなんてできませんか。でも、一生懸命になつて、それをさがしましょう。おまえさんのためなら、我慢しましょう」といった。ハイエナはにげていこうとするが、ライオンがしかつたので、すわった。ライオンは、「おまえさんのきらつているところをさがすのだ」といった。ハイエナは足のほうをみると、そこをきりとり、もってきた。雌ヤギはその皮をとると、皮を蜂蜜につけた。雌ヤギは、「その皮をなめてから、目につけておくれ」といった。ライオンは蜂蜜をすいとると、皮をのみこんでしまった。ライオンは、「あつ、のみこんでしまった」といった。雌ヤギは、「それでも、薬は体のなから病氣をなおすではないか。でも、薬をつくつてやろう。わすれないように。今度は、目につけるのだ」といった。雌ヤギはライオンとハイエナの氣をそらした。ハイエナが皮をとると、ライオンはそれを目につける。ハイエナはそのうちに体中の皮をとってしまった。皮はなくなった。ハイエナは体にある皮をみんなきりとりってしまった。

さて、ハイエナはにげていった。ハイエナとライオンは、はしつていった。

さて、リスと雌ヤギはいっしょになつて、にげていったとき。よろしい。このお話はこれで、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルファアイ、ガウンデレにて。この話は、マタカム族の友人がハウサ語でかた

るのを、モコロできいたという。)

## 5 イヌとツチブタ

アツラーのみ名によって。ちいさなお話、ちいさなお話。

イヌが村からでかけていくと、野原にツチブタがいた。イヌはツチブタに、「ツチブタよ、わたしは野原でいっしょにしようとおもってきた。わたしは村からおいだされた」という。子どもたちが石でイヌをいじめる。子どもたちが石でイヌをいじめるのだ。イヌは石がもういやになった。イヌは野原にきて、ツチブタといっしょにいるほうがよいとおもった。

さて、ツチブタはイヌに、「おまえさんはわたしのすむ野原にはおられない。つらいのだ。くるしい。獲物をつかまえる動物がい」という。イヌがツチブタに、「わたしは野原におられる。村ではいじめられるので、つかれた。おまえさんといっしょにいるほうがよい」という。

さて、イヌとツチブタはいっしょにあるいていく。イヌとツチブタはあっちこっちをあるいている。雨がふりかけた。イヌとツチブタははしって、ハイエナの穴にはいつていった。イヌとツチブタは雨宿りをしながら、すわっている。イヌとツチブタは、ハイエナの穴のそとにいるとはしらなかった。ハイエナはそとから、家にかえ

つてきて、そとをむいたまま背中からはいつてきた。ハイエナは穴のなかにいるものがなにかであるかしらなかつた。

さて、ハイエナがすわっているうちに雨が本降りになってきた。ハイエナがうしろをみると、そこにイヌとツチブタがいた。ハイエナはわらった。ハイエナが、「おまえさんたちは、アツラーにつれられてきたのか」という。ツチブタは、「自分たちでできたのか」という。ハイエナが、「おまえさんたちは、アツラーにつれられてきたのか」という。ツチブタは、「自分たちでできた」という。ハイエナが、「おまえさんたちは、アツラーにつれられてきたのか」という。ツチブタは、「自分たちでできた」という。ハイエナは三回くりかえした。ハイエナは戸をしめた。

さて、ツチブタはイヌに、「おまえさんに、このことをいつていたのだ。わたしがでられるように、なんとかしておくれ」という。

さて、イヌは、「わたしには十三の手だてがあつた。けれど、いまは三つしかのこつていない」という。ツチブタは、「その三つとはなにか」といつた。イヌは、「小便と大便と屁の三つがのこつていただけだ」といつた。ツチブタは、「おまえさんの手だてはなくなつたのか」という。イヌは、「うん」といつた。ツチブタは、「それしかないのか」という。イヌは、「うん」といつた。ツチブタはイヌに、「よろしい。それでよい。わたしはわたしの手だてをつかつ

てみる」といった。ツチブタはハイエナに、「わたしらは村からや  
つてきた。村でロバが死んでしまった。そいつは、雌で、もう子  
どもをうまなくなつたくらいやつだ。わたしはおまえさんをよび  
にきた。おまえさんはいくのだ。村の半分はおまえさんがそいつを  
たべてしまえるといつている。村の半分はおまえさんにはたべられ  
ないといつている。王さまがわたしらにおまえさんのところにいっ  
て、おまえさんをよぶようにといつた。おまえさんは、いつて、そ  
のロバをたべるのだ。あの人たちの言い争いにけりをつけさせるの  
だ」といった。

さて、ハイエナは、「ほんとうのこと、わたしにはわかつている。  
わたしにはわかつている。わたしは、わけもなく、おまえさんたち  
がくるわけがないといつことをしつている。それでは、いこう」と  
いった。ツチブタは、「いやいや。雨がすこし小降りになるまでま  
ちなさい」といった。ハイエナはいくと、穴のそとをみて、もどつ  
てきて、「ああ、もう、雨がやんだ」といふ。ハイエナはもどつて  
くると、「まで。あいつらに勝手なことをいわせておこう」といふ。  
さて、すこしすると、ハイエナはツチブタに、「いこう」といふ。  
雨がすこし小降りになった。ツチブタはイヌに、「そとにでよう。  
いこう。いこう」といふ。イヌは穴のそとにでた。ツチブタはハイ  
エナに、「イヌにツイていきなさい」といった。ハイエナはイヌの  
あとをあるいていった。ツチブタがイヌとハイエナについてい

た。イヌとハイエナとツチブタは、どんどんあるいていった。なが  
いあいだあるいた。

さて、ツチブタはハイエナに、「わたしはいいことをかんがえた。  
イヌはわかいから、はしつて、村の人たちにしらせにいくののだ。お  
まえさんとわたしはあるいていけばよい。イヌがやつてきて、わた  
しらにあうまで、わたしはおまえさんといっしょにあるいていく  
といふ。

さて、イヌははしつた。ツチブタはイヌに合図をした。イヌは、  
はしつていってしまった。ツチブタはイヌに、「いったら、どうし  
たらよいかかんがえろ。自分でかんがえろ」といふ。

さて、イヌはいつてしまった。イヌはハイエナからにげていっ  
た。イヌはどんだんはしつていった。ツチブタは、イヌがにげきつ  
たのがわかると、ハイエナに、「ふむ。わたしはまたしてもよいや  
りかたをおもいついた。王さまが使いのものをおくり、使いのもの  
がやつてきて、だれかをよぶなら、使いのものがばらばらになつ  
て、よばれたものを王さまのところにつれていくわけにはいかない  
(意味不詳)。おねがいだ、おまえさんは足がはやい。はしつて、イ  
ヌにおいついておくれ。イヌにおいついたら、おまえさんのもどつ  
てくるのだ。いっしょにいこう」といった。ハイエナは、「ほんと  
うだ」といった。ハイエナはいそいではしつていった。ツチブタは  
地面をほり、穴にはいつていった。ハイエナははしつていったが、

イヌにおいつけなかった。ハイエナがもどってきたら、そこにはなにもいなかった。

さて、このお話はこのとおり。

(一九九三年、語り手 ルーティ・センベ・ラーム、レイ・ブーバにて。ルーティは六五歳。ルーティの父親はフルベ族。母親はチョッリレのガルケ族。ルーティはチョッリレのさきにあるタパーレ村で生まれる。この話は老女たちから聞いたという)

## 6 雌ヒツジとハイエナ

ちいさなお話、ちいさなお話。聞き手の頭にある禿のまんなか。

雌ヒツジたちが道にまよった。雨雲がでてきた。雨がザーツとふっている。

さて、雌ヒツジは道にまよい、穴のなかで、ちいさな火がもえているのを見た。雌ヒツジは、「平安、なんじらにあれ。平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。ほんとうのこと、その穴のなかにハイエナがいた。ハイエナが、「なんということだ。自分はよめさんといっしょなのに、おちつけない。こんなときに、だれかが、『平安、なんじらにあれ』などという。わたしはこんな来客がいやだ。いっつしまえ。わたしはでない」といった。雌ヒツジはハイエナの声を

きくと、村にはしつてにげていってしまった。雨がすこしおさまると、ハイエナは穴のそとにでてきて、雌ヒツジの尿の臭いをかぎ、それが雌ヒツジの尿と糞だとわかった。もう、ここ(マーヨ・ルウエ)とモコロくらいはなれているところにむかつて、「なんじらに、平安あれ」と返事をした。体のむきをかえると、ここからムビ(ナージェリアの南東部にある町)くらいはなれたところにむかつて、「なんじらに、平安あれ」と返事をした。ハイエナは穴にもどつてくると、よめさんを棒でうち、「どこかにいっつしまえ。おまえはわしの頭をさわつてくれなかった。それで、簡単に手にはいるものをにがしてしまった」という。ポカン、ポカンとなぐつた。仲間たちがやってきて、「どうしたのか」という。ハイエナは、「こういうことだ。わしらにはこういうことがあった」という。仲間たちは、「おまえさんたちはどうしたのか」という。ハイエナは、「きょう、雌ヒツジがやってきて、『平安、なんじらにあれ』といった。よめさんは、『夜、来客のところはどうしておまえさんがいかなければならないのか』といった」という。仲間たちは、「それは、どうということもない。どうということもない」という。

わたしのお話は、おしまい。

(一九六六年ころ、語り手 サイドゥ・マーヨ・ルウエ、マーヨ・ルウエにて)

## 7 ハイエナとリス

ちいさなお話、ちいさなお話。聞き手の頭にある禿のまんなか。

ハイエナとリスがなかくなった。ハイエナとリスがなかくよくなるよ。リスはハイエナに、「友よ、ぼくはここにねている。ぼくが肉の夢をみると、おこしておくれ。わかたな」という。ハイエナは、「よろしい、友よ」という。リスはねているまねをし、「肉、肉」という。

さて、ハイエナはおきあがり、「友よ、リスよ、おきろ、友よ。きみは肉の夢をみた」という。リスは、「よろしい」というと、おきあがった。

さて、リスはハイエナに、「籠と包丁をもて」といった。

さて、ハイエナは籠と包丁をもった。

さて、リスもハイエナとおなじように籠と包丁をもった。リスとハイエナはでかけていった。リスとハイエナはいっしょにあるいていった。いくと、野原にライオンが死んでいた。

さて、リスはハイエナに、「ハイエナよ、友よ、このライオンの尻の穴にはいれ。きみは、そこにはいれ」という。

さて、ハイエナは籠と包丁をもつて、ライオンの尻の穴にはいっていった。リスははしつて、死んだライオンの仲間たちをよびにいった。

さて、リスはライオンの仲間、「おねがいだ、きておくれ。こういうことで、わたしはきたのだ。あそこで、わたしの従兄弟が死んでいる。どういふ病氣にかかっていたのかわからない。従兄弟は死んでしまった。きて、みておくれ」という。

さて、ライオンたちがやってきた。

さて、リスは、「腹をさいて、みてみたほうがよい」といった。ライオンたちが腹をさいてみると、腹のなかで、ハイエナが籠と包丁をもっていた。ライオンたちは、「なるほど、おまえがころしたのだな」といった。ライオンたちは、「ハイエナをつかまえよう」といって、ハイエナをつかまえた。

さて、ハイエナをつかまえると、リスがどこからかやってきた。リスがくると、ライオンたちがハイエナをもっていた。リスは、「おまえさんたちは、ハイエナをどうするのか」といった。ライオンが、「みてみる。ハイエナはわしらの仲間をころしてしまった」といった。

さて、リスは、「そうか、それはよい。そういうことなら、ハイエナをころすな。ハイエナには薬があるから」という。リスは手に蜂蜜をもっており、ライオンたちにすこしずつ蜂蜜の味をみさせた。リスは、「この薬はここにいるハイエナからしぼりだした。ハイエナをしぼったら、ウンコみたいにして、蜂蜜を尻からだした」といった。ライオンたちはハイエナをつかまえると、ハイエナをど

んどんしぼっていく。ライオンたちはハイエナの糞の味をみる。ま  
ずかった。蜂蜜のような味をしていなかった。リスは、「それでは  
ない。こういうものをださなければならぬ。おいしいのは、でて  
きていない」という。ライオンたちがハイエナをしぼっているうち  
に、ハイエナはそこで死んでしまった。

さて、そこにライオン一頭とリスがのこった。リスは、「なんだ  
って、ライオンよ、おまえさんは、ハイエナがわたしの従兄弟をこ  
ろしたのをみたな。でも、わたしはおまえさんの体にホロホロチヨ  
ウやシャコの体にあるような斑点をつけてやろう。わたしはホロホ  
ロチヨウやシャコたちにあるような斑点をつけてやったのだ。穴  
をほりなさい」という。ライオンはおおきな穴をほり、薪をあつめ  
た。リスはライオンに、「ここにはいれ。おまえさんは火傷しても、  
なにもいうな。自分は、堂どうとして立派なものだというのだ」と  
いった。ライオンは穴のなかにはいった。リスはライオンのうえに  
薪をかぶせた。リスはそのうえからガソリンをかけて、マッチをす  
って、火をつけた。ライオンに火がつく。ライオンは大声をあげて  
いる。リスは、「我慢しなさい。わたしはおまえさんの体の色をか  
えてあげる」といった。

さて、そのうちに、ライオンはそこで死んでしまった。リスは子  
どもたちをつれてやってきた。リスたちはライオンの肉をもつてい  
く。

さて、そういうことで、お話は、おしまい。

(一九六六年ころ、語り手 サーリフ・マヨ・ルウエ、マヨ・  
ルウエにて)

## 8 ハイエナとリス先生

さて、お話、お話。

この話はこうだ。ハイエナはコーラン学校で子どもたちにおしえ  
ている。ハイエナとリス先生の話だ。ハイエナは先生で、リスは大  
先生だった。ハイエナはコーラン学校の生徒におしえている。リス  
もコーラン学校の生徒におしえている。

さて、ハイエナはいつも、子どもたちに薪をとりにいけという。  
ハイエナは雌ヒツジの子どもにおしえる。雌ヒツジの子どもたちに  
薪をとりをやらせる。雌ヒツジの子どもたちが薪をとりに行くど  
ハイエナは一匹つかまえ、ころしてたべる。雌ヒツジたちは、「ど  
うしてなのか。先生、わたしたちの子どもがいなくなった。わたし  
たちの子どもがいなくなった。さがしたほうがよい」という。雌ヒ  
ツジたちはずっと子どもをさがしている。

さて、ハイエナは子どもをたべて、にげてしまった。ハイエナは  
子どもをなおす薬のつくりかたをしっているという。ハイエナがい  
くと、子どもがいた。ハイエナは、「塩とトウガラシと油をもって

おいで。みんなもつてきて、おいておくように」といった。子どもはそれをみんなもつてきた。ハイエナはそれをおいておいた。子どもはいくと、ネギをもつてきた。子どもがもつてきた。ハイエナはそれをもつて、小屋にはいった。ハイエナは、「よろしい。ネギはそれを見たら、草だというだろう」といった。ハイエナはそれをもつて、小屋にいれた。ほんとうのこと、ネギのしたには、タマネギがついていた。ハイエナはやつてくると、タマネギをきった。ハイエナは、「小屋をしめなさい。(関係のないものは)そとにおらせなさい」といった。ハイエナは子どもをつかまえて、(小屋のなかで)やいて、すっかりたべてしまった。ハイエナは穴をほって、にげていった。ハイエナはにげきった。子どもの親たちは、「さて、野原の動物をすべてあつめるのだ。そのなかで、ハイエナをつかまえてつれてくることのできるものには、屋敷と雄ウシをやる」といった。子どもの親たちは、「さて、ロバよ、おまえさんはなにがほしい」といった。ロバは、「モロコシがほしい、モロコシをおくれ。わたしはそれをたべる。わたしがモロコシをたべて、満腹すると、わたしをころすのだ。わたしの肉で、あのハイエナをつかまえる」といい」といった。リスは、「よろしい。わたしはロバの肉とロバの腿肉をのせていくためのべつのロバがほしい。わたしはいつて、おまえさんたちにハイエナを野原から、ここまでつれてきてあげよう」といった。

さて、子どもの親たちはロバをころした。子どもの親たちはヤギの父親をつかまえた。子どもの親たちは雄ヤギとロバの肉になにかをかぶせておいた。たくさん肉をつくった。

さて、子どもの親たちは、「ハイエナはつかまえられることがわかると、小屋のうえにあがってしまう」といった。リスは、「ハイエナよ、どうしている。平安、なんじらにあれ。ハイエナおじさんは、いるか」という。ハイエナの家族は、「いいや、いない。ここにはいない」という。リスは、「ああ、残念だ」という。ハイエナの家族は、「どうした」という。リスは、「ほんとうのこと、おいしいものがきたのに、たべられないでいる。おいで。いつしよにもつてきた肉をたべよう。ほんとうだ。いつておく。ロバが死んだので、あちらでその喉をかききった。ここに腿肉がある」といった。ハイエナの家族は肉をたべはじめた。ハイエナは小屋のうえにとまつている。ハイエナの家族は肉のなかにはいつて、肉をわけた。

さて、ハイエナがやつてくると、肉がたくさんあった。肉はたくさんあった。ハイエナは肉をみた。ハイエナは、「なんだって、それはどうしたのか」といった。リスは、「それでは、おりてきて、たべる。なにものこっていない。おりてきて、たべる」といった。ハイエナはおりてきて、肉をたべた。ハイエナはほとんど肉をたべた。ハイエナは雄ヤギと目があつた。ハイエナは、「アツラーは聖なり」というと、雄ヤギになにかをかぶせた。そちらにいくと、尾

つぼがあった。そちらにいつても、尾つぼがあった。こちらにきても、尾つぼがあった。

さて、雄ヤギたちはハイエナをつかまえた。雄ヤギたちはハイエナをころすと、リスに、食べ物や肉や雌ウシなどをやった。みんなはハイエナをつかまえて、ころしたとき。

このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話はヤウンデのちかくにあるムバルジョック出身の南部の男がフルフルデ語でかたるのを一九八二年にきいたという。)

## 9 ハイエナとサル(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

サルがあるいていくと、ハイエナにであつた。ハイエナはお腹がへつていた。ハイエナはサルがたべたかつた。サルはきつとハイエナにくわれるとおもつた。

さて、サルは、「ハイエナおじさん、ハイエナおじさん、わたしはおまえさんのしようとしていることが気にいらぬ。これから、リス先生のところにいこう」という。

さて、サルとハイエナとリスはともに、あるいていった。サルと

ハイエナは、リス先生のところにいく。

さて、ハイエナは、「まつておくれ。水をのむ」といった。ハイエナは水をのみにいった。

さて、ハイエナは井戸のなかにおちてしまった。ハイエナは、「サルおじさんよ、わたしはおまえさんにここからだしてもらつたら、おまえさんをたべるのをやめる」という。サルは、「わたしは、おまえさんのことがわかつている、ハイエナおじさんよ。おまえさんを井戸からだしてやつたら、おまえさんはわたしをたべるだろう」という。ハイエナは、「わたしはおまえさんをたべない」という。

さて、サルは、「ハイエナおじさんよ、わたしの尾つぼをつかまえない」といった。ハイエナおじさんは、サルの尾つぼをつかまえた。サルはハイエナを井戸からひっぱりだした。

さて、ハイエナは、「いま、わたしは井戸におちて、つかれていく。すこしのあいだ、わたしをせおつておくれ。いこう」という。サルはハイエナをせおつた。サルとハイエナはあるいていく。

さて、ハイエナは、「おまえさんのきらつてるところをすこしばかりさがしだし、それがどこかいておくれ。わたしは、そこをちぎる」といった。

さて、サルは、「なんだつて、ハイエナおじさんよ、わたしがいつたとおりではないか。おまえさんは、わたしをたべるといふ。そ

れでは、リス先生をさがしにいこう」という。サルとハイエナはでかけていき、リス先生をさがした。サルとハイエナはリス先生をさがしてあてた。

さて、リスは自分の穴の入り口にすわって、「サルよ、おまえさんはあちらにすわるように。ハイエナおじさんよ、あちらにすわりなさい」といった。

さて、リスは紙をもつて、すわった。リスは、「サルおじさんよ、まっすぐな木をみあげなさい。わたしはまがつた穴をのぞく。まっすぐな木をみあげなさい。わたしはまがつた穴をのぞく。わかつたな、サルおじさんよ」という。サルおじさんは、「わかつた」といった。リスは、「どうなのだ、ハイエナよ」という。ハイエナは、「そのとおりです」という。サルは、またしてもおなじことをいう。「サルおじさんよ、まっすぐな木をみあげなさい。わたしはまがつた穴をのぞく。まっすぐな木をみあげなさい。わたしはまがつた穴をのぞく。わかつたな、サルおじさんよ」という。サルは、「わかつた」という。

さて、そのとき、サルはまっすぐな木をみあげて、木の枝をつかんだ。リスは体のむきをかえると、まがつた穴をのぞいて、ハイエナをそこにのこして、穴にはいつていった。ハイエナは涎をたらししている。ハイエナはおくにいるサルをみて涎をながす。ハイエナは穴をのぞくが、リスはみえなかつた。サルとリスはいつてしまっ

た。サルとリスは、ハイエナをあとにのこしたとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。ひよっとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッポ・マンガ、  
ガウンデレにて)

## 10 ハイエナとサル(2)

ハイエナとあかいサルがいた。

ハイエナは水のみにきた。水は井戸のなかにあった。ハイエナは井戸のなかにおちた。サルが水のみにくる。やってくる、ハイエナが井戸におちていた。ハイエナは、「おねがいだ、サルよ、わたしをここからだしておくれ」といった。ハイエナはサルにたのむ。ハイエナは、「おねがいだ。おねがいだ。わたしをここからだしておくれ。うえにひきあげておくれ」という。サルはハイエナに尾っぽをさしだし、ハイエナをひきあげ、井戸のうえにだした。ハイエナはサルの尾っぽをもったままだ。尾っぽをもっている。サルは、「なんだって、ハイエナよ。おねがいだ。わたしを自由にしておくれ」といった。ハイエナは、「わたしの体がすこしかわくまで、まつのだ。わたしの体に泥がついている。みてみる」といった。ハ

イエナはずつとやすんでいる。サルはハイエナに、「おねがいだ。ハイエナよ。はなしておくれ」という。ハイエナは、「おまえさんの背中には脂肪があるというではないか。みんなそういつているが。きょう、その脂肪の味をみてみる」といった。サルは、「なんだって、きょう、その味をみてみるって。よろしい」といった。リスがやってくる。リスには知恵がある。

さて、リスがやってきた。リスは、「きこえるか。おまえさんたちはどうしたのか、ハイエナよ」という。ハイエナは、「サルの背中には脂肪があるといっている。わたしはその脂肪の味をみてみる」といった。リスは、「よろしい。わかるか、ハイエナよ。村長の家のものがやってきた。その人たちは村人から税金をあつめている。おまえさんがいるのをみつけたら、おまえさんをつかまえるだろう」といった。リスはハイエナにさういふと、サルにマサ語で、「よろしい、おまえさんはその木にのぼりなさい。おまえさんは木を折りなさい」といった。リスは、穴にはいるといった。サルとハイエナとリスはそこにいる。リスは穴にはいった。サルはいそいで、木にのぼった。ハイエナはアリ塚の穴をみている。ハイエナはずつとそこにたっている。すぐに、ゾウがやってきた。ゾウのキンタマはこんなにおおきかった。ゾウはキンタマをひきずりながらやってきた。やってくると、ハイエナがいた。ハイエナはアリ塚のところになつている。ゾウは、「どうして、ここであつてい

るのか、ハイエナよ」といった。ハイエナは、「リスはひどいことをしてくれた」といった。ゾウが、「どういうことか」という。ハイエナは、「わたしはサルの尾っぽをつかんで、サルの脂肪の味をみるといった。そこへ、リスがやってきて、マサ語でしゃべったのだ」という。ハイエナはオノをもつていて、それで、どんどんリスのはいった穴をほつていく。ゾウは、「ハイエナよ、ちよつとわたしにやらせておくれ」という。ゾウは力をだして、どんどんほつていく。埃がとびちる。埃はゾウの背中にかかる。ハイエナはそこにずつとたつて、ゾウをみている。ハイエナはゾウのキンタマをみている。ゾウのキンタマはリスよりおおきい。ハイエナはゾウのうしろにむかつてはしつていく。ハイエナはやってくると、ゾウの背中に埃をかけた。そのあとで、ゾウのキンタマにさわる。ゾウは、「ハイエナよ、どうしたのか」という。ハイエナは、「リスがでてきたとおもつたのだ。なるほど、でていないのだな」といった。ハイエナはそこにたつて、ずつとゾウをみている。ハイエナはよくかんがえた。ハイエナは、「なんと、このキンタマをとると、わたしはお腹がいっぱいになる。リスよりいい」といった。ほんとうのこと、ハイエナはそうかんがえた。ハイエナはとおいところになつていたが、ピョンピョンピョンピョンとやってきて、力をいれて、ゾウのキンタマをきつてしまった。ゾウは穴のうえにたおれた。ゾウは死んだようになった。ハイエナはキンタマをもつてにげていき、

屋敷についた。ハイエナたちはゾウのキンタマをたべている。とうとう、子どもたちもみんな満腹した。リスは知恵をつかって、穴のそとにでた。でてくると、ゾウがそこよこになつていた。ゾウは穴のところよこになつてゐる。リスはゾウに、「いますぐ、ハイエナをつれてこいというなら、そうする」という。ゾウが、「どうしたらよいかわかつてゐるなら、ハイエナをここにつれてこい。あいつをみてみる」という。リスは夜に、大声をあげて、「きのう、だれが獲物を射たのか。肉に虫がわいてゐる」といった。ハイエナが、「おちつけ。おちつけ。わかつた。きのう、わたしはむこうで、獲物を射た」という。ハイエナの家族はおちついた。リスが、「だ

れが、きのう、矢で獲物を射たのか」という。ハイエナは、それをきくと、籠をもち、家にあるいろいろなものをもつていった。子どもたちもみんなハイエナについていった。ハイエナはゾウの皮をはいでやろうとして、ナイフをもつてゐる。リスは虫をひろい、ゾウのキンタマをきりとつた傷のなかにいれた。ゾウはまるで死んでしまつたようによこたわつてゐる。すこしもうごかない。すこしも、うごかなかつた。ゾウはよこたわつてゐる。ハイエナがやつてきて、みた。ゾウがうごいてゐるようにならぬ。ハイエナは、「なんだつて、こいつは死んでゐないではないか。こういうことなら、死んでゐない」といった。リスは、「ずっとまえに死んでゐる。くさつていつてゐる。虫をみてゐないのか。ゾウはくさつていつて

ゐる」といった。ハイエナは、ゾウをすこしさわる。ハイエナは、「なんだつて、死んでゐないではないか」といった。リスは、「死んでしまつてゐるではないか」といった。すこしあとで、ハイエナは欲がでてきて、キンタマをきりとつたあとにのこつた穴にはいつていった。そこには穴ができてゐるではないか。ハイエナはゾウの腹のなかにはいつていった。ゾウは力をこめて、ハイエナを腹のなかにとじこめた。ゾウは、「きょうこそ、ひどい目にあわせてやる」といった。とうとう、ハイエナはゾウの腹のなかで死んでしまつたとき。

お話は、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ベットロ・デニス。ベットロ・デニスはジギラウ村出身のトゥブリ族でケイニ村でウシ飼いをしている)

## II ハイエナとサル (3)

お話、お話。

ウサギとリスがいた。ウサギとリスは道のうえに小屋をたてた。人びとはその道をとおりすぎていく。ある人がオノをもつて、たちあがつて、やってくる。リスの小屋をつぶしてしまつた。リスもたちあがると、ウサギの小屋をこわしてしまつた。ウサギとリスは

喧嘩をした。ハイエナがやってくると、ウサギとリスは喧嘩をしている。ハイエナは、肉がたべたかった。ハイエナはウサギとリスを両方ともつかまえた。ハイエナはウサギとリスをたべてやるという。リスは、「ハイエナよ、ごらんのとおり、わたしらは喧嘩をしている。おまえさんは、わたしらをたべるといった。それは、どういうことかな」という。ハイエナは、「なんだって、きょう、わたしはおまえさんたちをはなさない。おまえさんたちはわたしに悪知恵をはたらかそうとおもっているのだな。とうとう、きょう、わたしはおまえさんたちを手にいれた。きょうこそ、わたしはおまえさんたちをはなさない。きょうは、おまえさんたちをたべてしまわなければならない」といった。リスは、「ハイエナよ、おまえさんがわたしらをたべるといふのなら、おちついておくれ。わたしはおまえさんに話をする。こういうことだ。村長のところで、きょう、子どもたちがたくさんの家畜をころした。村長の屋敷のなかにはたくさんの肉がある。村長たちはその肉を施し物にする。村人たちはみんな村長の屋敷のなかにはしつていく。わかるかな。おまえさんがわたしらをたべても、たりないだろう。おまえさんは食欲をみたせばそれでよい。おまえさんにしゅうぶんでないなら、食欲はそのままで。ハイエナよ」という。ハイエナは、「よろしい」といった。リスが、「東のほうをみるのだ」といった。ハイエナが目をも東のほうにやると、リスはずっとまえに穴にはいつていた。ウサギ

も、ずっとまえに茂みのなかになにげいてしまった。リスとウサギはハイエナをそこにたたせておいた。サルがやってくると、ハイエナがたつていた。サルは、「だれにたたされているのか。ハイエナよ」といった。ハイエナは、「なんということか。ここで、おしえてもらったのだ」といった。サルが、「なにをおしえてもらったのか」という。ハイエナは、「ウサギとリスがおしえてくれたのだ。わたしはここでウサギとリスをみつけた。わたしはウサギとリスを両方ともつかまえた。わたしはウサギとリスをくってやるという。リスは、村長の屋敷にたくさんの肉があり、村長たちは施し物をする、村長たちはその肉をだれにでもくれる、わたしがそれをたべたら、満腹するが、それでも肉があまるといった」といった。サルは、「よろしい」といった。ハイエナは、「リスは、わたしに目を東のほうにむけて、みるようにといった。リスはここにある穴にはいつてしまった。ウサギは茂みのなかになにげいていった」という。サルがやってくると、ハイエナがいた。ハイエナはよだれをたらしている。ハイエナは肉を手にいれたが、自分の手からにげいていった。サルはハイエナに、「ハイエナよ、わかるかな。こういうことだ。わたしらはあちらで、ゾウをころした。ゾウにはおおきなキンタマがある。おまえさんは、そこについてみないとわからない」という。ハイエナはサルに、「サルよ、おまえさんにさきがあるいてもらわないと。わたしはおまえさんについていく」という。サルはハ

イエナのまえをあるいていった。ハイエナはそのあとをあるいていく。ハイエナはすぐにサル尾っぽをつかまえた。尾っぽをばつと力を入れてつかまえて、サルをひっぱっている。サルをたべようというわけだ。サルは、「なんだって、ハイエナよ、おまえさんにほかのものが話をしていのではない。わたしがおまえさんに話しているのだ。おまえさんをうまいもののある場所に、つれていこうとしている。おまえさんは、わたしに目をつけて、わたしをたべようというのかい」といった。リスには知恵があるので、穴のなかで話をきいている。リスはきいている。ハイエナとサルのことをみんなきいている。リスはでてきた。リスは、「なんだって、ハイエナよ。おまえさんとサルにながったのか」といった。ハイエナは、「サルがわたしを肉のある場所につれていくといったのだ。あちらに、たくさん肉があるといっている。わたしには、食欲がある」といった。ハイエナはリスにそのようにいう。リスは、「よろしい。ハイエナよ、それなら、サルをはなしてやりなさい」といった。ハイエナは、「わたしは、きょう、サルをはなさない」という。ハイエナは、「なんだって」といった。ハイエナは喉がかわいてきた。そこには水があるところがなかった。リスは、「ハイエナよ、水がほしいなら、くるのだ。おまえさんを水のあるところまで、つれていってあげる」という。ハイエナはサルをはなし、リスについていく。リスはハイエナを泥のあるところにつれていった。そこ

は、どうしようもないところだった。足をいれると、泥に足をとられてしまう。ハイエナは欲ばりなので、そこにつくと、水をのもうとした。泥のあるところにつくと、ハイエナの足が泥にとられてしまった。太股まで泥ははまった。ハイエナは自分で足をひきぬげなかつた。ハイエナはひからびるまで、そこにたっていたとき。

お話は、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ベットロ・デニス。ベットロ・デニスはジグラオ村出身のトゥプリ族。ケイニ村にて。この話は、ファイアングで、ケーラ族の女、ラセ・ラーガからきいたという)

## 12 ハイエナとサル(4)

サルはハイエナが泥で身動きができないのをみつけた。ハイエナは、「おねがいだ。泥からだしておくれ」という。サルは、「なんだって、わたしはおまえさんを泥からださない。おまえさんを泥からだすと、おまえさんはわたしをたべるといふことをしている」といった。ハイエナは、「おねがいだ。わたしはおまえさんをたべない。泥からだしておくれ」といった。サルは、「なんだって、わたしは、それをひきうけられない」といった。ハイエナは、「おねがいだ。泥からだしておくれ。わたしはおまえさんをたべない」といった。サルは、「なんだって。わたしは、それをひきうけ

られない。ハイエナよ、わたしはおまえさんのことがわかってい  
る」といった。

さて、そのうちに、サルは、「よろしい。それでは、おまえさん  
を泥からだしてやろう」といった。サルははねて、たつと、「わた  
しの尾っぽをつかめ」という。

さて、ハイエナはサルの尾っぽをつかんだ。ハイエナが尾っぽ  
をつかむと、サルはとびはねた。こうして、ハイエナは泥からでて  
きた。サルは、「わたしから手をはなせ」という。ハイエナは、「な  
んだって、まっておくれ。わたしはやすむ。まっておくれ。わたし  
は、まだやすんでいる。わたしは泥のなかで、痙攣をおこした。ま  
っておくれ。すこしやすむ」といった。サルは、すこしのあいだま  
った。サルは、「わたしから手をはなしておくれ、ハイエナよ」と  
いう。ハイエナは、「なんだって、まっておくれ。わたしはやすむ」と  
いう。サルは、「わたしから手をはなしておくれ」という。ハイ  
エナは、「まっておくれ。わたしはやすむ」といった。サルは、「な  
んだって。だから、わたしはおまえさんに、おまえさんはわたしを  
くうだろうといったではないか」といった。

さて、サルはとびはねた。サルはとびはねると、ハイエナがにぎ  
っていた尾っぽがきれた。こうして、サルはにげていったとき。

さて、こういうこと。

(一九九〇年二月一九日、語り手 アーマドウ・モーディッポ、

ケイニ村にて。この話は従兄弟からきいたという)

### 13 ハイエナと死神 (1)

ハイエナと死神のお話。死神はいつて、川向こうで雌ウシをころ  
し、そこにおいておいた。死神は、「この野原のまんやかに、この  
ように、わたしの雌ウシの肉がある。わたしの雌ウシはこえて、脂  
がのっている。(たべたいものはたべるがよい。しかし) わたし  
は、やってきて、この肉をたべてしまったものを、ころす」といっ  
た。どの動物もやってきて、この話をきくが、たべようとしなかつ  
た。ハイエナがやってきて、「友よ、わたしがそれをたべても、水  
はのませてくれるだろうな。それとも、わたしに水をのませてくれ  
ないか。友よ。わたしがいつて、水をのんでもいいか」といった。  
死神はハイエナに、「おまえさんに水をのませてやる」といった。  
よろしい、ハイエナはいくと、その肉をすっかりたいらげてしまっ  
た。ハイエナは頭をあげて、四方をみわたし、「友よ、死神よ、ま  
っいておくれ。わたしは水をのんでもどつてくる」といった。

さて、ハイエナは、おおいそぎではしつていくと、水のみつけ  
て、のんだ。ハイエナは背伸びをした。ハイエナはまたしても、水  
をのみ、川をわたった。ハイエナは、「こん畜生め、死神よ、おま  
えさんはかしこいけれど、わたしにであえるとでもいうのか」とい

った。ハイエナはいくと、おおきな窪地にいって、そこでそしらぬ顔をしてすわつていた。ハイエナは窪地にいくと、居眠りをはじめた。

すると、ハイエナのまえに、死神があらわれた。

さて、死神はハイエナに、「ハイエナおじさんよ、ここでころしてほしいのか。あるいは、このさきでころしてほしいのか」という。ハイエナは、「いやいや、わたしはまだ水のあるところにいっていない」という。ハイエナはおきあがると、またあるきはじめた。ハイエナはどんどんはしつていった。はしつていくと、蔓アカシアの茂みがあった。ハイエナはそのなかにはいって、よこになつた。しばらくすると、居眠りをはじめた。死神はハイエナに、「ハイエナおじさんよ、わたしはずつとおまえさんをまつている。ここで、ころしてほしいのか。いっておくれ。友よ、ここには日陰もあり、水もある」という。ハイエナは、「いや、わたしはまだ水のあるところにいっていない。水がなくなつてしまつてゐる」という。ハイエナははしつた。ハイエナがいくと、自分の子どもたちがいた。ハイエナは子どもたちに、「だれかがきて、父さんがいるかどうかたずねたら、いないといひなさい」という。ハイエナはいくと、穴があつたので、そのなかにはいつた。ハイエナは、「こん畜生め、まえ、わたしは穴のそとにいた。いま、わたしは穴のなかにいる。死神がこの穴のなかにはいってこられるか、みてみよう」と

いつた。

さて、ハイエナが居眠りをはじめた。

さて、死神がやってきて、「なんだつて、友よ、おまえさんは土のなかにいる。わたしがおまえさんをころしても、おまえさんをほうむる必要がない。おまえさんは、自分で自分をほおむつたということになる」という。ハイエナは、「いや、わたしはまだ水のあるところにいっていない」といふた。ハイエナは穴からでると、いいたいどうしたらよいだろうといつた。ハイエナは乾期のモロコシの畑をみつけ、そこによこたわり、齒をむきだし、すつかり息をとめた。ハイエナは目をむきだし、自分は死んだといつた。

さて、死神がやってきて、ハイエナのうえから頭をさげ、「アッラーよ、わたしはすべてのものの命をとる。わたしはこのハイエナの命をとっていない。それなのに、きょう、だれがやってきて、このハイエナの命をとつたのか」といふた。

さて、死神はたずねたが、どうしたらいいのかわからなかつた。

さて、精霊がそこをとおるかかり、やってきて、「どうしたらよいか、おしえてほしいか。いって、トウガラシをさがしてきなさい。トウガラシをさがしてくると、やってきて、それをこのハイエナにふりかけなさい。ハイエナはおまえさんを見るだろう」という。死神はいって、トウガラシをさがし、それを粉にした。死神はやってくると、ハイエナのうえにふりかけた。ハイエナはおきあが

つて、くしゃみをした。ハイエナはそこでしんでしまったとき。

(一九六九—一九七〇年、語り手 パーサー・ウオ村出身のアブド  
ウツラーイ・オスマーン、マルアにて)

## 14 ハイエナと死神(2)

お話、お話。

死神は自分の雄ヒツジをそだてた。死神はその雄ヒツジをつれて野原にいった。雄ヒツジは死神についていく。死神は雄ヒツジをつれて、あっちこっちをあるいた。あっちこちあるく。死神はその雄ヒツジをつれて、人をさがした。もし、その人がその雄ヒツジをうけとり、たべてしまうと、七日すれば、死神はその人をころすつもりだった。ハイエナは欲をもっていたので、その雄ヒツジをうけとった。死神は、「ハイエナよ、おまえさんは、この雄ヒツジをうけとるのか」といった。ハイエナは、「はい。わたしは、雄ヒツジをうけとった」といった。死神は、「ハイエナよ、ほんとうにおまえさんはうけとるのかい」といった。ハイエナは、「はい。わたしは、雄ヒツジをうけとる」といった。ハイエナの口から涎がたれていく。というのは、欲のためだ。ハイエナはうけとるといった。ハイエナは、雄ヒツジの皮をはいで、皮もいっしょにたべてしまった。あとには、なにものこらなかつた。

死神はおちついて、日数をかぞえようとする。

さて、ハイエナはよこになっている。五日たった。二日のこっているではないか。ハイエナはにげていった。明け方ころ、ハイエナはどんだんはしっていく。ハイエナの体には、すべてやわらかいウシコがついている。

さて、ハイエナはつかれた。ハイエナはどんだんはしっていく。ハイエナはたちどまった。ハイエナのまえに、死神があらわれた。死神は、「ハイエナよ、どうしておまえさんは、はしっているのか」という。ハイエナは、「なんだって、わたしはおまえさんからいいたいのだ」といった。死神は、「わたしは死神なのに、おまえさんはわたしからにげるといふのか、ハイエナよ」という。ハイエナはもときたほうにいそいではしっていた。どんだんはしっているうちに夜があげて、朝になった。二十日のあいだ、ハイエナは野原をはしっており、やってくる、たちどまった。死神がちがいてきた。死神は、「なんだって、きょうはどうしたのだ」といった。死神はまたしてもハイエナのまえにたっている。ハイエナはつかれてしまった。ころされるまで、一日のこっているだけだった。ハイエナはたちあがり、どんだんはしっており、その日から、一ヶ月ほどはしっている。そのへんは、やわらかいウシコだらけだ。ハイエナはすっかりつかれて、もう力がのこっていないかった。どうしようもないほど、つかれている。死神がやってくる、ハイエナ

がいた。死神はたっている。ハイエナは死神に、「わたしは欲をだして、雄ヒツジをうけとった。でも、うけとるべきではなかった」という。死神は、「おまえさんはわたしからにげられるか」といった。どこにでも、死神はいる。死神のいないところはない。ハイエナは、「ああ。わたしはなんといいたらよいのか。死神よ」という。死神は、「きょう、わたしはおまえさんをころすだけだ。どうなのだ。わたしはおまえさんをほっておかない」といった。ハイエナは、「五日のあいだだけでも、わたしをほっておいておくれ」といった。死神は、「五日のあいだ、なにをさがすのか」という。ハイエナは、「なんだって。それでは、わたしのやったことはうまくいっていない」といった。死神は首のところをつかみ、首の骨をおってしまったとき。

お話は、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ジグラオ出身のベッコ・デニス、ケイニ村にて)

## 15 ハイエナと死神 (3)

死神は家畜をころした。死神は、「だれでも野原の動物で、肉をたべるものはきて、わたしのころした家畜の肉をかいなさい」といった。ライオンがやってきて、その肉をかおうとし、死神に、「そ

れはいくらか」といった。死神は、「おまえさんがたべたら、わたしはおまえさんをころす」という。ライオンはそこをとおろぎた。ヒヨウがやってきた。ヒヨウは、「その肉はいくらか」という。死神は、「おまえさんがたべたら、わたしはおまえさんをころす」という。ヒヨウはそこをとおろぎた。リカオンがやってきて、「その肉はいくらか」とたずねた。死神はリカオンに、「おまえさんがたべたら、わたしはおまえさんをころす」といった。リカオンはそこをとおろぎた。ハイエナがやってきた。ハイエナは死神に、「その肉はいくらか」とたずねた。死神はリカオンに、「おまえさんがたべたら、わたしはおまえさんをころす」といった。ハイエナは、「なんだって。なんだって。なんだって。なんだって。なんだって。なんだって」といった。

さて、ハイエナはもどっていった。ハイエナはあちらまでいくが、またもどってきた。ハイエナは、「親父さん、その肉はいくらか」とたずねた。死神は、「おまえさん、かうかい」という。ハイエナは、「うん。わたしがたべると、わたしをわたしの家族のものに挨拶にいかせてくれるかい」という。死神は、「わたしは、おまえさんをおまえさんの家族に挨拶させてやる」といった。ハイエナは、「水がのめるかい」という。死神は、「おまえさんは満足するまで、水をのめばよい」という。ハイエナはその肉をどんだんたべていった。肉をたべおえた。

さて、ハイエナは、はしっていった。ハイエナは、「馬鹿だな、くえというからくった。あいつにころされなければならぬのか」といった。

さて、ハイエナはどこかにいってしまった。ハイエナは、いくと、かくれてしまった。自分の小屋のなかで、よこになった。ほんとうのこと、死神はハイエナの体についている。ハイエナはそれをしらない。死神はハイエナに、「どうなのだ、ハイエナよ。おまえさんをころそうか」という。

さて、ハイエナは穴からでていくと、水にはいってかくれた。ハイエナは水から鼻をだした。死神はハイエナに、「どうなのだ、ハイエナよ。おまえさんをころそうか」といった。ハイエナは水からでた。ハイエナは林にはいって行って、かくれた。死神は、「おまえさんをころそうか」といった。ハイエナはまたしても、そとにでた。ハイエナは、またにげていく。

さて、ハイエナはとびあがり、死んでしまったとき。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサはレイ・ブーバのフルベ族。この話は父方の祖父からきいた)

## 16 野原の動物たちと蜂蜜

この話も、野原の動物の話だ。

わかっているとおもうが、野原の動物には欲がある。動物たちは蜂蜜をとるために野原にいった。ある木があった。この木はたいへんおおいかった。この木はおおきく、これほどふとい。

さて、この木には入り口がある。動物たちはリスとそこに蜂蜜をとりきた。リスはそこにつくと、入り口にある戸をそのままにしておいて、なかにはいって、蜂蜜をたべている。蜂蜜をどんどんたべていった。

さて、この木のなかにある部屋には不思議なものがあって、リスに、「部屋のそとにでたいなら、ブンドウンプースといいなさい」といった。ブンドウンプースはハウサ語だ。

さて、リスは部屋のなかにはいった。不思議なものは、「カンシンカーズといえは、ミツバチがおまえさんをさす。ミツバチがおまえさんをさす」という。リスはその部屋にはいり、すわっている。動物たちはそこにいる。リスはさんざん蜂蜜をたべて、べつの動物とそとにでた。ハイエナが、「なんだって、おまえさんはいって、わたしがはいれないとは」といった。不思議なものは、「よろしい、ハイエナもはいれる」といった。ハイエナは自分の友だちをよんだ。友だちはおきあがり、やってきた。やってきたのだ。もとのと

ころにかえるのはたいへんだった。ハイエナはやってくると、部屋にはいった。ハイエナは、「さて、ブンドゥウンブース」というと、入り口がひらいたので、そのなかにはいった。

さて、リスはハイエナに、「そとにでるとき、カンシンカースといいなさい。そとにでるとき、カンシンカースといいなさい。そういうのになれた。ところが、「カンシンカース」といえば、（なかにとじこめられて）ミツバチにおそわれる。

さて、すこしあとで、ハイエナは部屋にはいった。部屋にはいって、すわった。ハイエナは蜂蜜をほとんどたべていった。ハイエナのお腹は人三人分くらいのおおきさになった。ハイエナは、「どういえばよいのか」といった。ある動物は、「入り口がひらくためには、ブンドゥウンブースといいなさい」といった。ハイエナは、「いやいや、カンシンカースというのだよ」という。友たちは、「ブンドゥウンブースというのだよ」という。入り口がひらきかける。ハイエナは、「ブンドゥウンブースといえといわれたんだ。ブンドゥウンブースといえといわれたんだ」という。ミツバチが動物たちのところにはいっていった。ハイエナは、「カンシンカース、カンシンカース」という。ミツバチはハイエナをさしていく。ハイエナはよこになつて、「カンシンカース」という。ミツバチは部屋にはいって、どんどんハイエナをさしていく。

さて、ある動物が、「ブンドゥウンブース」といった。入り口がひらいた。動物たちはミツバチとはしつていった。ハイエナたちはミツバチからにげていった。

さて、この野原にはたいへんおそろしい動物がいた。おそろしい動物たちが野原にでてきた。

さて、ライオンのなどのおそろしい動物がいた。おそろしい動物たちがいた。おそろしい動物たちはハイエナなどのもつていた蜂蜜をとつて、たべてしまい、ハイエナたちをつかまえた。おそろしい動物たちはハイエナたちが蜂蜜をぬすんだといった。ライオンはもうすこしで、ハイエナをたべてしまうところだった。ライオンはハイエナをたたいた。リスは村でイスラム教師になり、やってきて、子どもたちにおしえている。子どもは嘘の学校の生徒だった。

さて、このお話も、学校のところで、おしまい。これは、みじかい話だ。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて)

## 17 ハイエナをつれてきたロバ

お話、ちいさなお話。

ハイエナは自分の穴のなかにいる。

さて、ロバの持ち主は自分のロバにマメをくわせた。ロバはお腹がいっぱいになった。持ち主は、ハイエナの穴のちかくにロバをばなした。

さて、きょう、ロバは、一晩中、尻をこいている。一晩中、尻をこいている。

さて、ハイエナは末っ子とよばれている子に、「でていけ。いつて、そとでおそろしい音をだしてうごいているものをみてこい」という。末っ子とよばれている子が、「父さん、おかすがやってきた」という。父親は、「おかすがきたのか」という。末っ子といわれている子は、「おかすがやってきた、父さん」という。父親は、「なんだって、末っ子よ、うそだ。いつて、弟をつれてきて、そとにでて、くるように、きて、みるようにいいなさい」といった。末っ子といわれている子の弟がやってきて、みた。末っ子といわれている子の弟が、「なんだって、父さん、そとにたくさんおかすがある」といった。ハイエナは体全体をうごかして、よろこんでいる。ハイエナはずっと、おどっている。

さて、長男が、「父さん、みんながロバをたべたあと、ぼくは胃の内容物をもらいたい」という。父親は、「なんだって、息子よ、わしが胃の内容物をたべないなら、ロバをたべたことになるのか」といった。

さて、つぎの息子が、「父さん、みんながロバをたべたあと、ほ

くにロバの膝よりしたのところをおくれ」という。ハイエナは、「なんだって、わしが膝よりしたところをたべないなら、ロバをたべたことになるのか」といった。

さて、末っ子がやってきて、「父さん、ぼくがしたいのは、父さんをおろしたところをたべることだ」といった。父親は、「よくいつてくれた、末っ子よ。そのとおり、末っ子よ」といった。

さて、ハイエナたちはいくと、縄をもってきた。ハイエナはやってくると、自分たちの父親をロバのうえにしばりつけた。ロバはおきあがった。なんだって、どういうことか。ロバは村にむかつて、はしりだした。ハイエナの父親は、「末っ子はひどいことをいいた。末っ子はひどいことをいいた。末っ子はひどいことをいいた。末っ子はひどいことをいいた。末っ子はひどいことをいいた」という。ロバは村にいく道を雄ハイエナをせおつて、はしっていった。ロバは屋敷の裏口からはいると、みんなのいるところにてきて、ハイエナを背中のにせたまま、たちどまった。

さて、家のものたちは、「みる、ハイエナだ」という。あるものは、「そんなことはない」という。家のものたちは、「みる、ハイエナだ」という。あるものは、「そんなことはない」という。すなわち、みんな、ああでもない、こうでもないといっている。あるものは、「ハイエナではない」という。

さて、人びとが槍をもってでてきた。ハイエナはロバの背中をウソコでいっぱいにしたとき。

わたしが話をしたのではない。切り株が話をしたのだ。お話しはおしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ・サイドウ・ムーサ、レイ・ブーバにて。語り手はレイ・ブーバ地方のダーマ族ではあるが、ダーマ語を知らず、フルフルデ語しか知らない)

## 18 ハイエナにのつた人(1)

あるイスラム教の先生が自分のウマにのつて、メッカにでかけていく。先生はどんどんすすんでいった。

さて、ウマはつかれて、死んでしまった。ウマが死んだので、先生は自分の荷物をウマからおろし、地面においた。先生は木のしたにすわっている。

さて、ハイエナがやってくると、先生がいた。ハイエナは先生に、「先生、どうしたのか」という。先生は、「わたしはメッカにいくところだ。わたしのウマが死んでしまった」という。ハイエナは、「わたしにそのウマをください、わたしがそのウマをたべたら、わたしはあなたをメッカにつれて行ってあげます」といった。

さて、先生はハイエナにウマをやった。ハイエナはそれをたべてしまった。

さて、ハイエナはにげていき、先生をほつておいた。先生はすわっている。先生はアツラーを信じて、すわっている。

さて、リスがやってきて、「先生、どうしたのですか」という。先生は、「ごらんのとおり、わたしのウマが死んでしまった。ハイエナはわたしをメッカにつれて行ってやるといったが、わたしをだました」という。リスは、「おこらないでください。すわってください」といった。

さて、リスはいった。

さて、リスはいこうとしているところについた。ハイエナはにげて、自分の屋敷にいくと、「子どもたちよ、だれかがきて、わしをよんでも、わしがいないというのだ」といった。

さて、リスはおきあがると、ハイエナのところへ、ハイエナをさがしにいった。リスは、「平安、なんじらにあれ。平安、なんじらにあれ。平安、なんじらにあれ」という。ハイエナはこたえなかった。リスは、「平安、なんじらにあれ」という。子どもたちは、「父さんはいない。父さんはいない」といった。ほんとうのこと、ハイエナは、家のなかにいる。

さて、リスは、「わたしはだれそれだ。わたしはきた。わたしは、ハイエナがたべるように肉を手にいれてやった」といった。ハイエナは、「友よ、わたしは家にいる。わたしはほかのものがわたしの邪魔をするとおもったのだ。だから、おまえさんに返事をしなかつ

ただ」という。

さて、ハイエナはそとにでた。リスとハイエナはどんどんあるいていく。リスは先生がウマにのせていたものを取り、頭にのせた。リスはあるきながら、それをすこしずつ道にほかしていく。リスはあるきながら、それをすこしずつ道にほかしていく。

さて、ハイエナはあるいていき、リスがつれていこうとしているところについた。ハイエナはいろいろなものがたくさんあるのを見つけた。ハイエナはリスに、「これはだれのものか」といった。リスは、「これはみんなわたしのものだ。わたしの力ではもてない。荷物としておもすぎる。わたしは道にすててきた」という。ハイエナはリスに、「それをとって、わたしの背中におきなさい」といった。リスはいくと、ほっておいたものをとって、それをハイエナの背中においた。リスとハイエナがあるいていき、ついた。リスとハイエナはついた。そこに、イスラム教の先生がすわっていた。ハイエナはたちどまった。ハイエナはブレーキをかけて、とまった。先生が、「どうしたのか」という。リスは、「ハイエナではないか」という。先生は、「よろしい」といった。リスはハイエナをつかまえると、先生にかえした。先生はハイエナにまたがると、メッカにいった。メッカにつくと、先生は、「子どもたちよ、わたしのウマに水をのませにいきなさい。このウマが水をのんでも、口につけている轡をはずさないように」という。口につけてある轡がとれると、

ハイエナがにげるからだ。子どもたちは、「わかった」といった。子どもたちはハイエナをひきとると、川につれていった。ハイエナは水をのんでいる。

さて、ハイエナは、「この轡がとれないと、水がのめない」といった。

さて、子どもたちは轡をはずした。「ウマ」はにげてしまった。ハイエナはにげていった。

さて、ハイエナがにげていくと、ライオンが川で水をのんでいる。

さて、ハイエナはライオンのキントマをつかむと、パツとひきちぎった。

さて、ハイエナはにげていった。

さて、ライオンはなにもいかなかった。ライオンはあるいていくと、リスにであった。リスは、「どうしたのですか」という。ライオンは、「こういうことだ。ハイエナがやってきて、わたしのキントマをきりとって、どこかにいってしまい、わたしをほっておいた。わたしはいくところだ」といった。リスは、「腹をたてないでください。我慢してください。ハイエナをつれてきてあげましょう。ウマレイヨウを手にいれて、ころしてください。わたしはハイエナをつれてきてあげましょう」といった。

さて、ライオンはウマレイヨウを手にいれて、ころした。ライ

オンはそれをもってきて、リスに、「はい、獲物をもってきた」という。リスはライオンに、「よろしい、もってきたのなら、いって、刺のはえている木をきりなさい。柵をつくろう。囲いをつくろう。そこに囲いをつくろう。出入口を一つだけのこすのだ。おまえさんはそのなかにはいって、よこになるのだ。その肉をおまえさんの体のうえにおこう。ハイエナがやってきて、その肉をたべているうちに、ハイエナはおまえさんがよこになっているのがわかる。そのとき、おまえさんはハイエナをつかまえるのだ。ハイエナにくわれないように」という。リスは一生懸命になって、あるいていくと、ハイエナは穴にいた。リスは、「平安、なんじらにあれ」という。ハイエナは、「だれだ」という。リスは、「わたしは、だれそれだ」という。ハイエナは、「なんだって。どうしてきたのか」という。リスは、「わたしはおまえさんのためにウマレイヨウをころしてやった。ウマレイヨウは道によこたわっている。おねがいだ、いそいでおくれ。わたしには、じゅうぶんだ。おねがいだ、いそいでおくれ。おまえさんはあれをたべてしまふのだ」という。

さて、リスとハイエナはいっしょにあるいていった。リスとハイエナがつくと、そこに肉がたくさんあった。リスはハイエナに、「はいれ」といった。ハイエナが囲いのなかにはいった。リスは囲いの入り口をしめた。囲いのなかにはいるのは、ハイエナとライオンの二頭だけだ。

さて、ハイエナはどんどんたべていく。肉がなくなりかけた。そこに、ライオンの体があった。ハイエナは自分のつかまえた肉をばなすこともできないし、のみこむこともできない。ライオンは、「きょう、おまえさんの寿命はおわった。きょうこそ、わたしはおまえさんをくつてやる」といった。そういうことで、ライオンはハイエナをたべてしまった。たべてしまうと、ライオンはリスに、「いま、わたしはおまえさんに感謝する。おまえさんは、いいことをした」という。

こうして、この話はおわった。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサはレイ・ブーバのフルベ族)

## 19 ハイエナにのつた人(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ハンセン病者がロバにのっている。男は自分のロバに荷物をのせた。

さて、男がロバにのつて、どんどん道のあるいていくが、ロバはたおれて、道で死んでしまった。

さて、太陽がてりつけている。

さて、ハイエナがやってくると、男がいた。ロバが死んでいた。

さて、ハイエナは男に、「おまえさんは、ここでどうしているのか」といった。男は、「わたしのロバが死んでしまったのだが」といった。

さて、ハイエナは男に、「わたしはロバをたべて、おまえさんの荷物をはこんで、おまえさんの屋敷までもつていく」といった。

さて、ハンセン病にかかっている男は、「たべなさい」といった。

さて、ハイエナはロバをたべてしまった。

さて、ハイエナはしらない顔をしていってしまった。

さて、ウサギがやってくる、男がいた。ウサギは男に、「おまえさんは、ここでなにをしているのか」といった。男は、「わたしのロバが、たおれて、死んでしまった。ハイエナがやってきて、ロバをたべてしまい、どこかにいってしまった。いま、わたしはこの荷物をはこぶものがない」といった。

さて、ウサギは男に、「すわっていないさ。ハイエナがどこにいていても、おまえさんのためにハイエナをみつめて、つれてきてあげる」といった。

さて、ハンセン病にかかった男はすわった。ウサギはハイエナの小屋にでかけていった。

さて、ハイエナは家にかえると、自分のよめさんに、「だれかが、ここにきて、わしがいるかとたずねたら、わしはいないといひなさい」といった。

さて、ハイエナはよめさんにこのようにいった。

さて、ウサギが、「ハイエナはどこにいったのか」という。ハイエナのよめさんは、「でていった」といった。ウサギはハイエナのよめさんに、「よろしい。あそこに肉があつて、人びとがそれをわけようとしていたので、わたしはそれをとめた。わたしは、ハイエナがやってきてからでないといけなさい」といった。

さて、ハイエナは穴のなかでとびおき、「だれが、わしがいないといつとのか。わしは、わしは自分の小屋でねているから、だれかがここきたら、おしえてくれといつたではないか。わしはだれかがくるまで、ねているといつたではないか」という。

さて、ハイエナはそとにでた。ハイエナは自分のよめさんのほうにいき、なぐろうとした。

さて、ハイエナとウサギはいっしょにあるいていった。ハイエナとウサギはいっしょにあるいていった。ウサギはある道にはいっていくが、ハイエナにまへの道があるかせなかつた。まして、ハイエナはどこにいくか、わかるはずはなかつた。

さて、ハイエナとウサギはハンセン病にかかった男のところによつてきた。

さて、ウサギは男のために縄をさがしてくると、男のためにハイエナに縄をつけた。ウサギは男をハイエナにのせた。

さて、ウサギと男はハイエナをひっぱっていった。ハイエナを男

の屋敷につれていった。男には、よめさんが二人いた。二人とも、子どもを一人ずつうんでいた。二人の子どもはどれも男の子だった。

さて、男はいくと、ハイエナを第一夫人のところにつないでいった。ハイエナを第一夫人のところにつないでおくが、そこには長男がいた。

さて、長男はいつも、ハイエナをつれて、川に行く。

さて、第二夫人がそのことで腹をたて、男に、「あなたはどうしてわたしの子どもをハイエナにちっともせてやらないの」といった。

さて、男は、「おまえの子はなにもわかっていない。ちいさすぎる。おまえの子にハイエナをわたすと、いつて、にげられてしまうだけだ」という。

さて、第二夫人は、「わたしの子にわたさないというのなら、わたしとわかれておくれ」といった。

さて、ハンセン病にかかった男は長男に話をし、「おまえの弟にわたしなさい。きょう、ハイエナをにがしてしまいかどうかみてみよう」といった。

さて、兄さんはハイエナをとり、弟にわたした。

さて、弟とハイエナは川にでかけていった。

さて、ハイエナは男の子に、「わたしをしばらないでおくれ。お

まえさんの兄さんたちとやってきたら、兄さんはわたしをしばらない。兄さんは、縄をゆるめる。わたしたちは水浴びをする。家にかえるとき、兄さんはまたわたしに縄をつける」という。

さて、男の子は、「おまえが兄さんとくるとき、兄さんはおまえにそのようにするのだな」といった。ハイエナは、「うん」といった。

さて、男の子はハイエナの縄をゆるめた。男の子とハイエナは水浴びをし、かえるときになった。男の子は、「かえろう」といった。ハイエナは、「なんだって、わたしがここにきたら、そんなにはやかくかえらない。わたしたちはながいあいだ水浴びをする」という。

さて、男の子とハイエナはずつとあそんでいる。

さて、ハイエナは、「おまえさんに踊りをおどってあげよう」といった。男の子は、「それはよい」といった。ハイエナは男の子に踊りをおどってやった。

さて、しばらくすると、ハイエナはにげて行ってしまった。

さて、男の子は村にかえってきた。

さて、男の子は、「ハイエナがにげてしまったよ」という。

さて、父親は第二夫人に、「わたしはおまえにそのことをいつていたのだ。おまえの子どもはなにもわかっていない。いつて、ハイエナをにがしてしまふといっていたのに。子どもはハイエナをにがしてしまった。どうするつもりか」といったとき。

そこに、お話があり、わたしはここにいる。

(一九六五年五月、語り手 マイリ・アツダ・ペーテル、マヨ・ルウエにて)

## 20 ハイエナにのつた人 (3)

あるところのイスラム教の先生がいた。先生は旅にでかけていく。ごらんのとおり、先生は自分のロバにのつている。先生はメツカにいく。先生はロバにのると、どんどんすすんでいく。野原のまんなかにいくと、ロバが死んでしまった。ハイエナは先生がいるのを見つけた。ハイエナは、「親父さん、どこにいくの」といった。先生は、「村にいこうとしているのに、わたしのロバは死んでしまった」といった。ハイエナは、「わたしにロバをおくれ。わたしはそれをたべる。そのロバをくれたら、わたしの背中にとつて、いけばよい」といった。先生はロバをハイエナにやった。ハイエナはロバをすつかりたべてしまった。ハイエナは、「こんなものをたべたら、水がのみたくなかないか」といった。先生は、「水がのみたくなる」といった。ハイエナは水のみにいき、そこから姿をくらましてしまった。リスがやってくる、先生がいた。リスは、「親父さん、どうしたのか」という。先生は、「こういうことなのだ。ハイエナは、わたしのところにもどつてこない。ハイエナは、わたし

どこにいくかとたずねた。わたしは、あちらにいくところだといった。ハイエナはロバをくれといった。ハイエナは自分がロバをたべてから、わたしに自分の背中にのりなさいといった。ハイエナは水のみにいまま、まだもどつてこないのだ」といった。リスは、「親父さん、わたしに袋一杯の落花生をおくれ。ハイエナをつれてきてあげる」といった。先生は袋二杯分の落花生をリスにやった。リスは落花生をもつていくと、それをみんな自分の小屋にいれてしまった。リスはながい木をきると、それを地面にさした。リスは先生のちかくにあつたしろい土をとると、(木のさきにつけておき)どこかにいってしまった。リスがいくと、ハイエナはよこになつていた。リスは、「おきあがりなさい。わしらは動物をころした。わしらはその脂身を木にさしておいた。きて、その木にのぼり、その脂身をたべなさい」といった。ハイエナは、「いこう。いこう」といった。リスとハイエナはどんどんあるいていった。(こうして、ハイエナは先生のところをやつてきた。)先生の目のまえに、ハイエナがいるではないか。先生はハイエナをつかまえるとすぐに、ハイエナにのつた。先生はハイエナの背中にまたがり、どんどんすすんでいき、自分のいこうとしている村についた。先生とハイエナはこの村からもどつてくる。ハイエナは腹がへつてきた。ハイエナは、「腹がへる」といった。先生はハイエナに、「おまえさんは腹がへつているのか」といった。ハイエナは、「うん」という。先生

は、「動物をみつけないさい」といった。ハイエナは動物をみつけた。先生は、「よろしい」というと、自分の本をとり、動物をたいた。先生はハイエナに、「あの動物のところについて、おまえさんたちの母親はどうしようもないとっておいで」といった。ハイエナはあるいていく。(ハイエナは動物を馬鹿にする。)動物が(ハイエナをおっかけて)先生のところへやってきたので、先生はその動物を本でたたいた。動物は死んでしまった。ハイエナはその動物をすっかりたべてしまった。先生が動物を本でたたくと、その動物は死んでしまった。ハイエナはいつてしまった。先生は自分のいこうとしているところにつくと、ハイエナをほっておいた。ハイエナはリスともどつていった。ハイエナはリスに、「動物がいる。その動物に、おまえさんたちの母親はどうしようもないといいなさい」といった。ハイエナはパウヒニアの葉っぱをとり、それを(本のように)しばつておいた。ハイエナはリスをよんだ。リスは動物にむかつて、「おまえさんたちの母親はどうしようもない」といった。ハイエナはリスに、「動物がやってくる」といった。(動物がやってくる)と)ハイエナはその動物をパウヒニアの葉っぱでたたいた。動物はハイエナにちかづいてくる。リスはにげていき、穴にはいつたままだ。動物はハイエナをおどかした。ハイエナはもどつていった。ハイエナのよめさんは、「おまえさんは、どうしたの」といったとき、おしまい。

(一九八〇年八月二五日、語り手 子ども、レイ・プーバにて。嶋田にかたつたもの)

## 21 ライオンとカモシカとハイエナ(1)

ライオンとカモシカとハイエナがいた。ある男が自分の畑をつくつた。男はサツマイモなどをつくつた。

さて、男は自分の奴隷をつれた。男の奴隷は畑の番をしている。

さて、カモシカがやってくる。男の畑はどうしようもないほど出来がよかつた。カモシカがやってくる。カモシカがやってくると、いう。

「奴隷よ、奴隷よ、ピーポラー。」

畑の持ち主よ、おじいさんよ、ピーポラー。

わたしをサツマイモのよい蔓のなかにつないでおくれ。わたしはたべる。

ウマがいないいたら、わたしに水をのませておくれ。

ロバがないいたら、わたしをはなしておくれ」

さて、奴隷はよい場所をさがし、カモシカをしばる。カモシカはどんどんたべていく。カモシカが満腹し、ウマがなくなくと、奴隷はいつて、カモシカに水をのます。ロバがなくなると、カモシカをはな

す。

さて、そのつぎの日も、あいかわらず、カモシカはやってくる。カモシカはいう。

「奴隷よ、奴隷よ、ピーポラー。」

畑の持ち主よ、おじいさんよ、ピーポラー。

サツマイモが一番よくできているところをさがし、

わたしをサツマイモのよい蔓のなかにつないでおくれ。

ウマがいなければ、わたしに水をのませておくれ。

ロバがいなければ、わたしをはなしておくれ」

さて、ある日、畑の持ち主がやってきて、畑をみた。畑の持ち主は奴隷に、「なんだって、なにがどうして、このように畑を駄目にしてくれるのか。ほんとうに、わたしはおまえにきく。おまえは、作物をかりとり、うりにいつているのではないか。おまえは一体、なにをしているのか。畑の作物がなくなっている」といった。奴隷は、「わたしがしたではありません。あなたたちはカモシカをよこしました。カモシカがやってきて、作物をたべるのです。カモシカにやらせておいて、あなたはそれをわたしのせいにするのですか。ひよっとしたら、わたしは気がふれているかもしれません。あなたがそんなことをするなら、畑の番をしません」といった。畑の持ち主は、「よろしい、奴隷よ、おまえのいつたことは筋がとおっている。夕方、わしの屋敷にこい。縄をとりこい」といった。奴

隷は主人のところに行って、ふとい縄をうけとつた。奴隷は畑にいった。カモシカは、やってくると、いった。

「奴隷よ、奴隷よ、ピーポラー。」

畑の持ち主よ、おじいさんよ、ピーポラー。

豆が一番よくできているところをさがし、

わたしをつないでおくれ。

ウマがいなければ、わたしに水をのませておくれ。

ロバがいなければ、わたしをはなしておくれ」

さて、カモシカがやってくると、奴隷は縄をかえた。カモシカは、「どうしたのか、奴隷よ。おまえさんは縄をかえるのか」といった。奴隷は、「そうだ。おまえさんのお腹がいつぱいになれるようにするのだ」といった。奴隷は縄をしっかりとむすんだ。カモシカが、「おまえさんはどうして、しっかりとしめたのか」といった。奴隷は、「おまえさんのお腹がいつぱいになれるようにするのだ」という。カモシカはどんだべていった。ウマがいなければ、カモシカが、「わたしに水をのませておくれ」といった。奴隷は、「なんだって、お腹がいつぱいになるまでまちなさい」という。ロバがやってきた。奴隷がカモシカに水をのませるころ、ロバがやってきた。奴隷は、「なんだって、お腹がいつぱいになるまでまちなさい」といった。すこしすると、奴隷の主人がやってきて、ヘンナとグレワイアの木でできたムチをつみあげ、カマをもつた。火を

おこし、カマをそのなかにおいた。湯をわかしておいた。畑の持ち主は、「おまえさんは、カマのほうがよいか。それとも、湯をかけるのか、どちらがよいか。それとも、ムチでうたれるのがよいか」といった。畑の持ち主は、カマでバサツときられるほうがよいかという。カモシカは、「とんでもない、やめておくれ。湯のほうがよい」という。畑の持ち主は、カモシカの頭から湯をかける。カモシカが、「ムチのほうがよい」という。畑の持ち主はカモシカをムチでうつ。しばらくすると、カモシカは畑の持ち主に、「友よ、友よ、わたしをつよくうたないでおくれ」といった。畑の持ち主はカモシカをうつ。カモシカは、「湯のほうがよい」という。畑の持ち主は、カモシカに湯をかける。カモシカは、「カマのほうがよい」という。畑の持ち主はカモシカの背中をけずりとる。

さて、畑の持ち主はカモシカをはなしてやった。

さて、カモシカはどこかにいってしまった。カモシカはよわっていたので、あるいていくうちに死んでしまうとおもわれた。

さて、カモシカはライオンにであった。カモシカは、「ライオンよ、わたしをたべておくれ。ライオンよ、どうかわたしをたべておくれ」という。ライオンは、「くさいやつ。わしはおまえをくうと、はきだしてしまふ。わしのそばからはなれる」という。カモシカはあるいていくと、ハイエナにであった。ハイエナが、「なんだって、そこをのけ」といった。カモシカは、「ハイエナよ、わたしをたべ

ておくれ」という。ハイエナが、「父無し子め、そこをのけ。なぐるぞ」という。カモシカはそこをはなれた。カモシカがいくと、ヒヨウがいた。カモシカは、「ヒヨウよ、わたしをたべておくれ。おねがいだ。おねがいだ」という。ヒヨウは、「わしはおまえさんをとべない。ハエのようにうたれたいのか。いやだ」という。カモシカはいつてしまった。

さて、カモシカがいくと、おおきな木があった。木はよくしげつていた。水があり、草があった。カモシカは草をたべ、水をのむ。カモシカは草をたべ、水をのむ。カモシカは草をたべ、水をのむ。

さて、それからすこしあと、ある日、カモシカがでてきた。カモシカはふとついていた。カモシカがやってきた。ライオンたちがかくれている。ライオンはすわった。ヒヨウはかくれた。ハイエナは枝のうえにすわっている。

さて、カモシカはのっここのつこやつてくると、いった。

「なるほど、ほら、わたしにはおまえさんたちがみえる。

なるほど、ほら、わたしにはおまえさんたちがみえる。

ライオンは木の洞にいる。

ハイエナは穴にいる。

鳥は木の枝にいる」

さて、肉のたべたいハイエナがいう。

「やってきた。いつて、水にはいれ。

やってきて、水をのむ。

やってきた。いって、水にはいれ。

やってきて、水をのむ。

頭に毛のないものが後ろ足で宙をけると、わたしはそれを両

手でうける。

おいしいものが後ろ足で宙をけると、わたしはそれを両手

でうける」

さて、ライオンとヒョウはハイエナをおいはらい、「なんだって、

父無し子め。おまえはなにをするつもりか」といった。

さて、ライオンとヒョウはハイエナをおいはらった。

さて、ライオンとヒョウは、「おねがいだ、ハイエナよ、そんな

ことをするな」といった。しばらくすると、カモシカが、「なるほ

ど、ほら、わたしにはおまえさんたちがみえる」というと、ライオ

ンたちはカモシカにとびかかって、つかまえてしまった。ライオン

たちは、「だれが、薪をとりに行くのか。だれが、いって、火をお

こすのか」といった。

さて、ハイエナは、カモシカをみはるといった。ライオンたちは

カモシカを縄でしっかりとしばった。ライオンたちはハイエナにみ

はらせた。

さて、ヒョウは、「火をおこす」といった。ライオンは、「薪をと

る」といった。

さて、ライオンはいった。ハイエナはみはっている。ライオンが  
木をみあげると、木はかわいてしまう。ライオンが尻をみると、木  
はたおれる。ライオンが木をみあげると、木がかわいてしまう。ラ  
イオンが尻をみると、木はたおれる。

さて、ヒョウははしっていくと、火をおこした。

さて、カモシカがいいはじめた。カモシカは腰をかき、「うんう  
んうん」という。カモシカは腰をかき、「うんうん、わたしは踊り  
が上手なだけだ。わたしたち年寄りには踊りが上手なのだ」とい  
う。カモシカはすこしはねる。

さて、ハイエナはカモシカに、「おまえさんの仕事はなにか、友  
よ。おまえさんたち年寄りは多少踊りが上手だときいている。たち  
あがれ。みてる」という。カモシカはすこしたちあがる。ハイエ  
ナが、「すこし、たちあがれ」という。カモシカはすこしたちあが  
り、「なんだって、友よ、おまえさんはかしこくない。わたしの縄  
をほんのすこしゆるめてくれたら、ちゃんとおどってやるのに」と  
いう。ハイエナは縄をゆるめる。カモシカが、「なんだって、縄は  
かたい。もつとゆるめておくれ」という。ハイエナは縄をゆるめ  
る。カモシカは、「よかつたら、縄をみんなはずしておくれよ」と  
いった。ハイエナは、「友よ、友よ、おまえさんにはげるだろう。  
おまえさんにげられると、わたしはひどい目にあう」という。カ  
モシカは、「なんだって、わたしにはげない。わたしは馬鹿か。こ

のわたしがおまえさんに意地悪をし、おまえさんをひどい目にあわせるというのか」という。ハイエナは縄をすつかりとつてしまった。カモシカはどんどんおどる。カモシカはいくと、木のうしろにかくれ、もどつてくる。おどりながら、やつてくる。ハイエナが、「友よ、こい」という。カモシカは、「なんだつて、まちなさい」という。カモシカはおどる。しばらくすると、カモシカはどこかにいつてしまった。

さて、ライオンたちが薪と火をもつてきた。ハイエナはとびあがり、カモシカになぐられ、ひどい目にあわされたとうそをつくれ、棘で体全体に傷をつけた。

さて、ライオンたちがやつてきて、「カモシカをとりにいけ」という。ハイエナは、「カモシカになぐられた。体全体に棘がささっている。棘のついた木でうたれた。体中に傷をおわせられた。いま、わたしは血をながしている。わたしをおこらせないでおくれ」という。ライオンが、「なるほど。おまえさんがカモシカをはなしたのだな。わしらにはわかつていいる」という。ライオンたちは穴をほり、そこに薪をいれて、火をつけた。ライオンたちはハイエナに、「みんなで、その穴のうえをとびこすのだ。おまえさんがころばなかつたら、どうなるかな。だれがわるいことをしたのか、しらべてやる」といった。ライオンは穴のはしのほうをとびこした。ヒョウは穴のうえをピョンとわたった。ハイエナはとびあがるうとす

るが、穴のなかにおちてしまった。ライオンとヒョウはハイエナをたべてしまったとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 スレイ・ルーティ・ジャッポナ・ペーテル・ゴナ・ニリー・ディンバ・ゲエネ・ハムガープド、レイ・ブーバにて。この話は、自分の母親以外の父親のよめさんであるジョーダから聞いたという)

## 22 ライオンとカモシカとハイエナ (2)

ある人がモロコシやマメなどの畑をつくった。この人はなんでもつくった。この人が畑をつくると、カモシカがやつてきて、いつもその作物をたべる。この人は畑をみはつていた。この人がやつてくると、カモシカが作物をたべている。この人はカモシカをつかまえた。カモシカは、「おまえさんはウマがいなくのをきいたら、わたしをはなしておくれ。わたしはいつて、水をのむ。おまえさんがウシがなくのをきいたら、わたしをはなしておくれ。わたしは草をたべにい」といった。この人は、「よろしい」といった。ウマがいなくても、この人はカモシカをはなさなかつた。カモシカは水をのめなかつた。ウシがなくても、この人はカモシカをはなさなかつた。カモシカは草をたべられなかつた。この男はムチをつくつ

た。男は湯をわかした。男は鉄をとると、火にいれた。鉄はまっかになった。男はカモシカに、「おまえさんは、ムチがほしいか。熱湯がほしいか」といった。カモシカは、「ムチがいい」という。男はカモシカをバシッとムチでうった。カモシカは、「ああ、ああ、熱湯がよい」という。男はカモシカにバサッと熱湯をあびせる。カモシカは、「ああ、ああ、鉄がよい」という。男はカモシカにまっかになった鉄をおしつける。カモシカの体は傷だらけになってしまった。男はカモシカをはなした。(カモシカは野原をあるいていく。)

ライオンとハイエナとゾウたちは、「カモシカよ、どうしたのか」といった。カモシカは、「ライオンさん、わたしをたべておくれ。わたしは薬になりたい」という。ライオンは、「おまえさんをくえというのか」といった。カモシカは、「ハイエナさん、わたしをたべておくれ。わたしは薬になりたい」という。ハイエナは、「おまえさんをくえというのか。そこをどきなさい」といった。カモシカは、「ゾウさん、わたしをたべておくれ。わたしは薬になりたい」という。ゾウは、「おまえさんをくえというのか。ライオンがいなかったか」といった。カモシカは(野原をあるき)水のあるよい餌場をみつけた。カモシカはそこにおちつき、どんどん草をたべた。カモシカはふとつて、ライオンにであった。カモシカは、「ライオンさん、わたしをたべておくれ。わたしは薬になりたい」という。ライオンは、「こい、こい」という。カモシカは、「わたしは

おまえさんに、『わたしをたべておくれ』といったとき、わたしをたべようとしなかったではないか」という。カモシカはにげてしまひ、ハイエナのところにいった。カモシカは、「わたしをたべておくれ。わたしは薬になりたい」という。ハイエナは、「こい、こい」という。カモシカは、「わたしはおまえさんに、『わたしをたべておくれ』といったとき、わたしをたべようとしなかったではないか」という。ライオンとハイエナとゾウはヒヨウと話を付けておいた。カモシカは(ヒヨウのところにいき)「ヒヨウさん、わたしをたべておくれ。わたしは薬になりたい。おいで」という。ヒヨウはそこで、よこになった。カモシカはいう。

「ほれ、わたしにはおまえさんがみえる。

ほれ、わたしにはおまえさんがみえる。

ライオンは洞のなかにいる。

ハイエナは穴にいる。

バルバリツロ(おそろく鳥の名前)は木の枝にいる。

汁がにじみでると、それをなめる。

汁がにじみでると、それをなめる」

ヒヨウはパッとカモシカにとびかかり、カモシカをつかまえた。ヒヨウは、「だれがカモシカの番をするのか。だれがカモシカの番をするのか。だれがカモシカの番をするのか」という。ハイエナが、「わたしが番をする。わたしが番をする。わたしが番をする」とい

った。ライオンとゾウとヒョウは、いつてしまった。一匹はマッチをとりに行った。一匹は薪をあつめにいった。ハイエナはおどつてゐる。カモシカは、「おまえさんはおどれるのか。わたしたちのうちで、わたしがいちばん踊りがうまい。はなしておくれ。ちよつとばかり、おどりたい。みてみる」といった。ハイエナはカモシカを自由にした。カモシカはにげていったままだった。カモシカはにげていった。ハイエナは、「カモシカよ」といった。ハイエナは木などに自分の体をぶつけた。体全体から血がでてきた。ハイエナはすわっている。ライオンたちが、「ハイエナよ、おまえさんはどうしたのか」という。ハイエナは、「カモシカにたたかれた。カモシカはにげていった」という。ライオンはおおきな穴をほり、薪をもつてきて、つんで、薪に火をつけた。火はもえている。ライオンは穴のうえをとびこえた。ヒョウは穴のうえをとびこえた。ゾウは穴のうえをとびこえた。ライオンたちが、「ハイエナよ、おまえさんも穴のうえをとびなさい」という。ハイエナは穴のまんなかまでとぶと、火のなかにおちてしまった。ライオンたちはたくさん薪に火をつけ、その薪をハイエナのうえにおいた。ハイエナはやけてしまった。ライオンたちはハイエナをたべてしまったとき。

おしまい。

(一九八〇年八月二五日、語り手 子ども、レイ・ブーバにて。

嶋田にかたつたもの)

## 23 オオトカゲとハイエナ

さて、「これは、すなわち、オオトカゲの話。おまえさんは、オオトカゲをいつてゐるかい。

さて、オオトカゲは大食だ。オオトカゲは大食だ。おそろしいほどたべる。野原の動物のなかで、オオトカゲほどたべるものはいない。オオトカゲはたべて、ふとり、みれば体から脂がにじみでているのがみえる。

さて、野原の動物たちはたちあがり、あつまつた。動物はやつてきて、オオトカゲをまつている。動物はやつてきて、道でオオトカゲをまつている。ライオンとハイエナとヒョウとブタと水のなかにいるワニとカバなどがあつまつた。六頭があつまつた。動物たちがやつてきた。動物は、「さて、ハイエナよ。道にかくれておれ。さて、オオトカゲが川に水をのみにきたら、ここでたちどまる。おまえさんはまつておれ。オオトカゲがこういうのをききなさい。

『ジャリリは池をわらつた。』

ニシシカカモシカがきていないかみてみるのだ』

こういつたあと、川におりていく」といった。

さて、動物たちはハイエナをそこにたたせた。その日、動物たちはハイエナをそこにおらせた。

さて、オオトカゲがいった。

「ジャリリは池をわらった。

ニシシカカモシカがきていないかみてみるのだ」

さて、ハイエナがいった。

「リリチエ・リリチエ、

アツハハウハ。

おまえは糞をするがよい。脂肪がしみだす。

わたしは両手でうけて、パツと口にいれる。

きょうこそそうする」

(それをきいて) オオトカゲはもどつていった。動物たちはいくと、ハイエナをつかまえて、なぐつた。ハイエナは、「二度とおなじことをしない」といった。すなわち、ハイエナはオオトカゲの体に脂肪がついているのを見ると、こういうふうにいいたがるのだ。

そのあと、オオトカゲはたちあがり、べつの川にいった。動物たちはオオトカゲについて川までいった。動物はハイエナをかくれさせた。ハイエナはオオトカゲをみると、脂肪がおおいので、よだれをだす。

さて、オオトカゲはもどつてくると、いった。

「ジャリリは池をわらった。

ニシシカカモシカがきていないかみてみるのだ」

ハイエナはいう。

「ああ、リリチエ・リリチエ、

アツハハウハ。

おまえは糞をするがよい。脂肪がしみだす。

わたしは両手でうけて、パツと口にいれる」

オオトカゲはにげていった。

さて、動物たちはハイエナをそこにおらせないことにした。動物たちはヒヨウをそこにおらせた。わかるとおもうが、ヒヨウはとびはねる。オオトカゲがやってきて、歌をうたいおえた。

「ジャリリは池をわらった。

ニシシカカモシカがきていないかみてみるのだ。

リリチエ・リリチエ」

オオトカゲはなにもきこえなかつたので、川におりていった。

さて、ヒヨウはかくれていたところからでていき、オオトカゲの首をつかまえて、しばつた。動物たちは自分たちの屋敷で祭りをし、あそんだ。太鼓をもつてきて、おいた。動物たちはオオトカゲを土ナベのなかにいれ、それを穀物倉にいれ、そのまわりを矢でとりかこんだ。アツラーよ。

さて、オオトカゲは土ナベのなかにいた。動物たちはオオトカゲを縄でぐるぐるにしばつた。

さて、動物たちはどこかにいつてしまい、ハイエナにオオトカゲの番をさせた。動物たちはハイエナに番をするようにいった。オオトカゲはいろいろなものなかにいる。動物たちは薪をとつてく

るといい、でかけてしまった。薪をとりに行ったものも、土ナベをとりに行ったものも、みんなでかけてしまった。

すこしたつと、野原の動物たちはたちあがり、いつてしまった。

さて、動物たちはオオトカゲとハイエナを屋敷にのこしておいた。ハイエナはオオトカゲといっしょにいる。

さて、オオトカゲは土ナベのなかでうたっている。

「むむむ・むむ・むーむ。

むーむ・むーむ・むむー・む？」

ハイエナは、「もう一度歌をうたえ」といった。オオトカゲが、「なんだって、友よ。こんなに縄でしばられているのに、おまえさんに歌をうたえというのかい。すこし、縄をゆるめておくれ」といった。ハイエナはオオトカゲを土ナベからだした。オオトカゲを穀物倉のなかからだし、土ナベのなかからだした。オオトカゲは、「さて、これから、おまえさんはわたしに歌をうたってほしいのかい。それでは、この縄をすこしゆるめておくれ。縄をゆるめておくれ」といった。ハイエナは太鼓をもって、ドンドンドンとたたいている。そのあとすこしすると、ハイエナはたちあがり、縄をゆるめた。オオトカゲはたちあがり、おどっている。オオトカゲはうたう。

「ジャリリは池をわらった。

ニシシカカモシカがきていないかみてるのだ。

リリチエ・リリチエ」

ハイエナが太鼓をとって、うたうのがきこえる。

「ああ、リリチエ・リリチエ、

アツハハウハ。

おまえは糞をするがよい。脂肪がしみだす。

わたしは両手でうけて、パツと口にいれる」

ハイエナとオオトカゲははしって、そのへんを何度もまわる。オオトカゲがすこしいく。ハイエナもこのようにしてはしり、そのへんまでいく。オオトカゲははしっては、もどる。オオトカゲはおどっている。オオトカゲはあちらにはしっていき、もどる。

そのうちに、ハイエナは太鼓に夢中になっている。ハイエナは太鼓に氣をとられている。ハイエナが太鼓に氣をとられているうちに、オオトカゲははしって、にげていつてしまった。オオトカゲはハイエナからにげていった。動物たちがかえってくると、ハイエナがいた。ハイエナは大声をあげて、たおれた。ハイエナは体中がかゆかった。

さて、それからすこしたつと、ハイエナはたちあがった。ハイエナはすわっている。動物たちはハイエナをつかまえて、ころしてしまい、オオトカゲのかわりにした。動物たちはハイエナをころして、たべてしまった。オオトカゲはにげてしまった。オオトカゲは野原にいる。オオトカゲはまえとおなじようにくらしていたとさ。

さて、このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話はムプム族の女、デーリジャトウからきいたという。デーリジャトウはアーマドウの許嫁だという)

## 24 ハイエナとサソリ(1)

ハイエナがよめさんをもらった。義理の母親が死んだといった。ハイエナとよめさんは義理の母親のお悔やみにでかけた。ハイエナとよめさんはどんどんあるいていった。ハイエナはよめさんの母親の村にちかづいた。でも、村にはまだつかなかつた。ハイエナはサソリが道によこたわっているのをみつけた。ハイエナは腰をかがめて、そのサソリをとろうとした。よめさんが、「そのサソリをとったら、さされる」といった。そこで、ハイエナは、「うん」といった。ハイエナとよめさんはそこをとおりました。ハイエナとよめさんはどんどんあるいていった。ハイエナとよめさんはすすんでいった。ハイエナはもどつていった。ハイエナはよめさんに、さきほどいたところに、なにかをわすれてきたといった。よめさんはハイエナに、「もどきなさい」といった。ハイエナはどんどんもどつていき、サソリをとつて、口にいった。ハイエナは、いつて、サソリをたべてしまった。サソリが喉をさした。ハイエナがいくと、よめさんがいた。ハイエナは喉をつかんで、何度もさする。ハイエナはあ

るく。ハイエナは喉をつかんで、さする。ハイエナはよめさんに、「いまから、義理の母親のお悔やみをするためになく。義理の母親に死なれて、たいへんつらい」といった。ハイエナの喉がいたむのだ。ハイエナは義理の母親のお悔やみをするためになきはじめるといった。よめさんは、「わたしの母さんが死んだ。まだ村はとおいのに、どうして、あなたはなきはじめるのか」といった。ハイエナは、「なんだつて。義理の母親に死なれて、たいへんつらい」といった。ハイエナとよめさんは、どんどんあるいていった。ハイエナは、義理の母親のことが、たいへんつらいといった。すこしあとで、ハイエナはいいはじめた。

「ああ、わたしの喉の筋がきれた。

わたしの喉の筋がきれた。

わたしの喉の筋がきれた」

よめさんがハイエナに、「おまえさんは、あれをたべにいったのね」といった。ハイエナはいった。

「わたしの喉の筋がきれた。

わたしの喉の筋がきれた。

わたしの喉の筋がきれた」

よめさんはハイエナに、「おまえさんは、あのサソリをとつて、たべた。村につくまで、大声をあげなさい」といった。ハイエナはそのまま義理の母親の村につくまで大声をあげていったとき。

このお話も、おしまい。

(一九九三年一月一七日に、語り手 ヨン・イム、レイ・プーバにて。ヨン・イムは五〇歳くらい。ガウンデレのムプム族のすむところで、母方の祖母からきいたという)

## 25 ハイエナとサソリ (2)

よめさんがハイエナに自分の親の葬式についていってくれといた。ハイエナはよめさんについていく。ハイエナは腹がへつてきた。ハイエナは道でサソリが死んでいるのをみつけた。ハイエナがうしろにもどっていくと、よめさんはハイエナに、「うしろにもどって、あのサソリをとらないでくれ」という。ハイエナは、「うん、サソリをとらない」といった。(そうだったが、ハイエナはよめさんのしらないうちに、サソリをのみこんでしまった。) そのあとすこしたつと、ハイエナはまえにすすんでいく。(ハイエナの喉がおかしくなってくる。) ハイエナは、「泣き声をだしはじめよう」という。よめさんはハイエナに、「いや、まだ村についていない。いまから、なこうというのかい」といった。そのうちに、ハイエナはいいはじめた。

「わたしの声がでなくなった」

よめさんは、「なるほど。おまえさんはあのサソリをとったのだね」

といった。ハイエナはサソリをばつととると、口にいられてしまったのだった。

さて、ハイエナはずっとなっている。よめさんはいくと、それをなおす薬をさがして、それをハイエナにつけてやった。ハイエナはしずかになったとき。

(一九八〇年八月二五日、語り手 女性、レイ・プーバにて。嶋田にかたつたもの)

## 26 ハイエナとサソリ (3)

ある人が死んだ。人びとは(お悔やみに)でかけていく。ハイエナは自分の義理の親のところ(お悔やみ)にいく。ハイエナはどんどんあるいていく。ハイエナがいくと、道のまんなかにサソリがいた。ハイエナは何度もサソリの臭いをかく。ハイエナのよめさんは、「おまえさん、いらつしゃい。いきなさい」という。ハイエナは、「わたしはウンコにいくところだ」という。ハイエナはやってくると、サソリをとって、たべた。サソリはハイエナの喉を何度もさした。ハイエナはいった。

「わたしの声がでなくなった」

わたしの声がでなくなった

わたしの声がでなくなった」

(一九八〇年八月二五日、語り手 子ども、レイ・プーバにて。  
嶋田にかたつたもの)

## 27 知恵のないハイエナ

世間話をしよう。きいたな。

人びとは雄ウシをころした。人びとは、「野原の動物がすべてあつまり、あつまつた動物のなかで、水浴びをし、体をきよめ、礼拝をすることのできるものが、いって、この雄ウシの肉をたべることができる」といった。

さて、野原の動物たちがみんなきて、やってみるが、できなかつた。

さて、ハイエナがやってきて、とびはねた。ハイエナはやってくと、どうしたのかとたずねた。人びとはハイエナに、「まえにいつてあることができたものは、向こう岸にいつて、あの肉をたべることができる」といった。

さて、ハイエナはそれをきくと、川にやってきて、水にとびこんだ。ハイエナはまたとびこみ、向こう岸にいつた。ハイエナは、「二たす二は、いくつか。それに、二たす二たす二は、いくつか」といった。人びとは、「十だ」という。ハイエナは、「きらわれているだけだ」という。ハイエナはそこをとおらず、いくと、雄ウ

シの肉をたべてしまった。雄ウシの肉をたべてしまうと、人びとはハイエナに、「なんだって、友よ。おまえさんは話が上手だ。きて、すみなさい。おまえさんはわしらのウシ飼いになるのだ」といった。

さて、ハイエナはそこにいつて、すんだ。人びとはいつも、罾をしかけておく。人びとは雌ヤギをおいておく。ハイエナがぬすむか、ぬすまないかみるためだ。

さて、人びとは罾をしかけると、いつてしまった。人びとがやつてくると、ハイエナは雌ヤギをぬすんでいなかった。そのつぎの日、人びとは罾をしかけると、いつてしまった。罾をしかけると、いつてしまった。

さて、ハイエナはとおくからみていて、雌ヤギをたべようとして、罾にはいつた。すると、罾はハイエナをうえにもちあげて、おとす。

さて、ハイエナは一生懸命に罾からのがれようとする。ほんとうのこと、リスがみている。リスは、「友よ、ハイエナよ、おまえさんはここでなにをしていたのか」という。すこしすると、罾につかっていた縄がきれた。ハイエナは、「なんだって、友よ、わたしはここであることをしようとして一生懸命になっていた。わたしはここでされかけたから、こいつをたおそうとしていただけだ」という。

さて、人びとがかえつてくると、ハイエナの耳がなくなつており、ハイエナはさんざんな目にあつていたとき。

(一九七〇年二月二四日、語り手 パーサーウオ村出身のアブド  
ウツラーイ・ウスマース、マルアにて)

## 28 食べ物をさがすハイエナ

お話、お話。

ハイエナは一晚中、食べ物をさがした。ハイエナは頭のうえから、雨にふられた。ハイエナはさむかった。

さて、ハイエナがこのように雨ですぶぬれになって、食べ物をさがしている。ハイエナは、「アツラーよ、あなたはわたしをころさるのですか。食べ物をくださらないなら、いっそのことわたしをころしてください」といった。

さて、ハイエナがある木のそばで、やすんでいる。風がふいてきて、木がハイエナのうえにたおれてきた。ハイエナはたちあがり、「アツラーよ、あなたはわたしをころそうとしておられる。あなたは、わたしに食べ物をくださろうとなさらない」といったとき。

お話は、おしまい。蒸し焼きができた。

(一九六九一七〇年、語り手 ガルア出身の両親をもつアブドゥ  
ツラーヒ・マイダーデイ・サードウ、マルアにて)

## 29 ハイエナと昆虫

お話、お話。

ハイエナは一晚中、食べ物をさがしたが、なにも手にはいらなかつた。

さて、ハイエナがっていると、うしろから、おおきな昆虫が一匹やつてくる。ハイエナはふりかえると、「どうも、友よ」といった。

さて、昆虫は、「ハイエナよ、わたしは、おまえさんがわたしをくいたいとおもっているのをしっている。ひとおもいに、わたしをたべておくれ」といった。ハイエナは、「脂でいっぱいいるよ、わたしはまえからおまえのようなものをさがしていた」といった。

さて、ハイエナは身をひるがえすと、昆虫をたべてしまったとさ。

さて、お話は、おしまい。蒸し焼きができた。

(一九六九一七〇年、語り手 ガルア出身の両親をもつアブドゥ  
ツラーヒ・マイダーデイ・サードウ、マルアにて)

## 30 リスとハイエナのサルとり

リスとハイエナが狩をして、獲物をとりに行った。すなわち、サルの子どもたちをとりに行った。サルはちいさかった。サルが、川で水浴びをしている。サルたちがあつまっている。サルたちは川で水浴びをしている。(リスはサルの子どもを手にいれて、それを動かす。リスのところにハイエナがやってくる。)ハイエナは、「リスよ、このおかずの材料はどこで手にいれたのか」という。リスは、「このおかずの材料はおいとところまでいかなないと手にはいらない。おまえさんには無理だ」という。ハイエナは、「わたしはそこにいく」といった。

さて、ハイエナは自分の子どもをリスのところにいかせる。ハイエナは、「いって、リスのところで火種をもらってきておくれ」という。

さて、子どもはでかけていった。子どもはいくと、火種をもらって、もつてきた。それをつかって、食べ物をつくるのだ。ハイエナはその火種をとると、けしてしまった。ハイエナは、「火がきえてしまった。リスに、火がきえたといいなさい」といった。リスはまたしても、ハイエナの子どもに火種をやった。子どもはまたもどつていった。ハイエナは、「なんだって、わしが自分でいく」といった。

さて、ハイエナと子どもがリスのところに行った。ハイエナがいくと、リスはサルの肉をにているところだった。

さて、リスたちはサルの肉をにた。サルの肉ができあがった。リスとハイエナはそれをたべた。ハイエナはリスに、「友よ、わたしは(サルをとり)おまえさんといきたい」という。リスは、「よろしい。でかけるとき、ちいさな石を手にいれて、それを足にしばりつけておくのだ(なにのためか不明)」といった。リスはハイエナに、そのようにいった。

さて、リスとハイエナがでかけていった。ハイエナはいくと、これほどのおおきさの石をはこんできて、足にしばりつけた。リスは、「いくと、ちいさなサルをつかまえるのだ。おおきなサルをつかまえるな。気づかれる」という。ハイエナは、「よろしい」といった。サルたちのところにつくと、ハイエナはおおきなものみつけ、石をなげつけた。ハイエナはリスに、「いけ。わたしをたすけておくれ」といった。リスはにげていった。リスは、うまくいかないということがわかった。リスはハイエナに駄目にされたといつた。そういうことで、ハイエナはリスとわかれたとき。

(一九九三年十一月十七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・プーバにて。ムーサはレイ・プーバのフルベ族)

### 31 リスとオグロスナギツネ

リスはオグロスナギツネといっしょに畑をつくった。リスが落花生の畑をつくと、オグロスナギツネは畑のまわりをまわり、落花生をほりだす。落花生をさんざんほりだすと、ねにいく。リスはオグロスナギツネに、「わたしはおまえさんが落花生をほりだすということを知っている」という。オグロスナギツネは、「わたしではないよ」という。リスはオグロスナギツネに、「わたしはおまえさんをつかまえるだろう」という。リスはそのへんをまわって、縄をさがしてきて、それをつないで、罾をつくった。罾をつくと、オグロスナギツネが落花生をほりだすところに行った。リスは、オグロスナギツネがいつて、まだほりおこしていないところに罾をしかけた。オグロスナギツネはそのへんをまわり、いつもほりおこすところをやめて、そのへんをまわって、いままではほりおこさないところについて、リスがしかけた縄でできた罾のところにいき、(罾にかかり)そこにいた。リスがやってくると、オグロスナギツネがいた。リスは、「わたしは、おまえさんがわたしの落花生をほりだしているといつたではないか」といった。オグロスナギツネは、「わたしはそのへんがあるきまわり、おまえさんの畑をみてやろうとしているとき、罾にひつかかったのだ」といった。リスはオグロスナギツネに、「そこにいなさい。いくから」といった。リスはい

くと、空き缶をさがし、それを火にかけ、その缶を水でいっぱいにした。湯がわいている。リスはオグロスナギツネに、「いつて、おまえさんを自由にしてやる」といった。リスはやってくると、オグロスナギツネを縄ごともちあげ、いくと、湯のなかになげこんだ。

さて、オグロスナギツネはすっかりにえてしまった。リスはむこうにいくと、塩をとり、やってくると、オグロスナギツネのうえにふりかける。リスは塩をふりかけるとき、まちがって、湯のなかにおちてしまった。リスもオグロスナギツネもいっしょになった。リスもオグロスナギツネもいっしょにえた。野原中、リスとオグロスナギツネがにえるいい臭いがした。動物たちはその臭いをかいでいる。リスとオグロスナギツネがにえるいい臭いがする。動物たちはその臭いをかいでいる。

さて、ハイエナがやってきて、その臭いをかいた。ハイエナは野原をはしって、(リスの屋敷に) やつてくると、「平安、なんじらにあれ。平安、なんじらにあれ」といつて、挨拶をした。なんのこたえもなかった。ハイエナは、「火種をもらおう」といった。ハイエナは火種をとる。(ハイエナをそれをけす。) 火種をとつては、(それをけし) またいつて、火種をとる。ハイエナはたちどまると、それをけし、またしてもどつていく。ハイエナはまたしても、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をする。ハイエナは、「火種をもらおう」といつて。なんのこたえもなかった。ハイエナは日がたかくのぼるま

で、そうしていた。ハイエナはだれもないのがわかると、腰をまげて、ナベを頭にのせた。ハイエナは野原にいった。ハイエナはほとんど野原をあるいて、高みまでいった。ハイエナは林に水があるのをみつけた。それは水たまりみたいなものだった。そこはしめつたところだ。ハイエナはそこにはいると、ナベをおろした。ハイエナは、「ああ、ここには水がある。これをたべて、水のみ、ねるのだ」といった。ほんとうのこと、ハイエナがしらなかったのだけれども、木のしたにライオンがよこになっていた。ライオンがねている。ライオンも水をのんで、やすんでいるのだった。ライオンは腹がへっている。ライオンはやすんでいる。

さて、ハイエナはナベをおろして、水をすくおうとする。ライオンがハイエナをみて、ハイエナに、「ハイエナよ」といった。ハイエナは返事をした。ライオンは、「おまえさんは、なにを手にいれたのか」といった。ハイエナは、「ライオンさん、手にいれたものがあります。わたしはそれをあなたさまにさしあげようとおもって、あなたさまをさがしているところですよ」といった。

さて、ハイエナはナベを頭にのせて、いくと、ライオンのためにおいておいた。ハイエナはそこをとりすぎ、よこになった。腹がたつので、なにもみえなかった。ハイエナはよこになった。ライオンはそれをたべては、その骨をなげる。ハイエナは骨がやってくるど、そこにいき、その骨をとり、それを口にいれてかじる。腹がた

っている。そのうちに肉がなくなってしまった。ライオンはたちあがって、いつてしまった。ハイエナも、たちあがって、いつてしまった。あまりにも、くやしかったので、ハイエナは死んでしまったとき。

こうして、この話はおわった。

(一九九三年、語り手 ルーティ・センベ・ラーム、レイ・プーバにて。この話は大人たちからきいたという。ルーティは六五歳)

## 32 ハイエナの夢

平安、なんじらにあれ。イスラム教徒よ。

さて、わかるな。わたしはおまえさんがのぞんでいるお話をしやろう。ハイエナのお話をさせてもらおう。どの話のなかでも、ハイエナというのは、性質のわるいものとしてあらわれる。

さて、ハイエナがねた。

さて、毎晩、ハイエナは夢をみた。夢のなかで、ハイエナは、説明できないのだが、肉を手にいれ、一人でそれをよこになってたべている。

さて、ハイエナは、「アッラーよ、もしも、夢が現実になるなら、どうか夢が現実になりますように」といった。

さて、またしても、ハイエナは夢をみた。夢のなかで、ハイエナはふかい穴にいれられ、火をつけられると、料理される。ハイエナは、「主よ、どうか夢でみたことが、現実になりませんように」といったとさ。

(一九八三年一月二三日、語り手 サーリ・ジーカ、ガウンデレにて)

### 33 リスとハイエナの旅(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

リスとハイエナがいっしょになった。リスとハイエナはでかけていこうといった。リスとハイエナはでかけていき、食べ物をさがす。ハイエナはバラニテス・アエギプティアカの核をあつめ、ヒョウタン容器をいっぱいにした。リスは屁をこいて、自分のヒョウタン容器をいっぱいにした。リスとハイエナがあるいていく。

さて、リスはハイエナに、「川で、わしらの荷物をおろそう。水のをんだら、荷物がすこしはかるくなるだろう。おもくなくなる」という。

さて、ハイエナはそのとおりだといった。リスとハイエナはいくと、荷物をおろした。水のをんでみると、リスはやってきて、ハイエナの荷物をとった。リスは自分の荷物を取り、ハイエナの荷物と

交換した。リスとハイエナは荷物を頭にのせた。ハイエナは荷物を頭にのせた。

さて、ハイエナは、「なるほど。ほんとうだ、リスおじさんよ。水のをむと、荷物がおもくなくなった」という。

さて、リスとハイエナは自分たちの荷物をもつと、でかけていった。リスとハイエナはいこうとしていたところについた。

さて、リスはハイエナに、「いったら、おまえさんは雌ヒツジの番をする。わしは、ニワトリの番をする。ニワトリがケツケツケツというのをきいたら、わしがニワトリをたべているとおもうのだ。おまえさんも、雌ヒツジをたべるのだ」という。ハイエナは、「よろしい」という。リスとハイエナはいった。リスとハイエナは村につき、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。村人たちは、「どうしたのか。なにをしにやってきたのか」という。リスは、「わたしたちは家畜の番をするためにやってきた」といった。村人たちは、「よろしい。おまえさんたちの旅の食べ物をもつてこい」という。リスはもつていった。リスはもつてきた荷物を村人のところにもつていった。ハイエナももつてきた荷物をもつていった。村人たちはリスの荷物をあけた。すると、バラニテス・アエギプティアカの核がはいっていた。村人たちはやってきて、ハイエナの荷物をあけた。すると、屁がつまっていた。ハイエナが、「わたしはこの屁をこいていない。わたしはバラニテス・アエギプティアカから核を

だしたのだが」といった。

さて、村人は、「おまえさんはなんの番をするのか、ハイエナよ」という。ハイエナは、「わたしは雌ヒツジの番をする」といった。村人が、「おまえさんはなんの番をするのか、リスよ」という。リスは、「わたしはニワトリの番をする」といった。村人は、「よろしい」という。村人はハイエナに雌ヒツジをたくした。ハイエナは雌ヒツジの番をする。リスにはニワトリをあたえた。夜になると、リスは自分の尾っぱで、ニワトリをたたく。ニワトリは、ケツケツとなく。

さて、ハイエナは、(それをきくと)雌ヒツジをつかまえて、たべる。リスは自分の尾っぱで、ニワトリをたたく。ハイエナは雌ヒツジをつかまえて、たべる。雌ヒツジは一匹だけがのこった。リスは、「きょうは、おまえさんたちに別れをいう」といった。リスとハイエナはいくと、村人に別れをつげた。村人は、「おまえさんたちは、それぞれ自分が番をしていたものをだすように」といった。リスはニワトリをつれた。ニワトリがたくさんで来た。ハイエナは雌ヒツジ一匹をつれてきて、「はい」という。ハイエナはその雌ヒツジをひっぱって、ヒツジ小屋にはいっていく。ハイエナはまたしても、その雌ヒツジをだす。ハイエナはまたしても、その雌ヒツジをひっぱって、小屋にはいっていく。

さて、村人はハイエナに、「いけ、その雌ヒツジをとれ、欲張り

め」という。村人はリスに雌ウシをやった。ハイエナは、道すがら雌ヒツジをたべてしまった。リスは雌ウシにのっている。リスとハイエナはかえってきた。

さて、日がしずみかけるのをみて、リスは、「ハイエナおじさんよ、あそこにあかいものがみえるな(あれは火だ)、肉がほしかつたら、あの火をもつておいで。おまえさんがかえってきたら、火をもやそう。この雌ウシをころし、たべよう」という。ハイエナは、はしっていく。リスは自分の雌ウシをころすと、その肉をすべて、穴にいれて、頭と皮をのこしておいた。リスは自分の体に血をぬりつけた。

さて、ハイエナはかえってきて、「火が手にはいらなかった」という。リスは、「おじさんよ、おまえさんがいくと、あるおじさんがやってきて、わしをなぐって、血のなかにたおした」という。

さて、ハイエナは、「わしは頭と足さえあればじゅうぶんだ」という。ハイエナは頭と足をたべた。ハイエナはいつてしまった。ハイエナがすこしいくと、リスは雌ウシの太股をだし、「ハイエナおじさんよ、ハイエナおじさんよ」という。ハイエナがふりかえる。リスは、「はい、ここにこれがある。おまえさんは手にいれられない」といった。ハイエナはどんだんはしつてくると、リスの尾っぱをつかんだ。リスは、「なんだって、ハイエナおじさんよ、おまえさんは木の根っこをつかまえておきながら、それをわしの尾っぱだ

というのか。いつてしまえ、どうしようもないものよ」といった。

さて、ハイエナはリスの尾っぽから手をはなした。ハイエナは木の根っこをつかんだ。リスは、「おまえさんは尾っぽをつかんだ。おまえさんは尾っぽをつかんだ」という。

さて、ハイエナは木の根っこをひっぱる。木の根っこがきれた。ハイエナはたおれた。またしても、ハイエナはあるいていく。リスはまたしても、ハイエナをよんで、雌ウシの腿肉をみせた。ハイエナはいそいではしってきた。ハイエナがやってくると、リスは穴にはいったが、尾っぽはそのままであった。ハイエナが尾っぽをつかんだ。リスは、「ああ、気のふれたやつめ。おまえさんは、木の根っこをつかまえておきながら、それをわしの尾っぽだといふのか」といった。

さて、ハイエナは尾っぽから手をはなした。ハイエナは木の根っこをつかんだ。ハイエナが木の根っこをつかまえると、リスは、「おまえさんはわしの尾っぽをつかんだ。おまえさんはわしの尾っぽをつかんだ」という。ハイエナは木の根っこをひっぱった。

さて、木の根っこがきれた。ハイエナはどこかにいつてしまったとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。ひよつとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

(一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・テッポ・マンガ、  
ガウンデレにて)

### 34 リスとハイエナの旅(2)

リスとその幼友たちのハイエナがいた。二人はいつて、王さまに挨拶するといつた。リスは屁をこいて、水ガメをいっぱいにした。

さて、ハイエナは蜂蜜で、水ガメをいっぱいにした。

さて、リスは水ガメを頭にのせた。ハイエナも、水ガメを頭にのせた。二人は道があるいていく。リスはそのまま王さまのところに行く、わらわれるのをしっているので、「友よ、まっついておくれ。ほくはいつて、あそこでウンコをする」といった。リスは道からそれて、草むらのそばにいくと、たちどまった。ハイエナは、「なんだつて、まっついておくれ。ほくもいつて、あそこでウンコをする」といった。

さて、ハイエナが道をそれた。リスは、「きみは立派な人だから、とおくにいけ」といった。ハイエナはリスにみられないように木のうしろにいくととおくにいく。リスはやってくると、ハイエナの水ガメ(袋といつてはいるが水ガメで統一)と自分の水ガメ(袋といつてはいるが水ガメで統一)をとりかえた。屁のはいつた水ガメ(袋といつてはいるが水ガメで統一)をハイエナの水ガメ(袋とい

つてはいるが水ガメで統一)のあったところにもつていった。蜂蜜のはいった水ガメ(袋といつてはいるが水ガメで統一)を自分のところにおいておいた。

さて、リスとハイエナは水ガメ(袋といつてはいるが水ガメで統一)を頭にのせた。ハイエナがやってくると、リスとハイエナは水ガメ(袋といつてはいるが水ガメで統一)を頭にのせた。

さて、ハイエナは、「ぼくは、王さまのところで、この水ガメをあける」といった。リスは、「ぼくは、きみのいうとおりにする。ぼくは、王さまの奴隷のところで、この水ガメをあける」といった。

さて、(リスとハイエナは王さまのところにづく。)リスは奴隷のところで、この水ガメをあけた。奴隷たちは蜂蜜をたべた。奴隷たちはおいしいとおもった。ハイエナは王さまのところにいつて、水ガメをひらいた。(水ガメから尻がでてくる。)王さまのいる部屋は尻でいっぱいになった。王さまは、「わしは、おまえさんに日除けのしたにいつて、ひらくようにいつたのに、おまえはそれをこぼんだ。部屋でひらくといつた」といつた。王さまたちはおおきな声をあげている。王さまの家のものたちはいそいで窓をあけた。王さまも、ハイエナも、尻には手をやいた。王さまの家のものたちは戸をつぶして、そとにでた。王さまたちはたちどまった。

さて、夜になった。リスはハイエナに、「ぼくはニワトリの小屋

にねる」といつた。ハイエナは、ヒツジの小屋にねようといつた。

さて、王さまの家のものたちはリスとハイエナにいつて、おちつき、やすみ、夜のときをすこすようにさせた。リスは、「夜、ぼくがニワトリをおそい、ニワトリがケツケといえ、きみは雌ヒツジつかんで、たべるのだ」といつた。

さて、リスは小屋にはいると、ちいさな棒をつくり、手にもつている。すこしねると、リスはニワトリをたたく。ニワトリはとびあがり、ケツケとなく。リスはもどり、ハイエナにはねて、小屋のうえまでいかせる。ハイエナはもどつてくると、雌ヒツジにとびかかり、つかまえて、太股をきりとつて、のみこんでしまう。太股をきりとつて、のみこんでしまう。リスはまたしても、ニワトリをたたく。ニワトリはケツケとなく。ハイエナはまたしても、とびあがり、雌ヒツジをたべる。そうして、雌ヒツジをみんなたべてしまった。そこには、雄ヒツジが一匹のこるだけになった。リスは一羽もたべなかつた。夜があけて、朝になった。王さまの家のものたちは、「小屋にいたるものをそとにだしなさい。リスよ、ニワトリをみんなだしなさい」といつた。リスはニワトリをだした。王さまの家のものたちはでてきたものをすべてかぞえた。一羽もなくなつてないことがわかつた。王さまの家のものたちが、「ハイエナよ、小屋にいたるものをそとにだしなさい」といつた。のこつたのは、雄ヒツジだけだつた。ハイエナは、そちらにいつて、雄ヒツジをお

い、戸口をおとりすぎ、小屋のそとにいき、「はい」といった。王さまの家のものたちが、「ほかのをだしなさい」という。ハイエナはおなじ雄ヒツジをおう。おなじ雄ヒツジがそのへんをまわる。

さて、リスもハイエナも、小屋にいるものをそとにだした。

さて、王さまの家のものたちは雄ヒツジにふとい縄をしばりつけた。

さて、雌ウシには、ほそい縄をしばりつけた。

さて、王さまの家のものたちはハイエナに、「おまえさんは、さきにどちらかをとりなさい」といった。ハイエナは、「そこにふとい縄がある。ひよつとしたら、雌ウシにしばりつけてあるかもしれない。雌ウシにはほそい縄をしばるはずがない」といった。ハイエナはふとい縄をとった。ハイエナがでてくると、雄ヒツジがいた。リスがでると、雌ウシがいた。王さまの家のものたちは、「さて、のつて、家にかえりなさい」といった。

さて、リスとハイエナはもらったものにまたがった。王さまは、「これは、おまえさんたちの分だ」といった。

さて、リスは自分の雌ウシにまたがった。

さて、ハイエナは自分の雄ヒツジにまたがった。リスとハイエナはあるいていく。雌ヒツジはよくあるかない。リスが、「なんだつて、友よ。足を一本きりとれ。雄ヒツジはあるくだろう。足をきれば、よくあるく」といった。ハイエナは足を太股からきりとった。

ハイエナはその肉をすこしとり、リスにわたした。リスはそれを袋にいれた。

さて、またしてもリスとハイエナはすすんでいった。雄ヒツジはよくあるかない。リスが、「前足をもう一本きりとれ。きれば、雄ヒツジはあるくだろう」といった。ハイエナは足をきりとった。ハイエナはその肉をとり、リスにわたした。ハイエナは足をたべてしまった。

さて、リスとハイエナはまたしてもすすこしあるいた。リスはハイエナに、「もう一本きりとれ。きれば、雄ヒツジはあるくだろう」といった。ハイエナはまた足をきりとった。ハイエナはその肉をすこしリスにわたした。ハイエナは残りをたべてしまった。リスは、「もう一本きりとれ。きれば、雄ヒツジはあるくだろう」という。ハイエナはまた足をきりとった。ハイエナは肉をすこし、リスにわたした。ハイエナは残りをたべてしまった。リスは、「のこつている一本をきつてしまえ。それをきつてしまつたら、腹ではつていくだろう」といった。ハイエナは残りの一本をきつてしまった。ハイエナは肉をほんのすこしリスにわたした。ハイエナは足をたべてしまった。雄ヒツジは腹ばいになった。すこしも、すすまない。うごめいているだけだ。リスは、「首をきつてしまえ。首をきつたほうがよい」といった。ハイエナは首をきつてしまい、肉をすこしリスにわたし、残りをたべてしまった。リスは、「雄ヒツジの喉をか

ききり、くつてしまえ」といった。ハイエナは雄ヒツジの喉をかききった。リスとハイエナは肉をわけた。リスとハイエナはすこしすすんでいった。ハイエナは足であるいていく。ハイエナが、「なんだって。よかつたら、ほくの肉をかえしておくれ。そうでなかつたら、きみときみの雌ウシをたべてしまつてやる」といった。リスはもらった肉をだすと、ハイエナにわたした。

さて、ハイエナはそれをたべた。リスとハイエナはすこしききにすすんでいった。リスとハイエナはいこうとしているところについた。リスはハイエナに、「あそこに火がみえているだろう」といった。リスはハイエナにむかつて、しずみかける目をゆびさした。リスは、「いつて、火種をとつてくるのだ」という。ハイエナはどんなはしつていく。リスは自分の雌ウシをころして、その肉をひっぱつていき、穴にいれた。穴のそとには、血がのこっているだけだった。リスはすわった。リスはすわって、肉をたべた。ハイエナはいったが、火をみつけることができなかつた。

さて、ハイエナがそこをとりすぎていくと、ライオンをよんだ。

さて、ライオンとゾウがやってきた。ハイエナが（リスがはいっていった穴をゆびさし）、「この土を足でよくふみしめておくれ。リスがここにはいつていつて、わたしに肉をくれなかつた」という。

さて、ライオンとゾウはそこを何度もふみしめた。そこをふみしめても、なにもでてこなかつた。ハイエナたちはいくと、ハゲタカをよび、きて、穴をみはつてくれという。ハイエナは、「ハゲタカよ、おいで。きて、リスをみはつておくれ。わかるな。わたしはいつて、穴をほるものをさがしてきて、穴をほつたほうがよい。穴掘り棒でも、手にいれて、あの肉をとつてしまふのだ」という。

さて、ハイエナたちはそこにハゲタカをおらた。リスはいつて、トウガラシをとり、やつてくると、ハゲタカの目にいれた。ハゲタカはリスの穴をふさいだので、リスはいくとべつの穴をあけた。リスは自分の肉をたべている。ハイエナたちがやつてきて、「リスはどこにいる」という。ハゲタカは首をよこにふる。ハイエナたちがやつてきて、「リスはどこにいる」という。ハゲタカは首をよこにふる。リスはどこかににげていつてしまった。

さて、ハイエナたちはどこかにいつてしまった。ハイエナたちは自分たちの道のあるいていつた。ハイエナたちはどこかにいつて、肉をさがしたとき。

わたしがお話をしたのではない。切り株が話をした。わたしはそれをきいたのだ。

（一九八一年二月一六日、語り手 スレイ・ルーティ・ジャツボ  
ナ・ペーテル・ゴナ・ニリー・ディンバ・ゲーネ・ハム・ガー  
ブド、レイ・ブーバにて。この話は、一九八〇年にバム族の自

分の父親のお婆から、デーサンドウイ町できいたという)

### 35 リスとハイエナの旅(3)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ハイエナとリスがいた。リスはイヌをみつめて、「きみはほくが  
いこうとしている旅についてくるか」という。イヌは、「ほくはい  
けない。ハイエナおじさんのところにいってみなさい」といった。  
リスはハイエナのところにいってみた。リスは、「どうだ、ハイエ  
ナよ。きみはほくについてくるか、友よ。旅についてくるか」と  
いう。ハイエナは、「いついくのか」といった。リスは、「あすいこ  
う」という。

さて、ハイエナはバルタ菓子やナーキヤ菓子などを準備し、それ  
で袋をいっばいにし、袋をとじた。リスはやつてくると、ハイエナ  
の袋をぬすんだ。リスは、「よろしい」といった。リスはハイエナ  
の袋をぬすんで、自分のところにもつていった。リスはつぎに、屁  
をこいて、袋をいっばいにし、袋の口をしぼると、それをおいてお  
いた。リスはその袋をハイエナの屋敷にもつていった。リスはいく  
と、袋をおなじところにおいた。リスは、「友よ、いこう」といっ  
た。ハイエナは、「いこう」というのをきくと、たちあがり、どの  
袋が自分の袋かわからず、バルタ菓子のはいつている袋をもつた

つもりで、どんだんあるいていく。ハイエナとリスはあるいていっ  
た。ハイエナとリスが村にちかぶくと、リスは、「友よ、ハイエナ  
よ、村について、ねる小屋をもらい、どの小屋にねるか、といわ  
れたら、きみはなにといっしょにねるのか」という。ハイエナは、  
「ほくは、雌ヒツジとねる。リスよ、きみはなにといっしょにねる  
のか」といった。リスは、「ほくはニワトリといっしょにねる」と  
いった。リスは、「それで、友よ、ハイエナよ、ニワトリがケツケ  
ツケツというのをきいたら、それはほくがニワトリをたべているか  
らだ。きみも、雌ヒツジをたべて、その頭をおいておくれ」と  
いう。ハイエナは、「よろしい」といった。ハイエナとリスは村  
について、村の人たちは、「こちらにきなさい。こちらにきなさい」と  
いう。ハイエナとリスがついた。村の人たちは、「おまえさんは、  
なにをもつてきてくれたのか、友よ、リスよ」という。人びとが袋  
をあけてみると、バルタ菓子やナーキヤ菓子などがはいつていた。  
さて、ハイエナが、「なんだって、ほくのはリスのよりずつとよ  
い。小屋の戸をしめなさい」という。人びとが小屋の戸をしめて、  
袋にちかづいてきた。人びとは、「おまえさんは、きょう、おいし  
いものがやってきたというのだな」という。人びとが袋をひらいて  
みると、くさい屁の臭いがたちこめた。人びとは大声をあげ、たい  
へんな目にあつた。人びとは小屋の戸をひらいた。夜になった。人  
びとは、「リスよ、おまえさんはなにといっしょにねるのか」とい

った。リスは、「わたしはニワトリとねる」といった。人びとは、「それで、ハイエナよ、おまえさんはどうなのか」という。ハイエナは、「わたしは雌ヒツジとねる」という。

さて、真夜中、リスはニワトリをたたいた。ニワトリはケツケツケツとなく。ハイエナは雌ヒツジの小屋にいる。ハイエナは雌ヒツジをたべると、その頭をおいておいた。リスはニワトリをたき、ハイエナにニワトリをたべているとおもわせる。ニワトリがなくと、ハイエナは雌ヒツジをたべて、その頭をおいておく。そのうちに、びつこをひいた雌ヒツジが一頭のこるだけとなった。この雌ヒツジはハイエナから身をかくしていた。夜があけて、朝になり、人びとはいつて、ニワトリ小屋をあけた。ニワトリはみんなでてきた。いなくなつたニワトリはいなかつた。人びとはいつて、雌ヒツジの小屋をひらいた。人びとは、「雌ヒツジをおいだしておくれ」という。ハイエナはびつこをひいた雌ヒツジをおいだした。人びとは、「小屋にいる雌ヒツジをみんなだしなさい」という。ハイエナは、「ここに雌ヒツジがいるではないか」という。人びとは、「おいだしなさい」という。ハイエナはびつこをひいた雌ヒツジを小屋からだした。人びとは、「おいだしなさい、ハイエナよ」という。ハイエナは頭を一つもちあげると、なげて、「はい。もしよかつたら、おまえさんたちの子どもに料理してやりなさい」という。ハイエナはどんどん頭をなげていく。そのうちに頭がたくさんたまつた。人

びとはハイエナに、「よろしい。文句はない」といった。ハイエナとリスは村の人びとに別れをいい、家にかえるといった。人びとは、おおきな雌ウシをつれてきて、リスにやつた。人びとはびつこをひいた雌ヒツジをとり、ハイエナにやつた。人びとは、「はい、それではかえりなさい」といった。

さて、リスは自分の雌ウシにのつた。ハイエナはびつこをひいている雌ヒツジにのつた。ハイエナとリスがすこしすすんでいくと、ハイエナは、「友よ、リスよ、雌ヒツジはあるこうとしない」という。リスは、「なんだつて。その雌ヒツジの足を一本くつてしまえ。三本のこしておく、ほくの雌ウシよりよくあるく」といった。ハイエナは一本をたべると、その肉をすこしとり、リスにやる。リスはそれを袋にいれておく。ハイエナとリスがすこしすすんでいくと、ハイエナは、「足三本では、うまくあるけない」といった。リスは、「もう一本くつてしまえ。二本のこしておく、ほくの雌ウシよりよくあるく」という。ハイエナはもう一本をたべる。ハイエナとリスがすこしすすんでいく。ハイエナは、「リスよ、あるこうとしない」という。リスは、「もう一本くつてしまえ。一本にする」と、よくあるく」といった。ハイエナとリスは雌ヒツジの足をたべた。ハイエナは雌ヒツジをひつばる。ハイエナは、「リスよ、あるこうとしない」という。リスは、「なんだつて、残りの一本をくつてしまえ。雌ヒツジは腹ではつていく。まえよりよくすすむ」とい

う。ハイエナは、「よし」というと、のこっている足をたべてしまった。ハイエナは、「友よ、リスよ、雌ヒツジはすすもうとしない」という。リスは、「みんなくってしまえ、友よ」という。ハイエナは雌ヒツジをたべてしまった。ハイエナはすこしリスにわたした。ハイエナは自分がリスにわたすものを、リスがみんなたべてしまったとおもっている。ハイエナとリスはでかけていった。リスは、「さて、自分がさきがあるき、ハイエナがうしろをあるくと、ハイエナはまもなく自分の雌ウシの肉をはぎとるだろう」とおもった。

さて、ハイエナはさきをあるいた。ハイエナとリスはあるきながら、話をする。ハイエナはリスが家についたということをしらない。わかるな、お日さんがしずみかけているのをゆびさして、リスはハイエナに、「あそこに火がもえているのがみえるな。いつて、火種をとってきておくれ」といった。ハイエナは、「よろしい」といった。ハイエナはおおいそぎではしっていった。リスは自分の穴のそばまでいくと、雌ウシをころして、血をとり、岩のうえにながした。リスは、「よろしい、ハイエナがきたら、あいつをだましてやる」といった。リスは肉をとり、自分の家につめた。ハイエナは、「リスよ、火のあるところまでいけなかった」という。リスは、「もうすこしさきまでいけ。あそこに火がある。ほくには、火がもえているのがみえる」という。ハイエナはどんどんはしっていく。ハイエナは、「リスよ、火のあるところまでいけなかった」という。

リスは、「父無し子よ、こい」という。ハイエナがやってきた。リスは血をつけてある石をもち、「なんだって、友よ。ここに雌ウシの肉がある。きみにのこしておいてやった」といった。ハイエナは石をかじるが、かたかった。ハイエナは、「なんだって、この肉は手におえない、かたい。べつの肉をくれ。友よ」といった。リスはべつの血をつけてある石をわたした。ハイエナは、「なんだって、こんな肉をくれよって、ひどい目にあわしてやる」という。ハイエナは石をわり、かじる。

さて、リスはほそい肉をだした。リスはハイエナに、「ここに肉がある。くえ」といった。ハイエナはその肉をたべた。ハイエナは満足しなかった。リスはもどっていくと、おおきな肉をそとにだして、ハイエナに、「おまえさんにはみせても、やらない。どこにでも、うったえにいけ」といった。ハイエナは腰をおって、穴をほっていく。ハイエナは腰をおって、穴をほっていく。

さて、ライオンがそこにやってきて、ハイエナに、「友よ、ハイエナよ、おまえさんはここでなにをしているのか」といった。ハイエナは、「リスはいつて、もう子をうまなくなった雌ウシをころしたけれども、やってきて、わたしにその肉をくれなかったのだ」といった。ライオンは、「よろしい。いつて、葉っぱをとってこい。わたしのキンタマに風をおくっておくれ。友よ、穴をほってやる」といった。ハイエナは葉っぱをとってきて、ライオンのキンタマに

風をおくっている。ハイエナがライオンのキンタマに風をおくり、ライオンは穴をほる。ハイエナはライオンのキンタマをみて、キンタマをすこしひつかいた。ライオンは、「なんだって、おまえさんはわたしのキンタマをひつかくのか」といった。ハイエナは、「なにをいうか。木がふれているのだ」といった。ハイエナはライオンのキンタマをきりとって、にげていった。ライオンはたおれてしまった。リスは穴からでてきた。リスとライオンは肉をたべた。ハイエナは家につくと、家族とキンタマをたべてしまった。ハイエナは、「だれかが、きて、わしのことをたずねても、いないというのだ」といった。ハイエナはかくれにいった。ハイエナはよこになっっている。ライオンはリスに、「どうしたら、いいだろう。どうしたら、ハイエナをつかまえられるだろう」という。リスは、「よろしい。体がいたまないなら、おおきな雄ウシをころしにいきなさい」といった。ライオンはいくと雄ウシをころした。リスは、「あかい腰布をさがしておいで」という。ライオンはあかい腰布をさがしてきた。リスは、「仮小屋をつくらう」という。ライオンとリスは仮小屋をつくった。

さて、ライオンとリスは雄ウシをころして、その肉を日でかわかした。肉はかわいた。ライオンはやってくると、仮小屋の土間によこになり、そのうえから腰布をかぶった。リスたちはほそくきった肉をもつてくると、つんだ。リスは残りの肉を袋にいれて、ハイ

エナの屋敷のまえで、その肉をまいていき、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。ハイエナの子どもたちが返事をした。リスは、「おまえさんたちの父親はどこにいる」という。子どもたちは、「父さんはでていった」という。リスは、「よろしい、肉をもつてきてやったのだけれども、おまえさんたちの父親がいないのなら、もどつていく」という。ハイエナは、「いる。友よ、リスよ。いる。いるとも。いる」という。ハイエナは肉をたべていく。リスはあちらのほうをみて、「なんだって、友よ、ハイエナよ、肉はぼくの小屋につんである。はしれ。よかつたら、いつてたべればよい」といった。ハイエナは、「ほんとうか、友よ」という。ハイエナは肉をたべている。ハイエナは道におちている肉をひろっている。ハイエナは小屋のなかにあるたくさんの肉をみた。ハイエナは小屋のなかにライオンがよこになっているのをしらなかつた。リスは、「なんだって、それでは、きみがくるまでまつ」といった。リスははしつていき、仮小屋のなかにはいった。ハイエナは肉をたべている。リスはいくと、ハイエナを仮小屋のなかにとじこめてしまった。リスは、「友よ、きみはきみの友だちの小屋のなかで、すきなだけたべればよい」といった。リスはハイエナを小屋のなかにとじこめた。ハイエナは、どんだんたべていく。

さて、ライオンの爪がでてくる。ハイエナが、「リスよ、小便をする」といった。リスは、「そこは、おまえさんの友だちの小屋だ。

そこで小便をしろ」という。ハイエナが、「友よ、リスよ、ウンコをしてもよいか」という。リスは、「そこでウンコをしろ。友よ、ぼくは覚悟している」という。ハイエナは腰をおりまげ、肉をたべている。ライオンはハイエナにとびかかっている、ハイエナをころし、キンタマをとると、自分のキンタマのあつたところにもどした。ライオンとリスは肉をたべたとさ。

おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ  
ラーイ・オスマース、マルアにて)

### 36 リスとハイエナの旅(4)

リスとハイエナが挨拶をしに行く。リスとハイエナが王さまに挨拶をしに行く。リスとハイエナはあるいていく。リスとハイエナは蜂蜜を手にいれた。リスとハイエナは蜂蜜を袋にいれた。リスとハイエナはあるいていく。リスとハイエナはここから市場(レイ・プーバにある市場)くらいまでいった。リスは自分の蜂蜜をとると、みんなのんでしまった。リスはハイエナに、「荷物を交換しよう。おまえさんは、おおきいから、わたしの荷物をうけとりなさい。わたしのは、おまえさんのよりおおきい」という。ほんとう

のこと、リスは自分のものをおおきくしておいたのだった。すなわち、なかにはいつているのは、屁だった。リスは袋のなかに屁をこいて、その袋をとると、ハイエナにわたした。ハイエナはそれにもつた。

さて、リスとハイエナはかけていった。ハイエナとリスは王さまのところについた。リスとハイエナはついて、「平安、なんじらにあれ」という。王さまがそれにこたえた。リスとハイエナは挨拶をした。王さまは、「はいりなさい」といった。リスとハイエナは屋敷にはいつて、自分たちの荷物をおろした。荷物をおろすと、王さまの家来たちは、「おまえさんたちの荷物をしばつてある紐をとりなさい。わしらはそのなかにながはいつているかみてみる」といった。

さて、リスが自分の袋をひらくと、そのなかには、蜂蜜がはいつていた。王さまはそれを見た。

さて、そのあと、王さまはハイエナに、「おまえさんの荷物をあけなさい。みてみる」という。ハイエナが袋をひらくと、そのなかにはいつていたのは、屁だった。王さまは、「よろしい。問題はなさい。リスよ、わたしはおまえさんに雌ウシをやる。ハイエナよ、わたしはおまえさんに雌ヒツジをやる」という。リスとハイエナは、「よろしい」といった。これから、リスとハイエナは家にかえつていこうとする。リスは雌ウシをひっぱつて、あるいていく。ハイエ

ナは雌ヒツジをひっぱった。雌ヒツジはあるこうとしなかった。

さて、ハイエナは、「リスよ、雌ヒツジはあるこうとしなさい」という。リスはハイエナに、「脚を一本きりとつてしまえ。脚を一本きりとると、雌ヒツジはあるくだろう」という。ハイエナは脚を一本きりとると、それをのみこんでしまった。雌ヒツジはおきあがらなかった。リスはハイエナに、「もう一本きりとつてしまえ」といった。ハイエナはもう一本きりとつてしまった。雌ヒツジはおきあがらなかった。

さて、ハイエナは雌ヒツジをすっかりたべてしまった。リスは家にかえったとき。こうして、家にかえったとき。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサはレイ・ブーバのフルベ族)

### 37 リスとワニ(1)

すなわち、この話も野原の動物の話だ。野原の動物たちがたくさんあつまつた。動物たちは向こう岸まで、ゾウの結婚式にでかけていく。動物たちはクモにであった。クモとリスとハイエナはいっしょになって、川をわたっていく。動物たちは川をあるいていく。動物たちは川をあるいていく。

さて、動物たちは川をわたっていく。動物はあるいているとき、

クモの友だちであるリスはクモが太鼓たたきだという。リスは太鼓をたたく。太鼓は、「クモはわたしの友だち。クモはわたしの友だち。クモはわたしの友だち」という音をだす。川をわたってしまうと、太鼓は、「クモは友だち。わたしをおしておくれ。ちいさなお尻。クモのお尻のまんなか」に糸がある。わたしのリスのおおきなお尻。糸のちいさなお尻。クモのお尻のまんなか」という音をだす。リスはクモを馬鹿にしている。動物たちは川をわたっていく。動物たちは結婚式にいった。動物たちは結婚式のあと、あそんだ。リスは太鼓をたたきながら、クモを馬鹿にする。動物たちは太鼓をたたいている。リスは太鼓をたたいて、「クモは糸のでてくる尻をもっている。クモは糸のでてくる尻をもっている。クモは糸のでてくる尻をもっている」という音をだす。クモが、「なんだって」という。リスは太鼓をたたいて、「クモはお尻のまんなかから糸をだす」という音をだす。動物たちがかえってくるとき、このように太鼓をたたく。

さて、クモは、「みんなとおりにすきていきなさい」といった。リスは川にちかづいてくると、太鼓をたたいて、「クモはわたしの友だち。クモはわたしの友だち」という音をだす。リスはクモに川をわたらせてもらえらるおもっている。

さて、クモはリスをわたらせなかった。クモはリスが川をわたるための糸をつくった。クモは端のほうがふとく、まんなかほそい

糸をつむいだ。ほかの動物のためにふとい糸をつくった。ほかの動物たちは川をわたった。リスは川のまんなかまでくると、水のなかにおちた。リスは水のなかにしずんでいった。リスは川の底についてた。

さて、ワニはいくと、リスをつかまえた。リスはワニに、「あつ、おじさんよ。わたしはあなたをさがしていました。わたしはながいあいだ、おじさんであつていません。ほんとうのこと、わたしたちは、おたがいながいがいあいだであつていません。わたしがもうすぐ結婚するもの shouldn't でしょう。おじさん、ほんとうに、おたがいにながいがいあいだであつていません。ながいがいあいだ、であつていません」といった。リスはなんどもワニがおじさんだといつて挨拶をする。リスは、「ほんとうに、ながいときがたちました」という。おじさんだといわれたワニが、「おまえさんは、どこでわたしのことをしつたのか」とたずねる。リスは、「ああ、ほんとうに、わたしはおじさんをまえからしています」といった。ワニは目のみえないもの、ハンセン病にかかったもの、耳のきこえないもの、片足が不自由なもの、四人の奴隷をもつていた。ワニと奴隷たちはいっしょにすんでいた。リスも、そこにすんだ。ワニはリスに畑をあたえた。畑は水のしたにあつた。ワニたちは畑をたがやしにいく。ワニたちは畑をたがやす。リスはワニの卵がどこにあるかわかった。卵は六十個あつた。リスはワニの卵のありかがわかった。リスは卵

を一つつぶす。リスは卵をつかちて、食べ物をつくり、それをワニのところにもつていく。ワニは、「ああ、なんと料理が上手なところか。なんと料理が上手なことか」という。ワニたちは卵をたべてしまった。とうとう、一つがのこるだけになった。リスは、「それでは、わたしは家にかえります」といった。おじさんはリスがかえるためにもつてかえるものをまとめて、おいておいた。リスは家にかえるという。ワニはリスに、「耳のきこえないものにつれていってもらうか。片足のわるいものにつれていってもらうか。ハンセン病にかかったものにつれていってもらうか」といった。みんなは、「耳のきこえないものにつれていってもらえばよい」といった。というのは、耳がまったくきこえなくても、手でいきさきをおしえればよいからだ。ワニたちは、「耳のきこえないものがリスをつれていけばよい」といった。リスはワニの卵をかぞえて、もつてくるようにとといった。ワニたちはリスに、「まず、卵をかぞえるがよい」といった。リスは卵をとると、むこうにもつていって、卵をよごす。リスは、「はい」といって、卵をみせる。リスはもどつていくと、おなじ卵をもう一度よごす。リスは、「はい二つ目」という。卵をよごし、「はい、三つ目」という。とうとう、ワニがおいておいた数になつた。ほんとうのこと、リスはおなじものをもつてくるだけだつた。ワニとリスは船にのつた。ワニとリスはどんだん川をすすんでいく。とうとう、ワニとリスは川のまんかについた。ワ

ニが小屋にはいると、卵が一つあるだけだった。ワニはほかの卵をさがしたけれども、なかった。ワニは、「耳のきこえないものよ、そいつをつれてかえつてくれ。不信心ものをつれてかえつてくれ。そいつが卵をとつてしまった。耳のきこえないものよ」といった。ワニたちは手をあげる。耳のきこえないものが、ふりかえった。リスは、「あちらで、ご主人さまがなにをいいたいか、みてみる。おまえさんはわたしを川のむこうまでつれていきなさい。風にふかれないうちに。風がふいてきたら、埃をかぶる。そんなことでもしたら、あの人はおまえさんをころす」といった。相手は耳がきこえない。ワニはおよいでくる。ワニは、「耳のきこえないものよ。耳のきこえないものよ」という。耳のきこえないものはリスを川岸につれていった。

さて、リスはとびおりのた。リスは船からとびおりのた。リスはとびおりのた。ワニは船のそばまでやってきた。リスは、はねて、穴にはいった。ワニは手をいれるが、リスにはとどかない。あっちこっちをさがし、木の根っこなどをちぎる。リスをつかまえるためにしないことはなかった。リスはすつとまえににげてしまっていた。ワニはリスをそこにのこした。リスはにげていった。ワニは家にかえつてきた。ワニはやってくると、耳のきこえないものをころしてしまつた。ワニは耳のきこえないものをたいたりした。さて、リスがいくと、またしても、クモがいた。自分を水のなか

におとしたクモだった。リスはクモをみつけた。これから、クモとたたかおうというわけだ。リスとクモはたたかつた。クモはリスを縄でしばる。リスは縄をきる。リスはいくと、ふとつた。きれいになつた。クモはやつてくると、きれいになつたリスと結婚したいといつた。リスは、「おまえさんなんかと結婚するわけがない」といつた。

さて、リスはクモをころして、王さまになつた。リスは王さまになると、自分をしばっていたクモの糸をとり、綱にした。川にいくと、その糸を向こう岸までわたし、川をわたるのだった。

こういうことで、この話も、おしまい。

(一九八三年一月二六日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、マタカム族の女から、モコロできいたという)

### 38 リスとワニ (2)

リスはおきあがると、川向こうに夜遊びにでかけていく。リスたちはでかけていき、川についた。リスたちは川をわたるところにやってくる。リスはクモに、「糸をつむいでおくれ、わたろう」といつた。クモが糸をつむいだ。リスはわたつた。

さて、リスたちがいくと、みんな太鼓などをたたいて、たのしく

やっている。

さて、リスはそこにつくと、「お尻から糸をだすクモ、お尻から糸をだすクモ、お尻から糸をだすクモ、お尻から糸をだすクモ」とうたいながらおどる。

さて、クモはなにもいわなかった。とうとう、リスたちがかえるときになった。

さて、リスたちはやってくる、川についた。リスはクモに糸をつむいで、わたらせてくれといった。クモは、「なんだって、おまえさんはあそんでいるとき、『お尻から糸をだすクモ、お尻から糸をだすクモ』といって、わたしを馬鹿にしていたではないか。わたしはおまえさんをわたしてやらない」といった。リスはクモにたのんだ。しかたがないので、クモはほそい糸をつむいだ。リスは糸のり、川をわたっていく。リスがちょうど川のまんなかに行くとき、川におちてしまった。

さて、リスはどんだんながれていく。ながれついたところに、ワニがいた。

さて、リスは、「あっ、ほくのおじさんがいる。何年ものあいだ、ほくはおじさんをさがしていた」といった。

さて、リスはワニを、「ほくのおじさん」とよぶ。ワニはリスを、「息子」とよぶ。ワニはリスを自分の屋敷につれていった。

さて、夜があけて、朝になると、リスはワニたちに食事をつく

ってやるという。リスはいくと、ワニの卵を一つとり、おらずにまぜて、にる。ワニは、「息子よ、おまえは料理が上手だ」といった。そのうちに、卵は一つのこるだけとなった。リスはこれから家にかえるといった。

さて、ワニは、「よろしい。いって、わたしの卵をもつてきておくれ。かぞえるから」といった。リスははしっていき、卵を一つとると、もつてくる。ワニは線を一本ひく。リスがはしって、いき、おなじ卵をもつてくる。ワニは線を一本ひく。リスがはしって、いき、おなじ卵をもつてくる。ワニは線を一本ひく。こうして、とうとう、卵の数があつた。ワニは、「よろしい、それでは、耳のきこえないものか、目のみえないものか、どちらについていてほしいか」といった。リスは、耳のきこえないものについてきてほしいといった。

さて、川はおおきかった。耳のきこえないものとリスは船にのつた。耳のきこえないものは船をこいでいる。船はすすんでいく。ワニがいつ、自分の卵をみると、たった一つしかのこってなかった。ワニは、はしっていった。ワニは、「耳のきこえないものよ、とまれ。リスは卵をみんなたべてしまった」という。耳のきこえないものは、「なんだって」という。リスは、「親父さんは、はやくいけといっている。川の水が増水しないように、親父さんは、はやく



おいておいた。ワニは、「ここにモロコシがある。わたしがでかけたあと、お腹がすいたら、これを火にかけなさい」といった。リスは、「わかった」とこたえた。リスはそのモロコシを火にかけ、いくと、自分のおばさんの卵をとって、やっつけてくると、その卵をわり、そのモロコシのなかにいれた。モロコシはまるで砂糖のようになった。おばさんがかえってきた。リスはおばさんに、「ここにモロコシがある。おばさんのためにとっておいた」といった。おばさんはモロコシをちかくにもつてくると、すくってたべた。おばさんはいままで、モロコシがこんなにおいしいとおもったことがなかった。おばさんはモロコシをこんなにおいしく料理したことがなかった。ほんとうのこと、おばさんは自分の子どもをのみこんでいるのだった。おばさんは自分の子どもをどんだたべていった。そのつぎの日、ワニはいつてしまった。リスはいつては、灰をとり、もどつてきて、それを卵にぬりつける。リスはもどつていくと、灰をとる。リスは卵のところに行く道に灰をばらまいた。灰をばらまくと、いつて、卵をとる。リスはもどつてくると、またしても卵をわする。リスはモロコシを火にかける。卵はだんだんなくなっていく。おばさんはそれをみていなかったし、気にしていなかった。

さて、卵は最後の一つになった。リスは、「おばさん、きょう、おじさんたちをみにいきたい。わたしはもどつてくる」といった。おばさんは、「よろしい」といった。リスはたちあがると、どんだ

んはしつていき、耳のきこえない人のところにやっつけてくると、「耳のきこえない人よ、おばさんが、黒雲がでてきて、雨がふりそうだといった。はやく、わたしが家にかえられるように、岸までつれていっておくれ」といった。なんとなんと、耳のきこえない人はリスを船にのせて、船をこいだ。わかるかな、ここから、あの交差点ぐらゐのところまでいった(レイ・プーバの王都にある交差点)。

さて、リスは、「耳のきこえない人よ、リスをつれもどしておくれ。耳のきこえない人よ」というのをきく。リスは耳のきこえない人の耳をふさぐ。ワニが、「耳のきこえない人よ、リスをつれもどしておくれ」といつている。リスは耳のきこえない人に、「なんだつて、おばさんがわたしをはやくわたすようにといいつている。おまえさんはここでとまるといつのか」という。耳のきこえない人は、船をどんだんこいでいく。リスは、「なんだつて、おばさんがわたしをはやくわたすようにといいつているではないか」といつた。

さて、ワニは、「耳のきこえない人よ、リスをつれもどしておくれ。耳のきこえない人よ、リスをつれもどしておくれ」といつている。リスは、「なんだつて、おばさんがわたしをはやくわたすように、雨がふるといつている」という。わかるかな、耳のきこえない人といつのは、なにもきこえない。ワニは耳のきこえない人に手で合図をしているではないか。耳のきこえない人はワニのいつていることがわかった。ワニはどんだんやっつけてくる。ワニは、「耳のきこ

えない人よ、リスをつれもどしておくれ」という。べつのワニが、「これが見えないのか」といった。リスは、「わたしをやくつれていっておくれ。はやくわたしをおくれ」という。

さて、船が岸につくと、リスはピョンとどびおりて、高みにかえっていった。リスはそこに耳のきこえない人をのこしておいた。リスは高みにやってくると、とおくをみながら、「おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない。わたしをつかまえることはできない」といった。リスはこのようにするではないか。リスはこのようにして首をうごかすではないか。リスは、「おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない。おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない」という。おばさんは水をよこぎり、どんどんやってくる。

さて、リスははしると、穴のなかにはいった。おばさんは穴のところにくると、手を穴にいれる。リスはおばさんにちかづき、お尻をおばさんのほうにもどす。リスは尾っぽを穴の端のほうにもつていき、「おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない。おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない」といった。おばさんが手をのばし、木の根っこをつかまえると、リスは、「おまえさんはわたしの尾っぽをつかまえた。おまえさんはわたしの尾っぽをつかまえた。おまえさんはわたしの尾っぽをつかまえた」という。リスは穴のなかにもどっていく

と、目をだし、おばさんをみている。リスはまたそとにでてくる。リスは目をだす。そこにリスの尾っぽがある。おばさんの手はそこにある。おばさんは手をのばした。おばさんがただの木の根っこをつかむと、「おまえさんはわたしをつかまえた。おまえさんはわたしをつかまえた。おまえさんはわたしをつかまえた。おまえさんはわたしをつかまえた。おまえさんはわたしをつかまえた」という。おばさんは根っこをひきちぎる。リスははしって、またしてもどってくる。リスは、「おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない」という。このようにして、穴のなかからおばさんをみているではないか。リスは、「おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない。おまえさんにわたしがみえても、わたしをつかまえることはできない」という。リスはこのようにいつている。ワニが手をのばす。リスは、「おまえさんはわたしをつかまえた」という。これは、ただのうそ。ワニはリスをつかまえていない。リスは、「おまえさんはわたしをつかまえた。おまえさんはわたしをつかまえた」という。おばさんは根っこをひきちぎる。リスはワニにちかづいていく。ワニはリスをつかまえそうになる。ワニはリスの尾っぽをつかまえる。リスは、「おまえさんは根っこをつかまえた。おまえさんは根っこをつかまえた」という。ワニは手をはなす。ワニは一つの穴のところにだけ注意してたっている。リスはさっさとべつの穴をあけていた。

さて、リスは穴のそとにでた。

さて、リスはいくと、ゾウの尻の穴のなかにはいった。

さて、リスはいくと、ゾウの膀胱のなかでよこになった。

さて、ハイエナがやってきて、「だれが、ゾウをころしたのだろう。いったいだれが、ゾウをころしたのだろう」という。

さて、ハイエナが、「その膀胱をみてみる」といった。ハイエナたちは膀胱をみて、それをきりとり、草むらのなかにすてた。

さて、リスは膀胱のなかからでてきた。リスがでていった。さて、ハイエナはゾウをみた。ハイエナはゾウの肉をいやというほどたべた。リスは悪知恵をもっている。

さて、リスがやってきた。リスがやってくる、ハイエナたちがいた。ハイエナは、「だれが、ゾウをころしたのだろう」という。リスは、「ぼくは太鼓をつくり、ゾウのためになく」といった。リスは恥をしない。リスはゾウのお腹にはいると、どんどんたべていく。リスは、ゾウのためになく会をひらき、なくのだという。リスは、「だれが、ゾウをころしたのだろう。いったいだれが、ゾウをころしたのだろう」という。リスはこのようにして、耳をうごかしている。リスは、「だれが、ゾウをころしたのだろう」という。リスは太鼓をつくった。リスはフンドシをしめた。リスは、「だれが、ゾウをころしたのだろう。だれが、ゾウをころしたのだろう」と太鼓をたたいていつとき。

わたしが話をしたのではない。切り株が話をした。わたしは、それをきいたのだ。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ・サイドウ・ムーサ、レイ・プーバにて。この話は、アスタ・イディ・ニツドウンガからきいたとがいう。イーサはレイ・プーバ地方のダーマ族である)

#### 40 リスとワニ(4)

リスは自分の幼友たちであるクモと旅にでようとした。リスは、「クモよ、川にいたら、ぼくをわたしておくれ」といった。クモは、「ぼくのいうことをきくなら、ぼくもいく。ぼくはきみをわたしてやる」といった。リスは、「ぼくはきみのいうことをきく」といった。

さて、リスがやってきて、クモをつれていった。リスとクモが川につくと、川は増水していた。

さて、クモはリスをわたした。リスとクモはいくと、そこで夜の集いをしていた。クモは、「おちつきなさい。歌をうたってあげる」といった。

さて、そこにいたものたちはおちついた。  
さて、リスは歌をうたった。

「わたしの幼友たちは、クモ。

クモはお尻のまんなかから紐をだす。

ティンディーリ・チャツ。

わたしの幼友たちは、クモ。

クモはお尻のまんなかから紐をだす」

さて、クモは、「よろしい。もどつていくとき、川をわたしてやらない」といった。

さて、リスは、「ぼくは、もうきみのことをわるくはいわない。おねがいだから、川をわたしておくれ」といった。

さて、リスとクモは夜おそくまで、じゅうぶんにあそんだ。リスとクモはもどつていく。やつてくると、川の水はさらにふえていた。

さて、クモは、「ぼくは、きみをわたしてやらない」といった。リスは、「おねがいだ。わたしておくれ。きみのことをわるくはない」といった。

さて、クモは、「よし」といった。

さて、クモは糸をだし、ほそい紐をつくった。クモはリスをその紐でしばった。リスが川のまんなかまでやつてくると、紐がきれてしまった。

さて、紐がきれた。紐がきれると、リスは川底にしずんでいった。川底にいくと、ワニがいた。リスは、「あつ、兄弟がいる。あ

つ、兄弟がいる」という。

さて、ワニが、「あつ、従兄弟がいる」といった。

さて、リスがやつてくると、ワニがたくさんの卵をうんでいた。

さて、リスがやつてきた。リスはいくと、その卵を一つぬすんでたべる。リスはいき、卵を一つぬすんでたべる。リスは卵が一つだけのことっているのを見ると、「よろしい、これから家にかえる」といった。

さて、ワニが、「いって、卵をもつてこい。おまえさんは、いつて、あかい線のひいてある卵をもつてくるのだ」といった。リスがいつて、もつてくると、ワニはリスに、「それをもつてもどしなさい。線のないものをもつてこい」といった。

さて、リスは卵をもつてもどした。ワニは、「いって、灰のぬりつけてあるのもつてこい」といった。リスはいくと、(卵に灰をぬりつけ)もつてきた。ワニはリスに、「それをもつてもどしなさい。しろい卵をもつてこい」といった。リスはいくと、(卵をしろくし)もつてきた。ワニは、「それをもつてもどしなさい」といった。

さて、ワニは、「おまえさんは耳のきこえないものに、船をこいでほしいか。それとも、目のみえないものにこいでもらうか」といった。リスは、「耳のきこえないものに船をこいでもらうほうがよい」といった。

さて、ワニは、「よろしい」といった。

さて、リスはやってくると、船にのった。

さて、ワニは卵をとりに行った。いってみると、卵は一つしかのこっていないかった。

さて、ワニは、「耳のきこえないものよ、リスをわたしのところにつれもどしておくれ。リスはわたしの卵をみんなのんでしまった」といった。

さて、耳のきこえないものはリスに、「ワニはなんといったのか」といった。リスは、「わたしをさっさとつれていけといった」という。ワニは、「耳のきこえないものよ、リスをわたしのところにつれもどしておくれ。リスはわたしの卵をみんなのんでしまった」という。リスは、「わたしをさっさとつれていけ、自分の従兄弟が道にまよわないように、自分の従兄弟が水におちないようにといった」という。

さて、耳のきこえないものは、「よろしい」といった。耳のきこえないものは、リスを岸までつれていった。耳のきこえないものは、リスは岸についた。

さて、ワニは耳のきこえないものとリスのところについた。

さて、リスはとびはね、穴のなかにはいった。

さて、ワニは穴のあるところにじっとすわっている。

さて、ワニは喉がかわいてきた。

さて、ワニはハゲタカをつれてくると、「きて、わたしのためにみはっておくれ。きて、わたしのためにリスをみはっておくれ。リスがけって穴からでないように。わたしはいつて、水をのんでくるから」といった。

さて、ハゲタカがやってきて、すわって、リスをみはった。ハゲタカはずっとみはっている。

さて、リスはずっと食べ物をつまんでいる。

さて、ハゲタカはリスに、「リスよ、友よ、おまえさんがたべているものをわたしにおくれ。くれれば、わたしはおまえさんを自由にさせてやる」といった。

さて、リスはハゲタカに、「よろしい、おまえさんの目をおおきくあげなさい。おまえさんの口をおおきくあげなさい。おまえさんの羽をひろげなさい。おまえさんにやろう」といった。

さて、ハゲタカは、目と口をおおきくあげ、羽をひろげた。

さて、リスはヘイタイアリをつかむと、ハゲタカの体にむかってなげた。

さて、ヘイタイアリはハゲタカをさす。リスはとびはね、穴からでた。

さて、ワニがもどってきて、ハゲタカに、「リスはどこにいる」といった。ハゲタカは、「リスにヘイタイアリをなげられた。リスはにげていった」という。

さて、ワニはリスのところまでやってきた。

さて、ワニがリスの尾っぽをつかむと、リスは、「おまえさんは木の根っこをつかんだ。おまえさんは木の根っこをつかんだ。おまえさんは木の根っこをつかんだ」という。ワニがリスの尾っぽから手をはなし、木の根っこをつかむと、リスは、「おまえさんはわたしの尾っぽをつかんだ。おまえさんはわたしの尾っぽをつかんだ。おまえさんはわたしの尾っぽをつかんだ」という。ワニは木の根っこをひっぱる。そうすると、木の根っこがきれたとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一七日、語り手 アジャム・ハマ・ガープド、レイ・プーバにて。語り手は、ラカ族であっても、フルフルデ語しかできないという。この話は一九七九年に母親からきいたという)

## 41 リスとワニ (5)

リスとクモが夜、あそびにでかけていく。すなわち、ある村でどつてゐる。ガルアくらにのところで、お祭りがあつて、あそんでゐる。だれでも、そこにでかけていくではないか。おまえさんも、そのお祭りにいくだらう。クモとリスがいた。

さて、クモとリスはでかけていった。おどるところには、たくさ

んの人があつまつていた。

さて、クモは、「リスよ、おまえさんと夜、あそびにいくと、どうなるか。おまえさんは、わたしの邪魔をするだらう」という。リスは、「いいや、わたしはおまえさんの邪魔をしない。友よ、いつて、あそんで、かえつてこよう」という。

さて、クモとリスはクモの糸のつて、いった。すなわち、クモが草でできた盆のような形のクモの巣をはり、クモとリスはそれにつて、川をわたつたのだつた。

さて、クモとリスは夜の遊びの場所についた。そこには、たくさんの人があつまつていた。クモとリスはずつとあそんでいる。そこにいた人たちはやつてきて、クモをよめさんとしてえらぼうとした。やつてきて、クモをえらぼうとする。

さて、リスはたちあがつて、いう。

「わたしの幼友たちのクモは、

お尻に糸をもつてゐる」

さて、クモの体から力がぬけた。

さて、クモはリスに、「友よ、家にかえらう。これで、わたしには、遊びはじゅうぶんだ。家にかえらう」という。リスはクモに、「わたしはここでとまる。あすの朝あおう」といった。クモはリスに、「わたしはおまえさんにクモの巣をはつてやろう。家にかえらう」といった。リスは、いや、自分にあすの朝にかえるといった。

クモは、「それでは、いこう」といった。クモは自分のものはよくつくっておいた。リスのものは、わるいものをつくった。リスのクモの巣がきれた。

さて、リスは水のなかにはいつていった。水にはいつていくと、川底にワニがいた。

さて、リスはなきだして、「そこに、わたしのおばさんがいる。そこに、わたしのおばさんがいる。ここに、あなたの甥がいる」といった。

さて、ワニはリスをつれて、自分の家に行った。ワニはリスのねる場所をおしえた。ワニは自分のタマゴがあるところをおしえた。ワニはタマゴを百個だした。ワニはリスに、「これは、みんなわたしのものだ。甥よ」という。ワニがリスを自分の家においている三日のあいだ、リスはそのタマゴを料理して、たべる。リスはそのタマゴをみんなたべてしまった。のこったのは、一つだけになった。リスは、「これから、わたしは家にかえりません。おばさん」といった。ワニは、「家にかえるのかい」という。リスは、「うん」という。ワニは、「わたしはタマゴをあつめて、その数をかき、かぞえる」という。リスはタマゴを一つもつてくる。ワニはそれをかく。ワニは、「なるほど」といった。リスはそれをもとにもどすと、おなじものをもつてきた。ワニはそれをかく。ワニは、「それをもとにもどさない」といった。リスはそれをもとにもどすと、また

おなじものをもつてくる。そのうちに、百になった。ワニは、「よろしい。おまえさんをだれがつれていったらよいか」といった。リスは、「耳のきこえないカバにわたしの村までつれていってもらおう」といった。ワニはリスに、「よろしい」といった。

さて、ワニは耳のきこえないカバをよんだ。カバがやってきて、リスを船にのせた。カバとリスがすすんでいく。

さて、ワニが部屋にはいると、タマゴがなかった。のこるは、一つだけだった。ワニは、「リスをもとにもどしておくれ。耳のきこえないカバよ、リスをもとにもどしておくれ」といった。

さて、カバはリスに、「ワニがなにをいったのか」という。リスは、「おまえさんにはやくいくように、水がやってくるから、わたしがながされないようにといっている」という。

さて、カバはいそいだ。カバとリスは川をわたった。

さて、ワニはいくと、カバとリスにおいついた。ほんとうのこと、リスはずっとまえに穴にはいつていた。穴にはいると、ワニがリスにおいついた。ワニはリスの尾っぽをつかまえた。リスはワニに、「おまえさんは木の根っこをつかまえた」といった。ワニは手をはなした。ワニが木の根っこをつかまえると、リスは、「おまえさんはわたしをつかまえた。おまえさんはわたしをつかまえた」といった。ワニが根っこをひっぱる。根っこがきれる。

さて、この話も、このようにしておわる。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサはレイ・ブーバのフルベ族)

## 42 リスとカバ

クモがリスと結婚式にでかけていった。クモとリスはどんどんあるいていき、川についた。

さて、クモは、「わたしは糸をつくって、川をわたる。わたしはおまえさんをほっておく」といった。リスはないて、「おねがいだ。いっしょにいこう」といった。クモはリスに、「いっしょにいっても、人にわたしが糸をつくって、わたしたちが川をわたったなどといつてはならない。あとについてきた人たちに糸をつくってやれないから」という。リスは、「よろしい」といった。クモが糸をつくったので、クモとリスは川をわたって、結婚式をするところについた。そこにつくと、リスは人びとにいわなくてもいいことをいう。リスは人びとにいう。クモとリスがかえってくる時、川にいた。クモとリスは川をわたろうとする。

さて、リスは、「もう一度、川をわたしておくれ」という。

さて、クモは、「わたしはおまえさんにいらないことをいうなどいっておいだではないか。おまえさんはそれをいったではないか」という。

さて、リスは、「わたしは二度といわない。糸をつくっておくれ」という。

さて、クモはリスに自分についてくるようにといった。リスはクモについていく。リスが川のまんなかにつくと、クモは糸をきってしまった。クモは川をわたってしまってしまい、リスをあとにのこした。リスは川のなかにおちていった。

さて、リスが川のなかにおちると、カバがやってきた。カバがやってくると、リスがいた。カバはリスに、「どうして水のなかにつてきたのか。おまえさんは水のなかにいるではないか」という。リスは、「クモに水のなかにおとされたのさ。クモはわたしをほっておいた」という。

さて、カバは、「よろしい。きなさい。とめてやろう」という。カバはいくと、リスをとめてやった。

さて、リスはねた。二日ほどたつと、リスはお腹がへってきた。リスは卵のおいてあるところに行った。カバの卵(カバがもっている卵のことか)のおいてあるところに行くと、リスはそれをとつてのんでしまった。のこるは一つだけになった。

さて、リスは家にかえるまえの日、カバは、「きて、わたしの卵をみせておくれ」という。

さて、リスはいくと、一つだけになった卵をとりもってきた。カバはリスに、「それをもとのところにもどし、もう一つもってきた

さい」という。リスはそれをもつていくと、おなじものをべつのものだといつてもつてきた。そうしているうちに、卵を三つもつてきたことになった。ほんとうのこと、一つの卵しかなかった。

さて、カバはリスに、「きなさい。おまえさんをつれていってやろう」という。カバは船をもつてくると、リスをのせた。この船をこぐのは、耳のきこえない人だった。

さて、リスはどんすすんでいく。リスたちが川をわたりきるまえに、カバがいつて自分の卵をみてみると、一つしかなかった。カバはリスをよぶ。カバはリスをよぶ。リスにはきこえなかった。

さて、船をこいでいるのは、耳のきこえない人だった。その人はなにもきこえなかった。リスたちはすんでいき、川をわたってしまった。リスはにげていつてしまったとさ。

(一九八一年二月一八日、語り手 アブドゥッラーイ・サイドウ、レイ・ブーバにて。アブドゥッラーイはガルアでうまれた、フアリ族。この話は、ダーイからきいたという)

### 43 リスの共同耕作

リスとハイエナとイヌが共同耕作をした。

さて、リスは共同耕作をすることにした。リスがいくと、ニワトリがいた。リスは、「友よ、ニワトリよ、あす共同耕作をする。お

ねがいだ、きてくれるな」という。ニワトリは、「いく。でも、おねがいだ。ネコはよばないでおくれ」といった。リスはそこをとりすぎていき、ネコのところに行った。リスがいくと、ネコがいた。リスは、「友よ、ネコよ。あす共同耕作をする」といった。ネコは、「よろしい、友よ。いく。でも、イヌはよばないでおくれ」といった。リスがいくと、イヌがいた。リスは、「友よ、イヌよ、おねがいだ。あす共同耕作をする」といった。イヌは、「いく。でも、ハイエナはよばないでおくれ」という。リスは、「よろしい」といった。リスがいくと、ハイエナがいた。リスは、「友よ、ハイエナよ、あす共同耕作をする。どうだ。おまえさんたち、きてくれるかい」という。ハイエナは、「よろしい。ヒヨウはよばないようにしておくれ」という。リスがいくと、ヒヨウがいた。リスは、「友よ、あす共同耕作をする」という。ヒヨウは、「よろしい。ライオンはよばないでおくれ」といった。リスがいくと、ライオンがいた。リスは、「友よ、ライオンよ、あす共同耕作をする」という。ライオンは、「わたしはいく。でも、ゾウはよばないでおくれ」といった。

さて、そのつぎの朝、ニワトリは朝はやくから、畑にでかけた。ニワトリはケレット・ケレット・ケレットと畑をたがやしている。

さて、ニワトリは、「なんだ」という。さて、ネコがあらわれた。ニワトリが、「友よ、ネコだ」という。

ニワトリはすぐに、茂みのむこうにいつて、そこにいる。

さて、ネコはやってきて、畑をたがやしはじめた。ネコが、「ここにニワトリの臭いがする」という。共同耕作を主催しているリスはネコに、「ニワトリがここにいてるって。ニワトリがここにいてるって。ニワトリはいない」という。ネコがそのへんをまわって、ニワトリのクワをみつげる。ネコはいくと、ニワトリをたべてしまった。ネコはやってくると、ケレット・ケレットと畑をたがやしている。イヌがやってきた。ネコは、「友よ、イヌがやってくる」という。ネコはそのへんをまわり、とおくにイヌがいるのをみると、棘のある茂みのむこうにいった。

さて、イヌはやってきて、すこし畑をたがやした。イヌは腹がへつたといつた。イヌは、「友よ、ここで、ネコのような臭いがする」という。イヌはそのへんをまわると、ネコをみつけた。イヌはネコをたべてしまった。イヌはやってきて、ケレット・ケレット・ケレットと畑をたがやしはじめた。

さて、ハイエナがやってくる。イヌはハイエナがやってくるのをみると、茂みのむこうにかくれた。ハイエナがやってきた。ハイエナは、「友よ、リスよ、おまえさんは共同耕作をするというが、わたしだけか。しかたがない、わたしはたがやす」という。ハイエナがたがやしはじめ、すこしすると、「友よ、リスよ、ここでイヌの臭いがする」といふ。ハイエナが茂みのむこうにいくと、イヌが

いた。ハイエナはイヌをたべてしまった。ハイエナはそこをとりすぎて、やってくると、畑をどんだたがやす。

さて、ヒヨウがやってきた。ハイエナは茂みのむこうにいき、かくれた。リスは、「友よ、ヒヨウよ」という。ヒヨウが返事をした。ヒヨウは、「ここでハイエナのような臭いがする」という。

さて、ヒヨウは茂みのむこうにまわっていつた。ヒヨウがいくと、ハイエナがいた。ヒヨウはハイエナをたべてしまった。ヒヨウがやってきて、畑をどんだたがやす。ヒヨウはとおくからライオンがやってくるのを見た。ヒヨウは、「友よ、リスよ、みる。ライオンがやってくる。ライオンにみつかったら、わたしはほっておかれない。たべられてしまう。かくれる」という。ヒヨウはいくと、かくれた。ライオンはやってきて、すこしたがやすと、「腹がへる」といふ。ライオンはいくと、そのへんをまわり、ヒヨウをたべてしまった。ライオンはやってくると、どんだん畑をたがやす。ライオンはとおくからゾウがやってくるのを見た。ライオンは、「友よ、わたしはそこにかくれる。兄さんがやってくる」といふ。ゾウはやってくると、すこし畑をたがやした。ゾウは、「友よ、腹がへつた」といふ。ゾウはそのへんをまわって、ライオンをみつめて、ライオンをたべてしまった。ゾウとリスは腰をおって、二人で畑をたがやしたとき。

(一九六九一七〇年、語り手 パーセーウオ村出身のアブドゥッ

#### 44 リスとネコとハイエナとブタとサルの畑

ちいさなお話、ちいさなお話。

この話はこういう話だ。野原の動物たちがいっしょになった。動物たちはみんないっしょになった。動物たちは畑をつくっている。おおきな畑をつくったので、とうとう、畑はどこにもないようなおきさになった。

さて、動物たちはなんども、畑の草をとった。畑の草をとったのは、ネコとリスとハイエナとブタとサルだった。

さて、動物たちはいっしょになった。動物たちはでかけていき、畑の草をとろうとする。動物たちはどんどん草をとっていく。

さて、動物たちは畑の作物がみのもと、それをいれておくための穀物倉をつくった。ながいときがたった。六ヶ月がすぎた。動物たちはやってきて、自分たちの作物をとりいれて、穀物倉にいれておいた。作物とは、落花生だった。落花生が乾燥するまでおいたおいた。落花生が乾燥すると、すなわち、十二ヶ月たつと、動物たちはそこでであつて、落花生をわけることになった。死んだものは、死んだもの。死んでいないものがそこにいくことになった。

さて、リスはネコとおきあがつた。リスはでかけていった。リス

は野原にいくと、これからその落花生をぬすもうとする。あるものは、たべて、あるものはうる。あるものは、たべて、あるものはあつめて、なにかにいれる。乾燥した落花生をあつめて、つきからつきへと、ブタの落花生をとると、穀のなかをとりだし、殻をひつけておくと、穀物倉のなかにいれておく。そこからみると、殻のなかに落花生がはいっているようにみえる。でも、中身はなかった。

さて、ネコがいくと、自分のつくった落花生があつたので、それをとつて、うりにいく。

さて、ハイエナもいくと、落花生をとり、それをうっている。いくと、ほかの動物の落花生をぬすんで、それをうっている。動物たちはおなじ市場であつた。リスは自分の落花生をうる。ネコも自分の落花生をうる。ハイエナも自分の落花生をうる。そのあと、動物たちはすわつて、落花生をうっている。

さて、動物たちのうち一匹がやってきて、ハイエナの穀物倉をあけた。ハイエナの穀物倉をあけると、落花生がなかった。動物たちは自分の穀物倉をあけたけれども、落花生がみつからなかった。動物たちはハイエナをおいはらつた。動物たちが市場でハイエナをたいたいたので、ハイエナははしつて、にげてしまった。ネコがにげてしまった。リスだけ自分の落花生をうつた。

さて、動物たちがあつまった。動物たちはいくと、ブタの糞をあつめた。動物たちはブタの糞をブタの穀物倉がいっぱいになるまで

いれた。

さて、動物たちが穀物倉のあるところにやってきた。落花生をとりますとかがちがづいた。動物たちはあつまろうというわけだ。これから、そこにいって、穀物倉をあけて、わけようというわけだ。

さて、動物たちはあつまった。穀物倉にはいつているものをとりますとよになった。動物たちはかけていった。

さて、リスがあるいていく。リスはよくしっている。自分がいつて、穀物倉にあがって、落花生をとるなどというわけがない。リスは、親分だった。

さて、リスは刺をふんだ。刺が足にささった。リスの足に刺がささったので、足がはれた。リスは自分のはほれないといった。ブタがのぼることになる。ブタが穀物倉にのぼると、そのなかに自分の糞があった。ブタは、「このウンコはわたしのウンコだ。でも、わたしはこのウンコをしていない」といった。ほかの動物たちが、「なんだって、ブタよ」という。ブタは、「このウンコはわたしのウンコだ。でも、わたしはこのウンコをしていない」という。ほかの動物たちが、「なんだって」という。ブタが、「なんということか。このウンコはわたしのウンコにはにいていない。でも、わたしはこのウンコをしていない」といった。動物たちはリスに、「のほりなさい」といった。リスはおきあがると、のぼった。リスは、「これは、ブタのウンコだ。ブタのウンコだ。ブタのウンコだ」という。

動物たちはブタをつかまえると、たたこうとする。リスは、「まちなさい。サルよ、木のしたにすわりなさい。ハイエナよ、道のまんなかにすわりなさい。ブタよ、おまえさんの穴のよこにすわりなさい。わたしはわたしの穴のそばにすわる。それでは、ぬすんだものがみんなでてくるようにというお祈りをしよう。ぬすみをしたものは、ブタの分をとったのだ。ぬすんだものは、二度とぬすむな。また、畑をつくろう。でも、ぬすんでいないものは、みんな木にのぼろう」といった。リスとサルとネコは木にのぼり、ハイエナを地面にのこした。ハイエナはおきあがり、リスとサルとネコをおいかけた。ハイエナはリスとサルとネコをおいかけたけれども、どれもつかまえられなかった。ハイエナは家にかえって、おちついた。ハイエナは村にいて、おちついた。ある日、ハイエナはネコとであった。ネコをつかまえようとするが、ネコはにげてしまい、イスラム教の先生のところに行った。先生はネコをつかまえた。ネコは先生のものだった。ハイエナも、先生のところに行った。先生はハイエナをつかまえて、ハイエナは盗人だといったとき。

このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルファイイ、ガウンデレにて。この話は、一九九二年に、フルベ族の継母からきいたという)

## 45 リスとハイエナの魚とり (1)

わかるな。この話も、リスとハイエナの話だ。リスとハイエナの二人は川に魚をとりに行った。友よ。わかるな。リスとハイエナは、道をとことこあるいていった。リスとハイエナはあるいていく。ハイエナは道すがらたべるものをもっている。リスも道すがらたべるものをもっている。

さて、ハイエナは、「わしらはいつになったら、川につくのか」という。リスは、「おまえさんはどうしていそぐのか。まっておれば、そのうちに川がみえてくる」という。リスとハイエナはたちあがり、でかけていった。リスとハイエナは川についた。リスとハイエナがこちらをみてる。魚がいない。リスとハイエナがそちらをみてる。魚がいない。とうとう、リスとハイエナがあちらにいくと、魚がいた。ハイエナは、「さて、友よ、リスよ」という。リスは、「なんだって」という。ハイエナは、「この水を（せきとめて）かいだそう」という。リスは、「友よ、ハイエナよ、友よ、この水をつまんなかいだしてしまつて、魚をつかまえようというのか」という。ハイエナは、「そうしよう」といった。（リスとハイエナは川をせきとめる。リスはヒョウタンのかけらをとる。）リスが水をかいだしていく。ハイエナがやってきて、ヒョウタンのかけらをうけとり、「なんだって、友よ。おまえさんにはできない。ここに肉があ

る。ここに魚がいる。ここに肉がある」という。リスは、「なんだって、そうするのではない。友よ。それをよこせ。わたしが水をかいだしてやる。ヒョウタンのかけらをうけとると、どうなるか、うけとらないなら、どうなるか、うけとらないなら、どうなるか、うけとらないなら、どうなるか」という。すなわち、ハイエナはいいやりかたをかんがえている。魚がでてきたら、魚とリスといっしにして、くつてやろうとおもっている。ハイエナは友だちのリスをたべようとおもっている。

さて、リスは、「それでは、おまえさんは、ヒョウタンのかけらをうけとると、どうなるかなどといっているが、うけとらないなら、なにもしないことになる。これで、わたしがおまえさんに、それよりいいやりかたをおしえたほうがよい」といった。すこしすると、魚がとびはねた。水がすくなくなつた。

さて、ハイエナは魚をとつて、口にいった。リスはハイエナに、「わたしはおまえさんにそのことをいつていたのだ。友よ。水をかいだしているときには、魚がはねても、ほつておきなさい。魚に手をつけないでおくれ。魚がおおくなると、あつめて、わけよう」という。ハイエナは、「よろしい。わたしは魚に手をつけない。ここに肉がある。ここに魚がいる。ここに肉がある。ここに魚がある。ここに肉がある。ここに魚がある」といった。リスは、するつもりもないのに、「そのヒョウタンのかけらをよこせ。わたしが水をかいだしてやる」という。ハイエナ

は、「なんだって、友よ。不信心ものよ。おまえさんに水をぬかせ  
るわけにはいかない。ほっておいておくれ」という。リスは、「も  
う、そんなことをいわない」という。すなわち、ハイエナはもうど  
うしたいのかしつてゐる。水がなくなった。そこに魚がいて、そこ  
にリスがいる。魚とリスをいっしょにして、たべてしまおうとい  
うわけだ。

さて、リスは川岸にいき、ハイエナをほっておいた。ハイエナは  
水をかいだしている。リスはたちどまり、「はい」といった。ハイ  
エナは、「どうしたのか、友よ。どうしたのか、友よ」という。リ  
スは、「王さまの家のものたちが、おまえさんをさがしているでは  
ないか。おまえさんにおいついたら、おまえさんをほってはおかな  
い。きょう、おまえさんをころしてしまふ。王さまはハイエナの生  
皮がいる。その皮をだれかにさせるためにいるのだ」という。ハイ  
エナは、「いやいや、わたしのいるところをおしえるな。そいつら  
にいうな」といった。魚をおいたまま、野原にはいつていった。ハ  
イエナはどんだんはしつてゐる。リスは、「ハイエナはそこにゐる。  
ハイエナはそこにゐる。ハイエナはそこにゐる」という。ハイエナ  
は野原にはいつていった。リスは魚をひろいあつめた。リスは魚を  
ひろいあつめて、自分の袋にいれた。リスがかえつてくると、よめ  
さんがいた。よめさんはリスのために、その魚を料理してやった。  
リスはそれをゆつくりたべてゐる。ハイエナは野原で喉をかわかし

ていたとき。

(語り手 一九七一年一月二日、パーサーウオ村出身のアップ  
ドゥツラーイ・オスマース、マルアにて)

## 46 リスとハイエナの魚とり (2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

リスとハイエナの屋敷は隣同士だった。

さて、ハイエナは自分の子どもに火種をとりやらせた。そのと  
き、リスのよめさんは魚をたいてゐる。

さて、子どもは火種をもらいにいき、身をひるがえし、家にかえ  
つていこうとする。子どもはリスのところでもカタガユを手にいれら  
れなかつたので、いくと、道で火をけし、リスのところにもどつて  
いった。子どもは三度おなじことをした。リスたちは子どもにカタ  
ガユをやつた。子どもはそれをたべると、すこしのこしておいた。  
子どもはそれを爪につけた。子どもはいくと、「父さん、リスたち  
のところでもたべてゐるものをみておくれ」といった。父親はそれ  
をなめようとすが、子どもの手をかみきつてしまった。父親は、  
「わしは火種をもらいにいく」といった。父親はいくと、「平安、な  
んじらにあれ」と挨拶をした。リスたちはハイエナに、「なにが  
いるのか」といった。ハイエナは、「火種がほしい」といった。リス

は、「ここにある」という。ハイエナは火種をとった。ハイエナはいくと、道で火をけし、リスのところにもどっていった。ハイエナはいくと、火種をとった。ハイエナはいくと、道で火をけした。リストたちは、「ここにカタガユがある」といった。ハイエナはカタガユをとり、それをたべて、すこしのこしておいた。ハイエナはそれを指につけた。ハイエナがいくと、よめさんがいた。ハイエナは、「リスの家でたべているものをみる」といった。よめさんはそれをたべようとするが、ハイエナの指をかみきってしまった。ハイエナは、「よろしい」といった。(ハイエナはリスのところに行く。)ハイエナは、「おい、リスよ、おまえさんはこんなものをどこで手にいれるのか」という。リスは、「なんだって、友よ、ほしか。あすの朝、おいで。いっしょにいこう。弁当を用意しておけ」といった。

さて、ハイエナはいくと、小屋にはいった。真夜中、ハイエナはおきて、リスの屋敷にいった。ハイエナは、「友よ、夜があげた。リスよ、おきろ。いこう」といった。リスは、「いま、朝になったというのか。お日さんがみえない。ニワトリもいない」という。ハイエナはいくと、すこしまった。ハイエナは屋敷のむこうにいくと、コケコッコと鳴き声をあげた。ハイエナは、「きけ。もう、ニワトリがない」といった。リスは、「わたしは、お日さんがでるまで、おきない」といった。

さて、ハイエナはいくと、すこしよこになった。真夜中、ハイエナはもどっていった。ハイエナは草をさがしにいくと、自分の屋敷のむこうで、その草に火をつけた。ハイエナは、「友よ、でてこい。お日さんをみる」といった。火があかくもえている。リスは、「わたしは、いま、おまえさんの欲につられて、いけない。わたしはお日さんがたかくなつてからいく」といった。ハイエナはいくと、すこしまった。そのうちに、夜があげて、朝になった。ハイエナがやってくる、リスとハイエナはでかけていく。リスは、「ヒョウタンのかけらをさがせ」という。ハイエナはヒョウタンのかけらをかきとった。リスとハイエナはでかけていった。リスとハイエナはいくと、川のなかをみる。川にいくと、リスとハイエナは川をせきとめた。リスとハイエナは川の水をぬいていく。ハイエナはヒョウタンのかけらをうけとり、水をぬいていく。ハイエナは、「ここに肉がある。ここに魚がいる。ここに肉がある。ここに魚がいる」という。すなわち、ハイエナはリスと魚をたべたかったのだ。

さて、リスはハイエナに、「そのヒョウタンのかけらをわたせ。わたしが水をぬいてやる」という。ハイエナは、「ヒョウタンのかけらをうけとると、どうなるか、うけとらないなら、どうなるか」という。魚がはねた。水はなくなりかけている。魚がはねた。ハイエナは魚をとると、それをたべた。リスは、「友よ、おまえさんはたべているが、家になにももってかえるつもりか。家でなにを料理

するのか」といった。ハイエナは、「まで」といった。リスは、「よろしい」といった。リスが水をぬこうとすると、ハイエナは、「なんだって、おまえさんには無理だ。おまえさんには力がない。それをよこせ。わたしが水をぬいてやる。ここに肉がある。ここに魚がいる」といった。リスは、「なんだって、それをよこせ。わたしが水をぬいてやる。ヒョウタンのかけらをうけとると、どうなるか、うけとらないなら、どうなるか」という。

さて、またしても、ハイエナはリスからヒョウタンのかけらをうけとり、水をぬき、リスをたべようとする。ハイエナはヒョウタンのかけらをとり、水をぬく。水はなくなってしまった。ハイエナはどんだん水をぬいていく。リスは岸のうえにたち、だれにいわれるともなく、返事をした。リスは、「はい。ハイエナか。ハイエナはそこにいる」という。ハイエナは、「どうしたのか、リスよ。どうしたのか。なにをさがしているのか」という。リスは、「ハイエナの皮をほしがっているのだ。気をつける。王さまが病気になる。ハイエナをさがして、皮をとろうとしているのだ。いつて、(ハイエナの皮で)王さまに服をつくるというのだ」という。ハイエナは、「あいつらにわたしのことをいわないように、友よ」という。ハイエナははしっていった。ハイエナがとまりかけると、リスは、「ハイエナはそこにいる」という。ハイエナははしる。ハイエナはいつてしまった。リスは魚をひらうと、家にかえって、「こん

畜生め。ハイエナのやつ、えらそうに、わたしと魚をたべてしまうというとは」といったとき。

(一九六九一七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッライイ・ウスマース、マルアにて)

#### 47 ウサギとハイエナの魚とり

お話、お話。

ハイエナとウサギがいた。ハイエナとウサギは水をかいだしにいった。ハイエナとウサギの二匹だった。ハイエナの子どもが二匹いた。ウサギの子どもが三匹いた。ハイエナとウサギたちは水をかいだしにいった。水はたくさんあった。ハイエナとウサギたちはそこについた。ハイエナとウサギたちは水をどんどんかいた。魚をつかまえるためだ。もうすこしで、水がなくなりかけた。魚、カワズズメなどがはねている。おおきな魚がはねると、ハイエナは自分の陰核だという。ちいさな魚がはねると、ウサギに、「ここにおまえさんの陰核がある、つかまえろ」という。(ハイエナもウサギも雌なのだ。)ハイエナとウサギたちは水をどんどんかいた。おおきな魚がはねると、ハイエナは、「これは、わたしの陰核だ、ウサギよ」といった。ハイエナはそれをとると、自分のヒョウタンの筒のなかになげこむ。ハイエナのヒョウタンの筒はおおきかった。ち

いさな魚がはねると、ウサギに、「とれ。おまえさんのヒヨウタンの筒になげこめ」といった。とうとう、ハイエナとウサギたちは水をかいあげてしまった。そこにはたくさん魚がたまっている。ハイエナとウサギは魚をひらいあげている。ハイエナは、「ウサギよ、おまえさんはちいさな魚をひらいあげなさい。それは、おまえさんの陰核だ。わたしはおおきな魚をひらいあげる。それは、わたしの陰核だ」という。ハイエナは自分のヒヨウタンの筒を魚でいっぱいにした。ハイエナのヒヨウタンの筒はおおきかったのに、それをいっぱいにした。ウサギのヒヨウタンの筒は、まったくいっぱいになつていなかった。ウサギは腹をたてた。ハイエナも、ウサギも、まだ魚をひらいあげきつていなかった。ウサギは、「ハイエナのこと、つらい目にあつている」という。ウサギは自分の子どもたちとかえつていく。ウサギは家にかえつた。ウサギたちはハイエナとその子どもをほつておいた。ハイエナには欲がある。ハイエナは一生懸命になると、そこにいた魚をみんなすくいあげて、自分のヒヨウタンの筒をいっぱいにした。自分の腰布にもつつんだ。ウサギはずるいことをかながえた。ウサギは自分の家につくと、ユリ科のあかい植物としろい植物とくろい植物の汁を体全体にぬりつけた。ウサギの体には縞がついた。ウサギはやつてくると、道のまんなかでよこになつた。ハイエナは、この道をとる。ウサギはそこによこになつた。ハイエナの子どもたちはハイエナのさきをあるいてい

るではないか。ハイエナは子どものあとを魚でいっぱいヒヨウタンの筒をもつてあるいている。ハイエナたちはあるいている。ハイエナの子どもたちがさきをあるいている。ハイエナはうしろをあるいている。ハイエナたちはほとんどんあるいていく。ハイエナの子どもが、「母さん、わたしらのさきに、なにかがある」という。ハイエナが、「それはなにか。そこをのきなさい。おまえは、さきをあるきなさい」といった。べつの子どもがさきをあるいた。その子どもが、「母さん、縞のついてる、なにかがある」といった。ハイエナは、「なんだつて。うそをやめて、そこをのきなさい」といった。ハイエナは自分もそれをみた。ハイエナは、「なるほど、ここになにかがある」という。マイ・ジャック・ラグリ（トウプリ語で「カタガユをこねる棒」という意味）という子どもがいる。もう一人は、マイ・ジャック・フェルゲウ（トウプリ語で「トカゲ」という意味）。ハイエナは、「マイ・ジャック・フェルゲウよ、さきがあるきなさい」という。マイ・ジャック・フェルゲウがさきをあるいて、ウサギのところについた。マイ・ジャック・フェルゲウは、「母さん、なにかがここにいます。その体には縞がある」といった。ハイエナは（ウサギに）、「よろしい。どちらがほしいの。マイ・ジャック・ラグリがほしいのか。どちらがほしいのか」といった。ウサギはなにもこたえなかった。ハイエナは、「マイ・ジャック・フェルゲウがほしいのかい」という。ウサギは、「いやそうではない」

といった。それは、たっている。ハイエナはたつて、ずっとかんがえている。ハイエナは、「それは、わたしからなにがほしいのか」という。それは、だまつているだけだ。ハイエナは、「なんだつて、それは問題だ」といった。ハイエナは、ずっと気をとりもどそうとしている。ハイエナはよくかんがえた。ハイエナはひよつとしたら、自分をほしがっているのかとかんがえた。それがこたえた。ウサギがこたえて、「そうだ、わたしはおまえさんがほしい」という。ハイエナは自分の魚がはいつているヒョウタンの筒を道でつぶしてしまった。魚は道に山となつている。ハイエナは家まではしつてかえつていった。悪知恵をもつたウサギは、魚をひらいあつめて、自分のヒョウタンの筒をいっばいにして、それを家にもつてかえつたとさ。

お話は、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ジグラオ村出身のトゥププ族のベッコ・デニス・サンガムナがケイニ村にて。この話は、一九八七年にカエレにて、トゥププ族のロペールからきいたという)

## 48 リスの知恵(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

リスとハイエナが友だちになった。

さて、リスはおきあがつて、イスラム教の先生のところについて、「先生、わたしはあなたのところで、すこし知恵をいただきたいのです」といった。先生はリスに、「それでは、市場にいつて、老女がもつている塩を手にいれなさい」といった。

さて、リスは市場のひらかれる日にでかけていった。老女たちが家にかえつていく。リスはピョンピョンはしつていくと、しろい歯をむきだして、道のまんなかでよこになる。老女がやつてきて、そこをとりすぎる。リスはまたしても、ピョンピョンはしつていき、老女のさきまでいき、しろい歯をむきだして、よこになつていく。老女がやつてきて、リスをまたいで、とおりすぎていく。リスはまたしても、はしつていく。そのうちに、老女は、「なんだつて、リスは四匹にならないかい。あのリスをひらうと、一回分のおかずになるではないか」といった。

さて、老女は、「それでは、あのリスをひらおう。わたしはもどつていき、うしろのほうによこになつていたリスをひらおう」といった。

さて、老女はいくと、リスをいろいろなものをついた半截ヒョウタンのなかに入れた。半截ヒョウタンのなかに、塩、トウガラシ、スンバラ味噌、ドゥームの若芽などないものはなかつた。

さて、老女はいろいろなものをついた半截ヒョウタンをとり

もどつていった。

さて、リスは半截ヒョウタンのなかにはいつていたものをみんな袋にあげ、袋をいっばいになると、おきあがり、道があるいていった。老女がやってくるからっぽになった半截ヒョウタンがあった。リスはいくと、イスラム教の先生にわたした。先生はリスに、「さて、いまから、いつて、ライオンの涙を手に入れておくれ」といった。リスは、「よろしい。問題はありません」といった。リスはいくと、ライオンがいた。ライオンをみると、リスはおきあがり、なっている。ライオンはリスに、「どうしたのか」という。リスは、「なんだつて、おじさんよ、わたしたちのおじさんが死んでしまったんだつて」という。ライオンはすわつて、なっている。リスはヒョウタンの器をとり、「えらい人の涙はわけもなく地面にはおちない」といい、ヒョウタンの器を涙でいっばいにした。リスは、「涙をうけさせてもらいます」といい、涙をうけ、ヒョウタンの器を涙でいっばいにした。

さて、リスは涙をイスラム教の先生のところにもつていった。先生はリスに、「よろしい。それでは、いきなさい。あさつて、きなさい。野原にいつて、うろついて、なんにも手にはいらぬなら、きなさい」といった。リスは、「わかりました。問題はあります」といった。リスは野原にいつた。

さて、リスがいくと、アフリカクロスイギユウが子どもをうんで

いた。アフリカクロスイギユウが子どもをうんでいたの、リスはアフリカクロスイギユウに、「こい。そのバオバブの木をとびこえよう。むこうまでとびこえよう」という。

さて、アフリカクロスイギユウはリスに、「よろしい。おまえさんからさきにとびなさい」といった。リスはピョンピョンピョンとはしつてくると、木をまわり、埃をまきちらした。リスは、「みたな。わたしはとびこした。おまえさんにはできないだろう。おまえさんはおおきい。おまえさんほうそをいつている。おまえさんがとべるというのか」といった。アフリカクロスイギユウはリスに、「よろしい。やつてみる」といった。

さて、アフリカクロスイギユウはやつてくると、木に角をつきさしてしまった。リスは、「なんだつて。それでは、その乳をしぼつて、おまえさんの角につけてあげよう。そうすれば、角がぬけるだろう。角のところをしめられれば、木のその部分がくさつて、角がぬける。おまえさんの角を自由にさせよう。木のその部分がくされば、角はぬける」という。アフリカクロスイギユウはリスに、「よろしい」という。リスは乳をしぼり、ヒョウタンの筒をいっばいにした。リスはほんのすこし乳をしぼると、角につける。リスはアフリカクロスイギユウの子どもをつかまえ、ころし、その肉をもつていつた。リスはかえつていつた。いつも、リスはこのようにする。リスはいくと、乳をしぼつて、角につける。リスはうまい

こととして乳をしほって、角につける。乳をしほると、それを自分の屋敷にもってかえってくる。ある日、ハイエナの子どもがリスの家に火種をもらいにいった。すると、リスの家族がいた。リスたちは乳をのんでいる。リスたちはハイエナの子どもに乳をやった。ハイエナの子どもは乳をのむと、手にすこしのこしておいた。ハイエナの子どもは、手に乳をつけたままいくと、父親に、「わたしもらつてものをみてちょうだい。手をなめておくれ」といった。父親は子どもの手をもつて、手をなめるが、おいしかったので、子どもの手をかみきってしまった。父親も、かわらけをもつと、火種をもらいにいった。父親も、リスのところに行った。火種をもらったけれども、乳はもらえなかった。ハイエナは火種をけしてしまった。ハイエナは火種をもらった。ハイエナは火種をけした。ハイエナは乳をもらい、すこしだけのこしておき、よめさんのところにもつていき、「はい。わしの手にのこっている乳の味をみてみる。リスの家ではこれをのんでいる」といった。ハイエナのよめさんは味をみようとすが、手をかみきってしまった。

さて、ハイエナがいくと、リスがいた。ハイエナは、「友よ、リスよ、どこでこんなおいしいものを手にいれるのか」という。

さて、リスはハイエナに、「どこでもない。友よ」という。ハイエナは、「よろしい」といった。ほんとうのこと、ハイエナは夜明けどきから、分かれ道のところについて、すわっている。リスがや

つてきて、ヒョウタンの筒をもつて、とおりすぎるとき、ハイエナはリスのあとをつけていく。とうとう、リスはアフリカクロスイギユウのところまでやってきて、乳をしほり、身をひるがえし、家にもどつていった。ハイエナはいくと、アフリカクロスイギユウをたべってしまった。日暮れどき、リスがいくと、アフリカクロスイギユウはくわれていた。リスは、「よろしい。わたしはこれは友だちのハイエナの仕業だとわかっている。でも、問題はない」といった。

さて、リスはいくと、肉をさがし、よめさんに、「この肉をにろ」といった。よめさんはその肉をほそくきり、野菜といっしょにした。リスはおおきな針をさがした。リスは、「このおかずのなかにわしをかくしておくれ。これを頭にのせて、わしの友だち、ハイエナのところにもつていけ。ハイエナに、わしがおかずをもつていけ」といったといいなさい。でも、このおかずをのみこむだけで、かむなといいなさい」といった。

さて、リスのよめさんは、おかずを頭にのせてもつていった。リスのよめさんは、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。ハイエナはそれにこたえた。リスのよめさんが、「これは、おまえさんの友だちリスがおまえさんのところにもつていくように」といった。でも、これをかまないで、のみこむように」という。

さて、ハイエナはおかずをうけとった。ハイエナは、「よろしい。友だち、リスによろしくいっておくれ」といった。ハイエナはそれ

を一口でのみこんでしまった。リスはどんどんハイエナの腸をついでいく。リスがこちらにいくと、ハイエナはこちらにはしる。リスがあちらにいくと、ハイエナはこちらにはしる。とうとう、リスはハイエナの腸をじゅうぶんについたので、でてきた。ハイエナは、「よし、仕返しをしてやる」という。ハイエナは自分のよめさんに、「おまえのおかずをつくって、そのなかにわしをうめておくれ」という。ハイエナのよめさんは、おかずをつくって、ハイエナをそのなかにうめた。ハイエナは仕返しをするといった。ハイエナのよめさんがおかずをもつて、リスのところに行く、リスがいた。ハイエナのよめさんは、「これは、おまえさんの友だちハイエナがおまえさんのところにもつていくようにといった。でも、のみこむように」といった。リスは、「よろしい。問題はない」といった。

さて、ハイエナのよめさんがリスにわたすと、リスはふとい針をとり、ハイエナのお尻をさした。おかずをさしただけに、ハイエナのお尻をさしてしまった。ハイエナがとびあがったとき。

お話は、おしまい。ウサギの糞の蒸し焼きができた。

(一九六九—七〇年、語り手 バーセーウオ村出身のアブドゥッ  
ラーイ・ウスマース、マルアにて)

## 49 リスの知恵(2)

平安、なんじらにあれ。お話をしよう。わたしはもう一度話をするためにやってきた。もう一度、リスの話をしよう。リスはイスラム教の先生のところを知恵をさがしにいった。リスは知恵がほしいといった。先生は、「なにがほしいのか」といった。リスは、知恵がほしいといった。

さて、先生はリスに、「老女のところで、塩を手にいれて、わたしにもつてきておくれ」という。リスはたちあがった。リスは老女にであった。老女は塩をもつてくるところだった。

さて、リスは道にたおれ、自分は死んだといった。

さて、老女はリスのいるところをとおりました。リスはまた老女についていった。リスは、またたおれて、よこになった。老女は、「きょうは、どうして、リスがこんなにくさんいるのか。それでは、これをとろう。うしろにもどつて、あそこにあつたのをとろう。わたしは子どもたちにもつてかえつてやろう。子どもたちはそれをやくだろ」といった。

さて、老女はそこにいたリスをとると、塩のはいつたヒョウタンのなかにいれた。老女はうしろにもどつていった。老女は塩をおろした。あちらに、リスはいなかった。もどつてくると、リスが塩をもつていったあとだった。リスはいくと、それを先生にわたし

た。リスは、「はい、塩を手にいれました」という。先生は、「それでは、アフリカクロスイギュウの乳を手にいれて、もつてくるように」といった。リスは野原にいった。リスがいくと、アフリカクロスイギュウがあつまっていた。リスは、「おばさん、わたしがきた」という。アフリカクロスイギュウが、「どうしたの」という。リスは、「力くらべをしよう。あの木をけずっていき、あちら側によう。力のあるものはだれでもやればよい」という。

さて、リスは、「わたしにさきにやらせておくれ。おまえさんは、わたしについてくればよい」といった。リスははしって、木のまわりをまわり、埃をたてた。

さて、アフリカクロスイギュウも、はしってきた。

さて、アフリカクロスイギュウは木のはえているところにはいると、角が木につきささってしまった。

さて、リスはアフリカクロスイギュウの乳をどんどんしぼり、ヒョウタンをいっぱいにした。

さて、リスはこうして、アフリカクロスイギュウの角をぬきとつた。アフリカクロスイギュウはいってしまった。リスがいくと、先生がいた。リスは、「アフリカクロスイギュウの乳を手にいれました。もつてきました」といった。先生はリスに、「よろしい。いつて、ライオンの涙をもつておくれ」といった。リスは、「よろしい」といった。リスはどんどんいってしまった。リスはいくと、

ライオンをさがした。ライオンがすわっていた。

さて、リスはなきだした。リスは、「ほら、そこにわたしのおばさんがいる。ほら、そこにわたしのおばさんがいる」という。

さて、ライオンがないている。リスはライオンに、「なかないで。なくのをよしておくれ。涙をとつてあげよう」という。ほんとうのこと、リスはライオンの涙を瓶にあつめている。そのうちに瓶がいっぱいになった。リスは小便をするといつた。

さて、リスはどこかにいってしまった。いくと、先生がいた。リスは先生に、「ライオンの涙を手にいれました」といった。先生は、「手にいれたか」という。リスは、「はい」という。先生は、「よろしい。ここにすわりなさい」といった。先生はいくと、ムチをとつた。先生はリスの脇腹をムチでうち、線をつけた。くろい線をつけた。こうして、リスは知恵を手にいれた。リスはこれで知恵を手にいれたといつた。先生はリスに、「おまえさんの手にいれたものは、じゅうぶんではないというのか。それ以上の知恵をどこで手にいれるのか。おまえさんはむつかしいものを手にいれた。おまえさんはそれよりほかになにをさがすのか」といった。

さて、先生はリスの脇腹をムチでうった。先生はリスに、「もう、おまえさんはじゅうぶんに知恵をもっている。それでおわりだ」といつたとき。

(一九九三年十一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・

プーバにて。ムーサは三五歳。この話は自分の父親からきいたという。

## 50 リスの知恵(3)

ある人たち三人がいた。三人がいる。この人たちは三人だった。三人はいっしょになった。三人はでかけていった。三人はイスラム教の先生のところに行って、うまいやり方ができるお呪いをもらった。三人はすべてのまじないをもらった。三人は先生からうまいやり方ができるお呪いをもらった。

さて、三人はいくと、自分の友だちリスに、先生のところに行って、うまいやり方ができるお呪いをもらうようにいった。リスは先生のところに行った。リスは行って、老女の塩をもってくるようにいわれた。リスは塩をもってくるためにでかけていった。

さて、リスはいくと、死んだ真似をして、老女のまえでよこになる。リスははしっていく。リスはいくと、死んだ真似をして、老女のまえでよこになる。老女がとおりするまで、リスははしっていく。リスはいくと、またしても、老女のまえでよこになる。老女は、「これから、この肉をとっていくと、おおくないなどとはいえないのでは」といった。老女はリスをとると、塩のうえにおいておいた。リスは塩をぬすんで、とびはねて、草むらにはいった。リ

スははしった。リスは塩を先生のところにもっていった。先生は、「ライオンの涙を手にいれなさい」といった。ライオンの涙なのだ。リスがいくと、ライオンがいた。リスは自分のおじが死んだではないかといった。リスはよこになり、大声で、「おじさんが死んだ。おじさんが死んだ。おじさんが死んだ」という。ライオンもなく。

さて、リスは半截ヒョウタンをとると、「親父さんの涙は地面におちない。親父さんの涙は地面におちない」といって、涙をうけて、先生のところにもっていった。先生のところにもっていったのだ。

さて、先生はリスに、「よろしい。きなさい。象牙もってきなさい」といった。リスは象牙をとってくるためにでかけていった。リスはゾウをみつけた。

さて、リスはゾウよりおおきな木があるではないかといった。でも、ゾウにできるなら、象牙でもちあげてみる、自分は指でもちあげられるといった。ゾウがもちあげようとしていると、象牙がおれてしまった。リスは象牙をもつと、はしって、先生のところにもってきた。先生はリスをみて、「よろしい。いおつて、アフリカクロスイギュウの乳をもってきなさい」といった。リスがはしっていくと、アフリカクロスイギュウがいた。リスは、「よろしい。アフリカクロスイギュウよ、わたしは木をわって、木のむこう側でる。おまえさんは角があっても、木がわれない」といった。アフリカ

クロスイギユウは、「よろしい、いって、木をわって、むこう側に  
でなさい」といった。リスははしって、とびはね、木のそばをとお  
りすぎた。アフリカクロスイギユウは、「それっ、それっ、それっ、  
それっ」というと、はしって、木に角をさしこんだ。もどつてくる  
と、はしっていき、角をさしこんだ。

さて、角がぬげなくなつた。リスはアフリカクロスイギユウの乳  
をしぼつた。リスはそれを先生のところにもつていった。先生のと  
ころにもつていくと、先生は、「よろしい。これで、うまいやり方  
ができるお呪いができた。塩とトウガラシをもつておいで」といっ  
た。リスは塩とトウガラシをもつてきた。先生は半截ヒヨウタンの  
切り口をしたにして、おくと、そのヒヨウタンのしたにはいり、す  
わるようにとといった。先生はリスのもつてきたものをみんなとる  
と、かくした。

さて、リスは半截ヒヨウタンのしたにはいった。リスが半截ヒヨ  
ウタンのしたにはいると、先生はどこかにいってしまった。

さて、リスは半截ヒヨウタンからでて、木にのぼつた。リスは先  
生をみている。先生はいくと、丈夫な棒をとり、半截ヒヨウタンを  
うえからたたいた。半截ヒヨウタンはつぶれてしまった。ヒヨウタ  
ンがつぶれたが、リスがみえなかつた。リスは先生に、「わたしは  
先生よりいいやり方があります。わたしはあなたにわたしがまさつ  
ているということをおしえてあげたのです」といった。リスはハイ

エナのといころにいって、「しっているか。わたしはイスラム教の  
先生のところでもいいやり方を手にいれた。そのいいやり方のおかけ  
で、ハイエナがきても、先生はハイエナからにげる。先生はハイエ  
ナからにげる。ハイエナは先生をつかまえられない」といった。ハ  
イエナは、「よし」といった。ハイエナはでかけていった。ハイエ  
ナは（自分もいいやり方を手にいれよう）先生のところにいっ  
た。先生はハイエナに、「老女の塩をもつておいで」といった。ハ  
イエナは、はしって、市場にいくと、塩をすくって、にげる。人び  
とはハイエナをたたいた。人びとはハイエナをつかまえて、たたい  
た。ハイエナはいくと、先生に、「たたかれました」といった。先  
生はハイエナに、「よろしい。いって、ライオンの涙をもつてきな  
さい」といった。ハイエナはライオンがよこになっているのをみ  
つけた。ハイエナは草の茎をとると、それでライオンの目をつつい  
た。ライオンはハイエナをつかまえて、たたいた。ハイエナは先生  
にライオンの涙が手にはいらなかつたといつた。先生は、「よろし  
い。いって、象牙をもつてきなさい」という。ハイエナはいくと、  
象牙をとつて、もつていった。先生は、「よろしい。いって、アフ  
リカクロスイギユウの乳をもつてきなさい」という。アフリカクロ  
スイギユウがどこかにいってしまおうとすると、ハイエナはアフ  
リカクロスイギユウにだきついた。ハイエナはいくと、アフリカク  
ロスイギユウの乳房をつかみ、乳をとるといった。アフリカクロ

イギユウはハイエナをふみつけて、たたいた。ハイエナは乳がとれなかつたと先生にいった。先生は、「よろしい」といった。先生は、「それでは、きなさい。わたしは小屋に行く。魔法の小屋だ。いて、みる」といった。先生はいくと、火をもやした。先生はその火をもつと、その火で、ハイエナをたたきはじめた。先生は何度も、ハイエナをたたいたあと、ハイエナを自由にした。先生はハイエナに、「これがお呪いだ」といった。ハイエナの体ははれてしまった。ハイエナはリスにであつた。ハイエナはリスをころそうとして、おつかけた。リスをころそうとしたが、ころせなかつたとき。

さて、このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二日、語り手 アーマドウ・ルフアイ、ガウンデレにて。この話は、ヤウンデにいたファリ族の友人からきいたという)

## 51 ゾウとワニの綱引き

リスがいた。寒期がリスのいる村にやってきた。たいへんな寒期だつた。リスはウシをかって、すんでいる。

さて、食べ物がなくなつてしまつた。自分のためにたくわえておいたものが、なくなつてきた。ウシをころすと、ウシがなくなつてしまふ。

さて、リスは野原にでかけていった。野原に、ゾウがいた。リスは、「ゾウおじさん、ゾウおじさん、こんにちは」といった。リスはゾウに挨拶をした。リスは挨拶のことばがつかまるまで、挨拶をした。リスは、「さて、こういうことで、使いにだされました。おねがいです。一年のあいだたべられるだけのものをかえるお金をおかりできますでしょうか」といった。ゾウは、「かしてあげよう。おまえさんは、なにをかえしてくれるのか」といった。リスは、「一年がすぎさつたら、雄ウシで、そのかりをはいります」といった。ゾウは、「よろしい」といった。ゾウはリスに食べ物をかしてやつた。リスはワニのところへいった。リスはワニに、「そこにいたのですか。ワニおじさん、わたしはたのみごとをしようとしてやってきました。わたしはそんなことをしてただけるとおもいませんが」といった。ワニは、「なんだって、リスおじさんよ」といった。リスは、「なんということでしょう。ごらんください。わたしのウシはすっかりなくなつてしまいました。わたしは野原の雨のふるところにいきたいのです。おねがいです。お金をかしてください。たべていくお金をかしてください」といった。ワニは、「どれほどのお金か」といった。リスは、「わたしが一年間たべていけるだけのお金です。わたしはあなたにウシ一頭をおかえします」といった。ワニは、「よろしい」といった。ワニはリスにお金をかしてやつた。ゾウとワニは貸しをかえしてもらうのをまつている。リスは

どこかにいってしまった。リスはどこかにいって、あっちこっちをうろついた。リスはゾウとワニにかりたお金をすっかりつかってしまった。

さて、リスはある日、かえってきた。リスはかえつてくると、ながい綱をもつてきて、その一方を川のなかにいるワニにわたした。リスはいくと、野原にいるゾウにもう一方をわたした。綱は一本だよ。リスは、「わたしに姿がすっかり見えなくなると、綱のさきにくくつてあるウシをひきよせてください。ウシをひきよせるとき、わたしにきたといってください。ウシがこないというのなら、まってください。わたしはウシを綱にくくります」といった。どちらも、「よろしい」といった。

さて、ゾウは綱をひっぱる。ワニは綱をひっぱる。ゾウがひっぱる。ワニがひっぱる。

さて、ワニが川からでてきた。ゾウも野原からでてきた。ワニがやってくると、ゾウがいた。ワニがやってくると、ゾウにであった。ワニは相手がウシだとおもっている。ゾウも相手がウシだとおもっている。それぞれ、相手にまけないように力をだしていた。ワニとゾウがであった。ワニは、「なんということだ、リスはわたしをひどい目にあわしてくれた。ああ、リスはわたしをひどい目にあわせてくれた。ほら、リスはわたしにウシがやってくるといった」という。ゾウは、「なんということだ。わたしにも、縄にウシがく

くつてある、ウシをつれてくるといった」といった。(ゾウとワニはそれぞれ野原と川にかえっていく。)ゾウは仲間に、「よろしい。でも、おまえさんたち、野原をあるくものたちよ、リスに二度と野原の道のあるかないようにといいなさい。リスが野原の道のあるいたら、わたしはあいつをころしてやる」といった。ワニは川の水をのむものたちに、「それで、リスに二度ときて、この川の水をのまないようにといいなさい。ここに二度とやってきたら、わたしはあいつをころす」といった。

さて、ゾウも、ワニもいってしまった。みんなは、ゾウや、ワニにいわれたように、リスにいったではないか。

さて、リスがあるいてると、ネコの死体があった。

さて、リスはネコの皮をはいで、それをかぶった。わかるかな。ハエがリスのあとをつけるではないか。リスはおきあがると、はしつていきた。ハエがそのあとをつけた。リスが野原のゾウのいるところをやつてきた。リスはすわつて、なにかにもたれた。ハエがリスのあとをおいかける。ゾウはリスをみつめて、「ネコよ、どうしたのか」という。リスは、「わたしはリス先生に意地悪をした。リス先生はおきあがり、やってくると、わたしに呪いをかけた。リス先生はわたしに呪いをかけた。わたしはこのようになった」といった。

さて、ゾウはそこをとりすぎるものみんなに、「リス先生に、

きて、道をとるようにいいなさい。きて、道をとるようにいいなさい」といった。リスは野原にいき、水のあるところに行ってきた。ワニがいた。ワニは、「どうしたのか。ネコよ、おまえさんはどうしたのか」といった。リスは、「わたしはリス先生に悪態をついた。それで、リス先生はわたしに呪いをかけたのだよ」といった。ワニはそこにやってくるものみんなに、「リスに、すきなときに来て、水をくむようにいいなさい。きて、水をくむようにいいなさい」といった。

さて、リスはたちあがり、ネコの皮をぬぎ、かくれていた。リスは体をあらって、きれいになった。リスはおきあがって、やってくる。リスは野原に行ってきた。リスがそこについて、ゾウがそこにいる。

さて、ゾウはやってきて、なにかにもたれて、「アッラーがあなたのためにいいことをしてくださいますように。先生。先生。とおってください。先生。とおってください」という。先生はそこをとおりました。リスは川にいった。リスは川の水をのみにやってきました。ワニはリスを見ると、「ああ、先生。水をのみにこられたのですか。いらっしやい。いらっしやい。とおきなさい。きれいな水のあるところまで行って、水をのみなさい」という。ワニは先生にきれいな水のあるところにつれていった。

こうして、リスはゾウからかりたものも、ワニからかりたものも

ふみたおしてしまったとき。

このようにして、このお話は、おわる。

(一九八三年一月二四日、語り手 アーマドゥ・ルファイイ、ガウンデレにて。この話は、ルムシキにすんでいるガウンデレ出身者からルムシキで聞いたという)

## 52 落花生畑とリス(1)

王さまがおおきな畑をつくった。王さまはおおきな畑をつくった。畑は落花生の畑だった。

さて、落花生がみのつていく。王さまは、「これではだめだ」といった。王さまは奴隷をさがした。王さまは、「おい、おまえがいて、わしの畑をみてくれたほうがよい。鳥や動物たちがわしの落花生をほりおこしている。おまえがいて、畑をみてくれたほうがよい」といった。奴隷はいて、畑を見張っている。もうすこしで昼というとき、奴隷はおくからリスがやってくるのを見る。リスは袋をひっぱりながらやってくる。リスは、「クルクラー・クルクラー、おまえさんの兄さんの袋。クルクラー・クルクラー、おまえさんの兄さんの袋」という。リスはやってくる、王さまの奴隷に、「友よ、ほくに落花生をおくれ。飢えをとりのぞくのだ」という。奴隷は、「なんだって、落花生はみのつていない。どうして、

わたしがおまえさんにやれるというのか」といった。リスは、「よろしい。ピンキル」といった。

さて、奴隷はねてしまった。リスは落花生をほりかえすと、袋につめていく。リスは、「ファイルファイル」という。

さて、畑の番人は目をさました。リスはずつとこのようにする。奴隷はいくと、王さまにそのことをはなした。奴隷は王さまに、「畑で、こういうことが、わたしにおこっています」といった。王さまは、「よろしい。おまえはうそをついている。でも、畑の番人を二人にする」といった。王さまは見張りを二人にした。奴隷たちはでかけていった。

さて、もう一人の奴隷はもう一人に、「よろしい。そいつが、おまえさんをこわがらせたというのか。ほんとうのこと、おまえさんはうそをついているのだらう」という。もうすぐ、昼というときになった。

さて、リスはこんなおきな袋をひっぱりながらやってくる。リスは、「クルクラー・クルクラー、おまえさんたちの兄さんの袋。クルクラー・クルクラー、おまえさんたちの兄さんの袋」という。リスは、「きょう、おまえさんたちは二人になったのか。友よ、ほくに落花生をおくれ。飢えをのぞくのだ」という。奴隷は、「なんだって、落花生はみのついでない。どうして、わたしがおまえさんにやれるというのか」という。リスは、「ピンキル」という。二人

とも、たおれてしまった。二人はねている。リスは落花生をほりかえすと、袋につめた。リスは、「ファイルファイル」といった。畑の番人たちは目をさました。二人はいくと、村で大声をあげた。王さまは太鼓をたたかせて、「あす、わしらはみんなदैいて、わしの畑をみはるのだ」といった。人びとは「よろしい」といった。夜があけて、朝になると、王さまから庶民まで、みんな畑にいった。王さまは畑をみんなに取り囲ませた。人びとは二人の奴隷にむかって、「なんだって、おまえたちはうそをついている。おまえたちはうそをついている」という。

さて、それからすこしたつと、人びとはとおいに埃があがるのをみた。リスは袋をひっぱりながらやってくる。リスは、「みなさん、きょうは、おまえさんたちみんなできたのかい。友よ、ほくに落花生をおくれ。飢えをとりぞくのだ」という。人びとは、「なんだって、落花生はみのついでない」という。リスは、「ピンキル」という。王さまから庶民までみんなたおれて、ねている。リスは落花生をほりかえすと、もどつていった。リスは、「ファイルファイル」という。人びとは目をさました。リスはいつてしまった。王さまは、「みなもの、わしは、いつたい、どうしたらいいのだらう。よろしい」といった。老女が王さまに、「あなたがあるものをくくださるなら、あのリスをつかまえてあげましょう」といった。王さまが、「よろしい。つかまえておくれ」といった。老女は、「わたしにモロ

コシの粉をください。薪をください。塩をください」という。王さまは老女に老女がくれといったものをすべてやった。

さて、老女はいくと、トリモチをさがしてきて、そのトリモチで子どもの人形をつくって、もってきた。老女はナベを火にかけると、おかずをつくり、それを火からおろした。老女はカタガユをつくるためのナベを火にかけ、たいている。

さて、老女は仮小屋に身をかくした。リスがやってきた。やってくる、トリモチでつくった子どもが日除けのしたにいる。お日さんの熱で人形はとけていく。リスは、「きょう、おまえさんは食べ物をつくっているのか。食べ物をつくらう」という。リスは袋をおくと、リスは食べ物をつくっている。リスはそれがトリモチでできた子どもとはしらない。老女はリスの様子をみている。リスはナベの蓋をとった。リスは、「なんだって、ナベのなかのものがふいている。かきまぜろ」といった。トリモチでできた子どもはなにもいわない。リスはトリモチでできた子どもを人の子どもだともっている。リスは、「なんだって。おまえさんがかきまぜないなら、わたしにかきまぜろというのだな」といった。リスはカタガユをかきまぜている。リスは、「きて、カタガユをすくえ。おまえさんがすくわないなら、わたしにすくえというのだな。こい。たべよう。おまえさんがたべないのなら、わたしにくえというのだな」という。リスはトリモチでできた人形にこのようにいつている。リス

は食べ物をたべてしまった。リスは、「おねがいだ。おまえさんよ」といった。リスは大足であるいていくと、トリモチでできた人形を平手でうった。リスの手にトリモチがついた。リスは、「よし。手をひつつけてくれた。これをうける」ともう一つの手で人形をうった。もう一つの手にとりモチがついた。リスは人形を歯でかんだ。歯がひつついた。リスは足でつけた。足がひつついた。もう一つの足でつけた。その足もひつついた。

さて、老女は小屋のそとにでて、大声をあげた。人びとはやってきて、リスをころした。

さて、王さまは老女にいろいろなものをやったとき。

お話は、おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 パーセーウォ村出身のアブドゥラ  
ーイ・オスマーヌ、マルアにて)

### 53 落花生畑とリス(2)

老女が野原に落花生の畑をつくった。老女は畑をみはっている。リスがやってきて、落花生をほりだす。老女は畑をみはる。リスがいつもやってきて、落花生をほりだす。リスがいつもやってきて、落花生をほりだす。リスは落花生をそのままにしておくことがない。

さて、老女はいった。老女はすわった。すわったのだ。老女は自分のおかずをつくる台所をもっている。老女はいくと、蜜蠟をかっ  
た。老女はやってくると、蜜蠟で形をつくっていった。老女は蜜蠟  
で人形をつくった。老女はそれをたてた。老女は火をもやした。ナ  
ベをもつてくると、その火のうえにかけた。水をもつてきた。蜜蠟  
でできた人形を火のそばにたてた。

さて、リスがやってきた。老女はどこかにいってしまった。リス  
がやってくると、なにかがたっていた。リスは、「おい、友よ、お  
い、友よ。きょう、おまえさんが落花生の番をするのか」という。  
蜜蠟でできた人形はたっているが、リスになにもいわなかった。リ  
スは、「おまえさんが畑の番をするのか」という。蜜蠟でできた人  
形はたっているが、リスになにもいわなかった。リスは、「おまえ  
さんがなにもいわないのなら、平手うちにしてやるぞ」という。蜜  
蠟がとけた。火があたったからだ。リスは蜜蠟でできた人形を平  
手打ちにした。蜜蠟が手にひつついた。リスは、「あつ、わたしを  
はなしておくれ。はなさないなら、こちらの手でうってやる」と  
いう。リスはたいた。もう一つの手もひつついてしまった。リス  
は、「わたしのほうをみないなら、わたしの足でつけてやる」とい  
った。リスは人形をかけた。足がひつついてしまった。リスは人形  
にむかって、「わたしをはなしておくれ。はなさないなら、こちら  
の足でつけてやる」といった。リスがかけた。足がひつついた。リ

スは人形に、「あつ、わたしはおまえさんをかむ」といった。リス  
はかんだ。口がひつついた。リスはそこで、夜をすごした。あくる  
朝、老女がやってくると、リスはころがって、蜜蠟でできた人形と  
よこになっていた。

さて、老女は、「やった。どうも。きょうこそ、わたしはわたし  
の畑にやってくる盗人がだれだかわかった」といった。老女は子ど  
もたちをよんで、「子どもたちよ、おいで。わたしはリスをつかま  
えた」という。子どもたちがやってきて、縄としてつかえる木の皮  
をはいで、それでリスをしばった。縄としてつかえる木の皮をはい  
で、やってくると、リスをしばった。子どもたちは、「もうおそく  
なった。ぼくたちはこのリスをしばって、おいておく。あすの朝、  
ぼくたちはきて、リスを火であぶって、たべる」という。子どもた  
ちはリスを木の皮でできた縄でしばっておいた。リスはよこになっ  
ている。夜がふけた。ハイエナがやってくる。屋敷のなかで、リス  
はうなっている。リスはうなつて、ずっとないている。

さて、ハイエナはたちどまり、「どうしたのか」とたずねる。リ  
スは、「わたしのお腹はちいさいのに、老女はわたしをしばりあげ、  
雌ヤギをくれるという。雌ヤギをたべるほど、お腹に余裕があるか  
い」といった。

さて、ハイエナはリスに、「なんだって、老女はおまえさんが雌  
ヤギをたべるようにと、おまえさんをしばったのか」という。リ



イエナはそこにいる」という。ハイエナははしつた。とうとう、ハイエナの心臓がさけて、死んでしまったとき。こういうこと。

(一九九三年、語り手 ルーティ・センベ・ラーム、レイ・プーバにて。この話は大人たちから聞いたという。ルーティは六五歳)

## 54 リスとカンムリツル

すなわち、ある事件がおこった。王さまは人びとを自分の屋敷にあつめた。というのは、食べ物が出てきてなかったからだ。食べ物は一日中、そとにでてこなかった。王さまは世の中の人をみんなあつめて、「きょう、どうして、わしの屋敷から食べ物がでてこないのか」といった。奴隷たちはみんな王さまの屋敷のまえにあつまった。人びとはどうして、王さまの屋敷から食べ物がでてこないのかわからなかった。人びとは、「まず、一つ。リスは屋敷のなかにすんでいない。だから、屋敷のなかにある石ウスをつぶしてしまえない。(これはリスの仕業ではない。)それでも、食べ物がでてきていない」といった。ほんとうのこと、リスはそのよこにいて、やってきて、「石ウスがわれた。だから、食べ物がそとにでてきていないのだ」という。王さまは、「なんだって、リスよ。おまえさんがい

て、石ウスがわれたのなら、わしのためにその石ウスをぬつてくれないか」といった。リスは、「わたしは石ウスをぬうのを仕事にしている人ではありません。石ウスをぬうのを仕事にしている人はいます」といった。王さまは、「それはどういう人か」という。リスは、「カンムリツルは石ウスをぬうのが上手です」という。

さて、王さまはリスに、「カンムリツルをよんで、こさせなさい」といった。リスはいくと、カンムリツルをよんだ。カンムリツルがやってきた。リスはカンムリツルに、「王さまのよびかけに、こたえなさい。王さまがおよびだ」といった。王さまがカンムリツルをよんだので、カンムリツルがやってきた。王さまはカンムリツルに、「カンムリツルよ、わしの石ウスがわれた。きょうで、三日のあいだ、わしの屋敷のまえまで、食べ物がでてきていない。おまえさんがいるのに、そういうことがおこつてよいのか」という。カンムリツルは王さまにこたえなかった。王さまはもう一度カンムリツルにたずねた。カンムリツルは王さまにこたえなかった。カンムリツルは、「なるほど。ぬうことは、むつかしくありません。それをぬう糸がなければ」という。王さまは、「わしに糸がないというのか。わしにはどんな糸でもある」という。カンムリツルは、「なんですって。その糸を手にいれるのはむつかしいです。それでは、あなたがよろしいなら、どの糸がいるかいつてあげましょうか」といった。王さまは、「いつてほしい」といった。カンムリ

ヅルは、「リスの尻にある筋でのみ、石ウスがぬえるのです」という。王さまは、「よろしい」といった。人びとはリスをつかまえて、籠をうえからかぶせておいた。王さまはカムムリヅルに、「おねがいだ。わしのため、石ウスをぬっておくれ」という。カムムリヅルは、「リスの尻にある筋でのみ、石ウスがぬえるのです。その糸を手に入れるのはむづかしい」といった。ほんとうのこと、リスはずっとまえにどこかにいってしまった。人びとはリスがどこにいったかわからなかった。

さて、人びとはカムムリヅルをよんだ。カムムリヅルはやってきて、その石ウスをみた。石ウスはわれていた。

さて、リスはみんなのところから姿をくりました。人びとはリスをさがしたけれども、リスの居所がわからなかった。

さて、カムムリヅルはとんで、いってしまつた。カムムリヅルは、「うたがわしいときには、にげることだ」といったとき。

さて、この話は、このようだった。

(一九九三年十一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサは三五歳。この話は自分の父方の祖父からきいたという)

## 55 サルとリス

サルとリスがいた。サルとリスが落花生をほりにいった。

さて、リスはサルに、「おまえさんは木のうしろにおれ。わたしは落花生をほりにいく」といった。

さて、サルは木のうしろにいる。リスはおきあがつた。サルとリスはどんどん落花生をほりだした。落花生は袋いっぱいになった。

さて、サルが、「おい、畑の持ち主がやってきて、わたしたちをみつけたら、わたしたちをなぐるだろう」といった。

さて、リスは、「なんだって、友よ、こわがるな。わたしがこわがつているというのか。五袋分くらいほりだして、いこう」といった。

さて、サルとリスはどんどん落花生をほりだしていき、落花生は五袋になった。リスは一袋頭にのせた。サルたちはみんなもっていった。サルとリスは、どんどんあるき、おおきな木のしたにいった。

さて、リスは木にのぼれなかった。サルは木にのぼって、落花生をとり、木のうえにおいた。サルはどんどん落花生をたべていく。

さて、リスは落花生をたべなかった。リスはそこにいる。リスは、「サルよ、わたしにおまえさんの落花生をすこしおくれ。たべろのだ」といった。

さて、サルが、「ほしいなら、歌をうたうのだ。すこし歌をうたつて、落花生をたべるのだ。歌をうたわれないなら、おまえさんは落花生をたべられない」といった。

さて、リスは歌をうたつた。

さて、リスはサルに、「落花生をおおきな木にぶらさげておきな木をみつけて、そこにぶらさげておくのだ。おおきな木にぶらさげたら、木がおれる」といった。

さて、サルはそれをきくと、「リスのいつていることは、ほんとうだ」といった。ほんとうのこと、リスはサルにうそをいつている。

さて、サルはちいさな、かれた木にぶらさげた。

さて、落花生のはいつた袋は木から地面におちていく。リスは腰をまげて、落花生をとり、落花生をもつたままどんどんにげていき、穴にはいり、どんどんさきのほうにいつた。リスはそこにいき、おちついつた。サルはいくと、穴の出口をみはつていつる。リスはすわつて、落花生をどんどんたべていつた。リスは落花生をたべてしまつと、やつてきて、サルに、「あつ、友よ、きたのか。友よ、きたのか。友よ、きたのか。まえから、わたしは落花生をみはつていつる。でも、おまえさんはやくこなかつた。わたしは落花生をみはつていつる。穴にはいれ、いこう。わたしはおまえさんのために、落花生はちいさな日除けのうえにいつていつる」といつた。

さて、サルとリスは穴にはいつていつた。サルとリスはどんどん穴のなかにはいつていつた。

さて、リスが、「おまえさんがいき、道をみつけたら、右側にはいくな。左側にいく道をみつけたら、いけ」といつた。

さて、それをきくと、サルは左側にいく道あるいつていつた。

さて、サルとリスは穴にはいつる。サルとリスは穴にはいつる。リスは腰をおり、穴のそとにでてくると、穴の入り口にどんどん薪をいつていつた。サルは穴のなかにはいつる。薪をいつて、それに火をいつた。火はいきよいくもえた。

さて、穴の入り口でたくさんの火がもえた。

さて、リスはサルをころして、穴からひつぱりだしたとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 オマル・セイニ・トービ・ム  
ーサ・ラベヤ、レイ・プーバにて。オマルの父親はモノ族、母親はムプム族。オマルは、フルフルデ語よりムプム語がよくわかる。オマルはレイ・プーバ地方のトゥボロで一三歳までいつた。この話は、一九七八年に姉のルーティからきいたといつた)

## 56 肉のおかげでリスの奴隷になつたハイエナ

さて、慈悲深いアツラーのみ名によつて。お話、お話。

すなわち、リスとハイエナがいつしよになって、旅にかけた。リスとハイエナは旅にいき、いこうとしているところについた。

さて、リスはいくと、よめさんを手にいれ、結婚した。ハイエナもいくと、よめさんを手にいれ、結婚した。リスとハイエナは野原で屋敷を手にいれた。

さて、リスとハイエナが野原にでかけてくと、アフリカクロスイギユウにであった。アフリカクロスイギユウがうろついている。アフリカクロスイギユウはお腹がへり、子どもたちに食べ物をたべさせようとうろついている。アフリカクロスイギユウは子どもたちに食べ物をたべさせようとうろついている。

さて、リスはアフリカクロスイギユウをみつけて、「アフリカクロスイギユウおじさん、おまえさんはわたしがすることなら、なんでもできるかい。わたしはその木を二つにわることができる」といった。アフリカクロスイギユウは、「おまえさんにそんなことができるわけがない」といった。リスは、「それでは、おまえさんは、木をわればよい。みてる」といった。アフリカクロスイギユウは、「よし」といった。アフリカクロスイギユウがどんどんはしつてきて、角で木をつきさした。リスが、「もう一度、角でつきさせ」といった。アフリカクロスイギユウは角をつきさした。

さて、角は木にささってしまったまま、ぬけなかった。角がぬけなかったので、リスはやってくると、アフリカクロスイギユウの乳

をしほり、家にもつてかえた。家のものたちはその乳をどんどのむ。リスはいくと、ハイエナにほんのすこし乳をやる。ハイエナはそれをのむ。リスはハイエナにほんのすこし乳をやる。ハイエナはそれをのむ。リスはハイエナにほんのすこし乳をやる。ハイエナはそれをのむ。

さて、ある日、リスはひとりでかけていく。

さて、ハイエナは灰をとると、それをリスの尾っぽにつけた。リスは灰をつけたままにかけていく。

さて、灰は、アフリカクロスイギユウのところにつくまで、道にちつていく。リスは乳をしほった。リスはアフリカクロスイギユウの乳を手にいれると、家にかえていった。リスは乳を手にいれ、それをのんだ。リスはハイエナにほんのすこしやる。ハイエナはそれをのむ。ハイエナはお腹がへっているので、涎をだす。

さて、ハイエナは灰をたどつて、アフリカクロスイギユウのところへやってきた。やってくると、アフリカクロスイギユウがいたので、アフリカクロスイギユウをころし、肉をとつて、家にもつてかえた。自分の家にもつていくと、肉を家においておいた。ハイエナは家にいき、肉をたべる。ハイエナはリスにその話をした。リスはハイエナのところにいき、ハイエナがしていることがわかる。ハイエナがリスのところへいく。ハイエナはリスにみられている。リスはハイエナの屋敷までついていく。リスは、「よし。ほつておい

ておくれ。いいことをしてやる」といった。リスはおきあがった。リスはおきあがると、自分の屋敷までかえっていった。リスは自分のよめさんに話をした。リスのよめさんは、トウジンピエをとった。リスのよめさんはトウジンピエをとった。リスのよめさんはトウジンピエをなかにはいった。リスは、「わしといっしょにトウジンピエをハイエナの家までもって行くように」といった。リスのよめさんはトウジンピエをもつと、ハイエナのところにもっていった。ハイエナはすぐにトウジンピエのみこみはじめ、のみこんでいる。わかるとおもうが、ハイエナがトウジンピエをみつけると、かまずにのみこむだけだ。トウジンピエのみこんでいるうちに、リスもお腹にのみこんでしまった。リスはすぐに腸をきりはじめた。リスはハイエナに、「どこに肉があるのか」という。ハイエナは肉がどこにあるかわからないという。リスはお腹のなかで、ハイエナの腸をきって行く。そのあと、ハイエナは大声をあげた。ハイエナの子どもたちはみんなやってきて、ハイエナをとりかこむ。子どもたちがやってきて、ハイエナをとりかこむ。ハイエナの屋敷からはなれたところに、丘がある。ハイエナは丘にやってきた。ハイエナは自分の子どもたちに自分をとりかこませた。子どもは槍や剣などをもって、ハイエナをとりまいた。

さて、ハイエナは、「リスがでてきたら、ころそう」といった。

リスはハイエナの体にあるすべての関節をきってしまい、ハイエナの爪のところからでてきて、地面をほり、あちらのほうにでた。リスは、「ハイエナよ、わたしはおまえさんより上手だ」といった。リスは家にかけていった。

さて、リスは家にかけていった。ハイエナはリスをどうしてやるかとかんがえた。ハイエナもトウジンピエをかかって、そのなかにはいった。リスのところにもっていかそうというわけだ。ハイエナはよめさんにもって行くようにといった。

さて、リスは、「あすの朝もってくるように」といった。ハイエナのよめさんはリスのところにもって行くようにいった。

さて、リスはトウジンピエをうけとった。リスは、「それで、ハイエナはどこにいる」といった。ハイエナのよめさんは、「ほんとうのこと、ハイエナはこれをもってくるように」といった。おまえさんたちの分け前をもってくるようにといった。トウジンピエをたくさん手にいれた。みんなにわけているの」といった。リスは、「よろしい、もってきなさい」といった。ハイエナのよめさんがもってきた。リスはトウジンピエ（のはいった袋）をひっぱった。リスはトウジンピエをうえにたくわえておかなければならないといった。リスは、「このトウジンピエをもう一度あたためさせてもらおう。たべるにはあったかいトウジンピエがちょうどよい。もう一度あたため、調理したほうがよい」といった。リスはトウジンピエを（土ナ

べにいれ) あたためはじめた。リスは石をとると、トウジンビエをおさえた。石をとり、トウジンビエをおさえた。たくさんの石をもつてきて、トウジンビエにおもしをした。そのうえにのぼって、よめさんといっしょにおもしをした。リスは土ナベのしたから火をたいた。わかるとおもすが、ハイエナはトウジンビエのなかにいるのに、トウジンビエをあたたためて、やくとどうなるか。ハイエナは火傷した。ハイエナはトウジンビエのなかでもがいた。ハイエナは、「わたしはトウジンビエのなかにいる。なかにいる」というと、とびだした。ハイエナのよめさんが家につき、家にはいるうとする。ハイエナはよめさんよりさきに家にはいった。ハイエナは家にかえった。ハイエナは大声をあげている。ハイエナのよめさんが家につくと、ハイエナがいた。ハイエナは、「畜生め、おまえは、リスのところにもつていくとうそをついてくれた」という。ハイエナは何度もよめさんをたたいた。

さて、リスはハイエナの肉を横取りした。リスはハイエナのところにもどつていき、自分のみつけた肉をとってしまった。リスはいくと、ハイエナを小屋にとじこめた。リスはいくと、ハイエナを小屋にとじこめた。ハイエナはよめさんとふたりで小屋のなかにいる。ハイエナとよめさんは二人で小屋のなかにいる。リスは脂肉をとると、肉ができあがるまで、火であぶる。肉ができあがると、肉をみせて、「みてみる、ハイエナよ」といい、それをたべる。ハイ

エナはくやしいのでふるえている。ハイエナは涎をたらしている。リスはすこしとり、ハイエナにうけとるようという。リスはおまえはいらないだろうといい、その肉を地面にすて、もどつてきてとる。

さて、リスは肉のことで、ハイエナを奴隷にしまったとき。さて、こうして、このお話は、おしまい。リスはハイエナを自分のものにした。

(一九八三年一月二六日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、ガウンデレで友だちから聞いたという。)

## 57 ウンコをしない男と結婚したかった女とリス

ちいさなお話、ちいさなお話。

女がいた。女はウンコをしない男と結婚するといった。男がやってくる、女は、「なんだって、この人はだめ」という。べつの男がやってくると、女は、「なんだって、この人はだめ」という。どの男がやっても、女は、「よろしい、一週間いっしょにいましよう」という。男が食べ物をたべ、満腹したという、女は男をみはっている。そのうちに、男は便所にいく。女は、なんだって、この人はウンコをする。自分はウンコをしない人と結婚するという。

さて、リスがこの女の話を書いた。リスは、この女の話を書くと、自分はこの女と結婚するといった。

さて、リスは支度をした。支度をする時、リスは女の父親の畑の木にのぼった。畑にはたくさんのモロコシがはえていた。リスはモロコシの畑をすべてまわった。リスは葉っぱの包みをつくって、おいておいた。リスは葉っぱの包みをつくって、おいておいた。リスは葉っぱの包みをつくって、おいておいた。

さて、リスは女に、結婚しにきたといった。女は、「わたしの話をきいたか」といった。リスは、「すっかりきいている」といった。女は、「よろしい」といった。女とリスは畑にいった。女はリスといっしょにそこにいる。リスはお腹がいっぱいになるまで食べた。

さて、リスはウンコがしたくなった。

さて、女とリスはいっしょにでかけていった。

さて、リスは、「なんとということか。わたしはおまえさんのところにきて、おまえさんとわたしがいっしょにいる。おまえさんは、わたしのよめさん(になる人)だ。おまえさんはおまえさんの父親の畑をみせてくれないのか。いって、野原をすこしあるきまわろう。風にふかれよう」といった。女は、「よろしい」といった。女とリスはいっしょにあるいていく。女とリスは風にふかれるため、野原にいった。女とリスは、あっちこちをあるきまわった。さて、リスはウンコがしたくなると、「ああ、なんだって、この畑は

なんととおおきいことか。木にのぼらせてもらおう。畑の境をみる」という。リスは木のうえにのぼる。女はすわって、やすんでいる。わかるかな、女はあるきつかれている。

さて、リスは木にのぼる。リスは自分が包みをおいておいた場所がわかると、その包みのなかにどんどんウンコをする。ウンコをするとき、リスは、「ああ、なんとというモロコシの畑か。ああ、なんと、モロコシだ。ああ、モロコシだ」という。リスはこういう。リスは利口だ。リスはたちあがり、とおくをみて、「なんと、このモロコシの畑はおおきい。なんと、モロコシはよい」という。リスはたくさんのことをいう。女はなにも知らない。女はリスの話がほんとうだとおもっている。

さて、リスは木からおりてくる。ウンコをすると、木からおりて、「いこう」という。女はリスと一週間のあいだいっしょにいた。女はリスがウンコをするのをみなかった。そのつぎの日もおなじだった。女はリスがウンコをするのをみなかった。女は、「それでは、いって、これから結婚しましょう。むこさんになる人はあなたしかいない」といった。

さて、女はリスといっしょにいった。二人はいって、結婚の契りをむすんだ。二人は結婚した。人びとは、「ここに、女のすきなウンコをしない男がいる」といった。人びとは、「したがうべきものはアツラーのほかになし。モハンマドゥはアツラーの使わされた

人。モハンマドウのうえに、祈りと平安がありますように。アッラ  
ーをたたえ、宇宙の主よ」という。

さて、女とリスは自分たちの道があるいていった。リスはよめさ  
んをもらって、いつてしまった。

さて、リスの義理の父親たちは、「いつて、モロコシをみにいか  
せてもらおう」といった。人びとはモロコシをみにいった。木のし  
たは、どこもウンコの臭いがした。人びとはウンコの臭いをかく。

さて、人びとは、「これは義理の息子がうえまでのぼっていき、  
畑をみた木だな」という。人びとは、「その木だ」という。人びと  
が木にのぼってみると、リスがウンコをするための包みをみつけ  
た。

さて、リスはよめさんをもらって、どこかにいつてしまっていた  
とさ。わかるな、話はおわったあとだ。

お話のみじかく、わたしの命はながい。

(一九八三年一月二三日、語り手 キンギ・アイサトウ、ガウン  
デレにて。この話はガウンデレで、老女たちから聞いたという)

## 58 王さまの娘を手にいれたウサギ

ちいさなお話、ちいさなお話。モロコシのちいさな茎。屋敷跡の  
まんなかにある首の筋と肛門。

ある人がいた。この人は野原にいった。この人はどんなある  
いていった。いくと、野原の動物たちがあつまっていた。動物が、  
「こうさせておくれ。さて、いこう。おまえたちはそこにいき、木  
を矢でうち、矢が木をとりぬけたら、王さまの娘といういろなも  
のを手にいれる」といった。

さて、ウサギははしつていくと、木にのぼって、ミツバチにそ  
の木に穴をあけてくれ、矢をうち、その矢がその穴をとりぬけた  
ら、王さまからもらったものをすこしやるといった。ウサギはいく  
と、穴をあけてもらって、その穴に蜜蝋をつけた。うしろのほう  
は、そのままにしておいた。王さまがやってきた。野原の動物たち  
がやってきて、つきからつきへと、矢をうつていった。矢は木を  
とりぬけることができなかつた。ウサギは一番あとにうつといっ  
た。ウサギはやってきて、すわって、矢を一本うった。矢はあたら  
なかつた。ウサギはいくと、もう一本うった。矢は木にあたり、木  
につくった穴をとりぬけ、でていくと、もう一本の木にあつた  
とさ。(こうしてウサギは王さまの娘といういろなものを手にいれ  
た。)

このお話も、おしまい。

(一九七六年八月一六日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガ  
ウンデレにて)

## 59 どのようなにして、リスがライオンの体に癩痕をつけたのか(1)

お話、ちいさなお話。

リスとライオンがいた。ライオンは体に癩痕をつけてほしかった。ライオンとリスはふかい穴をほった。ライオンとリスは薪をもってきて、つみあげた。薪をどんどんつみあげた。ライオンは穴のなかによこになり、まっすぐになつていく。ライオンはきれいにしておきたいと思った。ライオンはよこになつていく。リスは、「親父さん、炭がおまえさんのうえにおちても、うごいてはならない。うごいたら、癩痕がだめになる」といった。ライオンは、「わかった」とこたえた。ライオンはよこになつた。

さて、リスは火をどんどんもやす。薪に火がついた。炭が穴のなかにおちていく。炭はライオンのうえにおちていく。ライオンは炭をはらう。リスはライオンに、「癩痕のために、我慢するのだ。癩痕がよくなるためなのだ。でも、体をうごかしたら、癩痕はよくならない。体が火傷しても、我慢するのだ」という。これほどの固まりの炭がライオンの体にどんどんはいつていく。ライオンは炭をはらい、足でける。リスはライオンに、「癩痕をするには、気をつけなくてはならない。炭をはらわないように。さつさとすまざなければ」という。ライオンは、「なんだって、わしは炭をはらつてい

ない。わしは、気をつけている」といった。ライオンはそれをわされる。リスはこのようにして、炭を穴におとす。ライオンは我慢をする。リスは、「親父さん、我慢するのだ。我慢しなさい。癩痕はもうすこしでおわる。我慢しなさい。我慢しなさい」という。ライオンは我慢しているうちに、体中、火傷をしてしまった。毛は一本ものこつていない。ライオンは穴のなかにたくさん糞をした。リスは、「よろしい。のこるは、頭だけだ。親父さん。目に気をつけておくれ」といった。ライオンは、「わかった」とこたえた。リスは、「親父さん、だまってよこになつていなさい」といった。ライオンは、「よろしい。よこになつていく。よこになつていくとも。よこになつていく。よこになつていくとも」といった。すこしすると、リスは火をどんどんもやす。炭はどんどん穴にはいつていく。穴のなかには、ライオンがいる。ライオンは炭をはらつた。

さて、ライオンは切れ味のわるいカミソリで癩痕ができないということがわかつたのか。

さて、ライオンは穴からおきあがつて、体に火をつけたままそとにでてきた。ライオンとリスは野原にむかつていった。癩痕は失敗した。ライオンは我慢しなければならぬのに、我慢しなかつた。ライオンの体に炭がはいつていき、ひどい火傷をした。我慢できなかった。リスが癩痕をしていた場所にやつてきてみると、たくさん糞がしてあつた。リスがみると、それはまちがひなくライオンの

した糞だとわかった。ライオンは我慢できなかつたとき。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードゥ・サーリ・サイドゥ・ムーサ、レイ・ブーバにて。イーサはレイ・ブーバ地方のダーマ族である)

## 60 どのようにして、リスがライオンの体に癩痕をつけたのか(2)

さて、リスは夜、ある女のところにあそびにいった。リスはそこに三回いった。

さて、その屋敷に老女がいた。老女は、(リスがその屋敷の主人であるライオンのよめさんのところにあそびにくるので)屋敷の主人に、「おまえさんが旅にいくまねをして、屋敷のうらにかくれいなさい」といった。老女はライオンにこのようにいった。

さて、ライオンはでかけていった。ライオンはいくと、かくれた。(ライオンがいなくなつて)リスがいくと、ライオンのよめさんが石ウスでモロコシを粉にしている。

さて、リスはやってくる、すわつた。リスは女のために、太鼓をたたいて、「デイン・デイン・デイン・デイン。デイン・デイン・デイン・デイン」と音をだす。リスは太鼓をたたいている。

さて、ライオンはそれをきいた。ライオンは頭にのせていた荷物

を地面においた。(ライオンがかえってくる気配がする。)

さて、ライオンのよめさんが粉をひいていたので、リスははしつていき、その粉のなかにはいつて、かくれた。ライオンが、「わしのよめさんよ、その粉をすくつておくれ。カユをつくつて、のむのだ」という。よめさんはライオンにうえのほうをすくつた。ライオンはよめさんに、「たくさんすくえ」といった。よめさんは、「なんだつて、それでじゅうぶん。わたしのむこさんよ、たくさんあるではないか」といった。ライオンは、「口のききかたに気をつける。それでは、わたしは自分の手ですくう」といった。よめさんは、「なんだつて、わたしはいや」といった。

さて、ライオンは腹をたてて、粉のなかにかくれているリスをすくいとつた。リスは、「なんだつて、なんだつて、なんだつて、男は村ではたたかわない。野原にいつて、たたかうのだ」といった。リスはライオンにこのようにいった。

さて、リスとライオンはでかけていった。ライオンはリスを自由にした。リスとライオンは野原にいつた。リスとライオンはいくと、ここから市場(レイ・ブーバにある市場をさす)くらいのところについた。

さて、ホロホロチヨウがバサバサととんでいつた。ライオンは、(ホロホロチヨウの羽についている模様をみて)「あのような模様をだれがつくれるのか」といった。リスは、「あれならわたしにで

きます」といった。ライオンはリスに、「それではいこう」という。ほんとうのこと、リスはライオンのことをうらんでいる。まだ、たたかいはおわっていないかった。リスはライオンとたたかうつもりだ。すなわち、女の主人はそのことを村にいるときからわすれてしまっている。ライオンはそんなことをわすれてしまっていた。

さて、リスとライオンはでかけていった。リスとライオンは野原についた。リスは、「ここについたから、おまえさんは穴をほるのだ。薪をあつめるのだ。おまえさんは穴にはいって、よこになるのだ。わたしはおまえさんにあのような文様をつけてあげる（直訳すれば、おまえさんにあのような草であんだ盆をつくってあげよう）」という。

さて、ライオンはふかい穴をつくって、そのなかにはいって、よこになった。ライオンは薪をもってきた。リスはやってくると、その薪をとり、その穴のなかに入れた。草をもつてくると、そのうえにおいた。火をもってきた。火がついた。リスは、「おまえさんの体に火がついても、うごいてはいけない」といった。ライオンの体がやけていく。リスは、「うごくな。うごいたら、火傷をする」といった。なんと、火はどんどんライオンの体をやけていく。そのうちに、ライオンは穴のなかですっかりやけてしまった。

さて、リスはすわった。ハイエナはおきあがって、やってくる。リスはハイエナに、「おまえさんはおかずを手にいれた。おまえさ

んにおかずをだしてやった。おかずのライオンのところにつくと、おまえさんは胃の内容物、ウンコのはいった胃のなかにはいって、たべるのだ。わたしは、胆嚢にはいって、たべる」という。すなわち、リスは胆嚢のなかにはいって、そこにいた。ハイエナは胃の内容物、ウンコのはいった胃のなかにはいった。

さて、そうしているうちに、リスのころしたライオンの親戚のものがハイエナとリスのところにやってきた。そこに、ライオンが死んでいた。ライオンの親戚のものはライオンの腹をひらき、胆嚢をほかした。ほんとうのこと、リスはそのなかにいた。

さて、リスはそとにでると、体をあらって、すっかりきれいになると、やってきて、「おまえさんたちはどうしたのか」という。ライオンの親戚のものたちは、「親戚のものにながおこったのかわからない」という。リスは、「その胃をひらいてみなさい。なにがころしたかわかるだろう」という。ライオンの親戚のものたちはライオンの胃をひらいた。そこに、ハイエナがいて、なにかをたべている。ハイエナは、「なんだって、なんだって、なんだって。さて、さて。おまえさんたちに、だれがころしたかおしえてあげよう」といった。リスは、「なんだって、こいつをころせ。こいつが、ころしたのだ」といった。（ライオンはハイエナをころしてしまった）

さて、リスはいくと、あちらのほうにすわった。リスは、「さて、わたしはリス。おまえさんたちは、わけもなくハイエナをころして

しまった。ちいさなものが、おおきなものをころした。おまえさんはだれがライオンをころしたか知っているといっていた。おまえさんは、だれがライオンをころしたか知っているといっていた。おまえさんは、だれがライオンをころしたか知っているといっていた」といったとき。

この話はこういうこと。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサは三五歳。この話は自分の父親からきいたという)

## 61 ウサギとサル

ちいさなお話、ちいさなお話。

ウサギとサルがいた。

さて、ウサギとサルがいた。ウサギとサルは野原にいて、話をしている。ウサギとサルはそこにいつて、すんでいる。

さて、ウサギはサルに、「友よ、ぼくは日がのぼるときから、日はずむときまで、どこもみずじつとしておられる」という。

さて、サルはそんなことができないといった。ウサギはサルに、「きみにそんなことはいえない」という。

さて、サルはウサギに、「友よ、ウサギよ、ぼくも、日がのぼる

ときから、日はずむときまで、体をかかないでおられる」といった。

さて、ウサギはサルに、「きみはうそをついている」といった。さつそく、サルはウサギに、「きみは正気だ。それでは、それができるかやってみよう」といった。二人はそれをやりはじめた。

さて、ウサギは一つの耳をまえのほうに、もう一つの耳をうしろのほうにして、顔をしたにしてすわっている。うしろをみないし、左も右もみない。

さて、ウサギはそうしている。サルもすわっている。ウサギもサルも、だまってすわっている。

さて、ウサギは体をうごかすこともない、体についている寄生虫をさがすこともしない。ウサギとサルは、だまってすわっている。

さて、ウサギは目をうごかした。ウサギとサルはこのようにして、昼くらいまですわっており、昼過ぎの礼拝のときがちがづいていった。

さて、ウサギはうまいやりかたをかんがえだし、「おい、サルよ」といった。サルはそれにこたえた。ウサギは、「友よ、サルよ」という。サルはそれにこたえた。ウサギは、「ぼくはきみにいつておく。ぼくは預言者たちの時代に戦争にいった。ぼくは大声をあげた。ぼくは弓でここをうたれかけたので、にげる。矢がぼくにむかってとんでくるので、にげる。このうえからくるので、こちらに

きて、にげる。このうえからくるので、こちらにきて、にげる。でも、矢が太股にささった」といった。ウサギはこうして、うしろをみた。ウサギはうまくやって、四方をみてしまった。

さて、ウサギはこれですんだ。

さて、サルはどうしたらよいのかわからなかった。ウサギは、自分のやりかたがサルにわからないようにといった。ウサギはこのようにして、サルをだました。ウサギはそうして、じっとしてるようにして、体をかいた。

さて、サルはすわっている。サルはなんとかして、ウサギをだましてやろうと、かんがえて、「ほくも、いった。友よ、ウサギよ。ほくも、矢をうちにいった。矢がここにとんできた。狩人があちらでとびはねると、ほくはこちらににげる。狩人があちらにいき、矢をいると、ほくはこちらににげる」といった。サルも、体をかくことができた。サルは、「みてみる、矢はここにささった。太股にささった。矢は体全体にささった」という。サルは体中を満足するまにかいたとさ。

こうして、ウサギとサルはすきなようにしてしまったとさ。

(一九七二年一月二四日、語り手 パーサーウオ村出身のアブド  
ウッライイ・オスマーン、マルアにて)

## 62 ハリネズミとウサギ

ハリネズミとウサギが旅にでかけて、どんだんあるいていき、ある村についた。その村につくが、とまるところがなかったので、村長のところにいき、とまらせてくれとたのんだ。村長はとまる場所をやり、食べ物をつくり、客にもっていった。

さて、村につくずつとまえて、ウサギはハリネズミよりさきに、「ほくの名前は『客』という。きみの名前はなんというのか」といっていた。

さて、ハリネズミは、「わたしの名前はハリネズミという」といっていた。

さて、ハリネズミとウサギが村につくと、村長は食べ物をもち、客のところにもっていった。

さて、村長の奴隷たちは食べ物を客のところにもっていった。奴隷たちはいくと、ハリネズミとウサギのとまっている小屋の入り口にいき、「ここに食べ物がある。客のためにもってきた」という。ウサギが食べ物をうけとった。

さて、ハリネズミが、「いっしょにたべるのだな」という。

さて、ウサギはハリネズミに、「きみは『客』ではない。ほくは『客』だ。ハリネズミのはくれない」という。

さて、ウサギはそれを自分のものだといって、たべてしまった。

ハリネズミはなにもたべずにいた。真夜中、お腹がすいてきたので、ハリネズミはウサギの服をとり、それをきた。ウサギが服をぬぐと、ハリネズミはそれをとり、きて、サツマイモの畑にいき、サツマイモをぬすんで、たべた。

さて、ハリネズミはとまっているところにかえつてくると、ウサギの服をぬぎ、おいておいた。そのつぎの朝、人びとが畑にいくと、サツマイモはみんなほりおこされていた。

さて、村人たちは客のところへやってきた。やってくると、ウサギの服がよごれていた。村人たちはウサギをつかまえると、たたいた。

さて、村人たちはウサギをつかまえて、たたいた。そうして、ハリネズミをつかまえて、たたいた。

さて、ハリネズミとウサギは家にかえつていく。ハリネズミはかえつていくと、道中、鍛冶小屋に仕事をしにいく人たちにであった。

さて、ハリネズミはこの人たちに、「わたしのあとから、フィゴをもつたものがやつてくる。そのフィゴをきりとればよい。それをあげる」という。

さて、ハリネズミはそこをとりすぎ、さきについてしまった。ウサギがやつてくる。

さて、ウサギがそこにつくと、鍛冶小屋にいく人たちが、「ハリ

ネズミがわたしたちのところへきて、おまえさんの頭のうえにあるフィゴをきりとるようにといいた」という。

さて、人びとはウサギの耳をきりと、ウサギをはなした。ウサギはいそいで、ハリネズミのさきまわつていった。

さて、ウサギは野原の動物をとりに行く人たちであった。

さて、ウサギはこの人たちに、「ほら、わたしのあとから矢がやつてくる。背中へ矢をせおった人がやつてくる。わたしはその人に矢をはこばせている。わたしはその矢をおまえさんたちへあげる」という。

さて、ハリネズミがやつてくると、人びとはハリネズミの背中についている針をすつかりとってしまった。

さて、ハリネズミはどんどんあるいていき、ウサギのさきまわつた。ハリネズミはあるいていき、とおくにいくと、またしても人びとにであった。ハリネズミはこの人たちに、「わたしのあとから、獲物がやつてくる。おまえさんたちへあげる」という。人びとはあるいていく。人びとはウサギにであった。

さて、人びとはウサギを矢でうった。人びとは肉をとり、それをもつていつてしまった。

さて、ハリネズミはひとり家で家にむかつてかえつていく。どんどんかえつていく。あるいていくと、太鼓の音がして、人びとがおどつていのがきこえた。

さて、そこにイヌもいた。ハリネズミは覚悟して、そこにいった。ハリネズミは、人びとがおどっているちかくにいき、たちどまり、その音をきいていると、イヌがやってきて、つかまり、どこかにつれていかれてしまったとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一日、語り手 アブドゥッラーイ・サイドウ、レイ・ブーバにて。アブドゥッラーイはガルアでうまれた、フアリ族。この話は、母親からきいたという)

### 63 野原の動物たちの相撲

さて、この話はクモのよめさんコーキとクモの話。クモはよめさんといた。クモとコーキがいた。コーキはクモのよめさんだ。クモはコーキのむこさんだった。コーキのむこさんはクモだ。糸をつむぐクモだ。べつのクモもいるな。さて、クモなのだ。クモが物語にでてくるのだ。こいつらは、策略をめぐらす。クモとそのよめさんは自分たちの屋敷をつくった。

さて、クモとよめさんは野原の動物とゾウと人とハイエナとライオンと野原にいる。日が暮れると、動物たちはあそぶ。

さて、動物たちはでかけていった。動物たちはあそんでいる。ロバやウマたちもみんないる。動物たちはあそびにいく。日が暮れる

と、動物たちはあそびにいく。さて、クモもたちあがり、でかけていった。動物たちはあそんでいる。

さて、動物たちはいくと、相撲をとる。動物たちは相撲をとり、たおされたものをころし、たおしたものにわたす。たとえば、わたしがおまえさんをたおすと、動物たちはおまえさんをころし、わたしにくれるというわけだ。おまえさんが、わたしをたおすと、おまえさんはわたしをころし、わたしの体をみんな手にいれる。動物たちはたおされた動物をころす。ゾウがべつの動物をたおすと、動物たちはそのたおされた動物をころし、ゾウがそれをたべる。ハイエナが相撲をして、べつの動物をたおすと、ハイエナはたおした動物をたべる。野原で、動物たちはそうする。

さて、動物たちがあつまってきた。動物たちは相撲をする。おまえさんが相撲をとり、相手をたおさず、相手にたおされないなら、動物はだれの首もきらず、おまえさんになにもくれない。さて、動物たちはいる。動物たちは、「クモよ、どういうことなのだ。おまえさんはやってきて、おおきなゾウをみると、ゾウと相撲をとるといふが」という。動物たちは相撲をとり、相手をたおす。ゾウはクモをつかんだ。クモはたおれた。相手をたおせば、相撲はおしまひ。わかつているとおもうが、ゾウは死んだものをたべない。

さて、動物が死んで、不浄になると、ゾウはその動物をとらない。ゾウは自分で動物をころして、たべる。

さて、クモは死んだまねをして、息をこらした。ゾウはやってくと、クモをさわったけれども、死んでいるようにみえた。

さて、ゾウは不浄な肉はたべないといった。

さて、ゾウはどこかにいってしまった。動物たちは、「クモは死んでしまった」という。動物たちはあちらにもどつていき、さきのほうにいき、相撲をしている。さて、みると、ゾウは相撲をとったけれども、ほかの動物を手にいれられなかった。

さて、ゾウがもどつてくると、動物たちは、「でも、気の毒に。

ゾウよ、おまえさんは相手をたおした。みんななかを手にいれた。おまえさんは、クモをたおしたのに、クモを手にいれられなかった」といった。

さて、動物たちはクモのところにもどつていき、何度もさわってみた。クモは死んでいるようにみえた。クモは動物たちがとおくにいくのを見ると、体をすこしずつひきずつていった。動物たちがとおくにいくと、はしつて、屋敷にかえつてきて、小屋にはいった。ゾウはクモをおいておいたほうをみて、「いって、みたほうがよい。あいつの耳でもきつておいたら、おおきな損失にはならない」といった。

さて、ゾウがやってくると、クモがいなかった。ゾウは、「なるほど、クモはだまして、にげたな。よし」といった。クモは手をおつて、よこになって、薬をつけている。さて、クモは小屋のなかで

ねている。クモはゾウと相撲をし、ゾウはクモをたべず、どこかにいってしまった、クモはうまくやったといった。よめさんは、「ゾウと相撲したのか」といった。

さて、クモは、「そうだ」といった。よめさんが、「おまえさんころさなかったのか」といった。クモは、「ころされなかった。こういうふうにして、ころされなかった。わしは、死んだまねをした。ゾウが不浄なものをたべないのを知っているからだ」といった。よめさんが、「なるほど」といった。ゾウは、もどつてきて、「どうしたら、クモを手にいれることができるだろう」といった。ゾウはくやしがつている。ゾウは、「なんとかなる」という。ゾウは、「なんとかなる」という。

さて、ロバはゾウに、「ほつておきなさい。わたしは村にはいる。おまえさんたちはだれも村にはいらぬのか。おまえさんたちが村にはいると、ころされてしまう。わたしにまかせておいておくれ。いって、クモをつれてきてやる」といった。ゾウは、「クモをつれてきてくれたら、わしはわしらのうちから一匹をころし、おまえさんにやる。おまえさんがたべればよい」といった。ロバはほかの動物とたたかう力はない。けることしかできない。ロバは、「よろしい」といった。ロバがいくとき、動物たちはそこにいる。さて、ロバはたちあがると、やってきた。雨がふつてきた。黒雲がでてきて、雨がふりそうになった。ロバはパッタ、パッタ、パッタとやっ

てくると、クモたちの小屋のちかくまでやってきた。

さて、クモは小屋のなかにいる。

さて、よめさんが、「クモよ、クモよ、みてみなさい。ロバがやってきた。雨がふっている。ロバが小屋にはいつてきて、糞をしてくれでもしたらこまる。ロバをおいはらっておくれ」といった。

さて、クモは、「ロバをおいはらえ、コーキよ。ロバをおいはらえ」といった。

さて、ロバはクモの小屋にだんだんちかづいてくる。クモは、「ロバをおいはらえ」という。

さて、コーキは杖をもった。

さて、コーキはロバの背中をたたいた。

さて、ロバはみんなが油であげてつくるマメの揚げパンの糞をした。糞はポトポトポトと地面におちてきた。コーキは、「揚げパンだわ。なんとなんと」という。

さて、コーキは、「クモよ、きて、ロバの糞をみてみなさい。揚げパンだわ」といった。

さて、クモは、「コーキよ、ロバをたたいて、小屋のほうにこさせなさい。たたいて、小屋のほうにこさせなさい。たたいて、小屋のほうにこさせなさい」といった。クモとコーキは食べ物をみただではないか。コーキはもどつていくと、ロバをたたいて、小屋のほうにこさせようとする。コーキはロバをたたいた。ロバは揚げパンの

糞をポトポトとする。クモは、「しっかりロバをたたけ」という。コーキたちがロバをたたくと、ロバがこのようにして、お尻の穴の片方をひらいて、たちあがり、糞をおとす。コーキはロバをたたいている。

さて、コーキがたたいた。

さて、ロバはお尻の穴のもう一方をひらいたが、なにも地面におちなかった。

さて、クモがいき、ロバをたたいた。揚げパンがすこしできてきた。お尻の穴はひらいている。クモはみている。

さて、クモが、「コーキよ、こい」といった。

さて、コーキは、「いや、いけない」といった。

さて、クモはたちあがり、揚げパンをだそうとする。ロバはお尻の穴をひらいている。クモはお尻の穴に手をいれる。すると、ロバはお尻の穴をとじて、はしった。

さて、ロバは、はしつていく。

さて、ロバは、はしつていく。

さて、ロバは、はしつていく。クモは、「コーキよ、ナイフをもつてこい。コーキよ、ナイフをもつてこい」といった。ロバはお尻の穴にクモの手をさしたままはしつていく。ロバはクモをつれてはしつていく。コーキはナイフをとると、はしつていった。コーキはいくと、クモの腕をしっかりとつかまえて、きつてしまった。

さて、ロバはクモの手をお尻の穴にはさんだままいってしまつた。ゾウは、「いったか」といった。ロバは、「クモのところについて、クモをみた」といった。ゾウは、「おまえさんはみていない」といった。ロバは、「ほんとうだ。ここにその証拠がある。クモの手をもちなさい」という。ゾウはそれをみて、「おまえさんはほんとうのことをしている。どうも、どうも、どうも」といった。

さて、ゾウはいくと、動物を一匹つかまえて、ロバのためにころした。

さて、クモは腕の傷をなおそうとしている。そこで、クモはでかけていった。クモはいくと、オオトカゲをみつけた。ある動物がクモのためにオオトカゲをとっておき、それをひっぱってくる。

さて、クモはやってくると、オオトカゲをとり、たべてしまった。クモは腕の傷をなおすのだといった。オオトカゲはトカゲにいて、オオトカゲはトカゲよりすこしおおきい。オオトカゲは草原にいる。

さて、クモはいくと、よその動物のもっているオオトカゲをころして、たべた。クモはオオトカゲをたべた。自分はたべておきながら、よめさんにたべないよといった。女はたべない、男がたべるといった。自分がオオトカゲをたべると、自分は薬をたべたことになる、自分は傷をなおそうとしているのだといった。

さて、クモの腹はふくれていった。

さて、よめさんは、「さて、どうする」といった。自分をイスラム教の先生の屋敷につれていって、みてもらうのだといった。手の病気がなおっていない。クモとよめさんは、どんどんすすんでいく。

さて、よめさんはクモをつれた。クモは家のそとにでるのがいやなのだ。ハイエナにつかまるかもしれないからだ。よめさんは、クモを半截ヒョウタンのなかにいれ、蓋をしておいた。クモとよめさんは、どんどんすすんでいく。鳥が、「どうなのだ」という。

さて、鳥がクモのよめさんにいった。

「コーキよ、どこに行く」

コーキがいった。

「クモは自分をみてもらうために、ある屋敷までわたしを使い

鳥はいう。

「クモのところに行ったら、クモはオオトカゲをたべたので、

死なないし、おきあがれないといいなさい」

さて、コーキは、「なんだって」といった。鳥は、「そうなんだ」といった。コーキはさきに行く。

さて、鳥はもどってきて、コーキにいった。

「コーキよ、どこに行く」

コーキがいう。

「クモがわたしをイスラム教の先生の屋敷まで、わたしを使い  
にだした」

鳥がいう。

「クモのところに行ったら、クモに、

オオトカゲをたべたので、いきておれないといいなさい」

さて、クモは、「ヤーイヤー・ハイイヤー、なるほど、病人は  
ころしてしまえということか。おきあがれないとね」という。

さて、鳥がいった。

「コーキよ、どこに行く」

コーキがいった。

「クモは自分をみてもらうために、ある屋敷までわたしを使い  
にだした」

鳥がいう。

「クモのところに行ったら、クモに、

オオトカゲをたべたので、いきておれないといいなさい

アッラーのほかにしたがるべきものはない。

なるほど、その病にかかったら、死ぬだけだ。

ゴニン・サーファイ」

こうして、コーキとクモはすすんでいく。クモはいきておれなかつ  
た。よめさんはイスラム教の先生の屋敷までいかなかった。クモは  
半截ヒョウタンのなかで死んでしまったとき。

それで、おしまい。

(一九八三年一月二一日、語り手 ハッジャ・ラブラトゥ・イス  
フ、ガウンデレにて)

## 64 クモと畑

お話、お話。ジャツラ・タボーイェル。

クモは畑をもっていた。クモは畑をつくった。キリンやカナンガ  
(未同定) がたくさんいた。クモは畑をつくると、オクラをうえた。  
クモはオクラの畑をつくると、そのへんをあるきまわり、かえつて  
くる。オクラの畑をあるきまわると、クモは目にアイラインをつけ  
て、雌ヒツジとメンドリと雌ウシと雌ヤギと結婚する。

さて、ある日、クモはたちあがった。

さて、クモはメンドリに、「いって、畑の番をしなさい」といっ  
た。ニワトリは畑にいくと、クモが種をまいているときから、畑を  
ほじくりかえす。

さて、クモは、「おまえは二度と畑にやらせない」といった。

さて、メンドリは、「よろしい」といった。

さて、ある日、クモは雌ヤギに、「いって、畑の番をしなさい」  
といった。雌ヤギはいって、畑の番をした。雌ヤギは畑の番をしに  
いくと、畑にうわっているものをぬきとっていった。クモは、「お

まへは二度と畑にやらせない」といった。

さて、ある日、クモは雌ヒツジを畑にやらせた。クモは雌ヒツジに、「いって、畑の番をしなさい」といった。雌ヒツジはいくと、そのへんをあるきまわり、うえてあるものを一本ずつぬいていった。クモは、「よろしい」といった。ある日、クモは雌ウシにいて、畑の番をしておくれといった。雌ウシはいくと、畑にはいて、畑の作物のうえのほうをとってしまった。作物は、もうすこしで、なくなりかけていた。

さて、クモは、「よめさんたちを二度と畑にやらせない」といった。クモはすわった。クモはよめさんたちを二度と畑にやらせないことにした。クモはよめさんたちとすんでいる。

さて、クモはでていき、かえってくる。

さて、クモはやってくる、シラミをとり、シラミを自分の畑にしておいた。クモは土をほり、そこにシラミをいれておいた。体につくシラミだ。クモは穴をほり、そこにシラミをいれておき、シラミが畑の番をするといった。

さて、クモは自分の着物についているシラミを畑の土のなかにいれておき、シラミに畑の番をもらうといった。

さて、クモはおちついた。

さて、クモは畑にいき、いくつも穴をほってかえってくる。クモはやってくる、よめさんたちに、「食べ物をさがして、シラミはな

ちにやりなさい」という。よめさんたちはお腹がへっているので、食べ物をさがしにいけない、じつとしているという。

さて、クモがいくと、サルたちが畑にはいていた。

さて、シラミはサルたちという。

「畑に手をだすな。」

畑に手をだすな。ジャルマナ。

それはクモのオクラ、クモのママ。ジャルマナ。

クモのオクラ。

手をだすと、クモはおまえたちをつかまえる。

ジャルマナは、おまえたちをしばらくあげる。

わたしはしらない」

さて、サルはいつてしまう。サルはクモがいるものとおもっている。あくる日、クモがやってくる。そのつぎの日、クモはやってくる。

さて、その日まで、サルはどうなっているのかわからなかった。

さて、サルはシラミたちのそばにやってきて、作物をとって

る。

さて、クモはすわった。クモはそのへんをまわって、「どうした

のだらうか」といった。

さて、クモはいくと、「なにが畑にはいつたのか」といった。

さて、ある日、クモはいくと、畑のものをぬすんだ。シラミはな

にもいわなかった。サルは畑にいる。サルは、「あれは、クモの作業ではない。あそこに声をだすものがある。みてみる、クモがやってきた。わたしは畑のそばにいる。わたしはクモの姿がみえなかった。クモは作物をとった。いま、クモはどこかにいってしまった。それなのに、なにかが声をだしている」という。クモはいつてしまった。すこしさきに、クモはかえってきた。

さて、サルたちはやってきて、畑にはいると、作物をとる。

さて、シラミがいう。

「畑に手をだすな。」

畑に手をだすな。ジャルマナ。

それはクモのオクラの畑。

それは、クモのオクラ。

手をだすと、クモはおまえたちをつかまえる。

おまえたちをしばらくあげる。

畑に手をだすな。

畑に手をだすな。ジャルマナ。

それはクモのオクラの畑。

それは、クモのオクラ。

手をだすと、クモはおまえたちをつかまえる。

おまえたちをしばらくあげる」

さて、クモはくるとシラミに、「なにもいうな」といった。その

日やってくる、クモはシラミをとった。

さて、クモはマメがなくなっていたので、シラミをつかまえ、つぶしてしまった。ほんとうのこと、クモはカナンガをつかまえ、手にいれたかったのだ。クモは、「一生懸命になって、カナンガを手にいれる。カナンガを手にいれ、肉にしてやる。なるほど、おまえたちはわるい。おまえたちはあいつらの手助けをするのか。なるほど、いいものがやってくるというのに、食べ物やってくるのに、おまえはずつとその動物がこないようにしている」という。

さて、クモはいくと、シラミをつかみ、つぶした。シラミをつかまえ、つぶすと、動物は畑にはいつて、どんどん作物をたべていった。クモはやってきて、動物をころそうとするが、できなかった。なにも、いうものがなかった。動物はやってくると、畑にはいつた。畑には作物がある。クモはいつて、一生懸命になった。クモは畑につくと、大声をあげる。動物はいつてしまう。クモは畑につくと、大声をあげる。動物はいつてしまう。クモはオクラを手にいれられなかった。マメも手にいれられなかった。野原の動物もつかまえられなかった。クモは家にかえり、ないている。よめさんが、「どうしたの。どうしたの」という。クモは、動物がやってきて、自分の畑のものをたべた、王さまのウシがやってきて、自分の畑のものをたべたといった。

さて、クモたちがかけていった。いくと、王さまがいた。王さ

またちは、「どうしたのだ」といった。クモたちは、「王さまはウシをつれていって、わたしたちの畑の作物をくわせた」といった。人びとは畑にいくが、ウシの足跡がなかった。クモは王さまに町をわけてもらわなければならないといった。クモはニワトリをかくしておく。

さて、クモはよめさんたちにやせたかどうかたずねた。クモはよめさんたちに畑の作物をたべさせているといった。よめさんがやせたのは、食べ物がたらないためだといった。ウシに作物をたべられてしまったためだといった。

さて、王さまたちはクモをよび、いって、みて、「よろしい」といった。王さまたちはクモのよめさんたちをよんだ。クモのよめさんたちは、食べ物がないといった。ほんとうのこと、クモはなにをしたらよいか知っている。クモたちはやってくる、王さまをよんだ。王さまたちは町をクモにわけてやった。クモはすわると、「一人一人順番に王さまにならせる、ニワトリから王さまにならせよう。よいことは、ニワトリにさきにやらせよう。そうでないと、話はおわらない」といった。

さて、ニワトリは、「よろしい」といった。王さまはクモのよめさんたちを王さまにするという。ニワトリは覚悟した。クモはニワトリをつかまえると、ころして、たべてしまった。ニワトリはクモのよめさんだった。クモはニワトリを王さまにしたといった。クモ

はほんとうのことをだれにもいわなかった。クモは畑にいくという。

さて、クモはどんどんすすんでいった。ある日、クモはいつて、雌ヤギをとった。クモは、「おまえさんを手にいれた屋敷につれていく」といった。クモはやってくる、よめさんたちに、「ニワトリはことわらず、畑についてきてくれた。わかるな。わしはおおきな屋敷を手にいれたので、そこにニワトリをつれていった。ニワトリはそこで、腹いっぱいたべている」といった。

さて、雌ヒツジはあるいていく。雌ヒツジがやってくると、クモは雌ヒツジをつれて、どんどん畑にあるいていく。クモはいくと、火をもやした。やってくる、クモは雌ヒツジをころした。クモは、「わしはおまえをころす。というのは、もっとおおいものを手にいれるためだ。ニワトリにも、こうしてやった。そうしなければだめだ」といった。クモは雌ヒツジをころした。二日のあいだ、クモは雌ヒツジの肉をたべている。クモは雌ヒツジの肉をすっかりたべてしまうと、家にかえってきた。よめさんたちが、「どうしたの」という。クモは、「わしはわしの畑でがんばっている。雌ヒツジはあの屋敷をみると、わしに二日とまっていけ」といった。わしは雌ヒツジといっしょだった。おまえさんたちは飢えて死んでしまうかもしれない。あそこの屋敷では、くいすぎでしんでしまう。わしはなにもたべない」という。雌ヤギがいくといった。クモは雌ヤギと

いっしょにいくと、雌ヤギをつかまえた。雌ヤギは、メーメーメーとなく。クモは、「なにをいっているのか。ほかのよめさんにもおなじことをした。わしはみんなを王さまの屋敷につれていった。おまえはそこにいる。おまえが大声をあげても、きこえるかい」といった。

さて、クモと雌ヤギはあるいていく。クモは、「さて、わしはおまえをここでころす。わしは王さまというものがどういものかみせてやる」といった。

さて、雌ヤギは大声をあげてないで、クモからにげた。雌ヤギはクモからにげた。雌ヤギはどうしたかというところ、雌ウシのところ、雌ウシは、「わかつておくれ。じつは、クモはわたしをころすだけ」といった。雌ウシは、「ころさない」といった。雌ヤギは、「クモは王さまの屋敷にいくというのではないの。王さまの屋敷とは、ほんとうのこところす場所のこと。クモは火をもやす。クモはわたしをそこにつれていく」といった。

さて、クモはいくが、よめさんたちがいなかった。雌ウシもいなかった。

さて、雌ウシはどこかにいってしまった。

さて、人びとは、「クモは盗人。クモは盗人。クモはぬすんでいないのか」といった。クモは、「わしはぬすんでいない。わたしの畑ではないか」といった。

さて、人びとは、「そういうことなら、まえから、自分の畑だといつてうそをついていたのだ」といった。人びとはクモにやった屋敷をとりかえした。

さて、クモはどこかにいってしまった。雌ウシをつれていったのかどうか、わからない。どこかにいってしまったとき。

お話は、おしまい。そういうこと。

(一九八三年一月二二日、語り手 ハッジヤ・ラブラトウ・イスフ、ガウンデレにて)

## 65 クモのダン・アウターとそのよめさん

ある男がいた。その男はダン・アウターという。ダン・アウターがいた。雨期がやってくると、村中の人が畑をたがやした。雨期がやってくると、学校の生徒たちはみんな畑をたがやした。雨期がやってきたら、そうした。

さて、ダン・アウターにはよめさんがいる。クモとダン・アウターは畑をたがやしている。クモにはコーキというよめさんがいた。ダン・アウターはどうしていたかというところだ。クモはよめさんのコーキたちといっしょにいる。

さて、ダン・アウターは自分のよめさんという。

さて、畑をたがやすときがきた。畑をたがやすときがくると、人

びとはでかけていった。クモたちがいる。クモにはよめさんが四人いる。おきると、でかけていく。クモは腰につけるピースのかわりになる草をとると、よめさんたちにやった。クモは腰につけるピースのかわりになる草をとり、よめさんのところにやってくる。」「わしはおまえがすきだ」という。クモは紐で、しろい宝貝のかわりの草をよめさんの腰につける。べつのよめさんがやってくる。」「わしはおまえがすきだ」といい、宝貝のかわりの草をつけてやり、「おまえだけがすきだ」という。

さて、クモはよめさんの腰に宝貝のかわりの草をつけてやる。クモは四人のよめさんみんなに、紐につけた宝貝のかわりの草をやった。クモは、「おまえたちが畑にやってくる、畑をたがやしているとき、腰につけるピース（草でできているのに）はわしのもの。わしはおまえのことを自慢している。おまえたちが仕事をするとき、わしはおまえたちのことを自慢におもっている」といった。ほんとうのこと、よめさんたちはだれも、どういふことかわからなかった。女たちは、どんだんたがやしていく。夜があけて、朝になると、女たちは畑にでかけていった。

さて、クモがやってきた。クモはいう。

「わしこそ、宝貝の持ち主。

わしこそ、紐の持ち主。

わしこそ、宝貝の持ち主。

わしこそ、腰につけるピースの紐の持ち主」

さて、クモはよめさんたちをみる。どのよめさんも、クワをもつと、どんだん仕事をしていく。アッラーは力のあるお方。どのよめさんもたいしたものだ。クモはよめさんたちのことをほめる。どのよめさんもたちあがる。みんな仕事をする。クモは一人だけをほめているのだという。（どのよめさんもその気になって仕事をする。）クモはよめさんたちにほんとうのことをいわない。

さて、ある日、よめさんたちはたちあがり、やってくる。畑からたちあがり、やってくる、川をわたっている。

さて、よめさんのうちの一人が、「ああ、たくさん汗をかいた。水浴びをする」といった。女は水浴びをするためにたちあがり、いくと、そのへんをあるき、着物をぬいだ。

さて、女は腰につけている紐をはずすと、かくしておいた。女は水浴びをしている。ほんとうのこと、女たちはそれをみた。

さて、女たちは水浴びをした。女はそのへんをあるき、紐を腰にまいた。もう一人がいき、それをみて、すわっている。女はなにもいわない。女は家にかえると、クモに、「ああ、クモよ、わたしはきょうだれその腰に紐がついているのをみた。おまえさんは、わたしにしかくれないといっていたのに」といった。クモは、「なんだって、おまえはうそをいっている。ちよつとみただけで、おまえはそんなことをいうのか。わしはやっていない」といった。

よめさんはいくと、すわった。おちついた。つぎの日、女たちはたちあがり、水浴びにやってくる。

さて、女たちは水浴びをするとき、おたがいに紐をみせあう。

さて、一人が自分の紐をとった。女はそれをかくしておき、「なんだって、そういうことか」といった。

さて、女は、「だれそれよ、なるほど。おまえさんにもあるのね」といった。もう一人の女が、「なんのこと」といった。女は、「おまえさんはビーズのついた紐をもっているか」といった。女は、「わたしにも、わたしの紐がある」といった。女たちはみんな紐をはずして、みせあった。だれも、「ほら、これはわたしのもの」という。

さて、女たちは紐をしばった。女たちは家にかえると、その女もおこっている。クモがかえってきた。いつも、家にかえってくる、みんな食べ物やさぐす。クモはかえってくると、「おまえたち、畑でなにかあったのか。どうしたのか」という。どの女もおこっている。クモが家にかえってくると、どの女も、紐をとると、クモになげる。どの女も、紐をとると、クモになげる。

さて、クモが、「おまえさんたちはきょうなにかあったのか」といった。よめさんの一人は、「なにかがおこった。おまえさんはわたしに紐をくれて、わたしにだけくれたといった」といった。もう一人が、「おまえさんはわたしに紐をくれて、わたしにだけくれたといった」といった。一人が、「わたしたち四人みんなにくれてい

たのね。なるほど、おまえさんはやってくる、おまえさんはビーズの持ち主、紐の持ち主だという。そのときからおかしいとおもいだした。なるほど、おまえさんがそういうから、わたしたちは一生懸命に畑をたがやした。おまえさんは、よく畑をたがやすものが、一番すきなよめさんで、その人にやるのだといった」という。

クモは、「それで、どうしたというのか。わしはそういうわなかつた。そういうことなら、わしはおまえたちをみんな離縁する」という。クモは、よめさんたちを離縁するといった。そういうことがおこって、どうなったのか。よめさんたちは、「離縁しておくれ」といった。よめさんたちは自分たちがクモのために畑をつくってしまったのをしっている。クモはしらない顔をしている。

さて、ダン・アウターのよめさんが夫に、「あなた、わたしたちはみんないって、畑をつくった。おまえさんはすわっていて、畑をつくらない。それでよいの」という。ダン・アウターはかけていく。でかけていくと、一日中いる。ダン・アウターは自分のクワを泥のなかにうめておく。家にかえってきて、「きょう、わしは一日中仕事をしていた」という。よめさんが、「一日中仕事をしていたって」という。ダン・アウターは、「うん」という。よめさんが、「どういふことなの」という。

さて、ダン・アウターは、「ベッドをあたためて、ぬるのだ。モロコシを刈り入れるときには、いっしょに刈り入れるではないか」

という。ダン・アウターはベッドのところをやつてくると、よこになる。つぎの朝、でかけていくと、午前中いっぱい、なにもせずすすわっている。午前中には、家にかえらない。よめさんが食べ物をつくった。よめさんが食べ物をつくり、畑にもつていくと、ダン・アウターがいた。ダン・アウターはクワを泥のなかにうめていた。ダン・アウターはつかれたという。よこになっている。よめさんが、「わたしの夫よ、あなたはいつ泥で家をつくるの」という。ダン・アウターは、「ベッドをあなたのために」という。よめさんは夫のいうまま、ベッドをあなたのためにやる。泥でできたベッドなので、したから火であたためなくてはならない。そうすれば、あたかくくなる。ベッドをあたためて、そのうえにねる。クモのよめさんたちはでていってしまった。ダン・アウターのよめさんはいる。よめさんは食事をつくるので、どうということはない。クモは畑ができたので、自分だけで収穫物をたべようとして、よめさんたちをおいだした。ダン・アウターのよめさんは、「クモのよめさんたちはそれぞれの実家にかえっていった」といった。ダン・アウターはたがやさなかった。もうすこしで、収穫物をかりとるといふときになった。ダン・アウターはベッドをあたためて、ねる。収穫物をかりとるときがやってきた。よめさんが、「わたしたちは収穫物ばかりとりにいかないの」といった。ダン・アウターは、「おまえの父親に畑がないのか。それとも、おまえは父親の畑でできたものを

たべにいくのか。おまえはいま、父親のところにいけばよい。おまえたちは、まず父親のものをたべればよい。畑に作物がきたら、まずおまえたちは父親のところについて、父親のものをもつてくれればよい。まずそれをたべよう。それがおわたたら、わしらのものをもつてきてたべよう。それでどうだ」といった。よめさんが、「どうしてそんなことをするの」といった。ダン・アウターは、「わしの畑はない」といった。よめさんは、「あなたには畑がないの」という。よめさんたちはそのままいた。収穫のときがおわたつたけれども、ダン・アウターたちはなにも手にいれられなかった。クモは自分のよめさんたちをおいだし、収穫物をたべてしまった。クモは収穫物をつくりいれるころ、よめさんたちをおいだしてしまい、畑にいった。クモは収穫物をたべた。よめさんたちはいってしまった。クモはよめさんたちを離縁した。ダン・アウターは収穫物がなかった。作物がみのあるころ、ダン・アウターはよめさんに、「いって、おまえの実家のものをもつてこい。それをたべよう」といった。どうして、こんなことができるだろう。ダン・アウターのよめさんは、もう食事をつくるのがいやになってしまった。ダン・アウターは畑をつくらなかったし、よめさんに食べ物もやらなかったとき。さて、そういうこと。

(一九八三年一月二二日、語り手 ハッジヤ・ラブラトウ・イス  
フ、ガウンデレにて)

## 66 メンドリとカエル

さて、お話、お話。ジャッラ・タボーイエル。わたしは、ハッジヤ・ラブラトゥ。わたしはおまえさんに話をする。

メンドリとカエルがいた。メンドリがいる。カエルもいる。おまえさんはカエルがなにかわかつているね。

さて、メンドリは自分の屋敷をつくった。メンドリが自分の屋敷をつくると、カエルがやってきて、「平安、なんじらにあれ」と客のように挨拶した。日暮れどきがやってきた。雨がふりかけた。メンドリが、「カエルよ、カエルよ」という。カエルは、「メンドリよ、メンドリよ」という。カエルが、「はい」といった。カエルは、「きた」という。メンドリは、「そうかい」という。カエルは、「平安、なんじらにあれ」という。メンドリは、「きたかい、カエルよ」という。メンドリとカエルは挨拶をかわした。

さて、カエルが、「メンドリよ、わたしはねるところがない。雨がふってきて、夜になった」という。

さて、メンドリはカエルに、「よろしい、そこがわたしの台所だ。ねなさい」といった。カエルは台所にはいると、よこになった。つぎの朝、カエルはおきあがると、台所からでて、とびはね、どこかにいってしまった。お日さんがでてきた。

さて、カエルはメンドリのところにかえってきて、「メンドリよ、

うまくあるけなかった。きょうはさむい。おまえさんの小屋にきてよいか」といった。

さて、メンドリは、「なんだって、カエルよ、わたしの小屋にきてというのかい。おまえさんは、きのう台所でねた。きょう、おまえさんはわたしの小屋にきてというのかい」といった。カエルは、「おねがいだ」といった。

さて、メンドリはカエルにそうさせておいた。

さて、カエルがやってきた。メンドリは、「きて、ねなさい」といった。

さて、カエルはやってきて、メンドリ的小屋にはいった。メンドリとカエルはねた。つぎの朝、カエルはもどっていった。カエルはあっちこちをうろついた。夕方になると、カエルはもどってきた。夜になると、カエルはかえってきた。カエルは、「メンドリよ、メンドリよ、わたしはうまくあるけなかった。わたしはおまえさんのところにいきたい。わたしはおまえさんのところにつて、おまえさんとねたい」といった。メンドリは、「なんだって、おまえさんはどういうつもりなのか。おととい、おまえさんはやってきて、台所にねたいというので、おまえさんに台所をやった。おまえさんはねた。きのう、おまえさんはかえってきて、わたしの小屋でねたいという。いま、おまえさんはかえってきた」といった。カエルは、「うん」といった。カエルはメンドリ的小屋にはいると、「メンドリ

よ、メンドリよ、わたしはおまえさんのベッドのうえにあがりたいのだけれども」といった。

さて、メンドリは、「わたしのベッドにあがりなさい」という。カエルは、「うん」といった。メンドリは、「なんだって、カエルよ。おまえさんはわたしの台所でねた。きょうは、わたしのベッドでねる。これからずっと、おまえさんはわたしのベッドにあがるというだろう」という。

さて、そのつぎの日、カエルがやってきた。またしても、カエルはやってくると、メンドリのベッドにねるといふ。カエルはやってくると、ベッドにあがり、夜、ねていると、「おまえさんにのつかりたいのだけれども」といった。

さて、メンドリは、「なんだって、おまえさんはベッドにねかせてくれといった。わたしは小屋をやった。わたしはそれをやった。おまえさんは、台所でねかせてくれといい、ねた。そのつぎの日、おまえさんはベッドにあがった。きょう、おまえさんはわたしとねるといふのかい」といった。

そのつぎの日、カエルはそとにでて、日にあたってゐる。さて、トビがやってきて、カエルをさらって、ピューっととんでいった。

さて、カエルは、「ああ、メンドリよ、メンドリよ、トビにつれたいか」といふ。

さて、メンドリは、「鳥につれていかれるがよい。がさがさの背中をもつものよ。がさがさの腰をもつものよ。なんだって、おまえさんは台所でねかせてくれといったので、わたしは台所をあげた。おまえさんは、そこにうつつた。おまえさんは、わたしの小屋でねかせてくれといったので、わたしはおまえさんを小屋でねかせてやった。今度は、わたしのベッドでねかせてくれといった。わたしは、おまえさんをベッドにねかせてあげた。今度は、わたしとねたいといったね。トビにつれていかれるがよい」といった。

さて、カエルはいつてしまった。メンドリはほっとした。

さて、ネコがメンドリにいいより、メンドリと結婚しようとする。

さて、ネコはメンドリにいいよった。

さて、メンドリは結婚するといった。

さて、メンドリはネコと結婚する。

さて、メンドリはネコと結婚している。メンドリとネコはずっといっしょにゐる。ネコはでかけていき、動物をつかまえる。ネコはやってくると、それをたべる。メンドリはそれをつつく。ネコはいつて、動物をつかまえ、メンドリはそれをつつく。

さて、ある日、メンドリは実家にいき、仲間にあうといった。メンドリが実家に行くと、幼友だちにみんな子どもができてゐるのを見た。幼友の子どもたちにみんな子どもができてゐた。子どもたち

はなっている。

さて、メンドリは、「なんだって、これはだれの子だい」といった。幼友たちは、「それはわたしの子ども」という。べつの幼友たちは、「それはわたしの子ども」という。メンドリは、「わたしはいつてわたしの屋敷を手にいれた。カエルはわたしにこういうことをしてくれただ。さて、そのあと、わたしはネコと結婚している。いままで、子どもがない」といった。

さて、メンドリはかえってきた。

さて、かえつてくると、ネコがいた。メンドリはずつとないでいる。

さて、メンドリはかえってきた。メンドリはずつとないでいる。

メンドリはネコに話をする。

さて、ネコが、「どうしたのか」といった。

さて、メンドリは、「わたしがどうしたという、こうなの。わたしが実家にいくと、幼友たちの子どもたちみんな子どもができていた。わたしはずつと、子どもをうんでいない。カエルはわたしにこういうことをしてくれた。わたしはおまえさんとううしていいしょにいる。おまえさんはわたしに食べ物を与えるが、わたしは子どもをうんでいない」といった。

さて、ネコが、「おまえは子どもをうみたいのか」といった。メンドリは、「そう」といった。

さて、ネコは、「薪をとりいきなさい」といった。

さて、ネコはいくと、薪をあつめて、もつてきた。メンドリはいくと、薪をあつめた。ネコとメンドリは薪をつみあげた。ネコは友だちみんなのところに行く、いった。

さて、ネコは、「きょう、わたしのよめさんは子どもをうむ」といった。ネコはたちあがり、いくと、メンドリに、「塩をかいなさい」といった。メンドリは塩をかけた。ネコはトウガラシをかけた。ネコは油をかって、もつてきた。ネコはよめさんに火をもやすようにとといった。メンドリは火をもやした。ネコは、「さて、よめさんよ、体についている羽根をとりなさい」といった。ネコたちは腰をおろし、ネコのよめさんの体の羽根をみんなとってしまった。

ネコたちはメンドリの体にトウガラシをぬった。ネコたちはメンドリの体に油をぬりおえた。さて、ネコたちはすわっている。

さて、ネコが火をおこした。火はまっかになった。ネコの幼友たちがみんなあつまってきた。

さて、ネコはよめさんに、「さて、火のまわりをあるけ。火のまわりをあるきながら、こういうのだ。

『コケコッコ、わたしはメンドリ。

わたしはトウガラシをのみ、子どもをうみにいく。

コケコッコ、わたしはメンドリ。

わたしは油と塩をのみ、子どもをうみにいく』

メンドリは火のまわりをあるきながら、こういう。メンドリは火のまわりをあるきながら、そういう。始めは声がでていたが、だんだん声がよわくなっていった。メンドリは話をしなくなった。メンドリはいう。

「コケッコ、わたしはメンドリ。」

わたしはトウガラシのみ、子どもをうみにいく」

声がでなくなりました。それからすこしすると、メンドリはへなへなとなってしまった。

さて、メンドリは火のなかにたおれてしまった。メンドリは死んでしまった。

さて、ネコは、「よろしい、きょう、おまえは子どもをうんだ」といった。

さて、ネコは友だちをよび、メンドリを火からとりだした。ネコは友だちといっしょになって、メンドリをたべてしまった。ネコは、「メンドリはわたしといっしょにすんでいたではないか。わたしはメンドリをもっていた。わたしはいろいろなことをみんなしてやった。メンドリは子どもをうむといつた。きょう、メンドリは子どもをうんだではないか」といったとき。

このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 ハッジャ・ラブラトゥ・イスフ、ガウンデレにて)

## 67 リスとニワトリ

ちいさなお話、ちいさなお話。ンジャムマ・タボーイエル。

ニワトリとリスがいた。

さて、ニワトリはリスに、「木をきり、いつて、小屋をつくらう」といった。リスは、「父親の家がたくさんある。わたしは木をきらない」といった。

さて、ニワトリは木をきり、ひっぱっていき、小屋をつくった。雨がふっていた。リスはニワトリのところに行った。リスは父親の小屋にはいったけれども、どこも雨漏りがしていた。リスはニワトリのところに行った。リスはいった。

「ニワトリよ、クレート。」

小屋にはいろいろか、クレート」

さて、ニワトリがいった。

「はいる、はいるというが、

わたしはおまえさんになんといつたか。

木をきれ、わたしは木をひっぱるといつたのに、

おまえさんはそれをこぼんだではないか、クレート」

さて、リスは小屋にはいった。リスはいった。

「小屋のなかにいようか」

ニワトリがいった。

「小屋にいる、小屋にいるというが、

わたしはおまえさんになんといったか。

木をきれ、わたしは木をひっぱるといったのに、

おまえさんはそれをこぼんだではないか、クレレット」

リスは小屋にすんだ。

さて、リスは、「よこになるうか」といった。ニワトリはいった。

「よこになる、よこになるというが、

わたしはおまえさんになんといったか。

木をきれ、わたしは木をひっぱるといったのに、

おまえさんはそれをこぼんだではないか、クレレット」

さて、リスはよこになった。

さて、リスは、「たべようか」といった。リスはいう。

「ニワトリよ、クレレット、クレレット。

たべようか」

ニワトリがいう。

「たべる、たべるというが、

わたしはおまえさんになんといったか。

木をきれ、わたしは木をひっぱるといったのに、

おまえさんはそれをこぼんだではないか、クレレット」

さて、リスは食べ物をたべた。リスはいった。

「ニワトリよ、クレレット、クレレット。

カユをのもうか」

ニワトリがいう。

「カユをのむ、カユをのむというが、

わたしはおまえさんになんといったか。

木をきれ、わたしは木をひっぱるといったのに、

おまえさんはそれをこぼんだではないか、クレレット」

さて、リスはカユをのんでしまった。

さて、リスはまたしても、いった。

「ニワトリよ、クレレット、クレレット。

水をのもうか」

ニワトリがいった。

「水をのみなさい」

さて、ニワトリはリスに水をやった。リスは水をのみこんでしま

った。リスは、「おまえさんのカユはどこにある」といった。ニワ

トリは、「カユは日除けのうえにある」といった。

さて、ニワトリはリスにカユをやった。リスがいう。

「ニワトリよ、クレレット、クレレット」

リスが、「おまえさんのカタガユはどこにある」といった。ニワト

リは、「カタガユは日除けのうえにある」といった。

さて、ニワトリはリスにカタガユをやったとき。

わたしはここにいます。お話はあそこにある。おいしくても、まず

くても、お礼をもらうほうがよい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ウスマーヌ・ジャウロ、ケイ  
二村にて)

## 68 ニワトリとクモとカエルとハエ

ニワトリとクモとカエルとハエがいた。ニワトリとカエルはいいしょになり、結婚した。ニワトリとカエルは草で小屋をつくった。

さて、ニワトリはカエルに、「ほら、もうすぐ雨がやってくる。これから、わたしの飯小屋をつくって、そこでねよう」といった。カエルは、「いつもわたしは、水辺の草のうえでねる。どうして、そんなことをいうのか。おまえさんは、わたしが雨にやられたことがあるというのかい」といった。ニワトリとカエルの話は、カエルは、どうして、そんなことをいうのか。おまえさんは、わたしが雨にやられたことがあるというのかい」というのだ。ニワトリは、「よろしい。その話はそれでよい。わたしはいいって、わたしの草をとって、小屋をつくる」といった。ニワトリはやってくる、自分の小屋をつくり、きれいにした。ニワトリはいくと、草をとり、自分の小屋をつくり、きれいにした。ニワトリは小屋にやってくると、よこになつてくる。雨がふってきた。大雨がふった。川にも、雨がふってきた。カエルがねていると、雨がカエルをうつ。雨がやってくる、カ

エルをうつ。

さて、カエルはおきあがり、はしって、ニワトリのところへやってきました。ニワトリの小屋の入り口につくと、「メンドリよ、メンドリよ。おまえさんの小屋にはいつてよいか」という。ニワトリは、「どうしようもないものよ、わたしは、おまえさんにいつて、草をかろうようにいつた。そうだろう、おまえさんはそれをこぼんだではないか」という。カエルは、「アッラーにかけて、預言者にかけて、たのむ。メンドリよ」という。ニワトリは、「よろしい。はいりなさい」という。カエルはやってくる、小屋にはいつた。カエルは、「メンドリよ、メンドリよ。龍のそばにいつて、火にあたって、よいか」という。ニワトリは、「なんだって、どうしようもないものよ、わたしは、おまえさんにいつて、草をかろうようにいつた。そうだろう、おまえさんはそれをこぼんだではないか」という。カエルは、「後生だから、後生だから」といった。ニワトリはカエルにカエルのすきなようにさせた。カエルはやってくる、すわった。カエルは龍のそばにいつてきて、すわると、火にあたる。カエルは火にあたっている。ニワトリはカエルをほっておいた。ニワトリは、それではいけないとおもって、カエルをつかまえて、しばつておき、小屋からでいつた。ニワトリはおしゃべりで、あつちこつちをぶらつく。ニワトリは道をほじくりかえし、だめにしていく。

さて、クモもたちあがった。クモとハエはでかけていくと、畑をつくった。クモとハエは自分たちの畑をたがやした。畑の作物がおおきくなった。クモとハエはやってくると、落花生をほりだした。クモは自分の分をとった。ハエも、自分の分をとった。ハエはとんでいくと、クモの落花生をとり、自分のものといっしょにしてはこんでいった。ハエは落花生をはこんでいった。クモも落花生をはこんでいった。ハエとクモはやってきた。ハエとクモはあるいていく。ハエの落花生はおおすぎたので、首の骨がおれてしまった。

さて、首の骨がおれた。ハエの首の骨がおれたので、クモはすわって、わらっている。クモはハエの分をとって、もつていこうとする。クモはずっとわらっている。わかるな。クモのお腹はおおきいではないか。

さて、クモのお腹は破裂してしまった。クモは死んでしまったとさ。

よろしい。このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドゥ・ルフアイ、ガウンデレにて。この話は、ハウサ族の生徒からきいたという)

## 69 オンドリとアソーヤ

ちいさなお話、ちいさなお話。

オンドリとアソーヤ(体毛はくろく、足は四本ある。ヤマネコよりおおきく、するどい爪をもっている。はやくはしり、水をたくさんのむという。おそらくカワウソかなにか。未確定)が旅にでた。オンドリは袋をせおっている。アソーヤはオンドリがたべたかったので、いつつぎの村につくのかとたずねる。アソーヤとオンドリはヴォアンズー豆をもらうと、アソーヤは豆をたくための石をくれといった。オンドリはアソーヤに、「ここに、豆をたくための石がある」といった。オンドリとアソーヤはまたつぎの村について。オンドリとアソーヤはカユをもらった。アソーヤはオンドリに、「ヒョウタンでできたスプーンはどこにある」とたずねた。オンドリは、「はい、ここにヒョウタンでできたスプーンがある」といった。オンドリとアソーヤはカタガユをもらった。アソーヤはオンドリに、「ヒョウタンのかげらはどこにある」とたずねた。オンドリは、「はい、ここにヒョウタンのかげらがある」といった。

さて、オンドリとアソーヤはすすんでいった。オンドリとアソーヤはいくと、水をももらった。アソーヤはオンドリに、「水をのむものはどこにある」といった。オンドリは半截ヒョウタンをとりだして、アソーヤにわたした。アソーヤはそれをうけとり、水をのんだ。旅からもどつてくることになった。アソーヤは火をもやした。火をもやすと、赤色の染料をつくるための石を手にもつて、「ぼく

が水にはいり、水があかくなるのをみたら、ほくが死んだとおもえ。そうすると、きみはこの火にはいれ」といった。オンドリはアソーヤに、「よろしい」といった。これで、アソーヤは準備をすませた。アソーヤはとびあがり、手に赤色の染料をつくるための石をもっている。アソーヤは水のなかにとびこんで、赤色の染料をつくるための石をつぶした。

さて、水はまるで、血のようにあかくなった。オンドリは火のそばにたっていて、「あいつの最後をみきわめてやる」といった。

さて、しばらくして、アソーヤが水からでてくると、オンドリがたっていた。うまくいかなかったけれども、アソーヤは水のなかで、ずっとまえから赤色の染料をつくるための石をつぶす計画をたっていた。石をもつて水にはいったのは、オンドリをたべるためだった。

さて、オンドリはアソーヤにだまされず、火にはいらなかった。アソーヤはずっと水のなかで我慢していたが、ずっと水のなかにいるわけにはいかなかった。水にまけた。オンドリは火のそばにたっている。オンドリは、「なんだって、きみはかしい」といった。さて、オンドリははしつていき、袋のなかにはいつて、よこになった。

さて、オンドリがやってきた。  
さて、オンドリはカエルをとり、それを火にいれた。

さて、オンドリははしつていき、袋のなかにはいり、よこになった。アソーヤは水からでてくると、「なるほど、あいつは火にはいりよった。ハゲタカめ。火にはいりよった。きょう、おかずを手にいれた。くつてやる」といった。アソーヤが、「あいつの肝をくえばどうなるか」という。オンドリは袋のなかから、「きみは、ほくをたべるのではない。きみは自分の頭をたべるのだ」とこたえた。

さて、オンドリは袋のなかからとびだした。アソーヤが、「きみの兄さんが死んでしまうというのに、火のなかにはいらぬのか」といった。オンドリは、「ほくは火にはいらぬ。ほくはきみの最後をみとけなければならぬ」といったとき。

わたしが話をしたのではない。切り株が話をした。わたしは、それをきいたのだ。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ、  
サイドウ・ムーサ、レイ・ブーバにて。この話は、数日前、ガ  
ガファガ町で、ドウル族のマイラマ・スレイからきいたという。  
イーサはレイ・ブーバ地方のダーマ族である)

## 70 ニワトリとニワトリ小屋

お話、お話。  
ニワトリが三十羽、ニワトリ小屋にいた。ニワトリの持ち主はこ

のニワトリ小屋を百五十フランで買った。

さて、男は、「ニワトリよ、わたしはこの小屋を百五十フランだして買った」といった。

さて、男は息子をよんだ。息子はちいさかった。その名前はシンダという。

さて、男の息子がいつもやってきて、夕方、ニワトリ小屋をしめる。朝、その小屋をあける。

さて、ある日、男の息子はニワトリ小屋をしめるのをわすれた。ネコがやってきて、ニワトリを三羽のこして、みんなたべてしまった。

さて、人びとが税としておさめるためのニワトリなどを、その小屋にいれて、息子にあずけていた。のこるは三羽になった。この三羽は息子のものだった。

さて、男は息子に、「どうしたというのか。おまえは、ニワトリをさらえて、うりにいったのだ」といった。息子はいった。「そんなことはない。父さん、

だました、だましたというのか。ぼくはだましていない。だました、だましたというのか。ぼくはだましていない」

さて、男はその三羽をもって、裁判をしてもらいにいった。人びとは男の息子に、「どうしたのか。おまえさんはニワトリを三十羽世話していたのに、人のニワトリがいなくなり、おまえさんの三羽

だけがのこるとは」といった。男の息子はこたえた。

「だました、だましたというのか。ぼくはだましていない。だました、だましたというのか。ぼくはだましていない」

さて、裁判をする人が、「どうしたらよいのか、シンダよ。おまえは、そのニワトリをうっていかないのだな」といった。男の息子はいった。

「ぼくはだましていない。ぼくはだましていない」

さて、人びとはその三羽をとった。人びとは裁きをしてくれた人にその三羽をお礼としてわたした。

さて、男の子の父親は息子をおいはらった。息子はどこかにいてしまった。息子はどんだん野原をあるいていく。ネコが三匹でてきた。ネコがでてくると、人びとは、「裁判をする人にニワトリを三羽わたした。ネコも、そこに三匹あらわれた。ネコが三匹でてきたというの、三匹のネコが三羽のニワトリにばけていたということだ」といった。

さて、ネコは男の子をとりかこんだ。

さて、ネコは男の子をころしてしまった。シンダは裁判をする人がネコをつかわしたということをしらなかつた。

さて、ネコがやってきた。ネコは血のついたままやってきた。

さて、人びとはみんなに知らせた。人びとはいくと、男の子の死んだ場所をみた。

さて、男の父親は、「この話はおしまい」といったとき。

(一九八一年二月一六日、語り手 スレイ・ルーティ・ジャッポ  
ナ・ペーテル・ゴナ・ニリー・ディンバ・ゲーネ・ハム・ガ  
ーブド、レイ・ブーバにて。この話は、一九八一年二月一五日  
に、ハマ・ジヨータからきいたという)

## 71 ネズミとサル

お話、お話。

ネズミはサルといた。これはバオバブの実の話だ。サルはやってくると、バオバブの木にのぼって、実をとっている。ネズミがやってきた。ネズミがやってくる、サルが木にのぼっていた。

さて、ネズミは腹をたてた。ネズミとサルは木のうえで、喧嘩をはじめた。

さて、ネズミはサルを頭にのせて、木からおろした。ネズミはサルのとつたバオバブの実をみんなとって、もった。ネズミは実をわって、中身をとって、たべている。サルはネズミの頭にのっているが、実がたべられない。一週間たった。サルは死にかけた。

さて、ネズミとサルはあるいていった。ネズミとサルはどんどんあるいていく。

さて、ネズミとサルがあるいていくと、イヌにであった。イヌ

は、「おまえさんたちはどうしたのか」とたずねた。サルはイヌに、こういうことがあった、バオバブの実のことでこんなことがあったといった。

さて、イヌはネズミとサルを二匹ともつかまえた。イヌはネズミをころした。イヌはサルをころすとどちらでもいいにして、たべてしまった。イヌはおきあがってあるいていく。イヌはどちらもたべてしまった。イヌはいくと、水をのんだ。イヌはそこまでやってくると、おきあがって、あるくことができなかった。

さて、ハイエナがやってくる、イヌがいた。ハイエナはやってくると、イヌをつかまえた。ハイエナはいつてしまった。ハイエナはすつかりたべてしまうと、水をのんで、おきあがり、いつてしまった。ハイエナがいくと、ニワトリがあつちこちをあるいている。ハイエナはニワトリに、「おまえさんは、どこにタマゴをうむのか」とたずねた。ニワトリはハイエナに、「そこにある茂みの端でうむ」といった。ハイエナはニワトリに、「おまえさんは、そこにある茂みの端でうむのか」といった。ニワトリは、「はい」といった。ハイエナは、「いこう。おまえさんの家までつれていっておくれ」といった。ニワトリは、「なんだって。また、べつの日にきておくれ。そのとき、わたしはいつて、おまえさんにわたしの家をおしえてあげよう」といった。ハイエナはニワトリに、「よろしい」といった。ニワトリは家にかえつていく。すると、ハイエナは

そのあとをつけていった。ハイエナはニワトリのあとをつけて、ニワトリの家に行った。ニワトリはいくと、自分の家にはいった。

さて、ハイエナはちどまると、ニワトリの家をみた。ハイエナはちどまり、ニワトリの家をみると、夜、やってきて、ニワトリをつかまえた。ハイエナとニワトリはとくみあいをした。

さて、ニワトリはハイエナをころした。ニワトリはハイエナをころすと、ハイエナをひっぱっていき、ハイエナの死体をかくした。ニワトリはハイエナをひっぱていくと、死体をかくした。

さて、ある人びとが野原をあつちこつちあるいていると、やってきて、ハイエナの死体をみつけた。人びとは、「みてみる。肉が手にはいったではないか」という。人びとはニワトリに、「これをもつていってもよいか」とたずねた。ニワトリはこの人たちに、「ひっぱっていきなさい。もつていきなさい」といった。人びとはいって、ハイエナをとった。人びとはハイエナの皮をはいだ。人びとはいくと、皮や肉を木にぶらさげた。皮をはぐと、いって、皮と肉を木にぶらさげた。

さて、それから、ニワトリはやってくると、この人たちに、「肉をみんなとつてしまいなさい。おまえさんたちはそれをわたしの家からとりのぞいておくれ。くさい臭いがしないように」といった。

さて、それから、ハイエナたちはその話をきいて、たちあがり、元気をだしてやってくる。

さて、人びとはにげてしまった。人びとがにげていくと、ハイエナたちはリスにであった。ハイエナたちはリスに、「リスよ、どうなのか」とたずねた。リスは人に、「なるほど。わたしはなにがなにをしたのかしらべてあげよう。でも、おまえさんたちは、わたしにくれるものをさがしてくれない」といった。ほんとうのこと、リスは、人びとがハイエナの皮をはいでいるところをいた。リスは、はしつて、にげていくと、パウヒニアの葉っぱをあつめて、とのえた。リスは自分がイスラム教の先生だといった。リスは（それが文字であるかのように）どんどん線をひいていった。リスは葉っぱでできた本をもち、そこにいる。リスは先生だ。リスは、ハイエナたちのために、だれがハイエナの仲間をころしたかを見つけてやろうというのだ。リスは線をひっぱっている。ハイエナが、「先生」という。リスは、「はい」とこたえた。ハイエナが、「わたしのためにみておくれ」という。ハイエナたちがやってきた。ハイエナたちは、リスのためにいろいろなものをさがし、もつてきた。先生は自分の本をひらいて、何度もみた。リスはハイエナに、「だれも、おまえさんの仲間をころしていない。ニワトリがうまいことをして、おまえさん仲間をころしたのだ」といった。ハイエナは、「ニワトリがわたしの仲間をころしたのか」という。リスは、「そうだ」といった。ほんとうのこと、リスはニワトリにまえて話をしておいたのだった。

さて、リスはハイエナたちがいつてしまうと、自分の穴のなかにはいった。リスがいくと、ニワトリがいた。ハイエナがいくと、ニワトリは自分の子どもたちをおおきくしたあとで、自分たちの子どもたちとあつちこつちをあるいている。

さて、ニワトリの子どもがたちあがり、母親に、「母さん」といった。母親が返事をして、「はい」という。子どもは、「きょう、みておくれ。ハイエナたちがやってきた。あいつらは、喧嘩をするためにやってきた」という。

さて、ニワトリはとんだ。そこに川があった。ニワトリはその川をとんで、向こう岸にわたつたとき。

そこに、お話がある。ここに、わたしがいる。お話は、おしま

(一九九〇年二月一九日、語り手 ベット・デニス、ケイニ村にて。この話はアブドゥッラーヒからケイニ村で一九九〇年にきいたという)

## 72 小鳥と男の子(1)

子どもが鳥のいるところへいくと、鳥は草の種をついでいる。

さて、子どもは鳥に、「わかるかな、鳥よ。おまえさんは、おまえさんの母親の石ウスのしたにいったら、(そこにおちている穀物

のくずがたべられるので)腹がいっぱいになるだろう。まして、ぼくの母親の石ウスのしたにいったら、まちがひなく腹がいっぱいになるだろう」という。鳥はとぶと、子どもについて子ども家にあるウスのしたにいった。鳥はウスのまわりをまわり、(そこにあつたものをたべてしまい)だまっている。つきに、石ウスのしたを一回りし、(そこにあつたものをたべてしまい)だまっている。

そこで、鳥はいくと、とまつていう。

「おまえさん、若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている。

おまえさんは、わたしが腹がいっぱいになつていないとい

つたら、そうでないといった。

おまえさんは、はずかしい。

わたしは、お腹がいっぱいになつていない」

子どもはそれにこたえる。

「姉さんよ、小鳥がいつていることをきこう。

父さんよ、小鳥がいつていることをきこう。

野原の小鳥がほくにいつていることをきこう。

「若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている」といつている。

ぼくは、小鳥のお腹がいっぱいになるといった。

ぼくは、はずかしい。小鳥はお腹がいっぱいになっ

い」

子どもは、いくと、雨期のモロコシのはいっている穀物倉をこわした。子どもの家族は鳥に雨期のモロコシのはいっている穀物倉にはいつているものやることにした。鳥はいくと、雨期のモロコシをたいらげてしまった。鳥はそこをとりすぎていき、とまった。鳥はいう。

「おまえさん、若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている。

おまえさんは、わたしがお腹がいっぱいになっ

つたら、そうでないといった。

おまえさんは、はずかしい。

わたしは、お腹がいっぱいになっ

子どもはいう。

「姉さんよ、小鳥がいつていることをきこう。

父さんよ、小鳥がいつていることをきこう。

野原の小鳥がぼくにいつていることをきこう。

「若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている」といつている。

ぼくは、小鳥のお腹がいっぱいになるといった。

ぼくは、はずかしい。小鳥はお腹がいっぱいになっ

い」

子どもはいくと、鳥のために、トウモロコシのはいった穀物倉をひらいてやった。子どもの家族は鳥に穀物倉にはいつているトウモロコシをやることにした。鳥はトウモロコシを一口でたべてしまった。小鳥は雌ヤギたちをたいらげた。雌ウシたちもたいらげた。どれも、いなくなっ

「おまえさん、若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている。

おまえさんは、わたしがお腹がいっぱいになっ

つたら、そうでないといった。

おまえさんは、はずかしい。

わたしは、お腹がいっぱいになっ

子どもはいう。

「姉さんよ、小鳥がいつていることをきこう。

父さんよ、小鳥がいつていることをきこう。

野原の小鳥がぼくにいつていることをきこう。

「若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている』といっている。

ほくは、小鳥のお腹がいつぱいになるといった。

ほくは、はずかしい。小鳥はお腹がいつぱいになつていな

い」

子どもの兄さんがでてきて、「こうなれば、ほくらしいない」といった。そのうちに、鳥は子どもの兄さんをつかまえ、のみこんでしまった。鳥はいう。

「おまえさん、若者よ、

おまえさんは、額に鉄の飾りをつけている。

おまえさんは、立派なムチをもっている。

おまえさんは、わたしがお腹がいつぱいになつていないとい

つたら、そうでないといった。

おまえさんは、はずかしい。

わたしは、お腹がいつぱいになつていない」

子どもの母親がでてきて、たちどまり、「こうなれば、わたしししかない」といった。鳥は子どもの母親をつかまえて、口にいれてしまった。鳥はあるいていき、とまった。子どもの父親がでてきた。鳥は、「わたしは、おまえさんのみこまない。わたしはおまえさんに手をつけない」といった。鳥はのみこんだものをみんなはきだして、子どもにかえた。鳥は、「アッラーはわたしたちをあのよ

うにするようにおつくりになった。毎日、わたしたちはああやうたべている。でも、おまえさんは、そんなことはないといった。おまえさんの母親だつて、お腹がいつぱいになつていない。そういうことで、おまえさんにみてもらおうとして、ああしてみせたのだ」といったとき。

ほら、あの人はあそこにいる。ほら、わたしはここにいる。わたしが、話をしたのではない。

(一九八〇年八月二五日、語り手 女性、レイ・プーバにて。嶋田にかたつたもの)

### 73 小鳥と男の子(2)

ある男の子がたちあがり、野原に水汲みにいった。男の子は野原で水をくむためにでかけていった。男の子は水をくんで、家にもつてこようというわけだ。

さて、男は野原で鳥がいるのをみつけた。鳥は石のみこんでいる。おる。

さて、男の子は鳥に、「どうも、友だちよ。おまえさんはここになにをしているのか」といった。小鳥は男の子に、「わたしは石のみこんでいるのだけれども」といった。男の子は、「おまえさんは、どうして石のみこんでいるのか」という。鳥は、「腹がすい

ているからだ」といった。男の子は、「こい。母さんの水ガメのおいてあるところまでいこう。いって、水をくもう。おまえさんは、すきなだけ水をのめばよい。母さんの水ガメのしたで、(たべられるものをみつけて) すきなだけ、たべたらよい」といった。

さて、鳥は野原をでて、やってきた。男の子と鳥はいっしょに家に入った。家に行くと、鳥は男の子の母親のウスのしたにおちいたものをたべたが、お腹がいばいにならなかった。鳥はたべたけれども、お腹がいっぱいにならなかった。鳥は男の子にいう。

「バージ・ンディル・ンディル、おまえさんははずかしい。わたしはお腹がいっぱいになっていない」

さて、男の子は家族のものをよんだ。家族のものがやってきた。男の子はいう。

「父さん、きいておくれ。  
母さん、きいておくれ。」

「ちいさな小鳥がほくにいつていることを」

さて、男の子の父親は、「それでは、その鳥をニワトリ小屋につれていきなさい。ニワトリをたべればよい」といった。鳥はやってくると、ニワトリをみんなのみこんでしまった。鳥はニワトリをたいらげってしまった。

さて、鳥はとまって、いった。

「バージ・ンディル・ンディル、おまえさんははずかしい。わ

たしはお腹がいっぱいになっていない」  
男の子はいう。

「父さん、きいておくれ。  
母さん、きいておくれ。」

「ちいさな小鳥がほくにいつていることを」

男の子の父親は、「それでは、その鳥をモロコシのはいつている小屋につれていきなさい。モロコシをたべればよい」といった。鳥はその小屋で、モロコシをすっかりたべてしまった。鳥は屋敷にあつたものをすっかりたべてしまった。

さて、父親は鳥に、「子どもの母親をのみこみなさい」といった。鳥は男の子の母親をのみこんでしまった。

さて、父親は男の子に、「よろしい。息子よ、おまえはこの鳥をみつけた。おまえは鳥をつれてきてくれた。どうするのだ」といった。父親は、「よろしい。わしをのみこめ」といった。鳥は父親をのみこんだ。男の子がにげていこうとする。鳥は男の子をのみこんでしまった。小鳥は男の子の屋敷をのみこんでしまった。

さて、鳥は男の子をはきだした。鳥は、「これも、おまえさんがしなくてよいことをするからこうなったのだ。おまえさんは、わたしが石をのみこんでいるのをみつけた。わたしが、石をのみこんでいても、おまえさんとは関わりがない。おまえさんはたちあがり、いらないことをいった。わたしは、ごらんとおり、おまえさんま

るごとのみこんでしまったではないか」といった。鳥は人をはきだした。鳥は男の子に二度とこんなことをするなといった。男の子と石とは関係がないといった。鳥は男の子をそこにのこし、どこかにいってしまったとき。

お話は、おしまい。

(一九八三年一月二四日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話はガウンデレで、イスラム教師の妻からきいたという)

## 74 ネコとハイエナの旅

この話は、ハイエナとネコの話。ハイエナとネコが旅にでかけた。ハイエナとネコはとおいところに行く。ハイエナは、「ネコよ、旅にいったら、おまえさんはなんというのか。おまえさんはどこにはいるのか。なんの小屋にはいるのか」といった。ネコは、「わたしはニワトリの小屋にはいる。それで、おまえさんはどうだい」といった。ハイエナは、「わたしは雌ヤギの小屋にはいる」といった。ハイエナとネコはでかけていった。ハイエナとネコはどんどんいった。ハイエナとネコは王さまのすむ村でとまるところをみつけた。ハイエナとネコは王さまの屋敷のまえにはいった。ハイエナとネコは王さまの屋敷のまえにすわった。ハイエナとネコは、「平安、な

んじらにあれ」と挨拶をした。王さまの家来たちは、「おまえたちは、どこからきたのか」といった。ハイエナとネコは、「どこそこの場所からきました」といった。王さまは、「よろしい。おまえさんたちの名前はなにか。おまえさんの名前はなにか」といった。ネコは、「わたしの名前は、ニワトリ小屋といいます」という。王さまは、「おまえさんの名前はなにか」という。ハイエナは、「わたしの名前は雌ヤギの小屋といいます」といった。王さまは、「よろしい。問題はない」といった。王さまの家来たちは、雌ヤギの小屋というものをつれていき、雌ヤギの小屋をあたえた。ネコをつれていくと、ニワトリ小屋にとじこめた。王さまの家来たちは、「ほら、おまえさんはここにとまるのだ。おまえさんは、雌ヤギの小屋にとまるのだ。おまえさんには、ほれ、ここに、おまえさんの小屋がある。ほら、そこに雌ヤギの糞がある」といった。ハイエナとネコは小屋にはいって、とまった。王さまの家のものは食べ物をつくって、ハイエナとネコにやった。ハイエナとネコは食べ物を食べた。夜になった。ネコはハイエナに、「わたしがニワトリをうごかし、ニワトリがケツケツといたら、わたしはニワトリをたべているということだ。おまえさんも、雌ヤギをたべるがよい」という。ハイエナは、「よろしい、問題はない」といった。ネコはいくと、何度も、ニワトリをつく。そのたびに、ハイエナはおきあがり、雌ヤギ二、三匹の首の骨をおり、たべる。そのうちに、朝になるまで、

雌ヤギは一匹のこるだけとなった。

さて、ニワトリは一羽もなくなかった。夜があけて、朝になった。王さまがおきた。王さまは、「小屋にいるものをそとにだしなさい。雌ヤギの小屋よ、雌ヤギをだしなさい。ニワトリ小屋よ、おまえさんもだすのだ」といった。ネコは、「よろしい」といった。ネコは自分の小屋にいたニワトリをみんなだした。一羽もいなくなつてなかつた。ハイエナも、「おまえさんも、だすのだ」といわれた。雌ヤギが一匹でてきた。ハイエナは、その雌ヤギの頭をとると、頭だけをみんなにみせて、「みたな」という。ハイエナはその頭をもどもどし、おいておく。べつの頭をもつていくと、「みたな」といった。ハイエナはその頭をもどもどし、おいておいておく。そのうちに、ハイエナはすべての雌ヤギの頭をみせた。

さて、王さまの家来たちは、「よろしい。問題はない。雌ヤギをつれていって、草をたべさせなさい」といった。王さまはもどつていった。ハイエナは雌ヤギ一匹をつれて、草をたべさしにいった。ハイエナは一日草をたべさせていた。ハイエナは、「なんだって。わたしは一晚中雌ヤギをたべていた。一匹のこっているだけで、どうしようというのか」といった。ハイエナは雌ヤギをつかまえるど、たべてしまった。

さて、ハイエナとネコは家畜をつれてかえってくる。ハイエナは雌ヤギの頭をもつと、雌ヤギの小屋にいそいだ。ハイエナが雌ヤ

ギの頭を小屋にいれて、戸をしめてしまつと、ネコは自分のニワトリをもつてきた。ネコはいくと、王さまにたのんだ。ネコは、「きて、あなたのニワトリの数をかぞえてください」といった。王さまは、ニワトリの数をどんだんかぞえていった。王さまは、「これで、すべてだ。ところで、雌ヤギの小屋はどこにいるのか」といった。雌ヤギの小屋は、「わたしは、もうじゅうぶんです。ずつとまえに、戸をしめました」といった。王さまは、「ずつとまえに、戸をしめた」という。ハイエナは、「はい」という。王さまは、「こうなれば、あすの朝にしよう」という。

あくる日、朝はやく、王さまは、「よろしい、おまえさんたちはよく家畜の番をした」といった。王さまの家来たちはハイエナに、「雌ヤギをだしなさい」といった。ハイエナは、頭をだしては、それをもどもどす。頭をだしては、それをもどもどす。ネコは、ニワトリをだしてはもどし、すべてのニワトリをだした。

さて、王さまはたちあがった。王さまは、「よろしい、みた」といった。王さまはたちあがると、雌ウシをつかまえ、ネコにやつた。最後にのこっている雌ヤギをつかまえ、ハイエナにやつた。

さて、ハイエナは雌ヤギをもらつと、それにくくつてある繩をもち、なにもいわなかつた。

さて、ネコも、雌ウシにくくつてある繩をもっている。王さまはハイエナとネコに別れをつげた。ハイエナとネコはどんだんあるい

ていった。ハイエナとネコは野原のまんなかに入った。

さて、ハイエナは、「わたしにおまえさんの雌ウシをおくれ。わたしはそれをたべる」といった。

さて、ネコは、「どうして、これをやれるか。そんなことはできない」といった。ハイエナとネコがいいあらそっている、そこにライオンがよこになつていた。雌ヤギがたちあがつた。ネコは雌ヤギとたちあがつた。ネコは雌ヤギに、「にげられるように」といった。雌ヤギは、「よろしい。アツラーがうけいられるなら、わたしはわたしたちがにげられるようにする」といった。ネコは、「よろしい」といった。雌ヤギはライオンに、「どうして、あなたの目がまつかなのですか」といった。ライオンは、「わたしの目がいたむのだ」といった。雌ヤギは、「おまえさんには、薬が手にはいらないのか」といった。ライオンは、「手にはいらない」といった。雌ヤギは、「そこには薬があります。それをつけてあげましょう」といった。ライオンは、「その薬をどのようにして、つけてもらえるのか」といった。雌ヤギは、「その薬はハイエナの皮にぬりつけければよいのです」といった。ライオンは、「ハイエナの皮でよいのだ」といった。雌ヤギは、「はい」という。ライオンは、「よろしい」といった。雌ヤギは、「そこにハイエナがいます」といった。ネコと雌ヤギは蜂蜜のはいっただヒョウタンを肩からさげていた。

さて、ライオンは、「ハイエナよ、おまえさんはどうしようもない。すこし、おまえさんのきらいな皮をきりとつておくれ」といった。ハイエナは、「はあ。わたしがきらつているところがあるというのですか」といった。ライオンは、「おまえさんがきらつているところをきるのだ。さがしなさい」といった。ハイエナは自分の皮をすこしきりとると、ライオンにわたした。ライオンは、それを雌ヤギにわたした。雌ヤギは、その皮を蜂蜜につけて、ライオンにわたした。雌ヤギは、「べつのものが手にはいるでしょうが、それをすこしずつなめてください」といった。ライオンは、それを口にいれると、「なくなつてしまつたではないか」という。雌ヤギは、「なくなつても、そこにハイエナがいるではありませんか」という。そのうちに、とうとうハイエナは死んでしまつた。ハイエナが死んでしまつと、ライオンは雌ヤギとネコのほうに目をむけた。雌ヤギは、「おじさん。ほら、草むらまでいって、水をのんでくるまで、これをなめていてください」という。ライオンは、「よろしい。問題はな」といった。雌ヤギとネコはおきあがつた。ライオンが夢中になつて、蜂蜜をなめているあいだに、雌ヤギとネコはにげてしまつた。雌ヤギとネコがにげてしまひ、蜂蜜をなめてしまつと、ライオンは、「先生、先生」と雌ヤギをよんでいる。雌ヤギは、「先生はいない」といった。雌ヤギとネコはライオンをだまして、にげていってしまった。雌ヤギとネコは二匹とも、にげきつた。ハイエナ

は死んでしまったとさ。

ほら、お話はそちらに行く。ほら、わたしはここにすわった。

(一九九〇年二月一九日、語り手 ハディージャ、ケイニ村にて。

この話は母親からきいたという。母親はムンダン語とフルフル  
デ語でかたったという)

## 75 病気のライオン(1)

お話、お話。ジャンナ・タボーイエル。

ライオンが病気をした。ライオンは野原の動物たちをよんだ。でも、ウサギだけがこなかった。

さて、ハイエナがライオンに会いに行く途中、ウサギはハイエナに、「いつて、ライオンにいいなさい。わたしは、畑をたがやしている。病気になるという老人のところにはいくことができない」という。

さて、ハイエナはウサギのいったことをライオンにつたえた。ハイエナはウサギのことをつたえた。

さて、そのずいぶんあと、ウサギがやってきた。ライオンはウサギに、「どうして、おまえさんはこなかったのか。みんなきたのに」とたずねる。ウサギは、「わたしは病気をなおす人をさがしにいたのです。病気をなおす人はとおいにいます。わたしはとおい

んはしつていきました。だから、わたしはつかれて、みんなのあとになったのです」という。

さて、サルは、「わたしは、ライオンをなおす人はいないとおもう。ライオンは年をとりすぎた」という。

さて、ハイエナは、「動物をたくさんたべるから、病気になったのだ」という。

さて、ウサギは、「ライオンは年をとったので、病気になるのだ」といった。

さて、ライオンはウサギに、「こい。わたしが病気になったら、こい。わたしはおまえさんをどついでやる。わたしが病気になったら、どういものかわかるだろう。わたしが病気になったら、どういものかわかるだろう。わたしが病気になるたら、おまえさんはわかるだろう。さて、わたしがなぐると、年寄りがなぐっているかわかるだろう」という。

さて、ウサギが、「反省しています。そんなことを二度といいません」という。

さて、ウサギはライオンに、「病気をなおす人がわたしに、あなたにつたえるようにといました。その病をなおす薬はハイエナの皮しかありません。おまえさんたちは、ハイエナの皮をはぎ、それを地面におき、それをとり、服にするのだ。あなたは、それをきるのです。それが薬です」という。動物たちはハイエナをころして、

その皮をとったとき。

お話は、おしまい。

(一九八一年二月一八日、語り手 アブドゥッラーイ・サイドウ、レイ・プーバにて。アブドゥッラーイはガルアで生まれた、フアリ族。この話は、学校の先生から聞いた、この話はもともと、『アフリカの朝』という本にあったものだという)

## 76 病気のライオン(2)

お話、お話。

ある病気のライオンがいた。

さて、ライオンは雌ヤギとハイエナをよんだ。

さて、ライオンは、「目がみえるようにするには、なにがきくか」といった。

さて、雌ヤギはいくと、ヒョウタンに蜂蜜をいれてもってきて、「わたしがあなたに、薬をさしあげ、あなたにそれをなめていただくには、なにが手にはいりますか」といった。ライオンはハイエナに、「おまえさんの体のなかで、おまえさんがきらっているところをさがし、それをわたしにおくれ。わたしはそれに薬をつけ、病気をなおすのだ」といった。ハイエナは体の一部をちぎると、ライオンにわたした。雌ヤギはそれを蜂蜜にひたし、「これのみこまな

いように」といった。ライオンは、「よろしい」といった。ライオンは、それを口にいれると、すっかりのみこんでしまった。ライオンは、「ハイエナよ、おまえさんのきらっているところをさがすのだ」という。ハイエナは耳のところをひきちぎった。雌ヤギはそれに蜂蜜をつけて、ライオンにわたした。雌ヤギはライオンに、「それをなめて、かえしておくれ」といった。

さて、ライオンはそれのみこんでしまった。

さて、ライオンは、「おまえさんのきらっているところをさがすのだ」という。ハイエナは、「もう、わたしはおまえさんから、無事に上げていください」といった。ライオンはハイエナにとびかかり、ハイエナの皮をみんなとってしまった。

さて、雌ヤギはその皮を蜂蜜のなかでころがし、それをライオンにわたした。ライオンはそれをすっかりのみこんでしまった。ハイエナの皮を蜂蜜のなかでころがし、それをライオンにわたした。ライオンはそれをすっかりのみこんでしまった。

さて、ライオンは死んでしまった。雌ヤギははしって、鍛冶屋のところにつた。いくと、そこにたくさんのハイエナがいた。

さて、雌ヤギが、「なんだって、そこをのきなさい。おまえたちは、風のおくりかたをしらない」といった。

さて、雌ヤギはフイゴで風をおくりはじめる。フイゴは、「わたしはハイエナを九頭ころした。わたしはその足を一本もっている。

わたしはハイエナを九頭ころした。わたしはその足を一本もっている。わたしはハイエナを九頭ころした。わたしは十頭目をさがしている」という音をだした。

さて、雌ヤギは、「いつて、水をもってきておくれ。わたしはそれをのむ」という。ハイエナは一頭ずつ、あつちについてしまい、どのハイエナもみんなどこかにいつてしまった。

さて、雌ヤギはひとり、フイゴで風をおくり、トントンと鉄をたたいている。

さて、ハイエナはみんなどこかにいつてしまい、雌ヤギを鍛冶小屋にのこしたとき。

さて、お話は、おしまい。ウサギの蒸し焼きができた。

(一九六五年頃、語り手 ファンタ・マーシの屋敷にいる子ども、

マーヨ・ルウエにて)

## 77 ハイエナとライオン

ハイエナとライオンが友だちになった。

さて、ハイエナとライオンがおきあがり、あるいていく。ハイエナとライオンは旅にでる準備をした。いったウオアンズー豆やむしたヤムイモにサトイモをませた。ハイエナとライオンはたちあがり、どんどんあるいていく。いくと、川があった。

さて、ハイエナとライオンは川にいくと、その水をのんだ。

さて、ハイエナがたおれた。ハイエナはたおれて、死んでしまった。

さて、ライオンはひとりになった。ライオンは二つの袋をまとめて、せおつて、どんどんあるいていく。

さて、ライオンがいくと、サルがいた。ライオンがサルをみつけると、サルは木にのぼった。サルは自分をたべないようにいった。

さて、(そこにリスがでてくる。)リスはライオンに、「なんだつて、おまえさんには力がある。わたしにはいいやり方がある。いこう」といた。リスとライオンはどんどんあるいていく。

さて、リスとライオンがいくと、野原の動物たちがいた。そこで、ライオンが、「リスよ、いけ。友よ、おまえさんがいつて、ソウたちをみつけたら、そいつらのおじさんがいる、そいつらをのみこんでしまうものがある、文句があるなら、くるようにといえ」という。

さて、リスがいくと、動物たちがいた。リスは、「おまえさんたちのおじさんがいる。文句があるなら、わたしについておいで」という。動物たちはリスをおいはらった。

さて、サルは木のうえにいる。(動物たちがやってくる。)

さて、ライオンは、「いいや、まて、わしはなにもいつていない。

リスはわしをおまえたちと喧嘩させようとしている。さて、この話にけりをつけるために、先生のところにいこう。ほら、木のうえに先生がいる」といった。動物たちはそこをとりすぎて、木のうえにすわった。サルは木のうえにいる。サルは木からおりと、バウヒニアの葉っぱをつみ、それを本だといって、その本をひらいた。サルは、「ほら、リスよ、そこにすわりなさい。ほら、ライオンよ、そこにすわりなさい。ライオンは自分のいっていることがほんとうなら、リスをくつてしまおうという。ライオンはそうしたいのだ」という。

さて、サルはバウヒニアの葉っぱをひろげた。バウヒニアの葉っぱが本だというのだ。ライオンはしらなかつたが、サルはリスの味方をしている。リスは、「友よ、サルよ、まっすぐな木をみる。わたしはまがった穴にはいる。友よ、サルよ、まっすぐな木をみる。わたしはまがった穴にはいる」といった。

さて、サルはとびはねて、木にのぼった。

さて、動物たちははげでいった。リスは穴にはいり、ライオンだけをそこにおきざりにしたとき。

お話は、おしまい。ウサギの糞の蒸し焼きができた。

(一九七〇年二月二四日、語り手 パーセーウオ村出身のアブド  
ウツラーイ・ウスマース、マルアにて)

## 78 カンムリツルとライオンとリス

ちいさなお話、ちいさなお話。

カンムリツルはお腹がへった。カンムリツルは母親のところに行った。母親のところに行くと、母親は食べ物をつくつて、それをたべたけれども、カンムリツルにはおこげしかのこしておいてくれなかつた。カンムリツルはおこげをナベからはぎとっている。

さて、ライオンがやってきた。ライオンがきた。ライオンはくると、カンムリツルはライオンに、「どうも、ライオンよ」といった。ライオンは、「どうも」といった。

さて、ライオンはゴミ捨て場に行くと、繩をさがして、やつてくると、カンムリツルをつまかえて、しっかりとしばってしまった。ライオンはカンムリツルに、「リス先生のところに行こう」といった。ライオンとカンムリツルはリスのところに行った。いく途中、ライオンとカンムリツルはリスにであつた。

さて、ライオンはリスに、「先生、わたしはおまえさんのところに行くところだ。裁きをしてもらいたいのだ」という。リスが、「どういう裁きか」という。ライオンは、「こうして、カンムリツルのところをとりすぎようとすると、カンムリツルはわたしに『どうも』といつてはくれるが、おこげを自分だけでたべ、わたしにくれなかつたから、さばいてほしいのだ」という。

さて、ライオンとカンムリツルはリスのところに行った。リスは、「いいたいことをいいなさい」という。カンムリツルはどういうことがあったかをリスに説明して、「母親は食べ物をつくって、たべたけれども、わたしにくれなかった。わたしは家にかえってき、おこげをナベからはぎとっていた。ライオンがとおりがかったので、わたしはライオンに、『どうも』といった。そうすると、ライオンはゴミ捨て場に縄をさがしにいき、もどつてくると、わたしをしばってしまった。そういうことで、裁きをうけにきたのだ」といった。

さて、リスは穴のなかにはいり、パウヒニアの葉っぱをとり、それをよむまねをしていう。

「カンムリツルはとんでいく。

わたしは穴にはいる。

ライオンは宙をつかむ。

カンムリツルはとんでいく。

わたしは穴にはいる。

ライオンは宙をつかむ」

カンムリツルはとんでいった。リスは穴にはいり、ライオンを穴のそとにほっておいととき。

このお話は、おしまい。

(一九八一年二月一七日、語り手 ジュンバ・ハマ・ジャム・

ジャーロ・パーテ、レイ・プーバにて。ジュンバはタマ族で、二十五歳。この話は、母親からきいたという)

## 79 リスとオオトカゲ

リスがゾウがたべるための肉をやいている。オオトカゲがやってくると、リスがいた。オオトカゲは、「友よ、なんの肉をやいているのか。わたしにけれないのか」という。リスは、「いいや、あげない。これはよその人の肉だ」という。オオトカゲは、「よその人だというが、わたしよりえらいものがあるのか」という。リスは、「いいや、わたしはおまえさんにはやらない。わたしのものではない。よその人のものだ」という。オオトカゲは、「いいや、くれないとこまる」という。リスとオオトカゲは肉の話をしている。リスとオオトカゲはいいあらそっている。ゾウがやってきた。ゾウがやってくると、オオトカゲが、籠のそばにいる。ゾウが、「どうだ。まだ、わたしの肉はできてないのか」という。リスは、「焼きをみんな肉のしたによせる」という。ゾウはオオトカゲを火のなかに、おしこんだ。オオトカゲは火からでてくると、どこかにいってしました。そのあとすぐ、ゾウがいなくなると、オオトカゲがもどってきた。

さて、オオトカゲがもどつてくると、「なるほど、友よ、リスよ、

おまえさんはおおきなキンタマの肉をやっているのか。おまえさんはわたしにそれをいってくれない」といった。すなわち、おおきなキンタマとはゾウのことだった（オオトカゲにはゾウがおおきすぎでみえず、ゾウの壘丸しかみえなかった）。

（一九九〇年二月一九日、語り手 ウスマーヌ・バツバワ、ケイニ村にて）

## 80 オオトカゲと野原の動物たち

お話、お話。

野原の動物たちがあつまって、畑をたがやそうとする。この畑をつくるのは、村のものをそだてるためだ。

さて、オオトカゲが野原にやってきた。くると、奴隷が畑をたがやしている。オオトカゲはいう。

「奴隷よ、奴隷よ、ビーボラ。」

おまえさんの主人は、おまえさんがわたしをしばるように、雌ウシがモーとなくと、わたしを自由にするようにといつた」

奴隷は、「よろしい」といった。奴隷はオオトカゲをつかまえて、豆のあるところのそばにしばっておく。オオトカゲは豆をさんざんたべる。縄をほどいてほしいときになるといふ。

「奴隷よ、奴隷よ、ビーボラ。」

おまえさんの主人は、おまえさんがわたしをしばるように、雌ウシがモーとなくと、わたしを自由にするようにといつた」

奴隷はオオトカゲを自由にする。オオトカゲはいつてしまふ。オオトカゲはまたしても、もどってきた。そのつぎの日も、いつもいつもそうする。オオトカゲはきたらどうすればよいのかわかった。夜があけて、朝になると、オオトカゲはいつもやってくる。

さて、ある日、人びとは、「奴隷の主人がきて、オオトカゲをしればよい」といった。主人がやってくる、いつも、「この豆はだれにくわれたのか」という。奴隷は、「あなたがオオトカゲを使いにするので、オオトカゲがやってきて、たべるのではないですか」といった。主人は、「よろしい。これから、オオトカゲがやってきたら、しばりなさい。縄をほどくな」といった。オオトカゲがやってきた。オオトカゲがいう。

「奴隷よ、奴隷よ、ビーボラ。」

おまえさんの主人は、おまえさんがわたしをしばるように、雌ウシがモーとなくと、わたしを自由にするようにといつた」

奴隷はオオトカゲをつかまえて、しばった。奴隷は縄をほどこうとしなかった。オオトカゲがいう。

「奴隷よ、奴隷よ、ビーボラ。」

おまえさんの主人は、おまえさんがわたしをしるばるのように、雌ウシがモーとなくと、わたしを自由にするようにとい

た」

奴隷はどうしてもほどこうとしなかった。オオトカゲをしぼってある縄をけつしてほどこうとしなかった。

さて、すこしたつと、その奴隷の主人がやってきた。主人と奴隷は湯をわかし、湯があつくなり、にえたっている。奴隷はオオトカゲをもつと、湯のなかに入れた。主人と奴隷は何度もオオトカゲをたたいた。オオトカゲの体はすっかり皮がただれてしまった。オオトカゲはにげていくと、ハイエナをみつめて、自分をたべてくれと叫んだ。ハイエナは、「なんだって」と叫んだ。オオトカゲは、「おまえさんはわたしに手をつけないのか」という。オオトカゲが自分をたべてくれとたのむ動物はすべて、オオトカゲをたべたくないとい

った。さて、オオトカゲはいつてしまった。オオトカゲは気をしずめ、野原のはしの、畑のそばにおちついた。オオトカゲはそこにいて、どんどんたべた。とうとう、オオトカゲはふとつて、おおきくなった。オオトカゲは、「ハイエナがわたしをたべるといのか。わたしこそハイエナをたべてやる。どうして、ハイエナはわたしをたべないといつたのか」という。オオトカゲははしっていく。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガ

ウンデレにて。この話は、フルベ族の友だちからきいたという)

## 81 ネコとその畑

ネコとその畑。

さて、ネコは畑をよくたがやした。トウジンビエ、ヴォアンズー豆、豆、サツマイモなどネコの畑にないものはなかった。ネコはすんでい

る。ネコはどんどんたがやした。畑をたがやすと、作物がみのつた。さて、ライオンがやってきた。ライオンはネコに、「おまえさんがつくったものをみてみる。おまえさんにはわかつている。わたしはこの野原で、人だけをたべる。母親に人をたべるのをとめられた。おまえさんは、わたしがいるのをみてい

る。これから、わたしはあつちこつちをうるつき、動物がとおりすぎるのをみつけると、わたしはその動物におそいかかる。動物たちはかしこくなった。動物たちはわたしをみると、わたしの臭いをかぐ。そうするとすぐに、にげる。動物たちは村にいく。人はさつそく動物をころして、たべる」とい

った。さて、しばらくすると、鳥がスーッととんでいった。ライオンはネコに、「なんだって。ネコよ、おまえさんは馬鹿だ。畑の作物を

料理して、たべよう。まず、わたしたちが満腹するの。わかるな。人がやってくると、畑のものをとってしまう。わかるな。わたしたちは作物をはこぶわけにいかない」といった。ネコとライオンは畑の作物を料理して、たべていく。鳥がスーッととんでくると、作物をたべている。ネコはいった。

「シート、シート、

鳥はネコの畑の作物をたべない、シート」

ライオンがいった。

「作物をみんなたべてしまえ。

ライオンの母親が料理して、ライオンにたくさんやり、

ネコにやる。

まるめて、まるめて、まるめて、手の甲でパンとたたく」

ライオンとネコがいる。

さて、ライオンとネコがいる。ライオンははしって、ゾウをよびにいった。ライオンは、「あそこにネコがいる。ネコはいろいろなものをおぼえた。でも、馬鹿だ。なにをしているのかさっぱりわからない。ネコは畑をつくった。でも、ネコは作物の食べ方をしらない。いこう。いって、ネコをおいはらおう。ネコはむしろに畑をのこすだろう。作物をたべよう。ネコは田舎ものでもある。ネコは野原にいる。ネコはなにもしらない」といった。

さて、ゾウたちがやってきた。ゾウたちはやってくると、たくさ

ん食べ物をつくって、それをたべて、満腹した。ネコはいった。

「シート、シート、

鳥はネコの畑の作物をたべない、シート」

さて、ネコがいった。

「作物をみんなたべてしまえ。

ライオンの母親が料理して、ライオンにたくさんやり、

ネコにやる。

まるめて、まるめて、まるめて、手の甲でパンとたたく」

さて、ライオンたちはそれをきくと、みんなはしっていつてしまった。ライオンたちはネコをほっておいた。ある男だけがやってきた。ネコはニヤオニヤオニヤオとないている。ネコはこちらにいき、ニヤオとなく。ネコは川のそばに畑をつくった。

さて、ネコは雨期になるとたくさん水がでくるということをしらなかった。水がながれてきて、ネコと畑の作物をみんなつれさつてしまった。作物はみんな駄目になった。男が船にのつてやってきた。やってくると、船にのつたまま、水のうえにのこっているトウモロコシの穂などをきりとつていったとき。

さて、このお話もおしまい。

(一九八一年二月一六日、語り手 スレイ・ルーティ・ジャツボ  
ナ・ペーテル・ゴナ・ニリー・ディンバ・ゲーン・ハム・ガ  
ーブド、レイ・ブーバにて。この話は、バカリという幼友たち

から、夜、市場で買ったという)

## 82 シラミとゾウ

ちいさなお話、ちいさなお話。さて、はやくやりなさい。語り手の頭のうえに、穴のあいたおおきな半截ヒョウタン、バシン。わかるかな。

シラミはいつも畑をたがやしている。ゾウたちがやってきて、畑の作物をたべる。いつも、シラミは畑をたがやす。ゾウたちがやってきて、畑の作物をたべる。シラミは、「よろしい。きょうこそ、なんとかしてやる」といった。シラミはモロコシの畑をつくった。モロコシがみのつてきて、モロコシの葉っぱがあかくなった。葉っぱがあかくなると、シラミはマツチと薪と草と土ナベや塩とトウガラシをもつていき、モロコシの葉っぱにしがみついた。

さて、ゾウたちがやってきて、作物をたべている。おおきなゾウがモロコシの茎をおつて、みんなのみこんでしまった。ゾウがそれをのみこむと、シラミはゾウの腸をきつていく。ゾウの臓物はみんなゾウのお腹にはいつている。シラミはどんどんそれをきつていく。

さて、おおきなゾウはたっている。ゾウたちは家にかえろうとしている。一頭のゾウがおおきなゾウのところに行ってきていう。

「兄さん、どうしてたっているのか。」

おおきな兄さん、どうしてたっているのか。

ゾウたちは草をたべにいった。

おまえさんは、たっている」

おおきなゾウはそれにこたえていう。

「わたしがたべたものが、わたしをほっておかない。」

わたしがのんだものが、わたしをほっておかない」

シラミがそれにこたえていう。

「気の毒におもえというのか。おまえさんたちのことを気の毒にはおもわない。」

娘と結婚すると、サルたちはよめさんをとつていく。

ちっぽけな畑をつくれれば、ゾウたちがやってきて、作物をたべる。

テベル・ミレル、テテール・ミレル」

さて、おおきなゾウはすこしもあるけない。そのつぎの日、ゾウたちがやってくると、おおきなゾウがいる。一頭のゾウがいう。

「兄さん、どうしてたっているのか。」

おおきな兄さん、どうしてたっているのか。

ゾウたちは草をたべにいった。

おまえさんは、たっている」

おおきなゾウはそれにこたえていう。

「わたしがたべたものが、わたしをほっておかない。

わたしがのんだものが、わたしをほっておかない」

シラミがそれにこたえていう。

「気の毒におもえというのか。おまえさんたちのことを気の毒にはおもわない。

娘と結婚すると、サルたちはよめさんをとっていく。

ちっぼけな畑をつくれれば、ゾウたちがやってきて、作物をたべる。

テベル・ミレル、テテール・ミレル」

とうとう、シラミはおおきなゾウをころしてしまった。シラミはゾウの肉をみんなとって、ほそくきった。シラミはいくと、それを料理した。シラミはこれからは二度とよめさんをとらせないといつたとき。

このお話も、おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 バーセーウオ村出身のアブドゥッ

ラーイ・ウスマース、マルアにて)

### 83 カエルの求婚

カエルが求婚しにいった。カエルが求婚しにいくとき、ハエについてきてくれといった。ハエはカエルについていった。二人は女

のところについて、すわった。女はモロコシをとり、それを粉にして、二人に食べ物をつくらうとする。女はモロコシを粉にした。二人はお腹がへっていた。ハエはいくと、石臼のうえにとまり、粉をなめていき、お腹をいっぱいにした。ハエがもどつてくると、カエルがいた。カエルは、「おまえさんははずかしいことをしてくれた。女がモロコシを粉にして、わしらのために食べ物をつくらうとしているのに、おまえさんはいつて、粉をなめた。おまえさんの口に粉がついている。おまえさんの義理の母親たちにみられなかったか。口をふきなさい」といった。ハエが口をふこうとすると、口がとれてしまった。カエルがそれをわらおうとすると、お腹がさけてしまった。女が食べ物をつくり、もつてくると、カエルもハエも死んでいたとき。

(一九八三年一月二六日、語り手 アスタ・ジョーダ、ガウンデレにて)

### 84 カエルとサソリ(1)

カエルとサソリが畑にでかけていった。サソリが、「カエルよ、どうして、おまえさんは畑を上手にたがやさないのか。あちらをみてみる。出目よ」という。カエルが、「おまえさんはどうしてわたしの目がとびでているか。略奪戦争をしていたとき、

非フルベ族をにらみつけたからなのだ」といった。サソリが、「おまえさんの足はどうして、ひらべったいのか」といった。カエルは、「略奪戦争のとき、鎧をふみしめていたからだ」といった。サソリが、「おまえさんの腹はどうしておおきいのか」という。カエルは、「略奪戦争をしているとき、水ばかりのんでいたからだ」といった。サソリが、「おまえさんの背中にどうして瘤があるのか」といった。カエルは、「戦争にでかけるとき、鞍にもたれていたからだ」といった。サソリが、「わかった」といった。

さて、サソリがやってきた。サソリは、「わたしを矢でうつつおくれ、カエルよ」という。カエルはとびあがって、二回うつつ。とうとう、六回うつつ。

さて、雌ヒツジがサソリに、「サソリよ、おまえさんはどうしようもない。カエルが六回うつつなのに、おまえさんは六回しかえしをしないのか」といった。

さて、サソリはしっかりと弓をひいた。サソリがカエルを一回だけうつつと、カエルは、「六回」といった。一回だけなのに、カエルは、「六回」といった。一回だけなのに、こういった。二回にもなっていないかった。カエルはウンコをだした。サソリの毒がまわったからだ。サソリの毒がカエルの体にまわったからだ。

わたしが話をしたのではない。切り株が話をした。わたしは、それをきいたのだ。

(一九八一年二月一六日、語り手 イーサ・サードウ・サーリ・サイドウ・ムーサ、レイ・プーバにて。この話は、カンペマン町で、バヤ族のマイロ・ガウナンがムブム語でかたるのをきいたという。イーサはレイ・プーバ地方のダーマ族である)

## 85 カエルとサソリ (2)

カエルとサソリがいいあらそった。カエルとサソリは、「どちらが、手がいかに」といった。サソリとカエルがそういった。カエルは、「サソリよ、おまえさんがわたしを六回なぐれ。わたしも、おまえさんを六回なぐる」といった。サソリは、「なんだって、カエルよ、おまえさんからさきにやいなさい」といった。カエルは、「なにをいっているか。サソリよ、おまえさんからさきにやれ」といった。サソリは、「カエルよ、おまえさんからさきにやれ」といった。カエルはサソリを六回なぐった。サソリがカエルを一回なぐっただけなのに、カエルはサソリに、「六回なぐった、六回なぐった」といった。サソリはカエルを一回なぐっただけなのに、カエルは六回なぐったといったとき。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・プーバにて。ムーサはレイ・プーバのフルベ族)

## 86 カエルとサソリ(3)

お話、お話。

カエルとサソリがいた。サソリはカエルに矢をうてといった。カエルはサソリをなんども矢でうち、つかれてしまった。

さて、カエルは、「おまえさんに矢をうつても、アリのさされるほどの感じかな」といった。サソリが一度さし、姿勢をなおして、もう一度さそうとすると、カエルは、「六回うたれた。六回うたれた。六回うたれた」といった。カエルはにげていき、穴にはいつたままだった。

わたしが話をしたのではない。切り株が話をしたのだ。ほら、おまえさんはそちらにいる。ほら、わたしはここにいる。

(一九八〇年八月二五日、語り手 子ども、レイ・ブーバにて。

嶋田にかたつたもの)

## 87 カエルとハゲタカ

お話、お話。

ハゲタカとカエルがいた。カエルはハゲタカに、何度も、(仮小屋をたてるために)木をきり、それをひっぱってこようといった。ハゲタカは、「わたしの翼さえあれば、雨がふせげる」といった。

カエルは、何度も、木をきり、それをひっぱってきて、仮小屋をたてた。アツラーはカエルにベッドをあたえられた。アツラーはカエルにランプをあたえられた。アツラーはいろいろなもののみんああたえられた。カエルは戸をしめた。ハゲタカは雨にふられて、ずぶぬれになった。ハゲタカがやってきて、「カエルさん、小屋にはいつてよいかい」という。(カエルはベッドでよこになってねている。)カエルが、「わたしはおまえさんに、『木をきって、それをひっぱってこよう。木をきって、それをひっぱってこよう』といつたのに、おまえさんは、それをこぼんだではないか。でも、はいりなさい」という。ハゲタカは(小屋にはいり)「カエルさん、すわつてもよいかい」という。カエルが、「わたしはおまえさんに、『木をきって、それをひっぱってこよう。木をきって、それをひっぱつてこよう』といつたのに、おまえさんは、それをこぼんだではないか。でも、火にあたりなさい」という。ハゲタカは、(火にあたり)「カエルさん、おまえさんのベッドまでいつて、ベッドにすわつてよいかい」という。カエルが、「わたしはおまえさんに、『木をきって、それをひっぱってこよう。木をきって、そ



ちいさなハエの頬がはれた。義理の母親たちが頬の出来物をさして、その膿をアリ塚にすてにいった。アリ塚はおこって、とびちった。笑い上戸の女がわらって、ドゥームヤシの木にもたれた。(ドゥームヤシの木がカメのうえにたおれる。)

さて、カメが尻をこいた。村長の薪の山に火がついた。村長が家にかえつてくると、自分の薪の山がもえていた。村長は、「だれが薪の山をもやしたのか」とたずねた。人びとは、「アリ塚がおこって、とびちった。笑い上戸の女がわらって、ドゥームヤシの木にもたれた。ドゥームヤシの木がカメのうえにたおれた。すると、カメが村長の薪の山に尻をこいた。(それで、薪の山に火がついた)」といった。村長が、「カメよ、おまえさんはどうして尻をこいたのか」という。カメは、「ドゥームヤシの木がわたしのうえにたおれてきた。だから、尻をこいた」という。村長が、「ドゥームヤシよ、おまえさんはどうしてたおれたのか」という。ドゥームヤシの木が、「笑い上戸の女がわらって、わたしにもたれかかったからだ」という。村長は、「笑い上戸の女よ、おまえさんはどうしてわらったのか」という。女は、「アリ塚がおこって、とびちった。わたしはわらわないでおられようか」といった。村長は、「アリ塚よ、おまえさんはどうして、腹をたてて、とびちったのか」といった。アリ塚は、「義理の母親が頬の出来物をさして、やってきて、その膿をわたしのうえにぬりつけた。わたしはどうして、おこらず、とびち

らずにおられようか」という。村長が、「義理の母親よ、おまえさんはどうして頬の出来物をさしたのか」という。義理の母親が、「ちいさなハエの頬に出来物ができるのに、どうしてわたしはその出来物をささないでおられようか」といった。村長は、「ちいさなハエよ、おまえさんはどうして頬の出来物をさしてもらったのか」という。ちいさなハエは、「アッラーがわたしを病気にされたのに、腫れ物ができないわけがないでしょう」といったとき。

このお話も、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーダマ・アルハジ・ベッロ・イーサ、ガウンデレにて)

## 90 ハエの頬がはれた(3)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ハエの頬がはれた。ハエの義理の親がその腫れ物をとがったものでさした。(膿がとんでいく。)ハゲタカはその膿をのんでしまいい、アリ塚で体をこすった。アリ塚がおおきくなって、ドゥームヤシの木にむかつてたおれた。ドゥームヤシの木はカメのうえにたおれた。カメは尻をこいた。(尻が火をつける。)村長のモロコシの束に火がついた。村長がかえつてきて、「モロコシの束よ、おまえさんたちはどうして火がついたのか」とたずねた。モロコシの束は、

「カメの屁のおかげだ」という。村長はいくと、カメをつかまえた。村長は、「カメよ、おまえさんはどうして屁をこいたのか」という。カメは、「ドゥームヤシの木がわたしのうえにたおれてきたからだ」といった。村長は、「ドゥームヤシの木よ、おまえさんはどうしてたおれたのか」といった。ドゥームヤシの木は、「アリ塚がわたしにむかってたおれてきたからだ」といった。村長は、「アリ塚よ、おまえさんはどうして、たおれたのか」といった。アリ塚は、「ハゲワシが膿をのんでしまい、わたしに体をすりつけたからだ。だから、わたしはたおれた」といった。村長は、「ハゲタカよ、おまえさんはどうして、膿をのんだのか」という。ハゲタカはその膿がハエにあったからだといった。

お話は、おしまい。

(一九九〇年二月一九日、語り手 アーマドゥ・モーディツポ・バカリ。アーマドゥはケイニ村にすむ、ムバーウエのフルベ族、ケイニ村にて)

## 91 シロアリがゴザをたべ、バラ色の花がさいた

ちいさなお話、ちいさなお話。ジャンマ・タボーイエル。お話を  
する人たちの頭のうえに、穴のあいた半截ヒョウタン。

ナーヌミは雌ヒツジとカエルと雌ヤギをめとつた。ナーヌミとい

うのは人の名前だ。男はこの動物たちをめとつた。男はこの動物たちを自分の屋敷にあつめた。男は動物たちとすんでいる。

さて、男は、「わしは旅にでる。でも、ゴザがシロアリにくわれ、バラ色の花がさいたのをみても、わしがかえってきていないなら、わしは死んでしまったのだ」という。

さて、よめさんたちは、「よろしい」といった。男は、「それは、わしが旅にでかけるまで、おまえさんたちに必要なものをそろえておこう」といった。

さて、男はいくと、肉をかつた。

さて、雌ヒツジは第一夫人。雌ヤギは第二夫人。カエルは男のいちばんすきな女だった。

さて、男はいき、動物をころし、その半分をカエルのところにもつていった。男は雌ヒツジと雌ヤギに残りの肉をすこしずつやつた。男は雌ヒツジと雌ヤギがあまりすきでなかった。

さて、男は、「おまえたちはこの肉を料理しなさい。わしはわしの友だちをよんで、こさせ、それをたべる」といった。

さて、雌ヤギはかしこかった。雌ヤギは、「よし。あの女たちの肉をだめにしてやる」といった。雌ヤギはかけていった。雌ヤギはイスラム教の先生のところにいき、「先生、こういうことで、わたしの夫はわたしのことがすつかりきらいです。どうしたら、カエルと雌ヒツジの肉をだめにすることができましょう」といった。

先生は、「よろしい。いって、にがい油をさがしなさい」といった。先生は雌ヤギにこのようにいった。雌ヤギはにがい油をさがした。このにがい油をなにかにすこしいれると、にがくてどうしようもなかった。

さて、カエルと雌ヒツジがいる。男はそとにでて、あそびにいった。雌ヤギは油のはいつたかわらけを布地でくるみ、いくと、「火種をとらしてもらう。火種をとらしてもらう」という。カエルは、「火種をとりにいきなさい」という。雌ヤギはいくと、土ナベの蓋をとり、肉のうえにすこし油をたらし、そこをとおりすぎていく。雌ヤギは、「おまえさんのところにいき、おまえさんの台所から塩をすこしとらなければならぬ」という。雌ヤギはナベの蓋をあけ、肉に油をたらず。とうとう、肉はみんなだめになり、たべられなくなった。そのつぎのつぎの日に、食事をつくることになっていく。そのつぎのつぎの日になった。男はたくさんの人をあつめた。人びとはやってきた。女たちは食事をつくった。女たちはそれぞれ食事をだした。カエルは自分の肉をたべてみるが、肉はたいへんにがかった。カエルは大声をあげて、「アッラーよ、わたしをこらしめられるのですか」といってないた。雌ヒツジも、肉の味をみるが、おなじだった。

さて、雌ヤギの肉はどうしようもないほどおいしかった。雌ヤギは油をいれていなかった。とうとう、女たちは食事をつくって、夫

のところもっていった。人びとは、「これはだれのものだ」という。男は、「これは雌ヤギのものだ」という。人びとはたべた。人びとは、「これはだれのものだ」という。男は、「これは雌ヒツジのものだ」という。みんな食べ物を一つかみして、口にいれるが、それをはきだす。油がにがかったからだ。人びとはカエルの食べ物の味をみたがおなじだった。

さて、男が屋敷のなかにかえってきた。男はカエルと雌ヒツジをたいた。男は、「雌ヤギがおまえたちより料理が上手だとはどういうことか」といった。男はカエルと雌ヒツジをたいた。男は、「ゴザがシロアリにくわれ、バラ色の花がさいても、わしがかえってこないなら、わしは死んでしまっている」といった。

さて、女たちは、「よろしい」といった。男はでかけていった。男は何年ものあいだ旅をしていた。ゴザがシロアリにくわれ、バラ色の花がさいた。ナーヌミはかえってこなかった。雌ヒツジはいくと、たちどまつて、いう。

「バー・バー・バー・バー、

ゴザがシロアリにくわれ、

バラ色の花がさいた。

ナーヌミがかえってきていない」

雌ヤギがいつて、いう。

「メー・メー・メー・メー、

ゴザがシロアリにくわれ、  
バラ色の花がさいた。

ナーヌミがかえつてきていない」

カエルがとびはねていう。

「ケロ・ケロ・ケロ・ケロ、

ゴザがシロアリにくわれ、

バラ色の花がさいた。

ナーヌミがかえつてきていない」

女たちがたあがつた。女たちは男についていくといった。女たちは  
はどんどんあるいていく。

さて、女たちはあるいていった。夜、女たちがあるいていく。

さて、ネコはいくと、カエルをのみこんでしまった。雌ヤギはそ  
のままにしておいた。雌ヒツジと雌ヤギはあるいていく。

さて、雌ヒツジと雌ヤギはあるいていく。雌ヒツジがいくと、泥  
棒がいた。泥棒が半截ヒヨウタンをこのようにしたら、雌ヒツジは  
糠のなかにはいつてしまった。雌ヤギは、「わたしは気丈だ」とい  
って、そこをとおりすぎていった。雌ヤギはあるいていく。雌ヤギ  
がいくと、ハイエナがいた。ハイエナは雌ヤギをたべてしまったと  
さ。

お話は、おしまい。ウサギの糞の蒸し焼きができた。

(一九七〇年二月二四日、語り手 バーサーウオ村出身のアブド

ウツライイ・ウスマース、マルアにて)

## 92 カメの甲羅に継ぎ目があるわけ

さて、おまえさんたちにカメの甲羅にどうして割れ目があるかを  
はなしてあげよう。

鳥たちがあつまつて、行事に参加するため空のうえまで旅をする  
ことになった。どの鳥もとんでいく。

さて、カメが自分もいっしょにいきたいといった。

さて、鳥たちは、「おまえさんには翼がない。おまえさんはどう  
してうえにいくのか」といった。

さて、カメは、「おまえさんたちはみんなわたしのために羽根を  
一本ずつぬいておくれ。わたしはそれをあわせて、わたしも翼を手  
にいられて、おまえさんたちととんでいくのだ」といった。

さて、鳥たちは、「よろしい」といった。どの鳥も羽根をとり、  
それをあわせて、カメにわたした。カメは羽根を体にさして、翼を  
つくった。カメも、鳥たちといっしょにとんでいった。鳥たちはの  
ぼっていった。鳥たちが行事のおこなわれる屋敷にちかづくとき、カ  
メは、「よろしい。とまっておくれ。とまっておくれ。ここでとま  
ったほうがよい。自分に名前をつけるのだ。わたしたちがいこう  
としているところに行くとき、人びとが食べ物をもってきても、水を

もつてきても、だれでも自分の名前をよばれたら、それをうけとつて、たべたり、のんだりすればよい」といった。鳥たちは、「よろしい。それはよい。それはよい」といった。

さて、鳥たちがいこうとしていたところについた。どの鳥も名前がある。カメは、「わたしの名前は、『おまえさんたちみんな』という」といった。

さて、鳥たちがいこうとしていたところについた。人びとが食べ物をもつてきた。人びとはそれを客たちにやった。

さて、カメは、「これはだれのものか」といった。人びとは、「おまえさんたちみんなのものだ」といった。カメは、「よろしい。これは、わたしのものだな」といった。カメはそれをうけとつて、たべた。そのあとで、人びとがなにかをもつてくると、カメは、「これはだれのものか」とたずねる。人びとが、「おまえさんたちみんなのものだ」という。カメの名前は、「おまえさんたちみんな」という。カメは人びとのもつてきたものをうけとり、たべる。そのうちに鳥はいやになって、「カメよ、おまえさんはわたしたちをだました。だから、わたしたちはおまえさんのすることがいやになった。わたしたちにわたしたちの羽根をかえしておくれ」といった。

さて、どの鳥も自分の羽根をとりかえた。鳥たちはカメを空のうえにのこしておいた。カメは自分でとんで、かえってくることでできなかった。

さて、カメは、「よろしい。それでは、おねがいがある。おまえさんたちはおまえさんたちの羽根をとりかえた。わたしはおまえさんたちをわたしのよめさんのところまで、使いにだす」といった。

さて、どの鳥も、「わたしはいかない。わたしはおまえさんの言付けをもつていかない。わたしはそれをとげない」といった。

さて、一羽が、「おまえさんの言付けをよめさんのところにとどけよう。どういう言付けか」といった。

さて、カメは、「よろしい。おまえさんたちがいったら、おねがいだから、おまえさんたちはわたしのよめさんに、布団や枕や毛布などすべてのやわらかいものを屋敷のまんなかひるげておくようにとっておくれ。というのは、空のうえからとびおりて、やわらかいものうえにおちて、体に傷がつかないようにするためだ」といった。

さて、その鳥は、「よろしい」といった。鳥はカメの屋敷にやってくる。カメのよめさんに、「カメが、おまえさんに、鉄やふるいクワやオノや瓶など、おまえさんの屋敷にあるすべてのかたいもの、すべてのこわれたもの、よくないものをすべて、この屋敷のまんなかにおくようにとあった。カメが家にかえってくる」といった。こうして、カメが空からしたをみると、いろいろなものひるげられていて、ひかっている。カメはそれをやわらかい寝具だとお

もっている。

さて、カメは空のうえからとんで、おりていき、そこにおかれてあったもののうえにおちた。こうして、カメの甲羅がぐちゃぐちゃになってしまった。

さて、カメの家族は医者をさがしてきた。医者はやってくると、傷口に薬をどんどんぬって、包帯をした。

さて、カメは、傷がなおった。でも、カメの甲羅にはいままも傷跡の線がのこっている。

さて、こうして、カメの甲羅には線がついたとさ。

お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。

(一九八九年二月二日、語り手 ナイジェリアのヨーラ出身のマル・ダウダ、マイドゥグリにて)

### 93 歌をうたうブヨ

ある人が自分の畑にいった。畑には、川がながれていた。川がながれていて、サトウキビがはいえている。男はそこにいる。サトウキビがはえている。男はサトウキビをつくった。

さて、男は水のながれているそばにすわった。水にちかかったので、ちいさな虫、ブヨがどんどん男をさす。

さて、男は自分の服をぬいだ。自分のきている服をぬいだのだ。

服についたブヨを服といっしょにそこにほっておいた。わかるかな。ブヨは男をかむことができなかった。ブヨはそこにいる。

さて、サトウキビ泥棒が盗みにやってきた。盗みにやってきた。

さて、泥棒は服があるのをみつけた。泥棒がやってきた。サトウキビに手をふれようとすると、虫がいないのをきいた。

「カック・タババー・カック・タババー、

ワーカーン・バーバン・マールコ・コー、ダルマナ。

ヤー・バーニー・アージェー、ダルマナ。

ジャルニー・ジャルキ・ティーティー、ダルマナ」

さて、泥棒はおどりだした。

「カック・タババー・カック・タババー、

ワーカーン・バーバン・マールコ・コー、ダルマナ。

ヤー・バーニー・アージェー、ダルマナ。

ジャルニー・ジャルキ・ティーティー、ダルマナ。

ジャルキティ・ジャルキティーター」

さて、畑の持ち主もおきあがって、おどりはじめた。村人たちはみんないって、王さまをよんだ。

さて、ある人がやってくると、そこからはなにもきこえない

ではないか。その人は、むこうの畑でだれがおどっているのを見た。この人はそのことを王さまにいった。王さまは奴隷たちをつかした。奴隷たちはやってきて、その歌をきくと、たちどまって、

おどつている。村人たちはみんなおどりだした。畑の持ち主は服をとり、それをおきにいった。村人たちがおどつて、つかれると、ブヨはとんで、家にかえつていった。人びとは畑の持ち主をつかまえた。王さまは男を牢屋に入れた。すなわち、男はなにもしていないかつた。王さまはなんのわけものなく、この男を牢屋に入れたのだつた。男は王さまの家のものいるところに行ったとき。(牢屋が王さまの屋敷のなかにあるということか)

よろしい。お話は、おしまい。この話も、このとおり。

(一九八三年一月二四日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、一九七六年に、ガウンデレで、ハウサ族の子どもから聞いたという)

## 94 おおきな鼻をもつた怪物とハイエナ(1)

お話、お話。

ジジキナルはダツタワ味噌(英名「イナゴマメ」といわれる、バルキア・ビグロボサの種からつくった調味料。この調味料のハウサ名がダツタワ)をつくつて、それを袋に入れて、その袋の口をしばつた。その袋はおおきかつた。ジジキナルはそれを肩にかけた。ジジキナルは野原に行く。野原に行くとき、ハイエナにであつた。ハイエナは、「親父さん、その袋をこちらによこしなさい。わたし

がそれをひきうけましょう」といった。ジジキナルは、「なんだつて、これはおもしろい」といった。ハイエナは、「こちらによこしなさい。わたしがもちましよう」という。ジジキナルは、「これはおもしろい」というと、(またしても)肩にかけた。ジジキナルは、「たくさん動物をみつければ、(わたしがそれをつかまえる)手助けをしておくれ」といった。ハイエナはどんだんあるいていくと、動物をみつけた。ハイエナは、「やった。ごらんとおり、たくさん動物がいます」といった。ジジキナルは、「なんだつて、これはわたしの村のジカバチくらいのものではないか」といった。ハイエナはいくと、ゾウが三十三頭いるのをみつけた。ハイエナは、「ごらんおとおり、あそこに動物がいます」といった。ジジキナルはダツタワ味噌をとると、おいておいた。ジジキナルは、「あいつらのところについて、あいつらを馬鹿にしてこい。おまえさんはあいつらのところからかえつてくると、わたしの鼻のなかにはいりなさい」といった。ハイエナはゾウのところについて、ゾウたちを馬鹿にして、「おまえさんたちの母親はどうしようもない。おまえたちの父親はどうしようもない」といった。ゾウたちは、ハイエナにむかつてはしつてくる。ハイエナはやつてくると、ジジキナルの鼻のなかにはいった。ゾウが一頭やつてくると、ジジキナルはそれを打つ、そうすると、そのゾウは死んでしまう。ゾウが一頭やつてくると、ジジキナルはそれを打つ、そうすると、そのゾウは死んでしまう。



ではなれると、ジジキナルは小便をした。ジジキナルの小便は川になつて、ハイエナをながしてしまつた。ジジキナルはいくと、ハイエナをすくひあげ、川からだしたとき。

これで、おしまい。

(一九八〇年八月二五日、語り手 子ども、レイ・プーバにて。

嶋田にかたつたもの)

## 95 おおきな鼻をもつた怪物とハイエナ(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ゾウがいくと、ハイエナがいた。ゾウはハイエナをつれていき、「こい。旅にでかけよう」といった。ハイエナは、「よろしい」といった。ゾウとハイエナは、モロコシの玉を三つつくつた。ゾウとハイエナはどんだんあるいていく。ゾウとハイエナはモロコシの玉を袋にいれた。モロコシの玉を袋にいれた。ゾウとハイエナはどんだんあるいていく。ゾウとハイエナがあるいていくと、川があつた。ハイエナはゾウに、「友よ、喉がかわいた。水をのんだほうがよい」という。ゾウは、「なんだつて、友よ、ほくらはこんな川で水をのまない。いつて、おおきな川をさがし、水をのもう」といった。ハイエナは、「よろしい」といった。ゾウとハイエナがいくと、みんな七つの川があつた。ゾウとハイエナはおおきな川をみつけた。

水はいっぱいだつた。ゾウはハイエナに、「ここで、のむのだ」というと、モロコシの玉をとり、川になげいれた。水はしろくなつた。もう一つなげこむと、水がすこししろくなつた。またしても、もう一つなげこんだ。水がしろくなつた。ゾウはハイエナに、「のめ、友よ。ほくがのみはじめると、きみはのめない」といった。ハイエナは、「よろしい」といった。ハイエナはどんだんのんでいった。水はみんななくなつてしまつた。そこに魚がとびはねている。カバなどみんなそこにいた。ゾウはハイエナに、「友よ、つかまえて。川にはいつて、魚をとつておくれ」といった。ハイエナは川にはいつた。カバがハイエナをかけた。ハイエナは、「なんだ、友よ。ほくにはとつてもできない」といった。

さて、ゾウは川にはいると、カバも、ワニも、魚もみんなまとめて、もつてきた。ゾウはハイエナに、「友よ、いつて、薪をとつてこい」といった。さて、ハイエナはかわいたちいさな薪をとりに行く。ゾウは、「友よ、これでこの肉をやくつもりかい」といった。ゾウはいくと、木をたおし、尻をこく。木はかわいてしまふ。ゾウはそれをおり、もつてきて、つみあげた。ゾウは、「それでは、いつて、火種をさがしてきておくれ。ハイエナよ」といった。ハイエナは村に行く道があるいていき、村についた。村の人たちは、「そこにハイエナがいる。そこにハイエナがいる。大声をあげよう」という。人びとは

ハイエナに大声をあげた。人びとはハイエナをおいはらう。ハイエナは小屋にはいることすらできない、まして火種などとすることはできない。ハイエナは、「友よ、火種が手にはいらなかった」といった。ゾウは、「よろしい。でも、きみはどうしようもない」といった。ゾウがいくと、おおきな岩があった。ゾウはすわって、尻をこいた。火がでてきた。

さて、ゾウはその火をとった。ゾウとハイエナはいつて、肉をやいた。ゾウはハイエナに、「くえ。ほくがくだすと、きみはたべられない」という。ハイエナはすこしたべると、「ほくはもうじゅうぶんだ」といった。ゾウはやってくると、みんなたべてしまった。ゾウは、「それでは、いこう」といった。ゾウとハイエナはでかけていった。

さて、ゾウとハイエナがあるいていくと、野原の動物たちがいた。ゾウはハイエナに、「友よ、いつて、あの野原の動物たちについてらよりつよいものがここにいるといえ。きみがおいはらわれたら、きて、ほくの鼻のなかにはいれ」といった。ハイエナははしっていった。ハイエナは、「おまえたちよりつよいものがここにいる」という。動物たちはハイエナをおいはらった。動物たちは、「この世でだれがわしらよりつよいというのか」という。動物たちはハイエナをおいはらう。ハイエナがやってくると、ゾウは、「ほくの鼻のなかにはいれ」といった。ハイエナは鼻のなかにはいった。ゾウ

は動物たちをころした。ゾウは動物たちをころした。

さて、動物たちをすっかりころしてしまつと、ゾウはハイエナに、「でてこい、友よ」といった。ゾウは鼻から息をだした。ハイエナは自分のしたいことをしている。ハイエナはゾウの頭にある骨をかじっている。ゾウはなんども鼻から息をだし、ハイエナをだそうとした。

さて、ゾウは力をいれて地面をふみつけ、鼻から息をだし、ハイエナをそとにだした。ハイエナはむこうにとんでいった。ゾウは、「なんだ。きみはほくをだました。ほくはきみを頭のなかに入れておいてやったのに、ほくの骨をかじるとは。もう友だちをやめるといった。

さて、ハイエナは村にかえるまでに、ゾウとわかれた。ハイエナがいくと、イヌがいた。ハイエナは、「こい、いつしよにいこう。さて、モロコシの玉をつくらう」といった。ハイエナとイヌはモロコシの玉をつくった。ハイエナとイヌは野原にもどっていった。イヌが、「友よ、ハイエナよ、ほくは喉がかわいた」という。ハイエナは、「なんだつて、もう喉がかわいたのか。ほくはこんなちいさな川の水をのまない」といった。ハイエナとイヌがいくと、おおきな川があった。ハイエナは、「この川の水をのもう」という。ハイエナがモロコシの玉を川にいれると、水がしろくなった。ハイエナはイヌに、「のめ。ほくがのみだすと、きみはのめない」といった。

イヌはずこしのむと、ハイエナは自分もゾウがのむときにだしたような力をだそうとした。ハイエナはずつと水をのんでいる。ハイエナの体のお尻などから、水がでてくる。ハイエナは大声をあげて、「友よ、友よ、イヌよ、葉っぱをとって、ぼくの尻の穴につめてくれ。水がでてくる」という。

さて、イヌは葉っぱをとりにいこうとする。ハイエナは、「いそがないのか。どうしようもないやつ」といった。水は鼻から、またほかのところからも、でてくる。ハイエナとイヌはそこをとおりすぎた。ハイエナとイヌがいくと、野原の動物たちがいた。ハイエナはイヌに、「いって、野原の動物たちをみついたら、おまえたちよりつよいものがここにいるというのだ。きみがおいはらわれたら、やってきて、ぼくの鼻のなかにはいりなさい」という。イヌはいくと、そのようにいった。

さて、野原の動物たちはイヌをおいはらった。イヌがやってきた。ハイエナは泥をこねて、鼻のうえにつけた。ハイエナはイヌに、きたら、はいるのだといった。イヌはやってくると、地面をふみしめ、ハイエナの鼻にはいろうとした。そうすると、泥をこねてつくったものが、つぶれてしまった。ハイエナとイヌははしつていく。野原の動物たちはハイエナとイヌにおいつき、ころしてしまつたとさ。

これで、おしまい。

(一九六九—七〇年、語り手 アブドッラーイ・オスマーン、マ  
ルアにて)

## 96 おおきな鼻をもつた怪物とハイエナ (3)

ある怪物がいる。それはジュジュキナルだった。ジュジュキナルはおおきな鼻をもっている。小屋ほどおおきな鼻だった。ジュジュキナルはたちあがり、どこかにいこうとする。わかるな、ジュジュキナルの奴隷のハイエナがやってきた。

さて、ジュジュキナルはいろいろのものをとり、いろいろなものをたくさんあつめた。ジュジュキナルの鼻はおまえさんの小屋くらいある。ジュジュキナルとハイエナはでかけていく。ジュジュキナルは野原のはしにつく。ジュジュキナルはハイエナに、「よろしい、あそこに行ったら、畑にいる奴隷の邪魔をし、奴隷をたいて、にげてきなさい。いって、奴隷に悪態をつきなさい」という。ハイエナはいって、「こん畜生め」といった。奴隷たちはハイエナをおっかける。ハイエナははげくると、鼻にはいる。ジュジュキナルは鼻から息をだす。奴隷たちはいなくなつた。ジュジュキナルはモロコシの玉をとると、いって、それを水になげこむ。ジュジュキナルはそれをませる。それは、まるで牛乳のようになる。ジュジュキナルはハイエナに、「のみなさい」という。ハイエナは、どんどんど

んどのんでいき、とうとう満腹する。ハイエナはのみながら、小便をする。リスはハイエナにまけないように、どんどのむ。ジュジュキナルとハイエナはリスをみつけ、リスはジュジュキナルとハイエナについてきていたのだ。リスはどんどのんでいき、お腹がいっぱいになるので、のむのをやめる。そうだったので、ジュジュキナルはのむ。水はなくなっていました。ジュジュキナルは川で魚をとる。ジュジュキナルがとる魚はおおきいものばかりだ。ジュジュキナルは、「よろしい。この魚をたべなさい。もどつてくる」という。ジュジュキナルとハイエナは魚をやく。ジュジュキナルは、「魚をたべなさい」という。ハイエナとリスはどんどのむるが、たべきれない。ジュジュキナルはやってくると、魚をとって、たべる。ジュジュキナルはこのようにすると、魚をなげて、まぜて、盛っていった。ハイエナとリスはどうしたらよいものかとかんがえた。にげるか、ジュジュキナルをあとのこすかどうか、などなどかんがえる。

さて、ジュジュキナルはたちあがった。ジュジュキナルは、「よろしい。わたしについてきなさい。よろしい、わたしが小便をする。わたしからとおざかりなさい」といった。ジュジュキナルが小便をすると、ハイエナとリスはジュジュキナルからとおくにはなれた。ジュジュキナルは、あるいていった。ジュジュキナルはたちどまり、小便をしている。

さて、ハイエナはやってきて、ジュジュキナルの様子をみている。ほんとうのこと、ジュジュキナルが小便をすると、その小便は川のようになつてなされる。ジュジュキナルは川のような小便をしている。川はやってきて、ハイエナをながしてしまつた。ジュジュキナルはやってくると、ハイエナをつかんで、川からだした。ジュジュキナルはハイエナをたたいた。ジュジュキナルは、「わたしはおまえさんにそうするなといったではないか。わたしが、咳をしていると、おまえさんはかくれなさい」といった。ジュジュキナルが咳をすると、口から骨がでてきて、木を二つにおろす。ジュジュキナルはその木を口にいれ、その木をはきすてる。ジュジュキナルが咳をした。ハイエナはまたしてもいって、様子をみてみる。木がハイエナを打つ。骨が木を打ち、木がハイエナを打つ。ハイエナはたおれた。ハイエナはそこよこになつてゐる。ハイエナはおきあがれなかつた。ジュジュキナルはやってくると、ハイエナに薬をやつた。ハイエナはおきあがった。ジュジュキナルは村にかえつてきた。ジュジュキナルは自分と旅にでるものをさがす。ハイエナはにげていった。

さて、ハイエナはいくとオオトカゲをつかまえた。ハイエナは、「友よ、野原にいこう」という。ハイエナとオオトカゲは野原にいった。

さて、ハイエナは、「わたしのサンダルをとり、もつてきなさい」

という。オオトカゲはサンダルをとり、もってきた。ハイエナは、「なんだって。おまえさんはもってこれられないというのだ」といった。オオトカゲは、「わたしにはもっていけない」といった。ハイエナはサンダルをとる。ハイエナは、「わたしの杖をとって、もつてきなさい」という。オオトカゲは、「もっていけない」という。

ハイエナは、「よし」といった。オオトカゲは杖をとると、もつてくる。オオトカゲはなんでもする。ハイエナとオオトカゲは野原にいった。ハイエナは、「いって、人に悪態をつきなさい。きて、わたしの鼻にはいりなさい」といった。オオトカゲは人びとに悪態をついた。ハイエナはやってくると、ハイエナの鼻にはいった。ハイエナの鼻がつぶれてしまった。人びとはハイエナとオオトカゲをたいた。ハイエナとオオトカゲはにげていくのが精一杯だった。ハイエナとオオトカゲはにげきつた。ハイエナとオオトカゲはいった。ハイエナは、「よろしい。モロコシの玉と牛乳をませよう」といった。ハイエナはモロコシの玉を川になげこんだ。モロコシの玉はながれていった。ハイエナは、「よろしい。のみなさい」といった。オオトカゲはどんだんのでいき、満腹した。ハイエナは、「わたしがのむ。みなさい」といった。ハイエナはのむが、水はなくならなかった。

さて、ハイエナはちいさな魚をみつけた。魚は死んでいた。ハイエナは魚をとり、かくしておいた。オオトカゲは、「よろしい。お

まえさんはわたしに、この川の水をのむようにとிட்டた」といった。ハイエナは、「おまえさんは、この川の水をのんでしまった。さて、いって、この魚をやこう。おまえさんは、すこしずつとつて、たべればよい」といった。ハイエナは魚をやいて、みんなたべてしまった。

さて、ハイエナの喉に骨がささった。ハイエナは魚の骨をはきだした。オオトカゲはハイエナに、「おまえさんは、ジュジュキナルではないな」といった。

さて、ハイエナはまたもおきあがった。ハイエナとオオトカゲは道があるいていった。ハイエナは、「よろしい。いま、おまえさんはあるいていって、あそこにするのだ。わたしが小便をする。にげるのだ。わたしが小便をすると、小便のちかくにたつてはいけない」といった。ハイエナはほんすこしだけ小便をした。オオトカゲはたつて、ハイエナをみている。ハイエナはジュジュキナルの真似をしようとしたのだ。

さて、ハイエナはほんのすこしの小便をしただけだった。小便はながれなかった。ハイエナは、「おまえさんは、わたしの小便がおきな川になったといわないのか。川にながされていくふりをしなさい」という。オオトカゲがながされていくふりをすると、ハイエナはオオトカゲをつかんだ。ハイエナは、「わたしが小便をしているとき、おまえさんはそんなことをするのか」という。ハイエナ

は、「よろしい、これからいこう。わたしが咳をしたら、わたしをみてはならない」といった。オオトカゲは、「よろしい」といった。ハイエナは、「わたしが咳をしていると、おまえさんはきて、わたしをみて、もとにもどりなさい」といった。オオトカゲは、「よろしい」といった。ハイエナは咳をしている。オオトカゲはハイエナをみている。なにもおれず、なにもハイエナの口にはいらなかった。ハイエナはすわった。ハイエナは木片を一つとると、オオトカゲをあてた。ハイエナは、「わかるな。わたしが咳をすると、わたしはおまえさんを打つではないか」という。ハイエナはおきあがった。ハイエナとオオトカゲは家にかえっていく。ハイエナとオオトカゲがもうすこしで、家にかえってくるというとき、ハイエナは、「いつて、人びとに悪態をつきなさい」といった。オオトカゲは、「あの人たちの父親をけなすのか、母親をけなすのか」という。さて、人びとはたちあがると、オオトカゲをおいはらった。人びとははしつてやってくる、ハイエナとであった。人びとはハイエナをうった。オオトカゲはそこをとりすぎ、人とハイエナをそこにおいておいた。人びとは、「ハイエナが悪態をついたのだ」といった。オオトカゲはずっとまゑに村にかえってきた。オオトカゲはやってくる、自分の家族とすんだ。オオトカゲは自分の畑をつくったとき。

お話は、おしまい。

## 97 頭

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドウ・ルファイー、ガウンデレにて。この話は、フルベ族の友だちからきいたという)

二人の人がいた。二人は男の子だった。二人はオオトカゲの皮を手にいれて、それを、太鼓にはるといった。二人はたちあがり、とんどんあるいていく。二人はどうとう野原についた。

さて、二人がいくと、ある木のしたに二つの土ナベがあった。一つはおかずのための土ナベだった。もう一つは、カタガユのため土ナベだった。一つにはカタガユがいっぱいだった。もう一つには、おかずがいっぱいだった。

さて、二人がやってくる、カタガユを一切れとり、たべた。カタガユのうえに、おかずをのせてたべた。

さて、二人は木のうえにのぼって、すわった。二人はずっとそこにいた。

さて、二人がみていると、頭のようなものがころがって、土ナベのところまでやってきた。

さて、頭はカタガユのはいった土ナベをあけ、すっかりたべてしまった。

さて、一つの頭が、「友よ、わしはお腹がいっぱいになっていな

「い」といった。もう一つの頭も、「友よ、わしはお腹がいっぱいになつていない」といった。一つの頭が、「それで、だれがやってきて、わしらのカタガユをたべたのか」といった。頭は、「わからない。ほつておけ。わかるだろう」といった。そのつぎの日も、頭は食べ物をつくつた。頭は土ナベに蓋をして、どこかにいつてしまつた。男の子たちは木からおりた。男の子はカタガユを一切れとると、たべて、もどつていき、木にのほつて、すわつた。

さて、つぎの日も、頭はかえつてきた。頭はやってきて、土ナベをひらいて、自分たちのカタガユをたべた。一つの頭が、「友よ、わしはお腹がいっぱいになつていない」といった。もう一つの頭も、「友よ、わしはお腹がいっぱいになつていない」といった。

さて、頭は食べ物をつくつた。つぎの日、つまり、三日目、頭はどこかにいつてしまつた。男の子たちは木からおりて、頭をつくつたものをたべてしまつた。頭はやってきて、カタガユをつくつてたべたが、お腹がいっぱいにならなかつた。一つの頭が、「友よ、わしはお腹がいっぱいになつていない」といった。もう一つの頭も、「友よ、わしはお腹がいっぱいになつていない」といった。一つの頭が、「だれが、わしらのカタガユをたべたのか。わしらみたいなおそろしいものの食べ物をだれがたべるのか。わしにそれがわからないとは」といった。

さて、木のうえにいる男の子がそれをうけて、「おそろしいもの

よ、ぼくたちがおまえの食べ物をたべたのだ」といった。

さて、男の子がおりた。男の子たちは木からおりた。

さて、頭たちは男の子たちをみつけた。頭は、「おまえさんたちは、どうしてこの野原にやってきたのか」といった。男の子は、「ぼくたちはこういうものをさがしている」といった。

さて、頭が、「よろしい。わたしたちをおまえさんたちの小屋につれていつておくれ」といった。男の子は、自分たちの小屋に頭をつれていつた。

さて、二つ小屋があつた。一つには男の子の母親がすんでいた。もう一つに、男の子がすんでいた。

さて、頭は、「おまえさんたちはわしらの食べ物をたべてしまつた。おまえさんをころすといつたら、おまえさんはどうするつもりか」といった。男の子は、「ぼくはおまえさんから姿をくらますとができる」といった。頭は、「おまえさんはわたしから姿をくらますとができるか」といった。男の子が、「それで、ぼくがにげたらどうなるか」といった。頭は男の子に、「おまえさんにおいついてやる」といった。男の子が、「木にのほつたらどうなるか」といった。頭は、「木をきつてやる」といった。男の子が、「こうしたらどうする」といった。頭は、「こうしてやる」という。男の子が、「こうしたらどうする」という。頭は男の子に、「こうしてやる」という。男の子が、「それでは、ぼくがジガバチになつて、ウシの糞のなか

にはいれはどうなるか」といおうとした。

さて、男の子の母親は（頭と男の子の話をきいていて、「ハンマドゥよ、ある話はアカ・ルツプ（最後の秘密までいってはならぬ）だよ」といった。

さて、男の子はなにもいわなくなった。

さて、頭はおきあがった。頭は男の子に、「わたしについてきておくれ。これから、家にかえる」といった。

さて、男の子はたちあがり、精霊（頭）についていった。男の子と精霊はどんだんあるいていく。とうとう、男の子と精霊は野原のまんなかについた。

さて、精霊は男の子のままで化け物の姿になった。精霊と男の子はどんだんはしっていく。男の子は川のなかにたおれた。精霊はやってきて、川の水をみんなのんでしまった。男の子は川からでくると、にげていき、木にのぼった。精霊は木をきってしまった。精霊は男の子ののぼっている木をたおした。男の子はまたしてももう一本の木にのぼった。精霊はこの木をきってしまった。そうして、おしまいに、男の子は昆虫にばけて、ウシの糞のなかにはいった。精霊はウシの糞のあるところについた。精霊はあちこちをさがしたけれども、男の子のいるところがわからなかった。

さて、精霊はもどって、家にかえっていった。子どもはウシの糞からでると、人の姿にもどり、母親の家にもどっていき、母親にな

におこったか話をした。

さて、母親は、「よいか。わたしはそういうこともあるから、ある話はアカ・ルツプだよ」といったのだ」といった。

さて、男の子はつぎの日も、もとの場所にもどっていき、もう一度オオトカゲの皮をさがしはじめた。男の子はもとの場所にもどっていった。男の子がいくと、精霊がいた。精霊は男の子に、「おまえさんは、きのうわたしから姿をくりました」といった。男の子は精霊に、「ぼくはおまえさんから姿をくりました。というのは、ぼくはおまえさんにまさるからだ。だから、ぼくはおまえさんから姿をくりましたのだ」といった。精霊は男の子に、「それでは、おまえさんの身につけているものをすこしおくれ」といった。男の子は精霊に、「なんだって。こい。ぼくの小屋までいこう」といった。男の子は精霊をつれて、自分の小屋までいった。精霊は男の子の小屋にいくと、男の子が自分よりおおきな精霊とつきあっているとということがわかった。精霊が男の子の小屋にやってくると、そこにはありとあらゆる精霊がいるということがわかった。男の子は精霊に、「それで、いま、なにがほしいか」といった。

さて、男の子が術をつかうと、精霊はただの水になってしまつて、男の子の小屋のまんなかちつていったとき。

お話はながく、わたしの命はながい。

（一九八三年一月二七日、語り手 ハデーリジャ・ブーバ、ガウ

## 98 頭と野原の動物たち

ちいさなお話、ちいさなお話。ンジヤンマ・タボーイエル。聞き手の頭のうえの禿のある石臼。

ある女と男が結婚した。二人に子どもができた。子どもには頭しかなかった。子どもは頭だけでころがっていく。

さて、子どもは頭だけで、ころがる。子どもが頭でころがりはじめると、父親も母親も子どもをのこして、死んでしまった。頭は父親の財産をみんなとつた。

さて、頭の財産はみんななくなってしまった。財産がなくなってしまうと、頭はおきあがり、「父さんが死んでしまった。母さんも死んでしまった。家族はみんな死んでしまった。ここにおいて、なにをしたらよいのだろう。わたしの財産がなくなってしまった」といった。頭はおきあがると、どんだんころがっていく。ハイエナとヒヨウとライオンがウシをおおきなウシの囲いにあつめた。頭は野原のまんなかに入った。

さて、頭はお腹がすいた。

さて、ハイエナとライオンはでかけている。そこで、ヒヨウがのこつて、子ウシの番をし、牛乳からバターをとっている。

さて、ハイエナとライオンはでかけて、ウシを放牧した。ハイエナとライオンはヒヨウをあとのこし、でかけていき、放牧をした。ヒヨウは屋敷の番をしている。

さて、ヒヨウは番をしている。頭はどんだんころがってやつてくると、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。

さて、ヒヨウはこわい目をして、すわった。すなわち、ハイエナとライオンはヒヨウにだれかがやつてきて、その牛乳をのまないように、まして、子ウシをたべるようなことがないように番をしるというておいたのだった。ヒヨウはこわい目をしている。

さて、頭はころがって、ちかづいてきた。頭は、「友よ、おまえさんの目でわたしをみないでおくれ。わたしはおまえさんになにをいったらよいかわからない」という。ヒヨウは、「おまえさんはわたしになにがいたいのか」といった。頭は、「それでは、こい。相撲をしよう」といった。ヒヨウは、「なんだって、おまえさんは、いまから、相撲をしようというのか」といった。頭は、「よろしい。まず、どうしたらよいか、おしえてやろう。わたしはウスにはいる。キネをとつて、わたしをついておくれ」といった。ヒヨウはキネをとつて、こちらのほうをつく。頭はそちらのほうにころがり、「わたしはこちらにげる。おまえさんはいりなさい」という。ヒヨウがはいった。頭はキネをとると、ヒヨウのうえをつく。ヒヨウは大声をあげて、「なんだって、わたしはこちらにげる」と

いう。頭はヒヨウのうえをつく。そのうちに、ヒヨウが、「なんだ、友よ、わたしをころすつもりか」といった。

さて、ヒヨウはウスからでて、とびはねている。ウスからでてきた。

さて、頭はヒヨウをつかまえて、しばってしまった。ヒヨウをしつかりと縄でしばってしまい、そこをとおりすぎて、小屋にはいり、牛乳にあらびきしてむしたトウジンビエをいれてのみ、ヒヨウたちの肉や、ウシ飼いたちがかえってくるまでにヒヨウがつくったカタガユなどをたべてしまった。頭は子ウシを一頭はなすと、いつて、やいた。頭は自分の木のぼった。頭はいくと、そこに夕方までいた。ハイエナとライオンが家にかえってくるとき、「ヒヨウよ、友よ、ヒヨウよ、子ウシをはなせ。雌ウシたちがかえってくる」といった。ヒヨウは、「わたしは、くくられている。だが、子ウシをはなすのか」といった。

さて、ハイエナとライオンはちかづいた。ハイエナとライオンがやってきた。やってくると、ヒヨウがいた。ハイエナとライオンは、「なんだって、友よ、ヒヨウよ、おまえはどうしようもないやつだ。友よ、ちいさなものがやってきて、おまえをしばるとは。おまえは、頭がやってきて、おまえをしばったというのか。どうしたらよいのか」という。ハイエナは、「まかせておけ。あすは、わたしがいる」といった。ハイエナとライオンはヒヨウの縄をといた。

ヒヨウは、「よろしい。ここにいなさい。おまえたちはひどい目にあう」といった。そのつぎの日、ハイエナがいた。ヒヨウとライオンは野原にウシをつれていった。

さて、頭がやってきた。頭は、「なんだって、友よ、ハイエナよ、おまえさんはここでなにをしているのか」という。ハイエナは頭をみると、頭の様子をみはじめた。ハイエナは小屋からでると、頭のほうにやってくる。頭は、「おねがいだ、友よ。まっておくれ。いてやる。おねがいだ。いっしょにあそぼう。わたしがウスにはいる。わたしをついておくれ」といった。頭がウスにはいった。ハイエナはキネをとると、「なんだって、友よ。おまえさんはなにもせず、ころされたいのか。いま、おまえさんはどうしようもない」といい、こちらのほうをつく。頭はそちらのほうにころがついていき、「わたしはこちらににげる」という。ハイエナがこちらのほうをつく。頭は、「わたしはこちらににげる」という。

さて、頭が、「おまえさんはいりなさい、友よ。みたな、おまえさんはわたしをうてなかつた。はいりなさい」といった。ハイエナはいった。頭はキネをとって、ハイエナの頭をうつ。ハイエナは、「友よ、わたしはこちらににげる」という。頭はキネをとって、うつ。ハイエナは、「友よ、わたしはこちらににげる」という。頭はキネをとって、うつ。ハイエナは、「わたし」というだけになり、声がほそくなっていった。頭はハイエナをしばった。ハイエナがで

てきた。頭はいくと、あらびきしてむしたトウジンビエを牛乳にいられてのみ、油でいためた肉や、食べ物をみんなたべてしまった。頭は子ウシもたべてしまった。

さて、頭はおきあがり、またしても家にかえっていった。夕方になると、ヒヨウとライオンが家にかえってくる。ヒヨウとライオンが、「友よ、ハイエナよ、子ウシをはなせ。わしらがかえってくる。子ウシをはなせ。雌ウシがかえってくる」という。ハイエナは、「わたしは、くくられている。だれが、子ウシをはなすのか」といった。ヒヨウとライオンがわらっている。ヒヨウとライオンがやってくる。ハイエナは死にかかっていた。糞がたくさんたまっていた。

さて、ライオンが、「なんだって、おまえたちはどうしようもない。まかせておけ。あすは、わたしが番をする」といった。そのつぎの日、ヒヨウとハイエナがウシをつれていった。ヒヨウとハイエナがウシをつれていった。ヒヨウとハイエナはわらっている。

さて、ライオンがいた。ライオンはだれにもまけないように目をまっかかにしている。さて、頭がライオンのところにいき、「友よ、きょうは、大物がいるのだな。おねがいだ、友よ、おいで。おいで。あそぼう。おねがいだ、腹をたてないでおくれ、友よ」という。ライオンは、「どうい遊びだ」という。頭は、「わたしはおまえさんをつぶしてやる」という。ライオンは、「おまえさんとわたし

しがどんな遊びをするというのか」という。頭は、「それでは、わたしはこのウスのなかにはいる。おおきなキネをとり、わたしの頭のまんなかをつくのだ」といった。ライオンはキネをとると、「なんだって、わたしはおまえさんをころしてしまおう」といった。ライオンがこちらをつくと、頭はあちらのほうにはね、ころがって、もどって、「わたしはこちらにげる」という。ライオンがこちらをつくと、頭は、「わたしはこちらにげる」という。ライオンがこちらをつくと、頭は、「わたしはこちらにげる。おまえさんもウスにはいりなさい」という。ライオンがウスにはいった。頭はキネをとると、ライオンの頭をつく。ライオンは、「なんだって、わたしはこちらにげる」といった。頭はライオンの頭をうった。ライオンは、「なんだって、友よ、わたしはこちらにげる」といった。頭がうった。ライオンは、「なんだって、友よ、わたしをころさないと気がすまないのか」といった。ライオンはウスからとびだしてきた。

さて、ウスからとびだすと、ライオンは小屋にはいつて、短刀をとうとうとする。

さて、頭は小屋をしめて、小屋に火をつけた。ライオンは小屋のなかで死んでしまった。頭は子ウシをみんなはなして、おいはらってしまった。夕方、ヒヨウとハイエナがかえってきて、「友よ」という。夕方、ヒヨウとハイエナがかえってきて、「友よ、ライオン

よ、子ウシをはなせ。雌ウシがかえってくる」という。なんの返事もなかった。ヒヨウとハイエナが、「友よ、ライオンよ、子ウシをはなせ。雌ウシがかえってくる」という。ヒヨウとハイエナはライオンのことをわらっている。ヒヨウとハイエナがついた。つくと、ライオンがいなかった。小屋がやけていたとき。

(一九七〇年二月二四日、語り手 バーセーウオ村出身のアブド  
ウツラーイ・ウスマース、マルアにて)

## 99 バー・ジューカとリス

あるところに、一人の男がいた。男は雄ウシをかった。男はその雄ウシをハエのいるところさないう。男はハエのいないところに行って、その肉をたべようとする。男には息子がいた。

さて、男と息子はでかけていった。二人は、「なんだ、さきにいこう」(バ)からマルアくらのところにかけていった。息子はいくと、用をたした。ハエがやってきた。二人は、「なんだ、さきにいこう」といった。二人は、ここからクシリ(カメルーンの北にある町。クシリの対岸にはチャドの首都ンジャメナがある)くらのところに行った。息子がウンコをした。ハエがすこしやってきた。そういうことなので、二人はあるいていった。息子が用をたした。ハエがいなかった。二人はその雄ウシをころして、たべるといった。二人

は、(雄ウシをころし)すべての用意をすませ、その肉を火でよくうとした。ところが、マツチがなかった。そこには、肉があった。夜になった。夜になったとき、ここから市場(レイ・プーバの市場)くらのところに、火がもえているのをみた。男は、「息子よ、いって、火をもらってきておくれ」という。息子はいった。ほんとうのこと、その火というのはある怪物のお尻でもえている。その怪物には目がある。ほんとうのこと、火がもえている。

さて、子どもがこうしていくと、その怪物は子どもに拳骨をくれてやった。その怪物は、「だれだ」という。子どもは、「家で父親がおまえさんをよんでいる」といった。その怪物は、「おまえの親父がわしをよんでいる」という。子どもは、「うん」という。(その怪物は子どもをつかまえる。)子どもは袋のなかにはいった。怪物は子どもを袋にいれた。怪物は子どもを袋にいれて、子どもの父親のところへやってきた。くると、父親がいた。怪物は、「どうして、わしをよんだのかいってくれ」という。父親も袋にはいってしまった。(怪物は子どもの母親のところへいった。)怪物は、「子どもの母親よ、どうして、わしをよんだのかいってくれ」という。母親も袋にはいった。怪物の食べ物みんな袋にはいってしまった。怪物はその袋を肩からぶらさげ、いってしまった。怪物はキゲリア・アフリカーナの木(ソーセージのような実ができる)のしたにいった。怪物はやってくると、そこで袋の口をしばって、木にぶら

さげた。

さて、リスが人間たちが袋のなかでなくのをきいた。リスは、「おまえさんたちはだれか」といった。袋のなかにいる人間が、「わたしたちはバー・ジューカにつかまった。バー・ジューカはここにやってきて、袋の口をしばった。わたしたちはたべられてしまう。バー・ジューカは薪をとりにつかまった。かえって来て、わたしたちを火でやいて、たべてしまおうとしている」という。

さて、リスは、「よろしい。おまえさんたちをおろしてあげるが、おまえさんたちは、わたしになにをしてくれるのか」といった。人間は、「おまえさんのほしいものは、なんでもあげる」という。

さて、リスは袋のうえにのぼって、しばってある縄をきった。袋はおちた。

さて、人間がでてきた。リスは、「おまえさんたちはわたしがキガリア・アフリカーナの実をとる手助けをしてくれ。実を袋につめて、まえとおなじように口をしばっておこう」という。男と息子と母親は実をとり、袋を実でいっぱいにした。(袋をもとのようにぶらさげておく。) 男たちはいってしまった。リスはあちらのほうに穴をほった。リスは、「おまえさんたちはあちらのほうにあるいていきなさい。おまえさんたちの村にかえるのだ。おまえさんたちは家にかえりなさい。わたしとあの怪物だけにしておいておくれ」という。

さて、怪物がやってくると、袋の口がしばってあった。怪物は薪をもつてきて、つんだ。怪物は火をつくった。怪物は袋をしばってあつた縄をきった。袋は火のうえにおちた。袋のなかにはいっていったものはよくやけた。

さて、怪物はそれをとって、たべようとする。たべると、にがかった。怪物は、「なんと、あいつらの肉はまったくまずい。どうして、こんなにまずいのか」という。ほんとうのこと、怪物はキガリア・アフリカーナの実をたべたのだった。男たちはいつてしまつていたとき。

すなわち、これも、このような話。

(一九九三年一月一七日、語り手 ムーサ・マウンデ、レイ・ブーバにて。ムーサは三五歳。この話は自分の父親からきいたという)